九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—23—

朝倉郡朝倉町所在山田遺跡群の調査

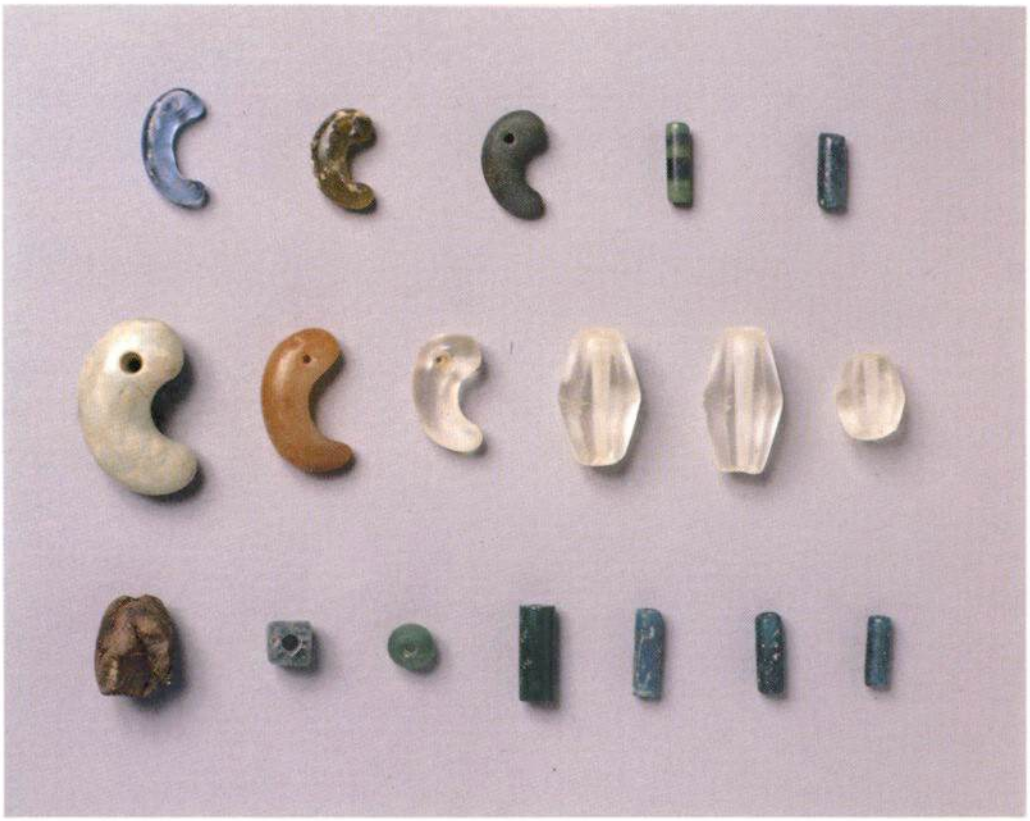
1992

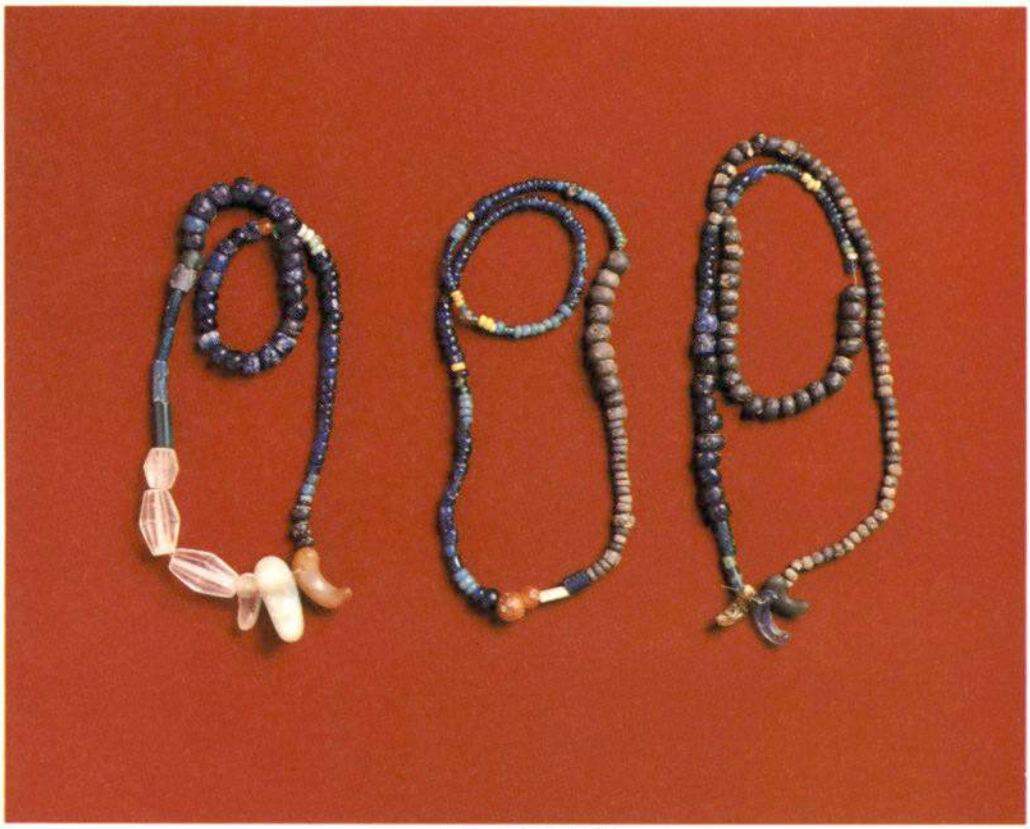
福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—23—

朝倉郡朝倉町所在山田遺跡群の調査

2 号墳全景空中写真





1・2号墳出土玉類

序

本書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の報告書であります。

九州横断自動車道関係の発掘調査は昭和63年度で完了いたしておりますが，今回の報告はこのうちの昭和54・58～60年度に行った朝倉郡朝倉町所在の山田遺跡群についてのものであります。

調査に際しましては，地元の方々をはじめ関係各位のご協力をいただき，多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

なお，本書が文化財愛護思想の普及，学術研究に役立つことを望みます。

平成４年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　御手洗　　康

例　　言

1．本書は，昭和54年度と昭和58～60年度に，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて実施した，九州横断自動車道ならびに山田サービスエリア建設によって破壊される埋蔵文化財の発掘調査報告書で九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第23冊目にあたる。

2．出土遺物は，県文化課甘木事務所および九州歴史資料館において整理したが，実施にあたり九州歴史資料館の横田義章氏と岩瀬正信氏の協力を得た。

3．出土人骨は，九州大学医学部解剖学第二講座の中橋孝博氏と土肥直美氏に整理・分析を依頼し，分析結果の玉稿をいただいた。

4．掲載写真のうち，遺構写真は小池史哲，伊崎俊秋が撮影し，遺物写真撮影には九州歴史資料館の石丸洋氏および岡紀久夫氏の協力をえた。なお，航空写真は国土地理院提供の写真，空中写真稲富撮影の写真も使用した。

5．挿図のうち，遺構図は小池，伊崎，日高正幸のほかに，栗原和彦，石山勲，川述昭人，木下修，小田和利，武田光正が実測し，遺物図は小池，日高と，高瀬照美，松嶋邦子が実測した。また図面の浄書には豊福弥生，塩足里美，原カヨ子の協力を得た。

6．挿図で使用する方位は，座標北に統一している。

7．本書の執筆は，中橋孝博・土肥直美と，栗原，小池，伊崎，日高が分担した。

8．本書の編集は，小池史哲が担当した。

本 文 目 次

山田（やまだ）遺跡群の調査

Ⅰ　調査の経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 9

Ⅲ　A地区の調査 …… 13

1．1号墳 …… 13
2．2号墳 …… 45
3．3号墳 …… 74
4．石棺墓 …… 81
5．土　壙 …… 84
6．その他の遺構と遺物 …… 89
7．おわりに …… 94

Ⅳ　D地区の調査 …… 96

1．はじめに …… 96
2．調査地の立地と状況 …… 96
3．調査の内容 …… 98
4．おわりに …… 100

Ⅴ　山田遺跡出土人骨について …… 101

1．福岡県朝倉郡，山田遺跡出土火葬骨 …… 101
2．山田1号石棺墓出土人骨について …… 104

図 版 目 次

巻頭図版 1　山田２号墳全景空中写真
2　山田１・２号墳出土玉類

本文対照頁

図 版 1　山田遺跡群周辺航空写真 …… 1
2-1　山田遺跡群遠景 …… 1
-2　山田遺跡群全景 …… 1
3-1　A地区全景 …… 13
-2　A地区１～３号墳 …… 13
4-1　１号墳全景 …… 13
-2　１号墳石室全景 …… 15
5-1　１号墳石室前面 …… 15
-2　１号墳前室左側壁 …… 15
-3　１号墳前室右側壁 …… 15
6-1　１号墳石室前門 …… 15
-2　石室玄門 …… 15
-3　石室玄門 …… 15
7-1　１号墳石室奥壁 …… 15
-2　玄室左側壁 …… 15
-3　玄室右側壁 …… 15
8-1　１号墳石室と閉塞状況 …… 18
-2　石室基底部 …… 18
-3　完掘後の石室掘り方 …… 18
9-1　１号墳発掘風景 …… 13
-2　石室内遺物出土状況 …… 19
10　１号墳出土土器１ …… 21
11　１号墳出土土器２ …… 21
12-1　１号墳玄室第１床面出土鉄器 …… 27
-2　１号墳前室第１床面出土鉄器・装身具 …… 27
13-1　１号墳玄室第２床面出土鉄器 …… 30
-2　１号墳前室第２床面出土鉄器 …… 30

14–1　1号墳玄室第1床面出土装身具1 …… 30
–2　1号墳玄室第1床面出土装身具2 …… 30
–3　1号墳玄室第2床面出土装身具1 …… 30
15　1号墳玄室第1床面出土装身具3 …… 30
–2　1号墳前室第1床面出土装身具 …… 30
–3　1号墳前室第2床面出土装身具 …… 30
–4　1号墳玄室第2床面出土装身具2 …… 30
16–1　2号墳全景 …… 45
–2　石室全景 …… 47
17–1　2号墳石室奥壁 …… 47
–2　玄室左側壁 …… 47
–3　玄室右側壁 …… 47
–4　完掘後の石室掘り方 …… 48
18–1　2号墳石室閉塞 …… 48
–2　石室閉塞 …… 48
–3　前室左側壁 …… 48
–4　前室右側壁 …… 48
19–1　2号墳石室と掘り方 …… 48
–2　墳丘列石 …… 46
–3　石室左前面の列石と集石 …… 46
–4　石室右前面の列石 …… 46
20–1　2号墳玄室内遺物出土状況1 …… 48
–2　玄室内遺物出土状況2 …… 48
–3　石室前面遺物出土状況 …… 48
21–1　2号墳玄室第1床面出土鉄器 …… 50
–2　2号墳前室第1床面出土鉄器・装身具 …… 50
22–1　2号墳羨道・墓道出土鉄器・装身具 …… 51
–2　2号墳左前面出土鉄器 …… 51
23–1　2号墳前室第2床面出土鉄器 …… 53
–2　2号墳玄室第1床面出土装身具 …… 53
–3　2号墳前室第1床面出土装身具 …… 53
–4　2号墳前室第2床面出土装身具 …… 53
–5　2号墳玄室第2床面出土装身具1 …… 53

24-1　2号墳玄室第2床面出土装身具2 …… 55
-2　前面遺物出土状況 …… 48
25　2号墳出土土器1 …… 64
26　2号墳出土土器2 …… 64
27　2号墳出土土器3 …… 69
28-1　3号墳全景 …… 74
-2　主体部 …… 74
29-1　3号墳左前面遺物出土状況 …… 75
-2　3号墳出土土器 …… 75
30-1　1号石棺墓 …… 81
-2　1号石棺墓 …… 81
31-1　1号石棺墓人骨出土状況 …… 81
-2　蓋石除去後の1号石棺墓 …… 81
-3　出土鉄器 …… 83
32-1　2号土壙 …… 84
-2　出土土器 …… 85
-3　出土鉄器 …… 86
33-1　3～6号土壙 …… 86
-2　3号土壙 …… 86
-3　4号土壙 …… 86
34-1　5号土壙 …… 88
-2　6号土壙 …… 88
-3　7号土壙 …… 89
35-1　1号火葬墓 …… 89
-2　1～3号骨蔵器 …… 89
36-1　通路遺構 …… 91
-2　通路遺構階段 …… 91
-3　その他の出土遺物 …… 93
37-1　903番地試掘トレンチ …… 93
-2　903番地試掘トレンチ …… 93
-3　試掘トレンチ出土土器 …… 93
38-1　山田D地区土塁 …… 96
-2　土塁土層断面 …… 98

挿 図 目 次

第 1 図　九州横断自動車道関係路線図（1/780,000）…… 2
第 2 図　山田遺跡群の位置と周辺の遺跡（1/25000）…… 11
第 3 図　山田遺跡群の発掘区域（1/2000）…… 12
第 4 図　山田遺跡群Ａ地区地形測量図（1/600）…… 折込み
第 5 図　山田遺跡群Ａ地区遺構配置図（1/600）…… 折込み
第 6 図　1号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）…… 13
第 7 図　1号墳墳丘土層実測図（1/60）…… 14
第 8 図　1号墳石室実測図1（1/60）…… 16
第 9 図　1号墳石室実測図2（1/60）…… 折込み
第 10 図　1号墳主体部掘り方実測図（1/80）…… 17
第 11 図　1号墳玄室第1床面遺物出土状況（1/30）…… 18
第 12 図　1号墳前室第1床面遺物出土状況（1/20）…… 19
第 13 図　1号墳石室第2床面遺物出土状況（1/30）…… 20
第 14 図　1号墳石室出土土器実測図1（1/3）…… 22
第 15 図　1号墳石室出土土器実測図2（1/3）…… 23
第 16 図　1号墳石室出土土器実測図3（1/3）…… 24
第 17 図　1号墳石室出土土器実測図4（1/3）…… 25
第 18 図　1号墳石室出土土器実測図5（1/3）…… 26
第 19 図　1号墳石室出土鉄器実測図1（1/2）…… 28
第 20 図　1号墳石室出土鉄器実測図2（1/2）…… 28
第 21 図　1号墳石室出土鉄器実測図3（1/2）…… 29
第 22 図　1号墳石室出土鉄器実測図4（1/2）…… 29
第 23 図　1号墳石室出土装身具実測図1（1/2）…… 30
第 24 図　1号墳石室出土装身具実測図2（2/3）…… 32
第 25 図　1号墳石室出土装身具実測図3（1/2）…… 34
第 26 図　1号墳石室出土装身具実測図4（2/3）…… 34
第 27 図　1号墳石室出土装身具実測図5（1/2）…… 35
第 28 図　1号墳石室出土装身具実測図6（2/3）…… 36
第 29 図　1号墳石室出土装身具実測図7（2/3）…… 40
第 30 図　1号墳墓道・前面出土土器実測図1（1/3）…… 42

第 31 図　1 号墳墓道・前面出土土器実測図 2 (1/3) …… 43
第 32 図　2 号墳墳丘・地山整形面測量図 (1/200) …… 45
第 33 図　2 号墳墳丘土層実測図 (1/60) …… 46
第 34 図　2 号墳石室実測図 (1/60) …… 折込み
第 35 図　2 号墳左前面集石遺構実測図 (1/30) …… 47
第 36 図　2 号墳主体部掘り方実測図 (1/80) …… 49
第 37 図　2 号墳石室出土鉄器実測図 1 (1/2) …… 50
第 38 図　2 号墳石室出土鉄器実測図 2 (1/2) …… 51
第 39 図　2 号墳石室出土鉄器実測図 3 (1/2) …… 52
第 40 図　2 号墳石室出土鉄器実測図 4 (1/2) …… 53
第 41 図　2 号墳石室出土装身具実測図 1 (2/3) …… 54
第 42 図　2 号墳石室出土装身具実測図 2 (1/2) …… 54
第 43 図　2 号墳石室出土装身具実測図 3 (2/3) …… 54
第 44 図　2 号墳石室出土装身具実測図 4 (1/2) …… 55
第 45 図　2 号墳石室出土装身具実測図 5 (2/3) …… 56
第 46 図　2 号墳石室出土装身具実測図 6 (2/3) …… 60
第 47 図　2 号墳墓道出土土器実測図 1 (1/3) …… 62
第 48 図　2 号墳墓道出土土器実測図 2 (1/3) …… 63
第 49 図　2 号墳左前面出土土器実測図 1 (1/3) …… 65
第 50 図　2 号墳左前面出土土器実測図 2 (1/3) …… 66
第 51 図　2 号墳左前面出土土器実測図 3 (1/3) …… 67
第 52 図　2 号墳左前面出土土器実測図 4 (1/3) …… 68
第 53 図　2 号墳左前面出土土器実測図 5 (1/3) …… 70
第 54 図　2 号墳左前面出土土器実測図 6 (1/3) …… 71
第 55 図　2 号墳墓道出土鉄器・装身具実測図 (1/2) …… 72
第 56 図　2 号墳左前面出土鉄器実測図 (1/2) …… 73
第 57 図　3 号墳墳丘・地山整形面測量図 (1/200) …… 折込み
第 58 図　3 号墳墳丘土層実測図 (1/60) …… 折込み
第 59 図　3 号墳主体部実測図 (1/60) …… 折込み
第 60 図　3 号墳墓道・左前面出土土器実測図 1 (1/3) …… 76
第 61 図　3 号墳墓道・左前面出土土器実測図 2 (1/3) …… 78
第 62 図　3 号墳墳裾・周溝出土土器実測図 1 (1/3・1/6) …… 79
第 63 図　3 号墳周溝出土土器実測図 2 (1/3) …… 80

第 64 図　1 号石棺墓実測図（1/30） …… 82
第 65 図　1 号石棺墓遺物・人骨出土状況実測図（1/20） …… 83
第 66 図　1 号石棺墓出土鉄器実測図（1/2） …… 83
第 67 図　1 ・ 2 号土壙実測図（1/30） …… 84
第 68 図　2 号土壙出土土器実測図（1/3） …… 85
第 69 図　2 号土壙出土鉄器実測図（1/2） …… 86
第 70 図　3 ～ 6 号土壙配置図（1/200） …… 86
第 71 図　3 ～ 6 号土壙実測図（1/30） …… 87
第 72 図　7 号土壙実測図（1/30） …… 88
第 73 図　1 号火葬墓実測図（1/10） …… 89
第 74 図　1 号骨蔵器実測図（1/3） …… 90
第 75 図　2 ・ 3 号骨蔵器実測図（1/3） …… 90
第 76 図　通路遺構実測図（1/300・1/60） …… 91
第 77 図　石器・石製品実測図（1/2・1/3・1/4） …… 92
第 78 図　合子実測図（1/2） …… 92
第 79 図　表採土器実測図（1/3） …… 93
第 80 図　南裾部出土土器実測図（1/3） …… 93
第 81 図　B ・ C地区地形測量図（1/400） …… 95
第 82 図　D地区周辺地形図（1/1000） …… 97
第 83 図　D地区地形測量図（1/200） …… 98
第 84 図　D地区土塁断面実測図（1/40） …… 99

表　目　次

表 1　山田遺跡群調査工程表 …… 3
表 2　1号墳玄室第1床面出土玉類計測表 …… 33
表 3　1号墳前室第1床面出土玉類計測表 …… 35
表 4　1号墳玄室第2床面出土玉類計測表1 …… 37
表 5　1号墳玄室第2床面出土玉類計測表2 …… 38
表 6　1号墳前室第2床面出土玉類計測表 …… 40
表 7　2号墳前室第1床面出土玉類計測表 …… 55
表 8　2号墳玄室第2床面出土玉類計測表1 …… 57
表 9　2号墳玄室第2床面出土玉類計測表2 …… 60

I　調査の径過

昭和51年，九州横断自動車道のルート決定時点で本線関係の発掘調査必要ケ所は，56ケ所，分布面積にして620,000㎡に達していた。これに加えて，九州横断自動車の福岡県内施工延長31.5kmのうちの大半を盛土施工する必要から，日本道路公団福岡建設局，同甘木工事事務所では採土場の選定をどこにするかの検討を行っていた。盛土施工には数百万立方米の土量が必要とされた。この採土場の候補地について，福岡県教育委員会は，日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所の要請に応じて文化財の分布調査を実施し報告してきた。

その採土場として昭和53年には，甘木工事区管内では同市大字柿原の山麗部と，朝倉工事区管内で朝倉町大字山田の本線に沿った部分が候補地として浮上した。甘木市大字柿原地区の候補地については，柿原古墳群などの多くの埋蔵文化財包蔵地であることや，九州横断道本線と若干ながら離れていることなどの問題があり採土場として最終的に決定されたのは，昭和55年度のことである。一方，朝倉町山田の採土場４万㎡については，本線沿いの部分であり採土後，本線を利用した土運般が可能なことや，南に筑後川を望む景色の良いサービスエリアとして供要することが出来ること，比較的埋蔵文化財の包蔵量は少ないのではないかと予想されたことから，昭和52年に採土場として，ほぼ確定していた。

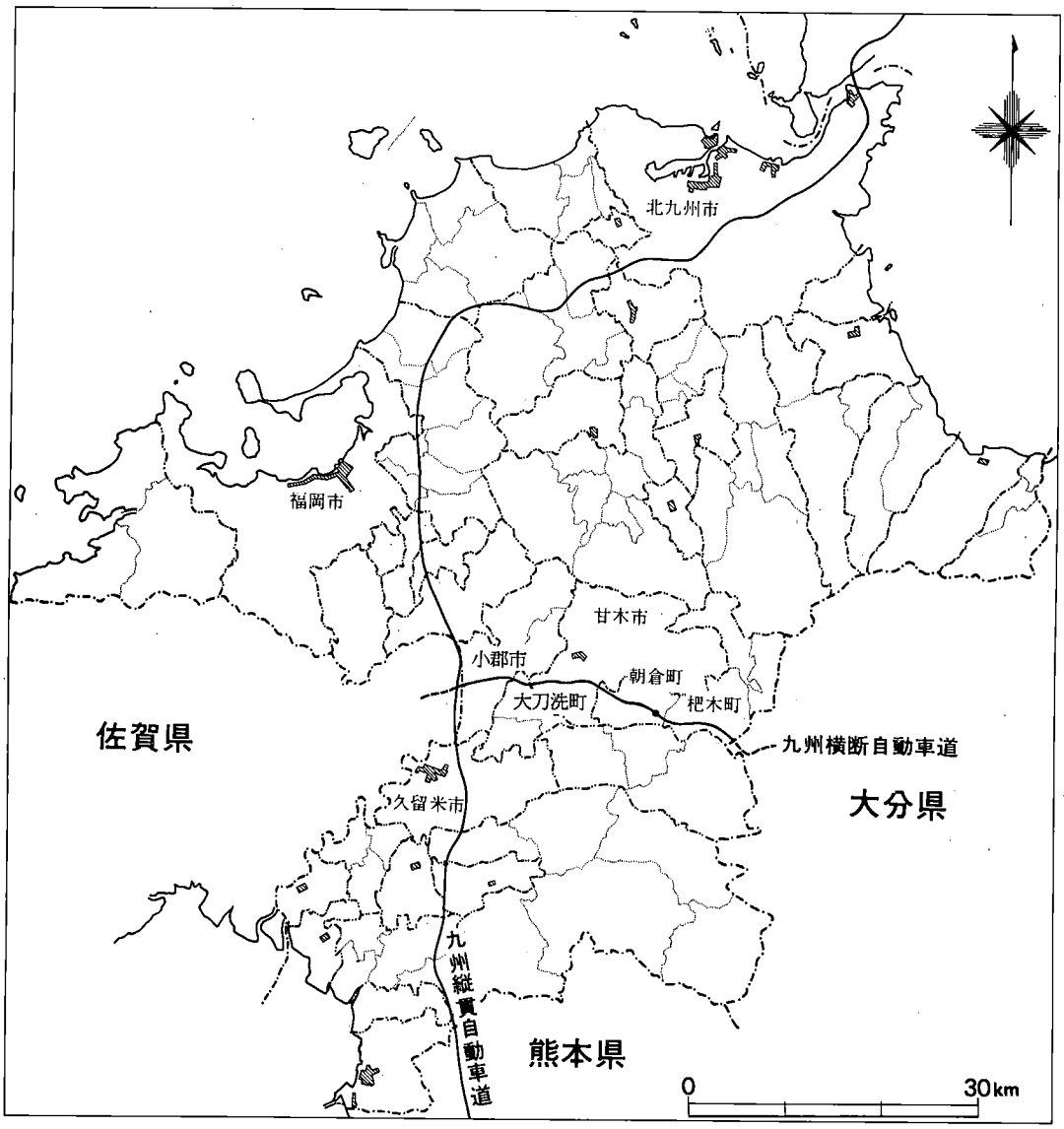
当時，福岡県教育委員会では，昭和51年度に九州縦貫道関係の埋蔵文化財の発掘調査を終了し，積み残した報告書の作成を行っていた。これは九州縦貫道関係の発掘調査は用地問題の解決した時点から文化財の発掘調査，工事期間を経過して本線が供要開始されるまでの時間短く，発掘調査の期間が各所で圧縮される一方，限られた調査人員から発掘調査が途切れることなく，本線の供要開始直前まで続いたことに起因する報告書刊行の積み残しであった。ために，九州横断道の発掘調査では，出来得る限り早い時期に発掘調査に着手することを日本道路公団福岡総局，同甘木工事事務所に要請してきた。

甘木工事事務所側でも，この要請を待つまでもなく連日連夜，用地の買収交渉を行っていたが，「用地買収交渉が成立すれば，道路建設事業の８割は終了したものと同じ。」と当事者が言うようにいくつもの困難があったようだ。

福岡県教育委員会では，昭和53年度中に九州縦貫道関係の報告書の刊行が終了することから，甘木工事事務所と協議の結果，用地買収交渉末了の状況ではあったが昭和54年度，本線の両側が圃場整備される13地点，14地点，地主の了解が得られた15地点の１部の発掘調査と山田

採土場の測量調査，８～11地点，柿原採土場候補地の詳細な分布調査を実施することから九州横断自動車の調査に着手することとなった。

山田採土場も，この時点では用地問題未解決のため，地元側からは細かい注文も出されたが，とにかくA～C地点の丘陵地鞍部を中心とする4,400㎡余の測量調査を実施した。さらにこの地点の発掘調査が可能となったのは昭和57年以降のことであり，発掘調査を実施したのは昭和58年に入ってからである。



第 1 図　九州横断自動車道関係路線図（1/780,000）

表1　山田遺跡群調査工程表

	調査地区	調査期間	調査担当者	調査内容	調査面積	調査概要
昭和54年度	A・B・C	S55. 2.15 ～3. 1	栗原・石山・新原	地形測量	4,435㎡	
〃 58年度	A・B・C	S58. 9. 1 ～59. 2.29	栗原	試掘	2,500㎡	
〃 59年度	B・C		栗原	〃	2,500㎡	
〃	D	S60. 3.15	木下・伊崎	発掘調査		土墨
〃 60年度	A	S60. 8.22 ～61. 1.20	小池・日高	地形測量 発掘調査	8,710㎡	横穴式石室、石棺墓 土壙墓、火葬墓

昭和54年度の調査

サービスエリア建設計画地の周辺では，本線は北西から東南にむけて走行している。本線北側の水田面（標高約60m弱）から，南側に急に高くなる。遺跡調査対象地は，本線の北東側，標高110mの最高部に馬頭観音が祭られている部分（C地点）から，西側に延びる丘陵鞍部標高80～90mの部分（A地点）と，A地点から北側に延びる標高100～105mの丘陵部分（B地点）であった。

A地点には，分布調査当時古墳が見つかっていたが，調査対象地の周囲では石棺墓などの遺存状況が知られており隣接するこの丘陵部にも各種の埋蔵文化財が包蔵されているものと予測されていた。

当時，日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所では当該地周辺の用地交渉を積極的に行っていたものの，交渉成立前の段階であった。福岡県教育委員会は，甘木工事事務所の仲介を得て，地元の理解と協力を要請した結果，昭和55年2月15日～3月にかけて地形測量を実施することが出来た。地形測量の実施面積は，A地点で2,075㎡，B地点で960㎡，C地点で1,400㎡程である。

この結果，A地点で円墳1墓の所在を再確認するとともに，A・B・C各地点にも遺構が充分に遺存していそうな平坦面を認めている。

なお，C地点の東側は，山地形を開墾し階段状にみかん畑が所在するが，A地点からみかん畑に丘陵尾根部にとりつく標高100m程のところに，1～2mの人工的な盛土部分があり，ここを後にD地点と呼ぶことにした。

昭和58・59年の調査

B・C地点

バックフォーによって，B・C地点の遺構検出を行った。表土の下は，すぐに地山となり弥生

式土器片・須恵器片など若干の出土はあったものの当初の予想に反して，明確な遺構は調査出きなかった。

なお，B地点の南側でC地点の裾にあたる付近で，巾1m程，深60cm程の丘陵を横切る溝が見つかっているが出土遺物などはなく，地境の表土的な意味をもつものと思われた。

表土の排土面積は，B・C両地点合せて3,500㎡程である。（栗原）

昭和60年度の調査

昭和60年度には，朝倉工事区での構造物工事もかなり進行し，文化財対象外区域や調査終了地点での盛土工事にいたっていた。本線内では各文化財調査地点の調査区域にも工事用道路が貫通していて，盛土搬入のダンプカーがひっきりなしに往来するようになった。そして山田採土場での採土はB地区とC地区の大半で既に掘削が進行していた。残されたA地区とC地区の一部は，伐栽後長期間が経過していて再度伐栽する必要があった。このため8月に森林組合に伐採を依頼し，伐採終了をまってA地区全域の地形測量を開始した。昭和54年度に実施した地形測量はA地区頂部のみであったが，伐採後の斜面全域はかなりの表面積であった。調査担当者の一人が暫く本線内の狐塚南遺跡の調査を並行実施していたこともあり，測量には長期間を要した。狐塚南遺跡の調査は9月24日に終了し，翌25日に山田古墳群に発掘機材等を移動するとともに，A地区頂部からユンボで表土を剝ぎ遺構検出を実施した。発掘前の地形測量は9月末に終了し，引続き遺構検出終了部分の地形測量を始めた。

調査前から古墳と判断できた1号墳は，表土から人力で掘り下げたが，石室内に転落していた天井石などの除去には機械力によったものが多い。また1号墳の南側では石棺墓を，東側では火葬墓を検出した。10月中旬には西側に延びる尾根の表土剝ぎにかかった。調査前に古墳の可能性を考えていた石のまとまりは石垣の崩壊したものであったが，これよりも北東側で調査前の観察では想定していなかった部分で，上部の削平された古墳（2号墳）を検出した。南西斜面にある3号墳は調査前から陥没穴があることから古墳と考えていたが，陥没穴は以前から伐採材の焼却などに使用されていたのか，焼土や焼けた木切れや塵芥なども詰まっているものの，石材はほとんどみられない状態であった。陥没穴の攪乱土をほぼ除去し尽くした頃になって石材が乱れた状態で少し現れ，前面で土器類が出土し始めたので古墳であることはほぼ確実となったが，床面の高さが一定せず判断に苦しむ古墳であり，実は地滑りによって床面に高低が生じていることを知るのは，墳丘を断ち割っての土層観察を行った11月中旬になってであった。

3号墳の南側の斜面下では1・2号土壙墓を検出したが，3号墳からの排土を含めて，表土剝ぎの排土はかなりの量に達した。諸般の事情で排土は調査区域の近くではなく本線内の谷部

に置かなければならず，時には搬出ルートの農道・町道を補修する必要もあった。12月になって斜面下位の表土も除去して農道脇で土壙墓などを検出したが，全面を剝いでの全景写真は気球による空中写真で撮影した。

1・2号墳ともに，石室内を清掃して写真撮影し，遺物出土状況・石室壁体の実測作業を進めていたが，床面はともに2面あり，それぞれに遺物の出土がみとめられた。12月からは天候もしぐれることが多く，石室の上にテント・ビニールシートなどで覆い屋根を設け，蛍光灯を点灯しての実測作業が続いた。また1月には，壁体を解体して鏡石・袖石の抜き跡まで確認したが，石室内床面からの排土はすべて水洗して多数のガラス玉などを回収した。

調査期間中には，付帯施設を含めたサービスエリア用地内の試掘調査も実施した。西側尾根裾に相当する，町道沿いの部分では煙草乾燥場に使用されていたこともあり，整地・削平されて遺構・遺物はみられなかった。また南側平坦面では柿畑造成時に攪乱されて遺構はみられなかったが，須恵器破片などが出土した。

現地での調査が終了したのは，1号墳の直ぐ後ろにまで掘削の迫った1月20日であった。

調査関係者

山田古墳群の調査関係者は次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局	1979	1983	1984	1985
局　長	竹原　清隆	今村　浩三	今村　浩三	今村　浩三
総務部長	田代　勝重	落合　一彦	菱刈　庄二	安元　富次
管理課長	野中　岩雄	梅田　道人	森　宏之	森　宏之
管理課長代理		野口　利夫	野口　利夫	佐伯　豊
日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所				
所　長	佐藤　善彦	乗松　紀三	乗松　紀三	乗松　紀三
副所長	矢野　浩司	西田　功	西田　功	西田　功
副所長（技術）		中村　義治	中村　義治	中村　義治
庶務課長	森本　太助	松下　幸男	松下　幸男	徳永　登
用地課長	溝口　萩男	岩下　剛	岩下　剛	岩下　剛
工務課長	福成　隆	山口　宗雄	山口　宗雄	後藤二郎彦
小郡工事区工事長	田口　裕	友田　義則	友田　義則	友田　義則
甘木工事区工事長	公文　莞二	猪狩　宗雄	猪狩　宗雄	猪狩　宗雄
朝倉工事区工事長	吉永　英一	平沢　正	平沢　正	小手川良和
杷木工事区工事長		前田　雄一	前田　雄一	山中　茂

福岡県教育委員会	1979	1983	1984	1985
教育長	浦山　太郎	友野　隆	友野　隆	友野　隆
教育次長	守屋　尚	安部　徹	安部　徹	安部　徹
管理部長	森　英俊	伊藤　博之	伊藤　博之	大鶴　英雄
文化課長	藤井　功	藤井　功	前田　栄一	前田　栄一
文化課長補佐	遠尾　謙吉	中村　一世	中村　一世	平　聖峰
技術補佐				宮小路賀宏
庶務係長	大淵　幸夫	松尾　満	松尾　満	平　聖峰
事務主査	平尾　敏映	長谷川伸弘	長谷川伸弘	長谷川伸弘
	三島　洋輝			
調査第二係長	栗原　和彦	栗原　和彦	栗原　和彦	宮小路賀宏
技術主査				井上　裕弘
主任技師	柳田　康雄	木下　修	木下　修	高橋　章
	石山　勲	児玉　真一	児玉　真一	中間　研志
		新原　正典	新原　正典	佐々木隆彦
		中間　研志	中間　研志	小池　史哲
		佐々木隆彦	小池　史哲	
		小池　史哲		
技師	新原　正典	伊崎　俊秋	伊崎　俊秋	伊崎　俊秋
	馬田　弘稔			小田　和利
	小池　史哲			緒方　泉
専門員			木村幾多郎	木村幾多郎
臨時職員			日高　正幸	日高　正幸
			森山　栄一	森山　栄一
			緒方　泉	緒方　泉
			宮田　浩之	宮田　浩之
調査補助員	日高　正幸	高田　一弘	高田　一弘	高田　一弘
		武田　光正	武田　光正	武田　光正
		日高　正幸	佐土原逸男	佐土原逸男
		佐土原逸男	平嶋　文博	平嶋　文博
		平嶋　文博	向田　雅彦	樋口　秀信
		狐塚　省三	田中　康信	向田　雅彦

A地区発掘調査は，小池と日高が担当し，武田（現遠賀町教育委員会）が補助した。

発掘作業には次の方々が参加された。原野昌伸・高瀬岩男・江藤行忠・牟田サエ子・谷村京子・野田美知子・半田久子・半田松子・足立シズカ・半田ヨシ子・岩下スミ子・岩下タマエ・岩下陽子・岩下キヨ子・岩下トミ子・岩下ヨシ子・岩下テル子・岩下チズ子・天野ヨシエ・松尾テル子・上田ヒサ子・星野百合子・星野美代子・小林あい子・古賀ふじみ・古賀フミエ。

また，地元の日野義夫氏，朝倉町役場建設課の古賀隆信氏，工事施工業者の日産建設・古賀組共同企業体からは種々の協力を得た。

報告書作成時の関係者

本書作成に係わる，平成3年度の関係者は次の通りである。

日本道路公団福岡建設局

	局　長	加藤　興史	中野　英治（前任）
	次　長	渡辺　国几	高野　武（前任）
	総務部長	岡本　房徳	
	管理課長	江良　信弘	
	管理課長代理	塚本　文康	

福岡県教育委員会

総　括	教育長	御手洗　康
	教育次長	光安　常喜
	指導第二部長	月森清三郎
	文化課長	森山　良一
	同文化財保護室長	石松　好雄
	同調査班総括	柳田　康雄
	同　総括補佐	井上　裕弘
	同　参事補佐	副島　邦弘
庶　務	文化課管理係長	岸本　実
	同　主任主事	安丸　重喜
整　理	調査班技術主査	小池　史哲（執筆担当）
	京築教育事務所主任技師	伊崎　俊秋（執筆担当）
	文化課専門員	日髙　正幸（執筆担当）
	整理指導員	岩瀬　正信

出土遺物の整理は，九州歴史資料館と文化課甘木事務所で行ったが，土器類の水洗・接合・復原には小島佐枝子・中塩屋リツ子・中村紀代子・尾花道子・石井紀美子・藤井カオル，土器類の実測には高瀬照美・松嶋邦子，遺構図の整理・浄書には豊福弥生・塩足里美・原カヨ子・関久江・水野美奈・土山真弓美・岡由美子・黒木美幸，写真の撮影・整理には石丸洋・水ノ江明美，鉄器類の保存処理には横田義章など各氏の協力を得た。このほかにも発掘作業・報告書作成作業を通じて，多くの方々の協力を得ることができた。感謝に耐えない。

Ⅱ　位置と環境

山田遺跡群は，福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字平川・長田・浦山の一部に亙って所在する。

朝倉山塊の麻底良山（標高294.9m）より西側に派生する丘陵は，筑後川右岸の朝倉町一帯に広がる中位段丘上に突出て緩傾斜になるが，その先端部の標高50～110mの斜面をもつ高まりに相当する。この丘陵の，北側は田の口峠を経て甘木市黒川地区に通ずる奈良ケ谷の狭い谷で，南側約1kmには筑後川本流が流れている。筑後川右岸の水田面を潤すために山田堰から堀川用水が開削されているが，現在も稼働している朝倉の三連水車も眼下に見ることの出来る位置である。古墳群のある丘陵は，菱野・山田方面から麻底良布神社のある麻底良山に登るルートとしては比較的緩やかな尾根が続いていて，古老の話ではこの尾根道をよく利用したということである。そしていま，遺跡群周辺の緩斜面では柿栽培が盛んである。

歴史的環境

旧石器時代の遺跡としては，朝倉町菱野所在の原の東遺跡でナイフ形石器などの包含層が調査されている。山田古墳群から至近の遺跡である山の神遺跡・上の宿遺跡でもナイフ形石器が出土していて，約21000年前のAT火山灰の降下の痕跡もみられる。同じく至近の金場遺跡からは旧石器時代末期の細石器を含む文化層が調査されている。

縄文時代の資料は横断道関係の発掘調査によって急増している。早期の石組炉跡・集石遺構が原の東遺跡，山田の金場遺跡・上の宿遺跡などで発見され，押型文土器などの出土は朝倉町から杷木町にかけての路線内遺跡の過半数でみとめられる状況であり，筑後川対岸の水縄山麓部の遺跡からも出土している。前期の遺構・遺物は金場遺跡・上の宿遺跡・稗畑遺跡・外之隈遺跡・杷木町の天園遺跡などから，中期の遺物は上の宿遺跡・稗畑遺跡などでみられる。後期は長島遺跡・上の宿遺跡・稗畑遺跡・杷木町の中町裏遺跡・上池田遺跡や，水縄山麓部の遺跡や吉井町月岡古墳周辺から出土している。晩期の遺物も朝倉町から杷木町にかけての路線内遺跡のほとんど，水縄山麓部の遺跡や吉井町塚堂遺跡などの筑後川自然堤防上の遺跡から出土している。竪穴住居跡・貯蔵穴・土壙などの遺構も多数調査され，当時の生活環境の復原に貴重な資料が多数得られた。また時期を特定し難いものの落し穴状遺構の例も増加している。

弥生時代では，初期の遺跡として支石墓4基や竪穴住居跡群などが検出された杷木町の畑田遺跡がある。前期から後期の住居跡・貯蔵穴群は，原の東遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡，吉井町大碇遺跡・鷹取五反田遺跡などで調査されている。墓地では中期初頭～前半の木棺墓・甕棺墓が，原の東遺跡・上の宿遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡などで

調査された。また高地性集落として杷木町の西ノ迫遺跡がある。

古墳時代では，集落として長島遺跡・長田遺跡・大迫遺跡・外之隈遺跡・杷木宮原遺跡・吉井町塚堂遺跡などの自然堤防上の遺跡がある。横断道路線内遺跡では緩斜面地形に相当するせいかこの時期の住居跡の検出例は多くない。墓地としては，筑後川に向かって突出した地形に占地して，恵蘇八幡宮古墳・志波宝満宮古墳・外之隈遺跡などがあり，朝倉町菱野の剣塚古墳・中町裏遺跡・志波桑ノ本遺跡なども比較的突出した位置にある。これらは古墳時代初期から5世紀代にかけて墓地が営まれ，対岸の自然堤防止には，月岡古墳・日岡古墳・塚堂古墳などの前方後円墳が並ぶ。後期の古墳群はそれまでの古墳よりも奥まって，朝倉山塊に派生した丘陵斜面に占地する。恵蘇山・上の宿・山田柳・奈良ケ谷・山ノ神・妙見・山後山・上須川・小隈・降葉山・宮野・立野・八坂・北八坂・宮地獄古墳群などがそれで，甘木市の山麓部にも群集する。これとは対称的に杷木町側の斜面には古墳群はみられない。

甘木市・朝倉町域に分布する古墳群の中には，6世紀代の後期古墳の他に7世紀以降に築造されるいわゆる終末期古墳の存在も注意する必要がある。横断道建設に伴う採土場で調査された柿原遺跡群のD地区・L地区古墳群例や，北八坂B古墳群・山後山の赤林古墳群など調査された例以外にもこの時期の古墳の存在が考えられよう。また奈良時代の土壙墓が長島遺跡などから，火葬墓が大迫遺跡で発見されている。柿原D地区の古墳から出土した須恵器には，大宰府政庁域出土のものと酷似するヘラ記号をもつものがあり，太宰府市向佐野の宮ノ本遺跡の窯跡出土の須恵器と胎土・調整などが酷似している。甘木市・朝倉町域での須恵器窯跡の調査例がなく，各古墳・住居跡出土須恵器の関係は，いまのところ把握できていないが，注意を要する問題であろう。

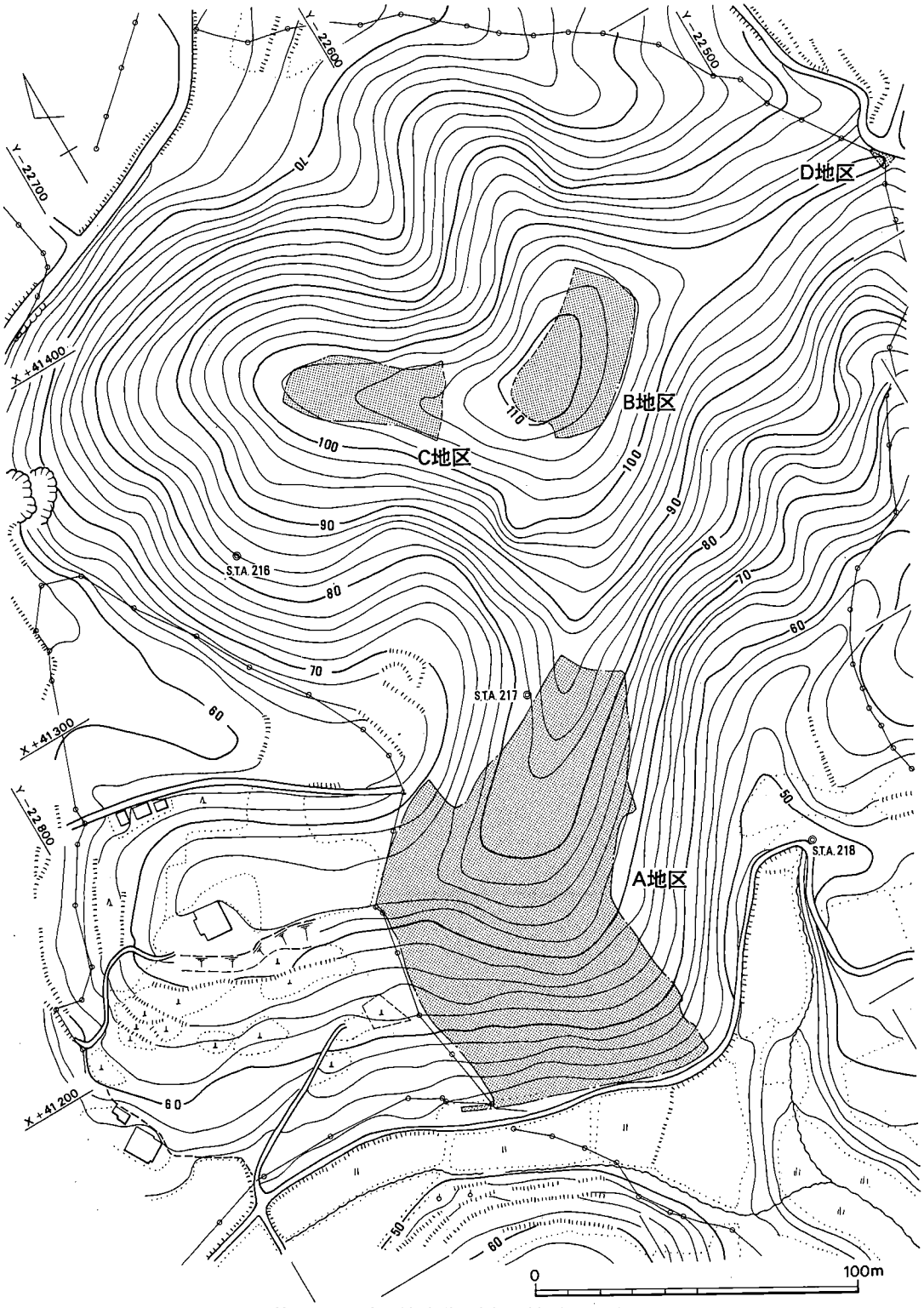
奈良時代の集落は，筑後川右岸の中位段丘上の平坦面で発見されている。朝倉町内では横断道関係で発掘調査した，中道遺跡・西法寺遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡などがあげられる。

平安・鎌倉時代の遺跡は，狐塚南遺跡・才田遺跡・長島遺跡・志波桑ノ本遺跡などがある。才田遺跡の土壙からは舶載陶磁器類が出土し，狐塚南遺跡・志波桑ノ本遺跡では火葬墓などが多数発見されている。

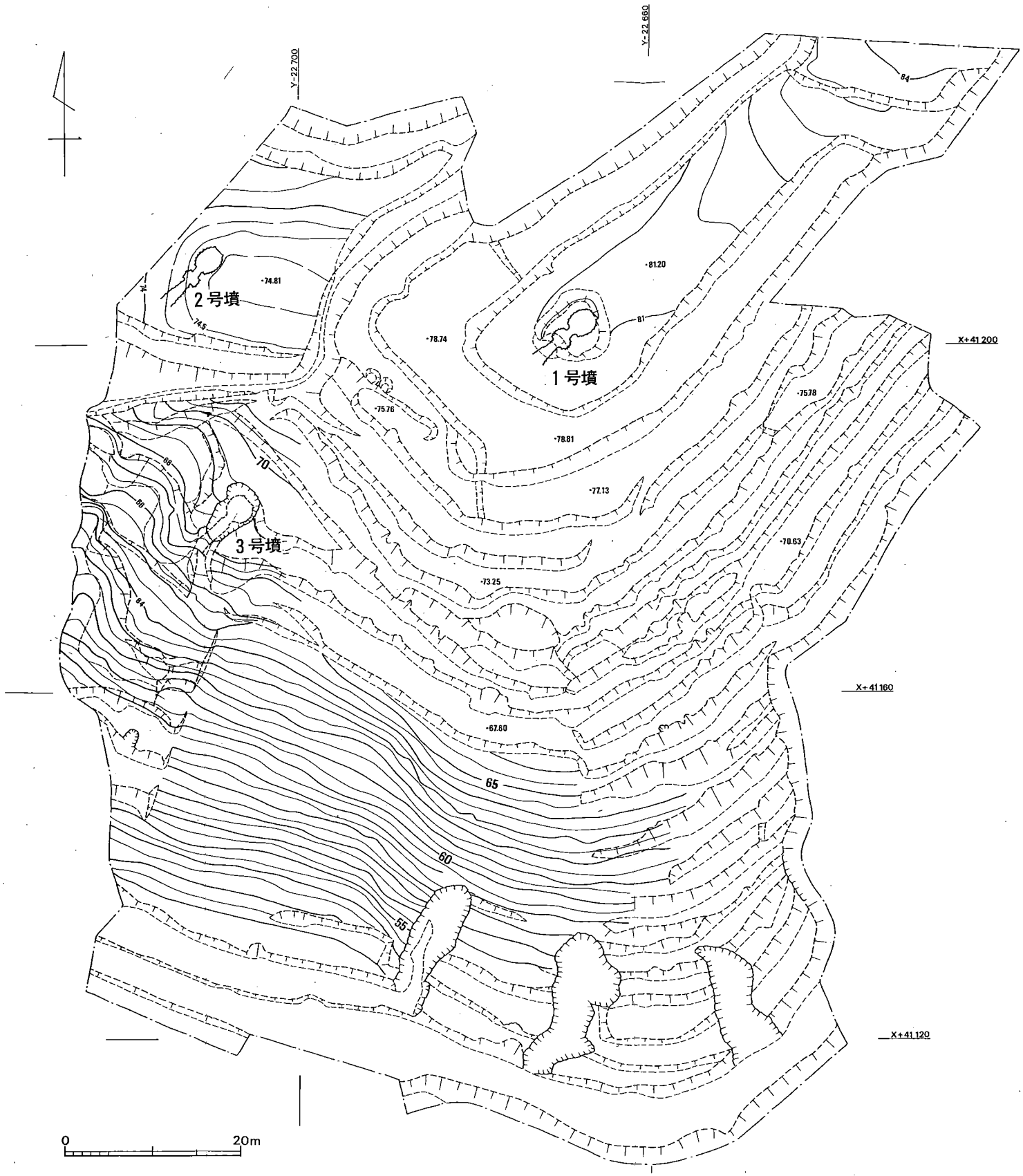
斉明七（661）年に，白村江の敗戦による百済の救援のため，斉明天皇が行宮された朝倉橘廣庭宮は朝倉山塊の麓にあり，朝倉町宮野・須川，同山田の恵蘇八幡宮，杷木町志波などに推定されているが，いまのところ考古学的な確証は得られていない。候補地のひとつである須川には，奈良時代の寺院跡長安寺跡がある。志波では，杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡に，時期が特定しえないものの主軸方位が共通する大型の掘立柱建物跡群がみられる。朝倉町側に集中する集落跡・古墳群の存在など，この考古学的解明への礎ともいえる資料が集りつつある。

1．山田遺跡群　2．才田遺跡　3．長島遺跡　4．中妙見遺跡　5．原の東遺跡　6．妙見古墳群　7．鎌塚遺跡　8．山ノ神遺跡　9．長田遺跡　10．金場遺跡　11．山ノ宿遺跡　12．恵蘇山遺跡　13．稗畑遺跡　14．大迫遺跡　15．外之隈遺跡　16．杷木宮原遺跡　17．中町裏遺跡　18　志波桑ノ本遺跡　19．志波岡本遺跡　20．江栗遺跡　21．古熊古墳群　22．曲田古墳群　23．烏集院1号墳　24．北八坂古墳群　25．宮地嶽古墳群　26．宮地嶽古墳　27．宮地嶽北方古墳群　28．立野古墳群　29．宮野A古墳群　30．宮野B古墳群　31．朝倉橘廣庭宮推定地　32．長安寺廃寺　33．八並遺跡　34．小隈古墳群　35．上須川古墳群　36．山後山古墳群　37．山ノ神古墳群　38．奈良ヶ谷古墳群　39．鎌塚古墳　40．鎌塚西遺跡　41．剣塚古墳　42．山田ウラ山遺跡　43．山田古墳群　44．山田柳古墳群　45．上ノ宿古墳群　46．恵蘇八幡宮古墳群　47．麻底良城跡　48．志波宝満宮古墳　49．鷹取五反田遺跡　50．堺町遺跡　51．大碇遺跡　52．生葉1号墳　53．女塚古墳　54．月岡古墳　55．日岡古墳　56．千年遺跡　57．塚堂古墳　58．塚堂遺跡

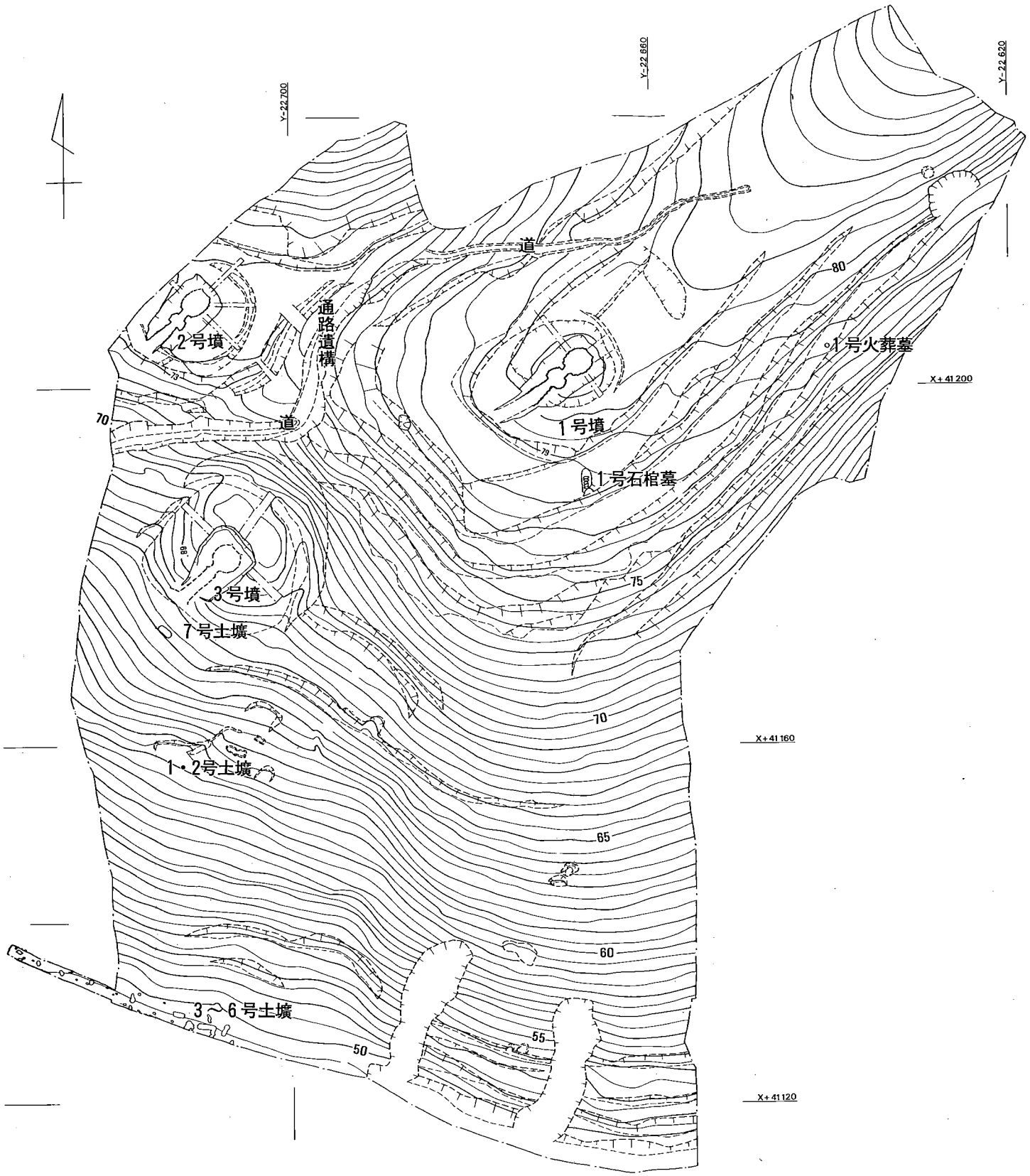
第 2 図　山田遺跡群の位置と周辺の遺跡（1/25000）



第 3 図　山田遺跡群の発掘区域（1/2000）



第 4 図　山田遺跡群 A 地区地形測量図 (1/600)



第 5 図　山田遺跡群 A 地区遺構配置図 (1/600)

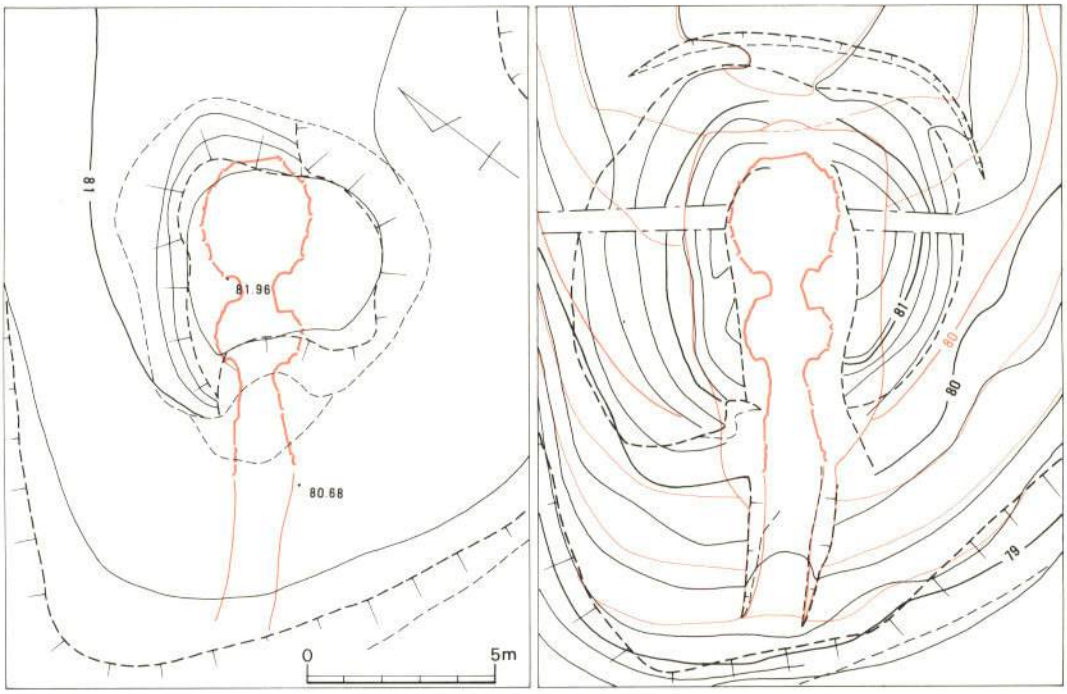
Ⅲ　A 地区の調査

山田 A 地区では，横穴式石室 3 基，石棺墓 1 基，土壙墓 7 基，火葬墓 1 基，通路遺構 1 条などの遺構を調査した。

1．1 号墳

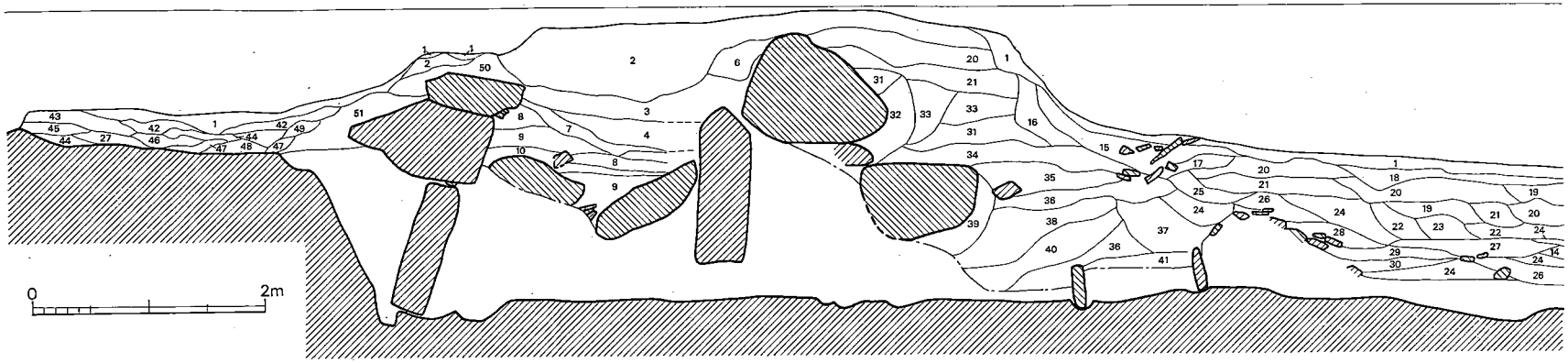
墳　丘（図版 4－1，第 6・7 図）

A 地区尾根の頂部を占地し，3 基の古墳の中では最高所の標高81ｍに位置する古墳である。調査前の観察では，南北 8 ｍ，東西 9 ｍ，高さ 1 ｍの円墳として，当初から古墳と判断できた。墳頂部は直径 5 ｍ程の平坦面になっていたが，墳頂部に陥没穴はみとめられないものの，南西



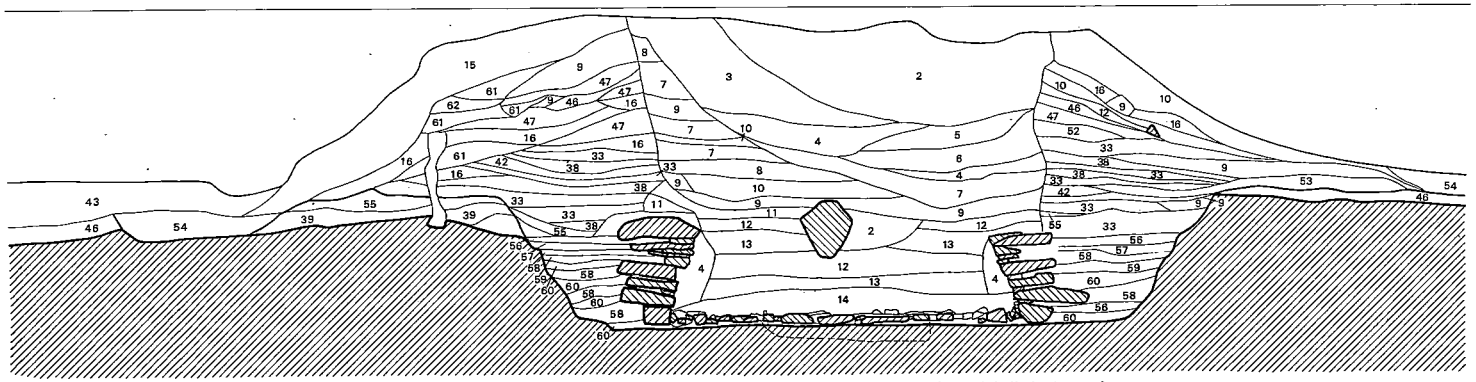
第 6 図　1 号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）

標高82.0m



1 表土，青灰色混茶褐色土
2 小角礫混茶褐色砂質土
3 小角礫混暗茶褐色砂質土
4 小角礫混赤褐色砂質土
5 角礫混赤褐色土
6 角礫混赤茶褐色土
7 板石混暗赤褐色土
8 小角礫混赤茶色粘質土
9 小角礫混赤褐色粘質土
10 赤茶色粘質土
11 小角礫混黄茶色粘質土
12 小角礫混暗黄茶色土
13 小角礫混黄褐色土
14 暗茶灰色粘性土
15 茶・暗褐色土
16 小角礫混茶・暗褐色土
17 淡黄茶色泥土
18 淡黄褐色粘質土
19 淡黄茶色粘土
20 黄・茶褐色粘質土
21 小礫混淡黄茶色粘質土
22 淡灰色土混茶色粘質土
23 灰色砂泥混茶色粘質土
24 赤褐色礫混暗茶灰色土
25 淡黄褐色土混茶灰色土粘質土
26 茶灰色土混淡黄褐色粘質土
27 暗灰褐色土
28 茶色粘質土混灰色砂泥
29 岩盤礫混暗茶灰土
30 礫混淡茶褐色土
31 黄褐色混茶褐色粘質土
32 黄褐色混茶褐色土
33 礫・黄褐色混茶褐色粘質土
34 灰色砂泥混茶灰色粘質土
35 黄褐色混淡茶灰褐色粘質土
36 淡茶灰褐色粘質土
37 礫混暗茶灰色粘質土
38 礫・黄褐色混暗茶灰色粘質土
39 茶色粘質土
40 暗灰色粘質土
41 礫混暗茶灰色土
42 礫・黄褐色混茶色粘質土
43 礫混茶灰褐色土
44 茶灰褐色粘質土
45 茶褐色粘質土
46 暗茶褐色土
47 淡赤褐色粘質土
48 淡茶褐色土
49 黄茶褐色粘質土
50 礫・褐色混茶褐色粘質土
51 赤褐色混黄茶褐色粘質土
52 赤褐色粘質土
53 礫・茶褐色混黒褐色砂質土
54 黒茶褐色土
55 黒褐色粘質土
56 小礫混赤黄褐色土
57 小礫混黒褐色土
58 小礫・黒褐色混褐色土
59 小礫・褐色混黒褐色土
60 礫混赤褐色土
61 黒褐色砂質土
62 茶暗褐色土混黒褐色砂質土

標高82.0m



第 7 図　1号墳墳丘土層実測図（1/60）

側斜面に小さな陥没がみられた。地形測量後，この陥没部分の壁面の清掃を始めて，石室の石材の一部を確認した。

石室確認後に，石室内部の掘り下げと，墳丘の断ち割りを実施した。石室内部は天井石および壁体の石が転落し，墳丘盛土の崩落した締りのない土が堆積していた。また前面側の堆積土や，奥壁裏側の墳丘も比較的締りがなく，土層の観察でも，開墾などによって盛土が移動したかのような状況がうかがえる。北西側の墳丘盛土では，袖石上の壁体構築段階の盛土が旧表土の上にみられ，天井石構架段階までは，版築状をなしている。この後の墳丘盛土はそれまでの盛り方ほど整然さがみられず，いっきに天井石がすっぽり隠れる土饅頭に盛りあげたような状況がうかがえる。

この古墳は，北東側から続く尾根線に平行させて石室を構築している。地山整形では，背後に標高80.9m位を上端として，幅1m強の馬蹄形状の溝を削り，この内側に盛土して墳丘としているが，直径9.5～10mの円墳で，当初の高さは2.5m程度であろうか。

主体部（図版4－2，5－8，第8～10図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN54° 20′ Eにとり，南西方向に開口する，複室構造の横穴式石室である。

石室の掘り方は，80.5m位を奥側の上端として掘り込まれる，長さ10m，幅4～5.5mの不整長方形プランを呈している。奥壁部分では深さ1.3mだが，前面側に浅くなり，幅2m弱，長さ3m程の素掘り墓道が取付く。

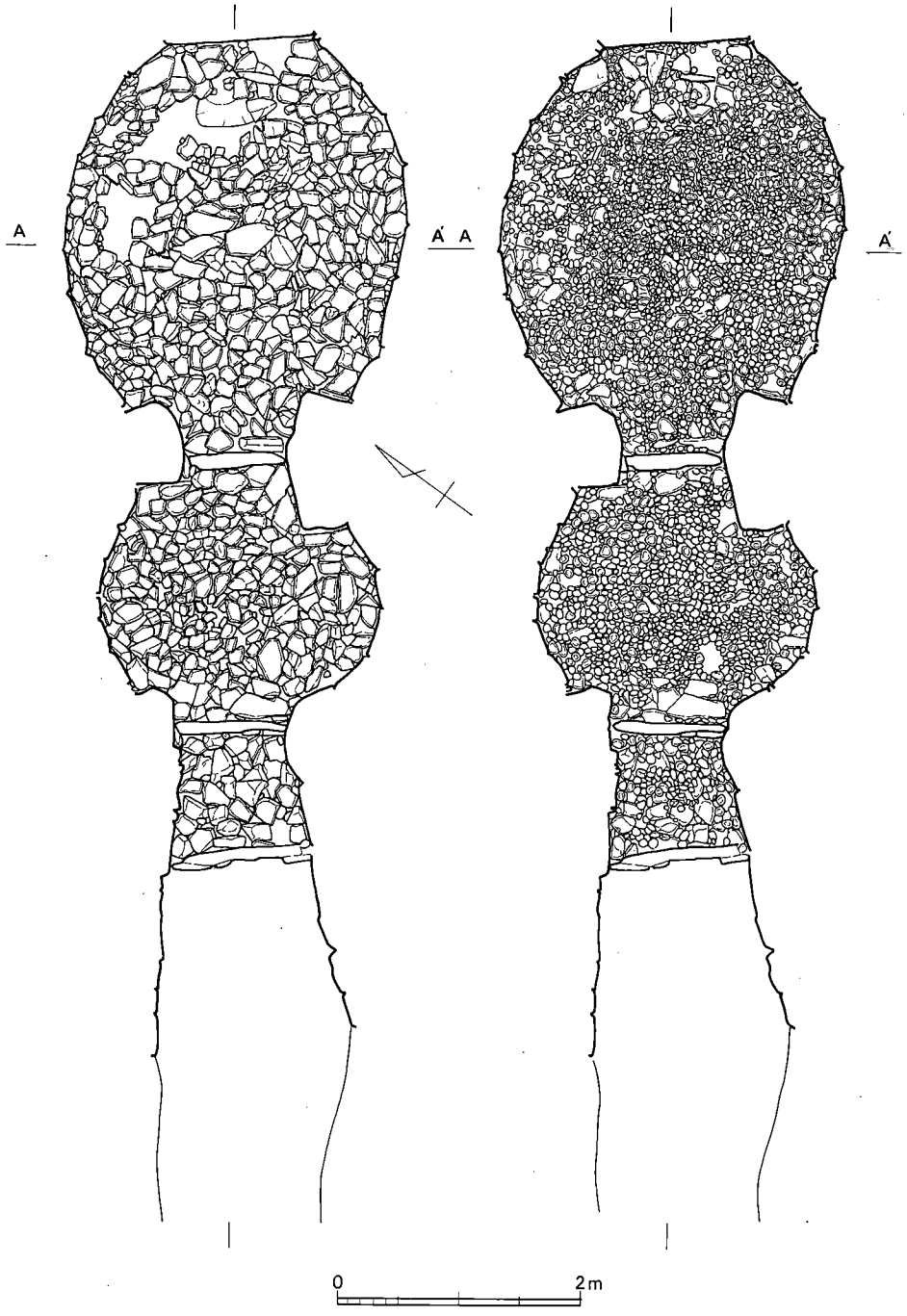
石室では玄室・前室ともに天井石と壁体の一部が崩壊し，石室内に転落していた。

石室全長は、左側壁で8.30m，右側壁で8.10mを測る。

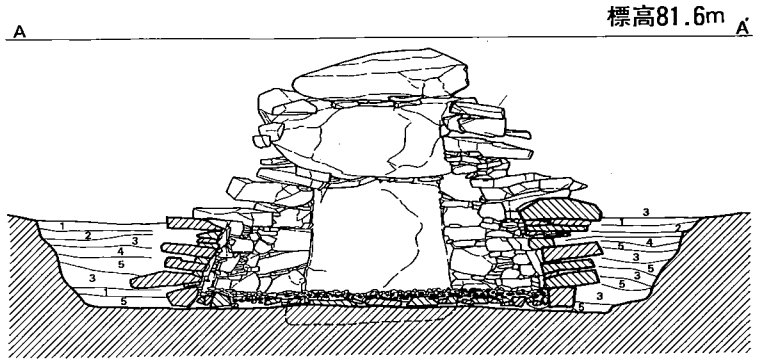
玄室の長さは，左側壁で2.95m，右側壁で2.90m，中軸線で2.90mである。三味線胴の胴張りプランで，最大幅2.80mは中央部にある。奥壁中央に幅120cm，高さ90cm（石材の高さ115cm，最大幅135cm），厚さ33cmの石を据えて鏡石とし，両脇は扁平石を基底部から平積みしている。鏡石の上には，大きく広めの石が平積みされる。両側壁ともに，基底部から扁平石の平積みで，少しづつ持ち送ったドーム状を呈しているが，天井石は残らない。玄室では奥壁が床面から1.95mの高さまで残されているものの，側壁は高さ0.80m程度しか残らない。床面には下部で大きめの扁平石を，上部で玉砂利状の石を全面に敷いた，上下2面の敷石がみられる。

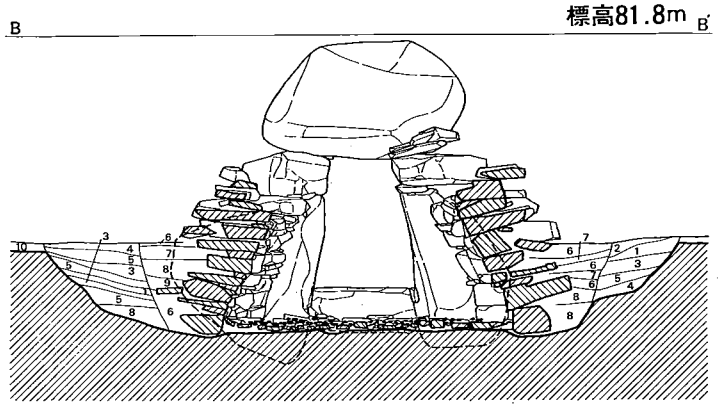
玄門部分の袖石は，120～130cm程，幅70×110cm程の石が，左側は主軸に平行，右側は直交方向に据えられて，袖石上に乗る広めの扁平石を挟んで，長さ150cm，幅・厚み100～150cmの塊石が天井に架かる。玄門幅は0.6～0.8mで，高さ1.3m程に空間を得ているが，床面には長さ78cm，幅30cm，厚さ10cm強の扁平石が仕切石として据えられている。

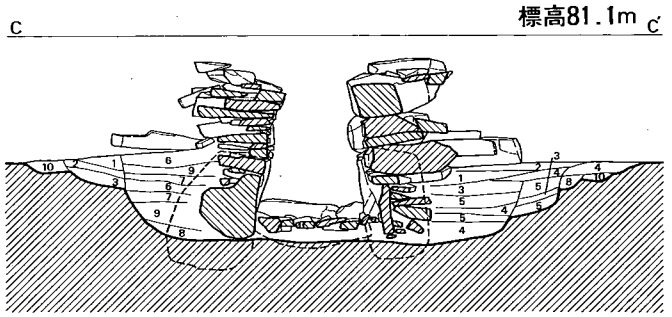
前室は，左側で1.65m，右側で1.30m，主軸で1.55mの長さを測り，胴張りの平面形を呈し

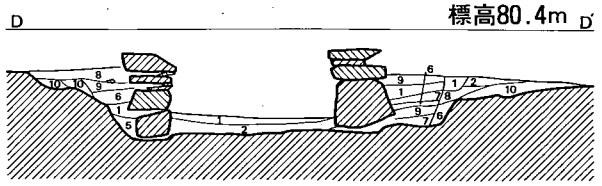


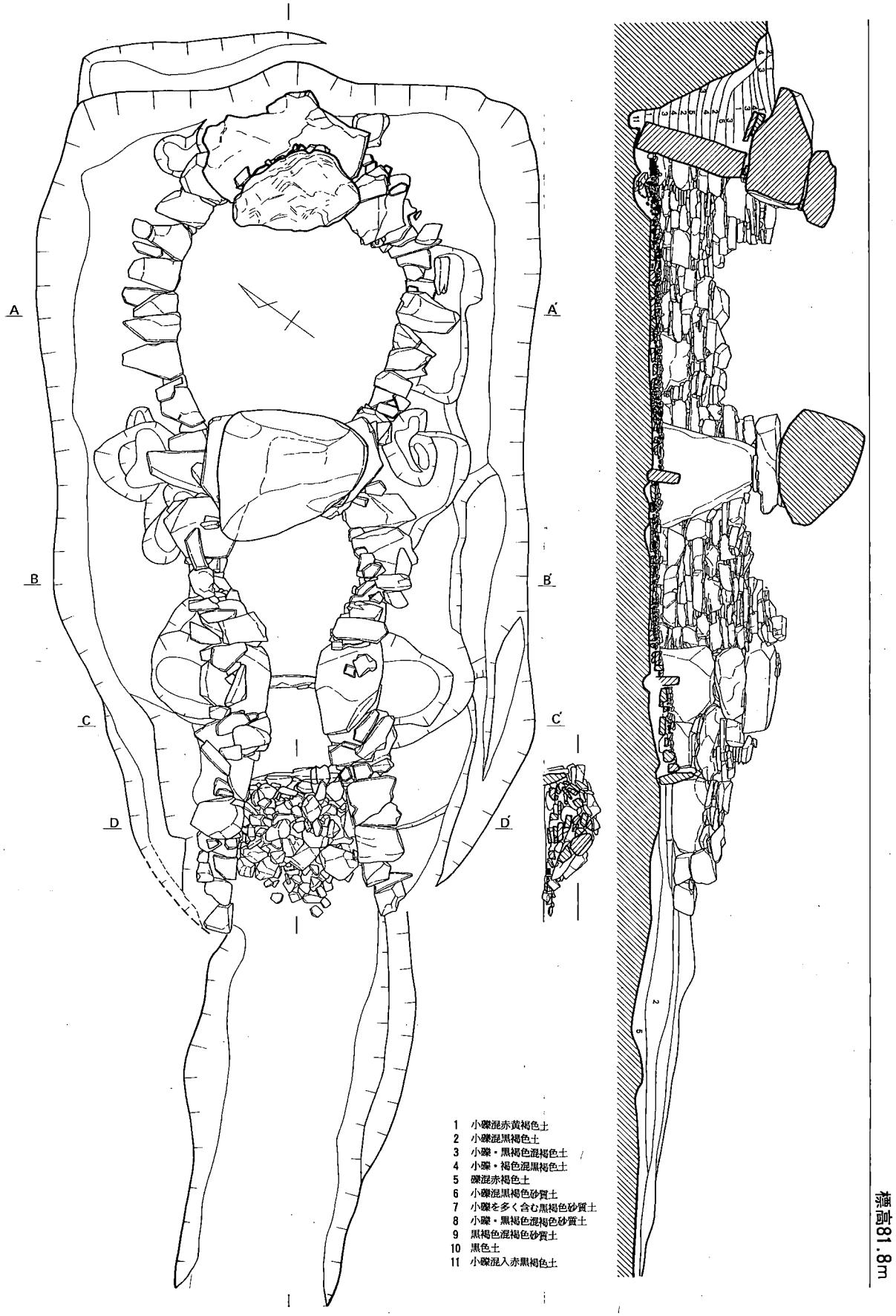
第 8 図　1号墳石室実測図1 (1/60)



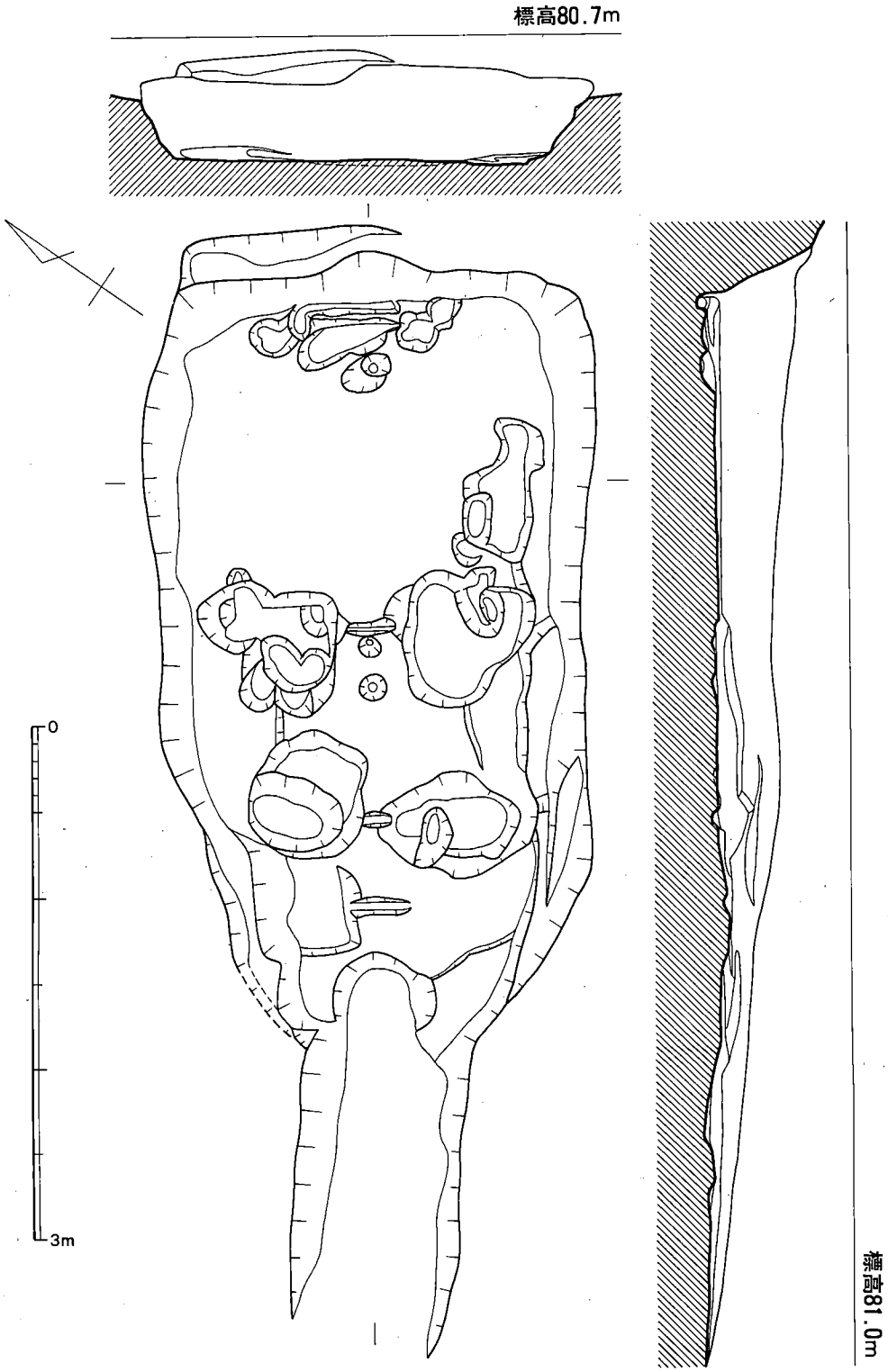








第 9 図　1号墳石室実測図2 (1/60)



第 10 図　1号墳主体部掘り方実測図（1/80）

ていて，最大幅は中央部にあり2.30ｍを測る。側壁は，左右ともに基底部から扁平石の平積みで，少しづつ持ち送ってドームを呈し，1.0～1.4ｍの高さに残っている。床面には下部で大きめの扁平石を，上部で玉砂利状の石を全面に敷いた，上下２面の敷石がみられる。

前室左袖石は，高さ60cm（石材は95cm），幅50cm，厚み70cmの石を，右袖石は高さ60cm（石材は90cm），幅75cm，厚み50cmの石を据えている。この石の上にそれぞれ広めの扁平石を平積みして高さ1.3ｍ程に残るが，このすぐ上に天井の石が架けられていたのであろう。袖石間0.90ｍぎりぎりに，長さ90cm，幅35cm，厚さ10cmの扁平石を立てた仕切石がある。

羨道部は，前室袖石から緩やかに開く平面形を呈するが，左側で2.70ｍ，右側で2.50ｍの長さをもち，前面での幅は1.60ｍを測る。このうち，前室仕切石から左側で1.00ｍ，右側で0.90ｍの位置では，幅1.15ｍを測るが，ここに長さ100cm，幅40cm弱，厚さ10cm弱の扁平石と小振りな石を立てて仕切石が設けられている。これによって小さな室が区画されて，床面も前室・玄室と同様な敷石がなされている。左右の側壁は，前室・玄室と異なり，基底部にやや大振りの石が据えられて，その上に扁平石の平積みがみられ，小さな室に区画された部分では1.10ｍの高さに残っていて，その上に眉石が架けられていたのであろう。

閉塞は，羨道中途の仕切石の前に，奥行き1.0～1.5ｍ，高さ0.5ｍ程に積まれるが，積み方に規則性はみられない。

石室を構成する石材は，全て緑色片岩や緑泥片岩であるが，奥壁の鏡石や玄門・前門袖石などには硬く，大きな石材を使用している（図版８－２）。また図版８－３や第10図は，石室構築材を全て除去した，主体部掘り方である。

第 11 図　１号墳玄室第１床面遺物出土状況（1/30）

前述した硬い質の石材を使用する部分は深く掘り下げられている。

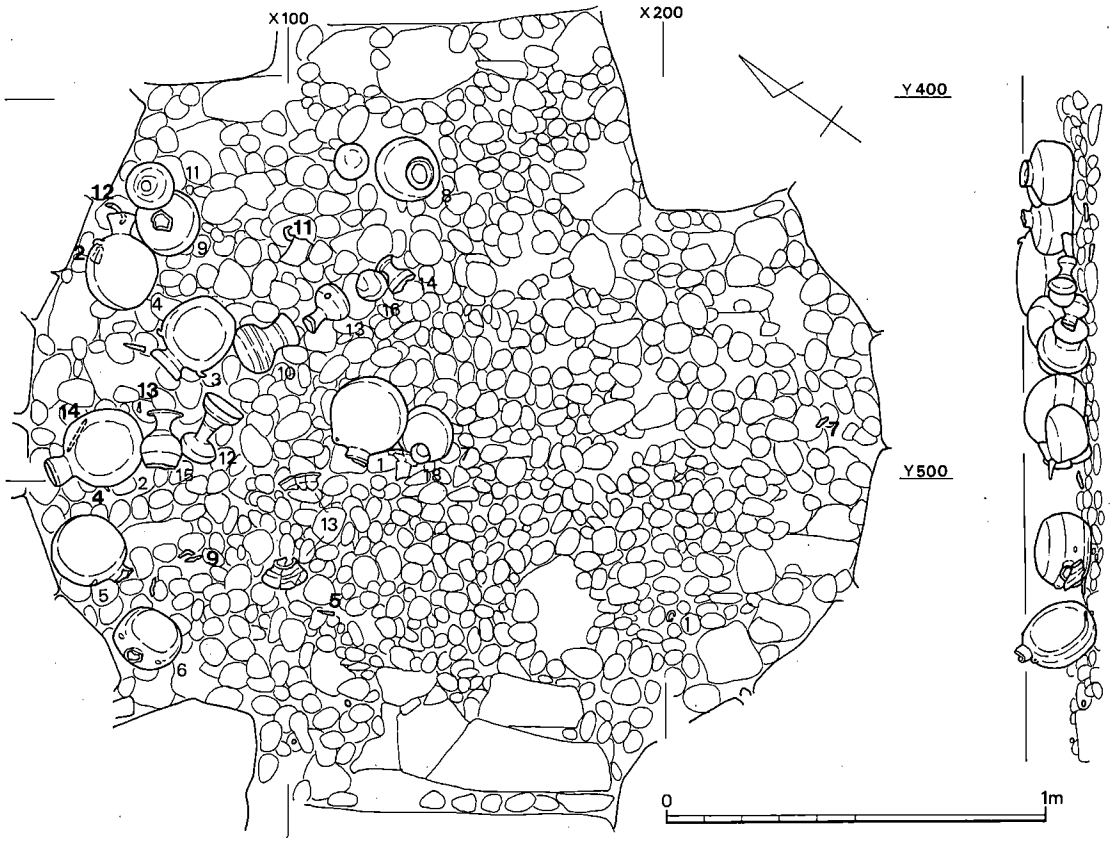
遺物出土状況（図版9－2，第11～13図）

第1床面（上部床面）

玄室・前室・羨道区画室にみられる，玉砂利状の石で敷かれる上部の床面を第1床面としている。

玄室内では，左袖石の近くで耳環2点，中央部で耳環4点・勾玉・切子玉など，右側壁近くで耳環1点・小玉・鉄鏃片などが出土したが，とくにまとまった状況でもなく，敷石の間にはまり込んだものが多い（第11図）。

前室内では，左側に土器類がまとまって出土した。提瓶・平瓶・台付壺・甕・高杯などの器種がみられ，石や土砂の崩落などの影響もあって，いくつか一部破損するもののほぼ完形で，横倒しのものが多い。また，刀子や鉄鏃やU字状を呈する鉄製品片などもあり，右側袖石付近



第12図　1号墳前室第1床面遺物出土状況（1/20）

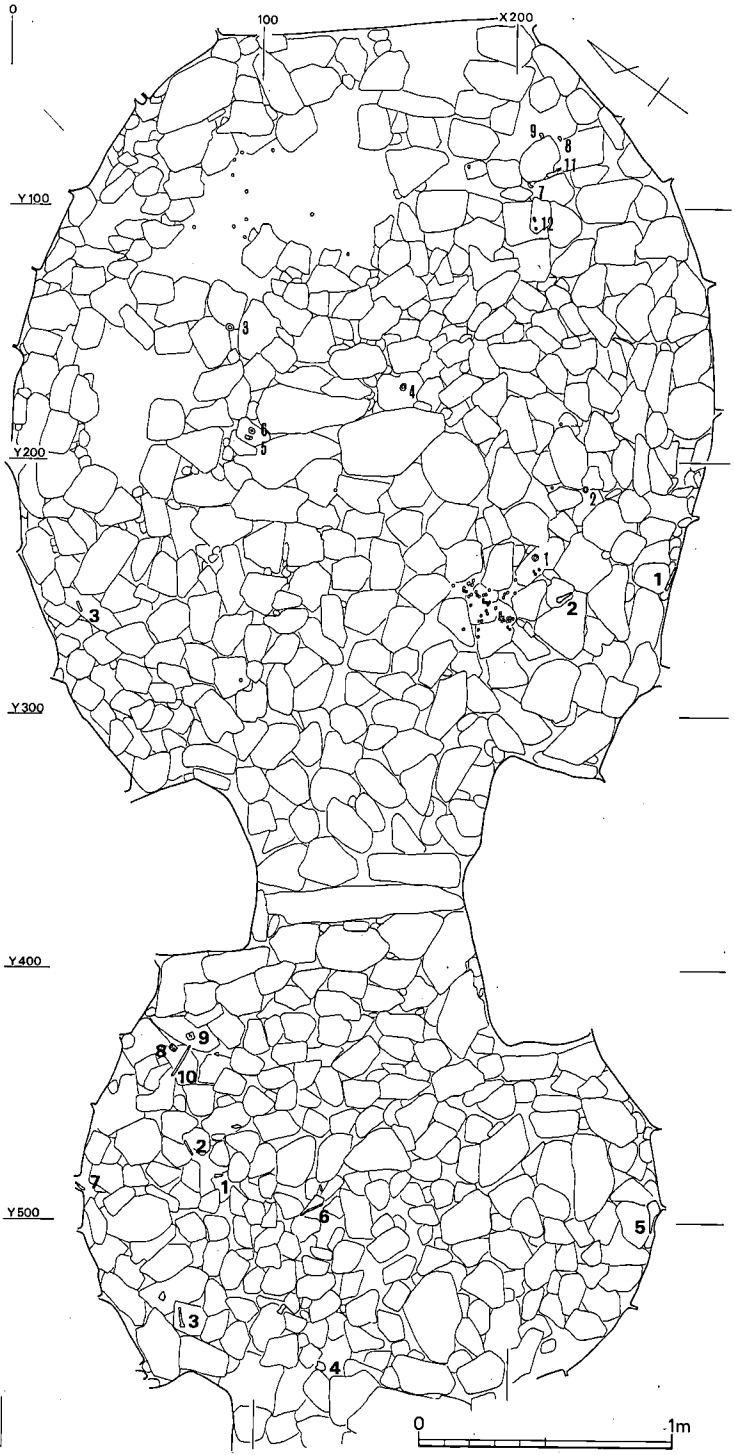
では耳環１点が出土した（第12図）。

第２床面（下部床面）

玄室・前室・羨道区画室にみられる，第１床面の下にわずかに間層を挟んで，やや大振りの扁平石で敷き詰められた床面を第２床面としている。

玄室内では，右袖石の近くと奥壁寄りで玉類がややまとまって出土し，耳環が中央部とやや右壁よりで計４点出土した。ガラスおよび土製の玉類は中央よりもむしろ右側壁や奥壁寄りで出土し，敷石間に転落したものもある。鉄鏃もほぼ同様の出土状況である。なお排土を水洗選別してガラス・土製の玉類が100点以上検出できた。

前室内では，左側で鉄鏃・刀子や辻金具片が，右側壁に接して鉄鏃１点が出土している。水洗選別した排土ではガラス小玉が多数検出できた。このほか左側で須恵器小片が２点出土したものの，第２床面では，玄室・前室・羨道区画室ともに土



第 13 図　１号墳石室第２床面遺物出土状況（1/30）

器類の出土はほとんどみられなかった。

墓道および前面

石室内の床面に対応した面は確認しえなかった。墓道から左側前面にかけては須恵器片を中心として土器類が散乱していて，３号墳背後に相当する前面斜面にも続いている。

出土遺物（図版10～15，第14～31図）

前室出土土器（図版10・11，第14～18図）

前室からは須恵器提瓶６，平瓶３，𤭯３，壺１，台付壺１，高杯１，土師器小形壺１，杯１が出土している。また閉塞石の間から土師器高杯１点が出土している。

須恵器提瓶（１～６）　１は，口縁の一部を欠くがほぼ完形で，器高23.6cm，胴最大径20.4cm，厚み16.2cm，復原口径10.2cmの大きさ。口縁部は短く外反して，端部外側が三角凸帯状に肥厚する。直径１cmほどの粘土紐を渡した吊手が一対，肩部に付されている。主な回転ヨコナデ調整されるが，膨らんだ側の胴部にカキ目がみられる。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で暗灰色を呈している。

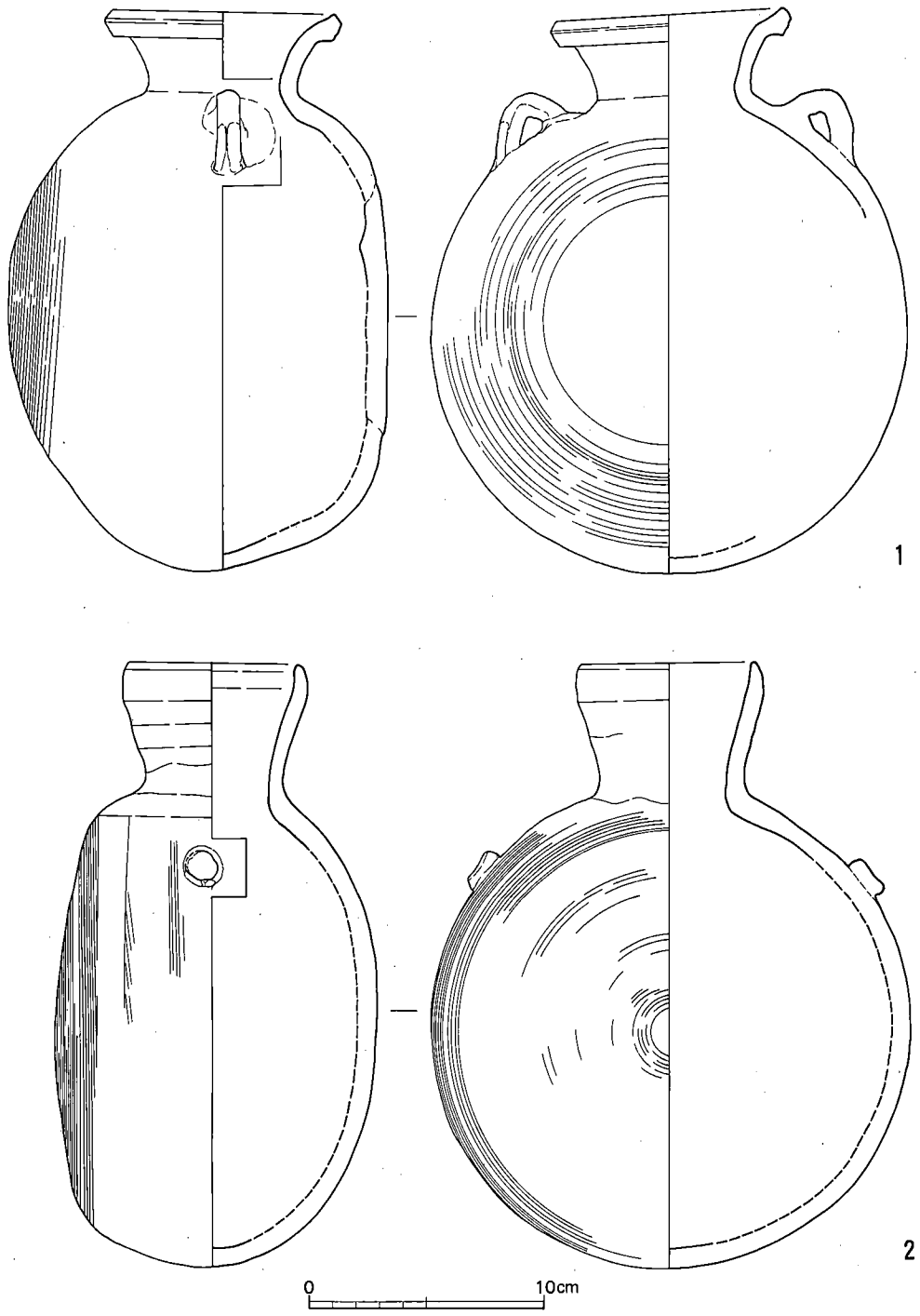
２は，器高25.8cm，胴最大径20.4cm，厚み13.8cm，口径8.0cmの大きさ。口縁部は直立気味でわずかに開き，端部はやや内彎する。扁平で小さな釦状のつまみが一対，肩部に付されている。胴部はカキ目調整のあと回転ヨコナデ調整され，磨滅したカキ目がみられる。胎土に若干砂粒を含み，あまい焼成で淡灰色を呈している。

３は，器高21.0cm，胴最大径17.6cm，厚み13.3cm，口径9.1cmの大きさ，口縁部は直線的に外反し，肩部に一対の鈎手が付される。主に回転ヨコナデ調整されるが，膨らんだ側の胴部に平行叩き目の痕跡がみられ，平坦な側は回転ヘラケズリされる。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で灰色を呈している。

４は，器高24.7cm，胴最大径19.1cm，厚み14.2cm，口径7.7cmの大きさ。口縁部はわずかに開くが直立気味で，端部はやや内彎する。肩部には一対の小さめの鈎手が付される。体部は全体にカキ目調整されている。胎土に砂粒を多く含み，良好な焼成で暗茶灰色ないし暗紫褐色を呈している。

５・６は，口縁端部を欠くが，いずれもやや外反する口縁部と，カキ目調整の体部をもち，肩部には一対の小さめの鈎手が付される。５は残存器高22.2cm，胴最大径19.1cm，厚み14.5cm，６は残存器高20.4cm，胴最大径17.8cm，厚み13.1cm。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で暗茶灰色ないし暗灰色を呈している。

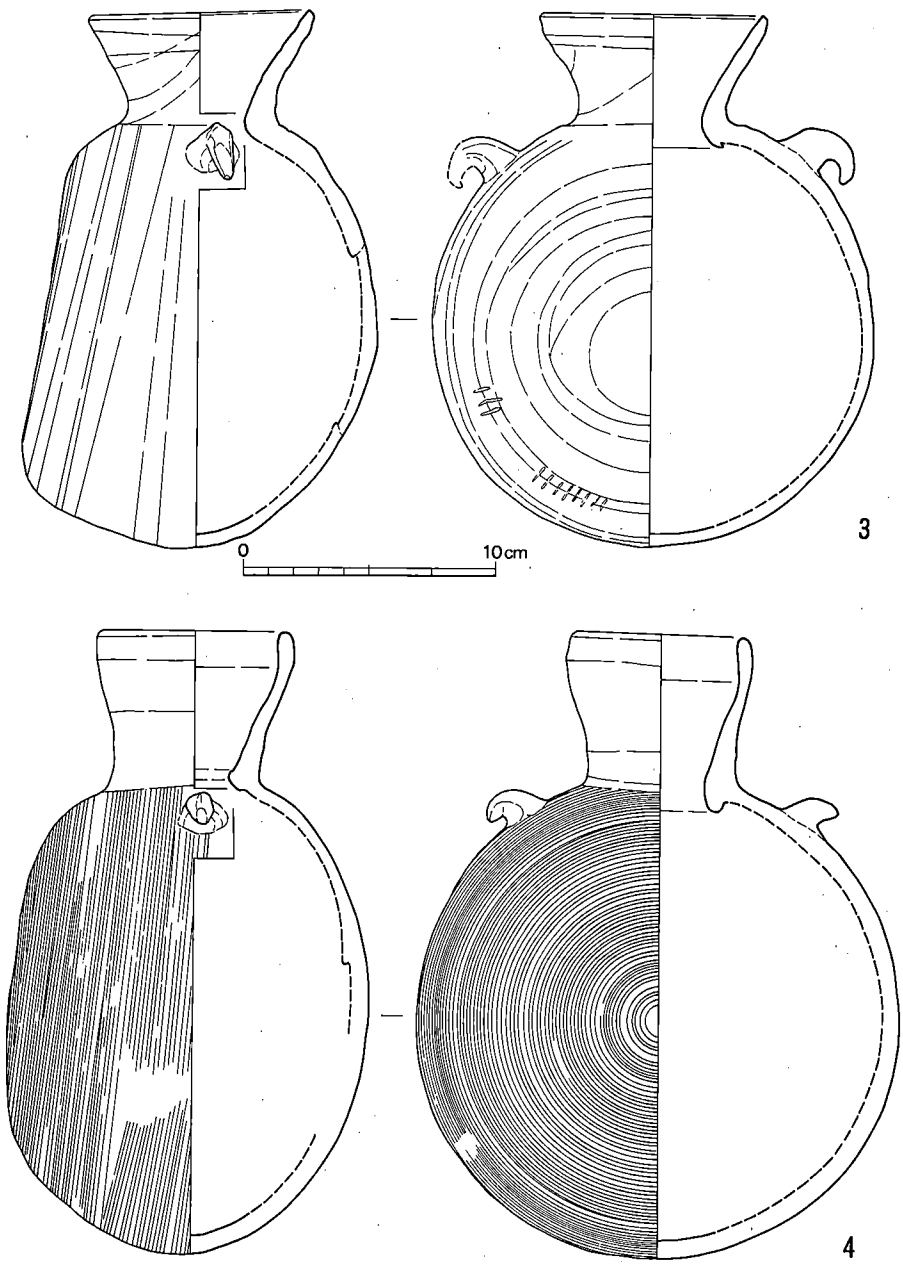
須恵器平瓶（７～９）　７は，口径5.8cm，胴最大径14.8cmの大きさ。器高11.7cmのうち体部高が9.3cmを占める。口縁部は短目で直線気味に立ち上がる。全体にカキ目調整され，体部上面に２ケ所の小突起が付され，外底面には鳥足状のヘラ記号が付されている。胎土に砂粒を含み，



第 14 図　1 号墳石室出土土器実測図 1 (1/3)

ややあまい焼成で灰色ないし黒灰色を呈している。

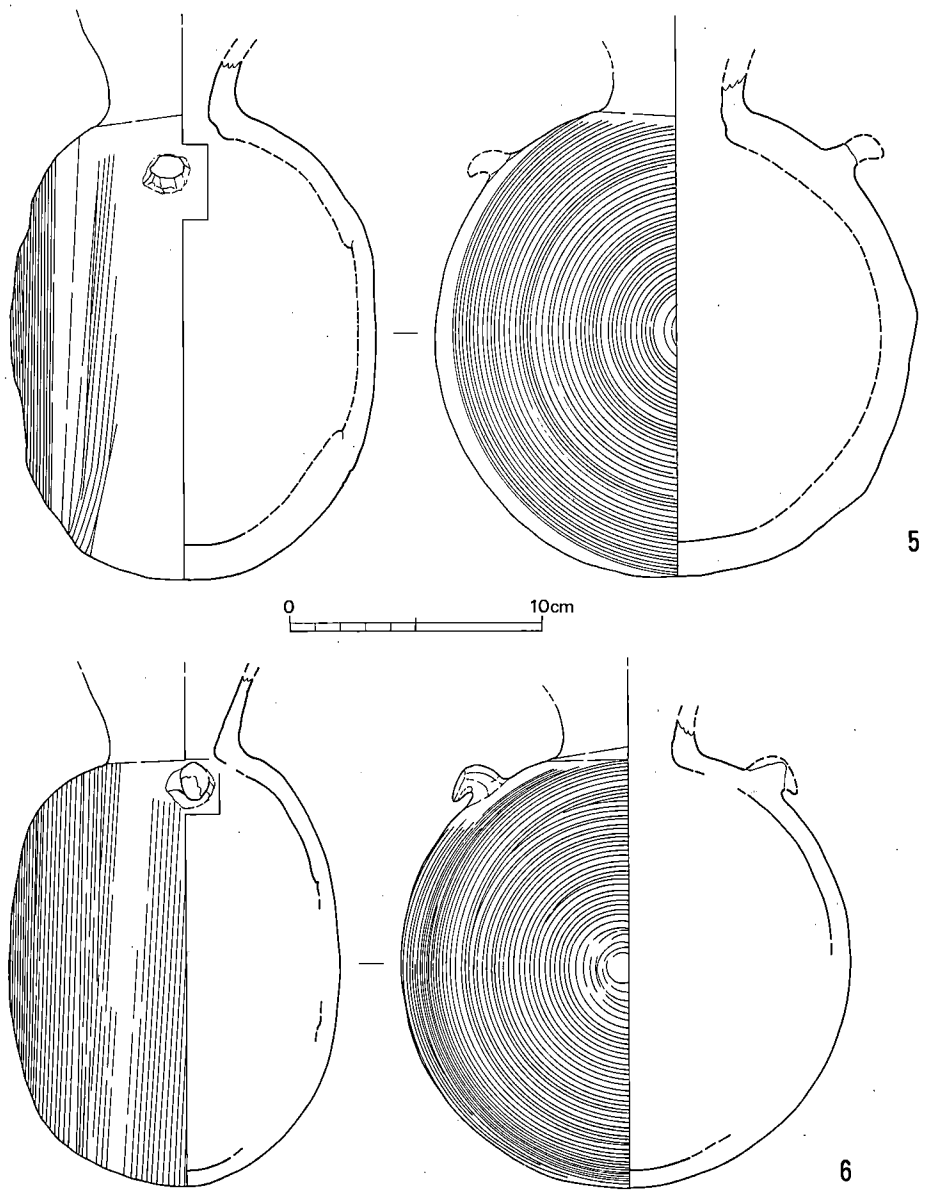
8は，口径6.7cm，胴最大径17.3cmの大きさ。器高12.7cmのうち体部高が10.5cmを占める。口



第 15 図　1号墳石室出土土器実測図2 (1/3)

縁部は内湾気味に短く立ち上がる。上半は灰を被るが，体部下位にはカキ目がみられる。外底面はカキ目が残り指圧痕もみられる。胎土に砂粒を含み，堅緻に焼成で淡灰褐色ないし黒灰色を呈している。

9は，胴最大径18.5cmの大きさ。口縁端部を欠くが残存器高13.6cmのうち体部高が10.8cmを

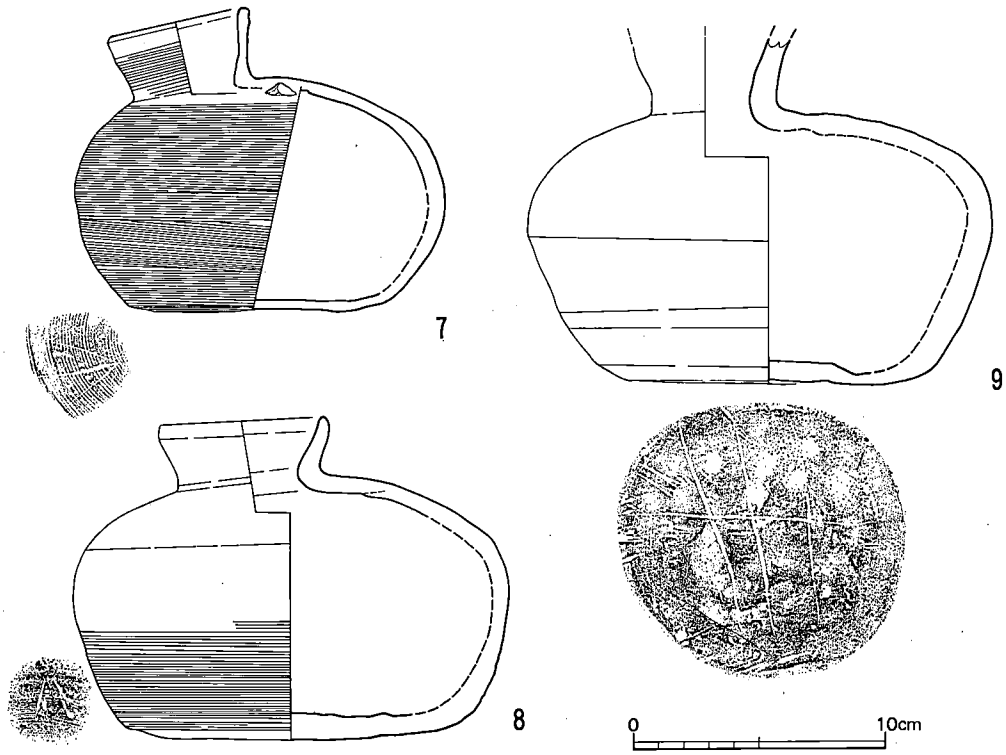


第 16 図　1号墳石室出土土器実測図3（1/3）

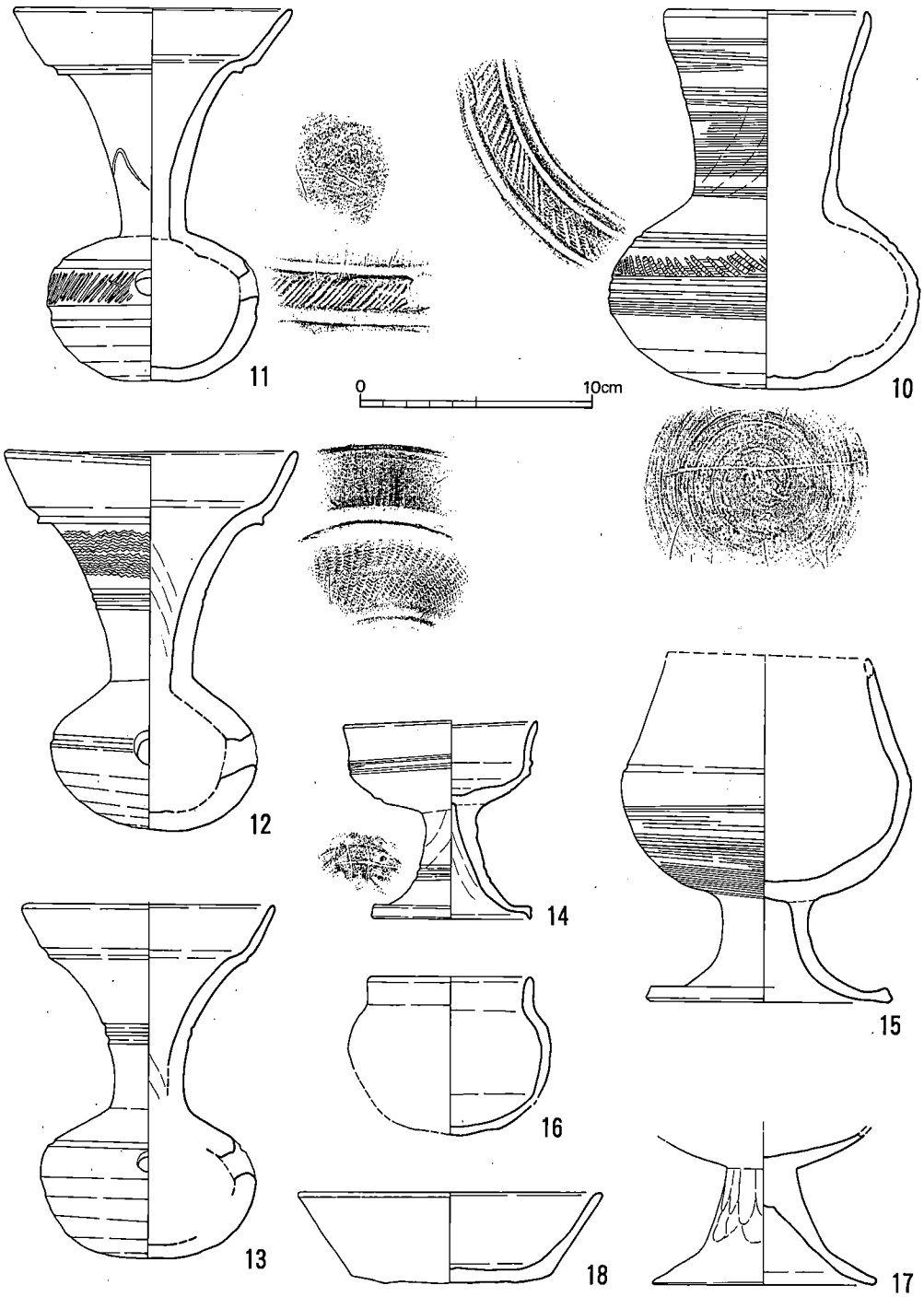
占める。体部上半は回転ヨコナデ，下半は回転ヘラケズリ調整されている。外底部には指圧痕と，３本線と１本線の交差するヘラ記号がみられる。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で暗灰色ないし黒灰色を呈している。

須恵器壺（10） 扁球形の体部に長い口頸部が付くもので，器高16.3cmのうち口頸部が9.0cmを占め，口径9.0cm，頸部径6.2cm，胴部最大径13.5cmの大きさ。カキ目調整されているが絞り痕の残る口頸部には，中程に２条の沈線が巡る。体部では，胴部に巡る２条単位の沈線間に小口圧痕が右下がりに連続施文されている。底部は回転ヘラゲズリで丸底に仕上げられ，単直線のヘラ記号がみられる。胎土に砂粒を含み，口縁部の一部を除き良好な焼成で黒色を呈している。

須恵器甕（11～13） 11は，口径12.1cm，頸部径2.8cm，胴最大径9.0cmの大きさ。器高15.9cmのうち9.7cmを占める口頸部は，回転ヨコナデ調整されていて，細い頸部に逆Ｖ字形のヘラ記号が付され，口縁部は段をなして開く。体部はやや上側に最大径のある扁球形を呈し，２条の沈線間に右上がりの斜線文が連続施文されている。胴下半は回転ヘラケズリされ，底部に小さな平坦面をもつ。穿穴は２条の沈線間にあり，径1.0cm。胎土に砂粒を含み，良好焼成で灰色ないし黒灰色を呈している。



第 17 図 １号墳石室出土土器実測図４（1/3）



第 18 図　1 号墳石室出土土器実測図 5 (1/3)

12は，口径12.4cm，頸部径3.5cm，胴最大径8.8cmの大きさ。器高16.2cmのうち9.8cmを占める口頸部は，回転ヨコナデ調整されていて，口縁部は三角凸帯をなす段を介して内彎気味に開く頸部上位には波状文が，中程には2条の沈線が巡る。体部はなで肩の扁球形を呈し，径1.2cmの穿穴にかかって1条の沈線が巡る。胴下半は回転ヘラケズリされ丸底。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で黒灰色を呈している。

13は，口径11.0cm，頸部径3.0cm，胴最大径9.2cmの大きさ。器高15.3cmのうち8.8cmを占める口頸部は，回転ヨコナデ調整されていて頸部下位に絞り痕が残る。口縁部は緩やかな段を介して開く。頸部中程に2条の沈線が巡る。体部はなで肩の扁球形を呈し，肩に1条の沈線が巡るが，沈線の下に径1.2cmの穿穴がある。胴下半は回転ヘラケズリされ丸底。胎土に砂粒を含み，ややあまい焼成で淡灰色を呈している。

須恵器高杯（14） 口径8.3cm，器高8.6cm，裾径6.8cmの大きさ。高さ3.5cmの杯部には2条の沈線が巡り，口縁部は僅かに外反する。絞り痕の残る柱状部は中程に2条の沈線が巡り，裾端は鳥嘴状にまとまる。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で淡黒灰色を呈している。

須恵器台付壺（15） 口縁部端を僅かに欠き，残存器高14.9cm，裾径10.6cmで，口径は8.5cm前後であろう。胴最大径12.4cmからそのまま口縁部にすぼまり，高さ4.4cmの脚台部は大きく外反して開く。体部下半はカキ目調整され，肩部に1条の沈線が巡る。胎土に砂粒・雲母を含み，軟い焼成で淡灰色を呈している。

土師器小形壺（16） 口径7.2cm，器高6.8cmの大きさ。扁球形の体部に短く直立する口縁部が付く。器面がやや風化しているが，ナデ調整されているようだ。砂粒を胎土に含み，淡褐色に焼成されている。

土師器高杯（17） 杯部の大半を欠くが，残存器高6.4cm，裾径9.6cmの大きさ。中実部分の少ない柱状部から裾部にかけてラッパ状に開く。杯部はナデ調整，柱状部はヘラケズリされている。砂粒・褐色粒・金雲母を胎土に含み，淡明褐色に焼成されている。

土師器杯（18） 底部から直線的に口縁が開く器形で，復原口径13.2cm，器高3.9cm，底径8.5cmの大きさ。ヨコナデ調整されているが，底面は風化して調整不明。砂粒・褐色粒・金雲母を胎土に含み，淡茶褐色に焼成されている。 （小池）

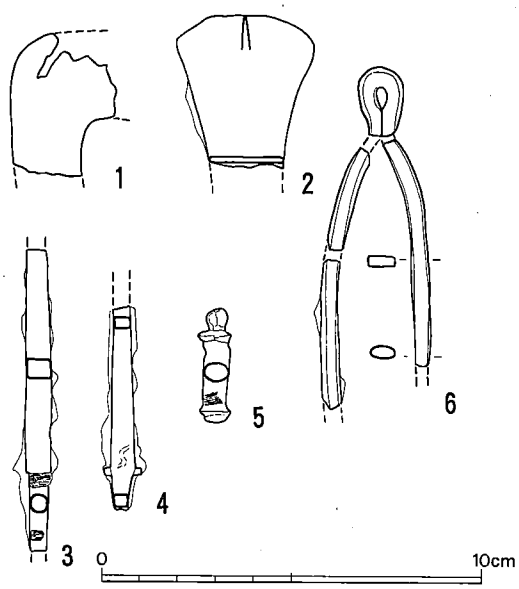
玄室第1床面出土鉄器（図版12-1，第19図）

武具として鍔1点，鏃3点，弓付属金具1点，工具としては鑷子1点が出土した。

鍔（1） 鍔の一部で残りが悪く，大きさや厚さは判らない。

鏃（2～4） 2は鏃身は平根式圭頭形で鏃身部以下を欠く。3～4は柄部片で3は直角の篦被を有し，4は棘状の篦被を有す。1～4は中央右より出土。

弓付属金具（5） 両端が丸い頭を有する金具で，両端の径は6～8㎜，中心部径6㎜，全長



第 19 図　1 号墳石室出土鉄器実測図 1 (1/2)

3.3cmを測る。金具の一部に直交して木質が見られる。

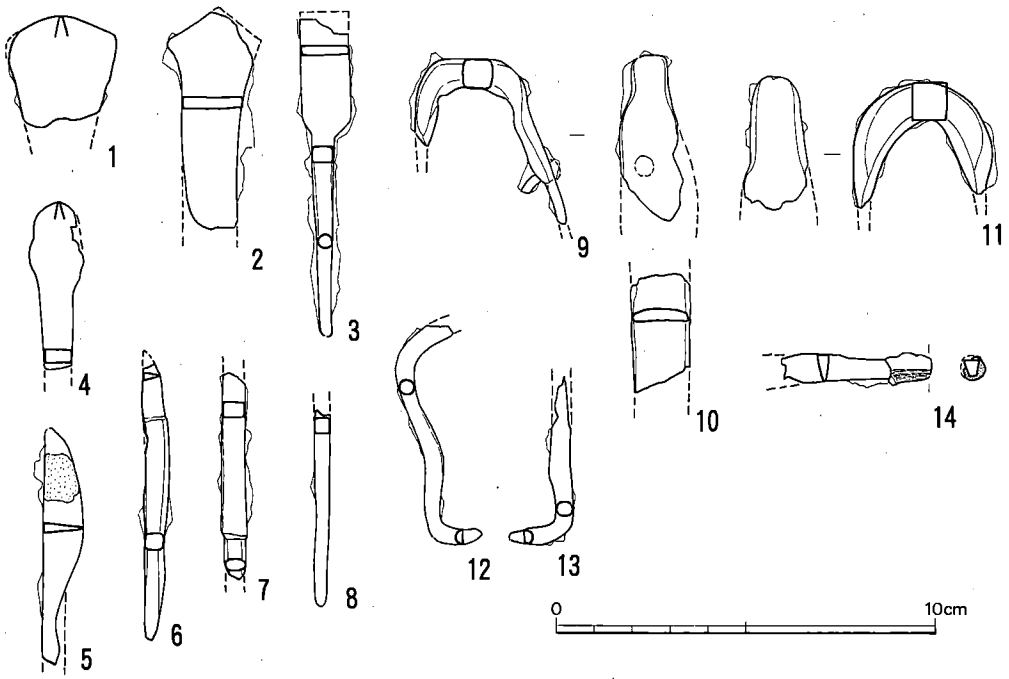
鑷子（6） 頭部が楕円形を呈し，頸部が付着している。先端部は欠損する。断面は中央部までは方形を呈するが，下位は楕円形になる。玄室右奥（X＝128 Y＝185, X＝113 Y＝163）より出土。

前室第 1 床面出土鉄器（図版12, 第20図）

武具として鏃 8 点，馬具では鐙金具 2 点・絞具 2 点，工具の刀子 1 点が出土した。

鏃（1～8） 1・2 は平根式圭頭形で鏃身の一部以下は欠損する。3 は平根式方頭形で現存長8.3cm，最大幅1.2cm，4 は尖根式剣形で，5・6 は尖根式片刃形である。

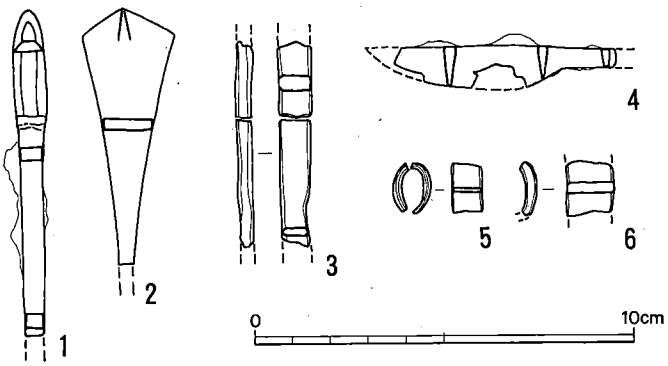
鐙金具（9・10・11） 木心鉄板張鐙の上部金具で下位は欠損している。9 は頂部より3.5cm



第 20 図　1 号墳石室出土鉄器実測図 2 (1/2)

下に鋲が付く。出土位置は9は左壁側中央（X＝460 Y＝60），11は中央奥壁寄り（X＝435 Y＝105）。

絞　具（12・13）　径4㎜程度の鉄線を折り曲げ，接合部は半円形に成形して合わせている。12・13は別個体である。ともに左壁側より出土（X＝427 Y＝55，X＝480 Y＝62）。



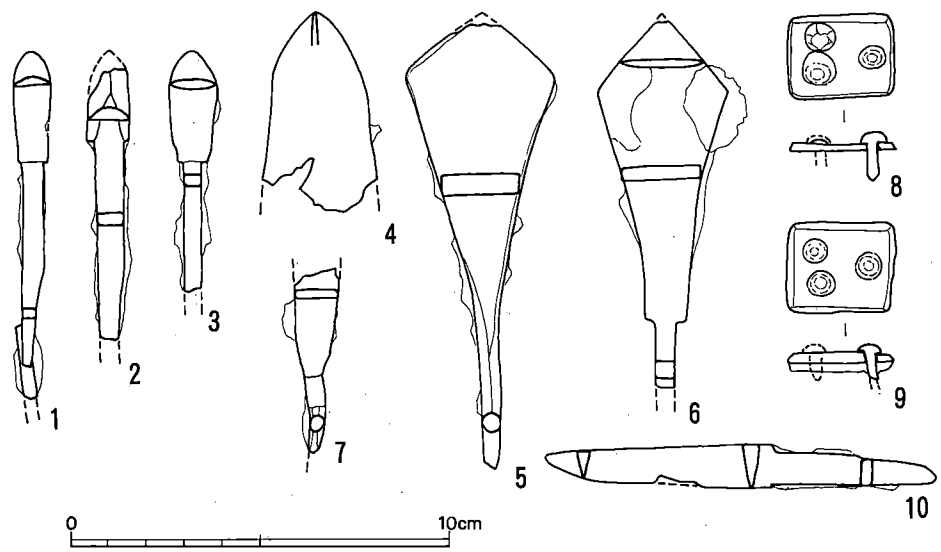
第 21 図　1号墳石室出土鉄器実測図3（1/2）

刀　子（14）　刃部の多くを欠損する。茎部に木質が残る。左壁側中央より出土（X＝490 Y＝45）。

玄室第2床面出土鉄製品（図版13，第21図）

武具として鏃2点，工具では鑷子1点，刀子1点，刀子の縁金具2点が出土した。

鏃（1・2）　1は尖根式剣形で片切刃造りである。最大幅8㎜，茎部は欠損する。玄室右手前の壁際（X＝245 Y＝260）より出土。2は平根式圭頭形で，茎部を欠損する。最大幅2.56㎝。玄室右手前（X＝280 Y＝220）より出土。



第 22 図　1号墳石室出土鉄器実測図4（1/2）

鑷　子（3）　上部は幅が狭くなり薄くなる，湾曲部と先端部が欠損する。

刀　子（4）　片関で茎部を欠損する。復原身部長5.5cm。玄室左手前（X＝250 Y＝30）より出土。

刀子縁金具（5・6）　5は幅7.5mm，厚さ0.5mmで一部欠損するが卵形を呈す。6は小片で幅12mm，厚さ2.5mm。

前室第2床面出土鉄器（図版13，第22図）

武具として鏃7点，馬具では留金具2点，工具の刀子1点が出土した。

鏃（1～7）　1～3は尖根式剣形，5・6は平根式圭頭形，1・2は片切刃造り，3は両丸造りである。1・2は前室左中央（X＝480 Y＝85，X＝470 Y＝75），3は前室左手前（X＝540 Y＝70）より出土した。5・6は平根式圭頭形で5は鏃身関部のないタイプ，最大幅3.9cm，現存長11.8cm，前室右壁際（X＝257 Y＝495）より出土。6は鏃身関部のあるタイプ，最大幅3.9cm，現存長11.8cm，前室中央右壁際（X＝257 Y＝495）より出土。6は鏃身関部のあるタイプ，最大幅3.5cm，身部長8.3cm，前室中央（X＝495 Y＝123）より出土。

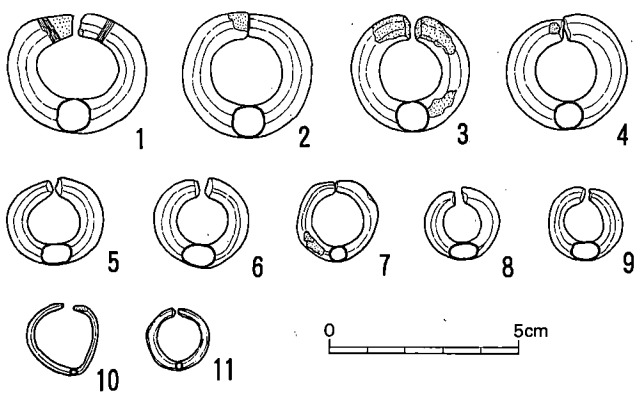
留金具（8・9）　鉄地に金銅張りで，方形を呈し，3ケ所に鋲を有する。いずれも前室左奥（X＝430 Y＝70，X＝425 Y＝75）より出土。

刀　子（10）　両関で，身部長6.0cm，現存長10.3cm。前室左奥（X＝440　Y＝70）より出土。

玄室第1床面出土装身具（図版14・15，第23・24図，表2）

玄室内全域から，耳環11点，勾玉3点，四角玉1点，棗玉1点，切子玉3点，管玉4点，丸玉30点，小玉34点，他に玉類の破片などが出土した。これらを糸に通すと52cmになる。

耳　環（1～11）　1～4は銅地銀張りの銀環。1は長径3.6cm，短径3.05cm，断面8.0mm×7.5mmのほぼ円形で，重量は26.55g。合わせ近くに線痕がある。2は長径3.4cm，短径3.3cm，断面8.0mm×7.8mmの円形で，重量24.9g。法量からみて1と対であろう。3は長径3.15cm，短径3.0cm，断面8.0mm×7.5mmのほぼ円形で，重量は21.25g。玄室左手前（X＝283 Y＝50）より出土。4は長径3.2cm，短径2.9cm，



第23図　1号墳石室出土装身具実測図1（1/2）

断面7.5㎜×7.3㎜の円形で，重量は22ｇ。出土位置は中央（X＝102 Y＝155)。法量からみて３と対であろう。５～９は銅地金張りの金環。５は長径2.5㎝，短径2.15，断面８㎜×5.4㎜の楕円形で，重量は13.55ｇ。玄室右中央（X＝216 Y＝240）より出土。６は長径2.55㎝，短径2.25㎝，断面8.3㎜×5.8㎜の楕円形で，重量は14.55ｇ。玄室中央（X＝227 Y＝107）より出土。法量からみて５と対であろう。７は長径2.1㎝，短径2.05㎝，断面4.0㎜×3.8㎜の円形で，重量は3.45ｇ。玄室左中央（X＝130 Y＝80）より出土。風化が著しく表面の金銅張りはほとんど残っていない。８は長径2.05㎝，短径1.85㎝，断面7.7㎜×4.5㎜の楕円形で，重量は9.05ｇ。出土位置は玄室中央袖寄り（X＝270 Y＝80)。９は長径2.0㎝，短径1.9㎝，断面6.5㎜×5.0㎜楕円形で，重量は9.0ｇ。法量からみて８と対であろう。10は断面径2.0㎜の銅線で，表面は錆て風化している。長径2.0㎝，短径1.9㎝，重量0.9ｇ。11は銀線による銀環で，長径1.65㎝，短径1.6㎝，断面2.0㎜×1.8㎜の楕円形で，重量は0.8ｇ。

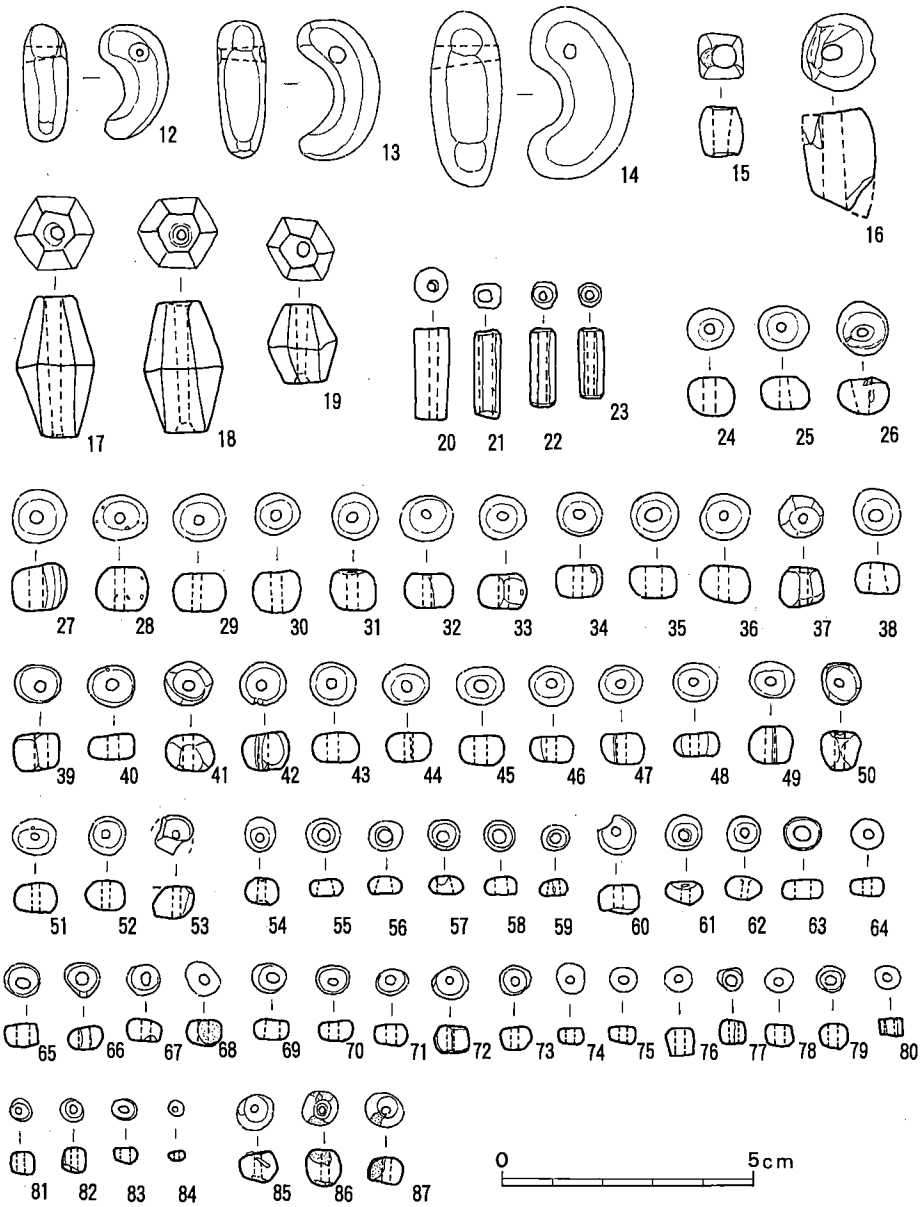
勾　玉（12～14）　12は水晶製で，長さ3.2㎝，厚さ6.0～8.5㎜，幅5.7～8.5㎜，重量3.25ｇ。孔は片面から穿たれ，孔径は一方が3.4㎜，他方が0.8㎜を測る。13は赤味黄色の瑪瑙製で，長さ2.7㎝，厚さ8.4～9.2㎜，幅5.0～9.3㎜，重量4.8ｇ。孔径は3.2㎜，1.4㎜を測る。出土位置は玄室中央（X＝165 Y＝130)。14は薄い緑色の翡翠製で，長さ3.2㎝，厚さ9.0～12.7㎜，幅8.6～13.6㎜，重量15.7ｇ。孔径は3.2㎜，1.4㎜を測る。出土位置は玄室中央左（X＝196 Y＝100)。

四角玉（15）　薄いスカイブルーを呈するガラス玉で，長さ0.96㎝，厚さ7.0～9.0㎜，幅8.6～10.4㎜，重量1.0ｇ。孔径は3.7㎜，2.9㎜を測る。

棗　玉（16）　茶味黄色を呈する琥珀玉で一部欠損する。長さ1.48～1.93㎝，幅1.1～1.45㎝，残存重量2.15ｇ。孔径は5.0㎜×2.6㎜，3.5㎜×3.3㎜を測る。

切子玉（17～19）　いずれも水晶製で，六角錐台を二つ底部を合わせた形。穿孔は片面から行い貫通後に一方も僅かに孔を広げている。17は長さ2.74㎝，幅1.42～1.52㎝，重量7.35ｇ。孔径は1.5㎜，3.6㎜を測る。出土位置は玄室中央奥壁寄り（X＝127 Y＝117)。18は長さ2.51㎝，幅1.45～1.56㎝，重量6.7ｇ。孔径は1.4㎜，3.85㎜を測る。19は長さ1.51㎝，幅1.23～1.35㎝，重量3.5ｇ。孔径は1.3㎜，2.6㎜を測る。

管　玉（20～23）20は緑色を呈す碧石製で長さ1.78㎝，径6.7～6.8㎜，重量1.55ｇ。穿孔は一方からで孔径は1.1㎜，2.0㎜を測る。出土位置は玄室右奥（X＝102 Y＝204）で他の管玉も付近から出土した。21は失透ライトブルーのガラス製管玉。断面が隅丸方形で表面には孔と平行な気泡や傷が多く見られる。長さ1.62，径5.0～5.6㎜，重量0.75ｇ。孔径は1.6㎜，2.0㎜。出土位置はX＝94 Y＝12。22はライトブルーのガラス製管玉で気泡を多く含む。長さ1.46～1.55㎝，径5.2～5.3㎜で，重量0.65ｇ。孔径は1.45㎜，1.6㎜。玄室右奥（X＝97 Y＝210）より出土。23は22よりも僅かに明るいライトブルーのガラス製管玉で気泡を多く含む。断面は丸味をもった六角形。長さ1.32㎝，径4.6～4.7㎜，重量0.5ｇ。孔径は1.3㎜，1.7㎜を測る。出土



第 24 図　1号墳石室出土装身具実測図 2 (2/3)

位置は X＝110 Y＝194。

丸　玉（24～53）　ガラス製で30点ほど実測したが，他に 4 ～ 5 点の破片がある。色調は透明のコバルトブルーが大半で，失透ライトブルー，透明緑で研磨した玉などもある。多くの玉には孔と平行な白色の線（気泡線）が入っている。外径は1.1cm前後から0.8cmほどで，外形は楕

表2　山田1号古墳　玄室第1床面出土玉類計測表　　（単位：㎜）

No.	種　類	径	厚　さ	孔　径	色　調	形　態
24	ガラス丸玉	8.8	7.2～7.4	2.0 ・ 2.15	グリーン	C
25	〃	9.6×8.8	5.4～5.9	1.7 ・ 1.8	コバルトブルー	B
26	〃	10.4×10.1	5.8～7.1	3.0×2.0・1.8×1.1	ライトブルー	C
27	〃	11.4×11.2	6.2～9.0	2.8×2.6・2.6×2.4	コバルトブルー	B
28	〃	10.9×9.3	7.8～8.2	1.8 ・ 1.7	〃	〃
29	〃	10.6×9.8	7.2	1.8 ・ 1.6	〃	〃
30	〃	9.1×8.2	7.7	1.8×1.5・1.7×1.4	〃	〃
31	〃	9.0×8.9	7.3～8.9	2.1	〃	〃
32	〃	10.3×9.2	6.3～6.8	1.8×1.3・1.8×1.2	〃	〃
33	〃	10.2×9.2	6.6～6.7	1.4×1.3・1.5×1.3	〃	〃
34	〃	9.3×8.7	5.9～6.2	1.9	〃	〃
35	〃	9.2×9.1	5.3～5.9	2.5×1.8・2.4×1.8	〃	〃
36	〃	9.8×8.5	6.3～6.5	1.6×1.5	〃	〃
37	〃	9.0×8.4	6.6～7.7	1.6 ・1.7×1.5	〃	〃
38	〃	9.5×8.9	5.5～6.0	2.3 ・3.1×2.6	〃	〃
39	〃	9.1×7.6	6.4～6.8	2.5×2.0・2.4×2.0	〃	〃
40	〃	9.2×8.3	4.3～5.4	2.1 ・ 2.2	〃	〃
41	〃	9.0×8.9	7.3～8.9	2.0×1.4・1.9×1.8	〃	〃
42	〃	8.7×8.3	6.2～7.0	1.7×1.4・1.8×1.7	〃	〃
43	〃	9.1×8.8	5.8	1.7×1.6・1.8×1.5	〃	〃
44	〃	8.85×8.3	5.0～5.8	2.3×2.1・2.2×2.1	〃	〃
45	〃	8.95×7.8	5.7～5.8	2.0×1.8・2.0×1.6	〃	〃
46	〃	8.5×7.8	5.0～5.3	1.6×1.5・1.5×1.4	〃	〃
47	〃	8.2×7.7	5.8	1.7×1.3・1.7×1.5	〃	〃
48	〃	8.7×8.2	4.3～4.8	1.8×1.6・1.7×1.6	〃	〃
49	〃	8.6×7.7	6.9～7.1	1.5×1.1・ 1.4	〃	〃
50	〃	8.2×8.0	6.2～7.2	2.2×1.4・2.0×1.6	〃	〃
51	〃	8.4×7.5	5.3～5.8	1.5×1.2・1.5×1.4	〃	〃
52	〃	7.3×7.2	4.9～5.6	1.25 ・ 1.3	〃	〃
53	〃	—	6.3	1.6	〃	〃
54	メノウ小玉	6.7×6.5	4.0	1.1 ・ 1.3	黄味橙	〃
55	ヒスイ小玉	6.8	3.3	2.0 ・ 1.3	淡緑	〃
56	〃	6.8×6.5	3.1～3.4	2.0 ・ 3.0	緑味白	〃
57	〃	6.2×6.0	3.1	1.9 ・ 2.1	淡緑・緑味白	〃
58	〃	5.9×5.85	3.1～3.6	2.1 ・ 3.0	〃	〃
59	〃	5.8×5.2	3.0～3.3	2.0 ・ 2.85	〃	〃
60	ガラス小玉	7.5×6.7	4.1×4.7	1.3 ・ 1.2	ライトブルー	〃
61	〃	7.4×6.8	2.4～3.8	2.0 ・ 2.1	〃	〃
62	〃	7.2×7.0	3.4～4.3	1.3 ・ 1.5	〃	A
63	〃	7.4×7.0	3.2～3.6	1.8×2.5・2.9×2.7	コバルトブルー	B
64	〃	6.3×6.2	3.0～3.3	1.5	〃	〃
65	〃	6.9×6.5	3.8～5.0	2.7×2.1・2.5×2.1	〃	〃
66	〃	6.8×6.5	4.3～4.9	2.1	〃	〃
67	〃	6.7×6.3	3.2～4.7	2.2×2.0・1.6×1.4	〃	〃
68	〃	7.2×6.2	4.1～4.3	2.5×2.1・2.5×2.0	〃	〃
69	〃	6.5×5.8	3.9～4.6	2.4×2.0・2.3×1.8	〃	〃
70	〃	6.9×6.1	3.5～3.7	1.8×1.3・1.8×1.4	〃	〃
71	〃	6.2×5.8	3.5～4.1	1.8×1.7・2.0×1.7	明コバルトブルー	〃

72	ガラス小玉	6.7×6.1	4.7～5.4	1.4×1.2・2.7×2.1	明コバルトブルー	B
73	〃	6.2×5.8	4.5	1.4×1.2・1.4	〃	〃
74	〃	5.7×5.2	2.7～3.1	1.2 ・1.4	コバルトブルー	〃
75	〃	5.3×5.25	2.8～3.2	1.5×1.2・1.8×1.2	〃	〃
76	〃	5.3×5.1	5.1～5.3	1.7×1.6・1.6	明コバルトブルー	〃
77	〃	5.0×4.6	4.1～4.6	1.9 ・2.1×1.8	〃	〃
78	〃	5.3×5.1	4.0～4.3	1.7×1.0・1.8×1.2	〃	〃
79	〃	5.4×5.25	4.0～4.4	1.8×1.5・1.5×1.2	〃	〃
80	〃	4.8×4.7	3.4～3.6	1.3×1.1・1.2	〃	〃
81	〃	4.7×4.2	4.1～4.3	1.5×0.9・14×1.1	青味緑	〃
82	〃	4.7×4.5	4.4	1.5 ・1.7×1.3	にぶ青緑	C
83	〃	5.0×4.5	2.2～2.6	1.5 ・1.8×1.5	青味緑	B
84	〃	3.2×3.2	1.5～1.7	1.0 ・ 0.9	明コバルトブルー	〃
85	土製小玉	7.2×6.7	5.2～5.4	1.5 ・1.6×1.4	黒	〃
86	〃	7.4×6.8	5.6～5.8	1.6×1.4・1.3×1.2	〃	A
87	〃	7.0×6.4	4.0～5.0	1.8×1.3・1.6	〃	C

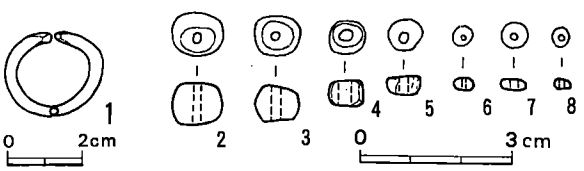
円形のものが多く，なかには丸味を帯びた四～六角形のものがある。厚さは９㎜から4.3㎜まであり，左右の厚みの違うものが多い。重量は0.5ｇから1.2ｇまである。形態的には両断面（孔口部）が丸味をもつもの（A），扁平なもの（B），片面は丸味をもち一方は扁平なもの（C）があるが，Ａが多い。

小　玉（54～87）　54は瑪瑙製で赤味黄色を呈し，長さ4.0㎝，径6.7㎜×6.5㎜の楕円形。重量0.25ｇ。穿孔は一方からで孔径は1.1㎜，1.3㎜。出土位置はＸ＝92 Ｙ＝216で管玉とほぼ同様である。55～59は翡翠製で色調は淡い緑色，緑味白色，淡い緑色に斑に緑味白色のものがある。径5.8～6.8㎜で楕円形のものが多い。穿孔は一方からで孔径は２㎜，３㎜ほどで外径に比して大きい。重量は２～2.5ｇ。60～84はガラス製で色調は透明はコバルトブルーが大半で，透明なライトブルー，失透の青味緑，失透のにぶ青緑色のものがある。外径は7.5㎜から3.2㎜ほどで，外形は楕円形のものが多い。厚さは1.5㎜から5.3㎜まである。重量は0.1ｇから0.4ｇまである。形態分類ではＢ形が多い。85～87は土製で径は7.2㎜×6.6㎜前後の楕円形で，側面の一部は剝離している。重量は0.3ｇ程度を計る。形態分類ではABCに分かれる。

前室第１床面出土装身具
（図版15，第25図，表３）

装身具としては耳環１点，ガラス製の丸玉２点・小玉５点が出土した。

耳　環（１）　腐食が進み芯の銅線部のみが残る。長径2.5㎝，短径2.2㎝，断面径2.2㎜，重量2.9



第 25 図　１号墳石室出土装身具実測図３（1/2）

第 26 図　１号墳石室出土装身具実測図４（2/3）

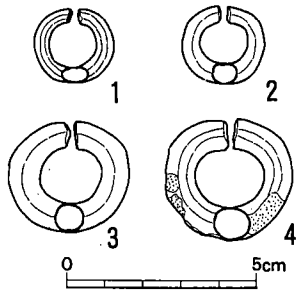
表3　山田1号墳　前室第1床面出土玉類計測表　（単位：mm）

No.	種　類	径	厚　さ	孔　径	色　調	形　態
2	ガラス丸玉	9.4×8.6	6.8～7.6	1.7×1.3・1.8×1.4	コバルトブルー	B
3	〃	8.5×8.6	5.5～6.5	1.7	〃	〃
4	ガラス小玉	7.0×6.7	4.5～5.3	2.7×2.3・2.0×2.3	〃	〃
5	〃	6.6×6.0	3.7～3.4	1.6×2.0	〃	〃
6	〃	4.4×4.0	2.4～2.7	0.8	〃	〃
7	〃	5.1×4.8	2.1～2.2	1.8×1.9	スカイブルー	〃
8	〃	3.8×3.7	1.9～2.1	1.0　・　1.1	〃	〃

g。出土位置は右前方（X＝535 Y＝200）。

丸　玉（2・3）　1は平面が歪な楕円形で形態はB形。孔も歪である。2は断面が楔形である。ともにガラス製で，色調はコバルトブルーを呈する。

小　玉（4～8）　ガラス製で，径4～7㎜程度で形態は全てB形である。色調は4・5はコバルトブルー，6・7はスカイブルーを呈する。



第 27 図　1号墳石室出土装身具実測図5（1/2）

玄室第2床面出土装身具

（図版14・15，第27・28図，表4・5）

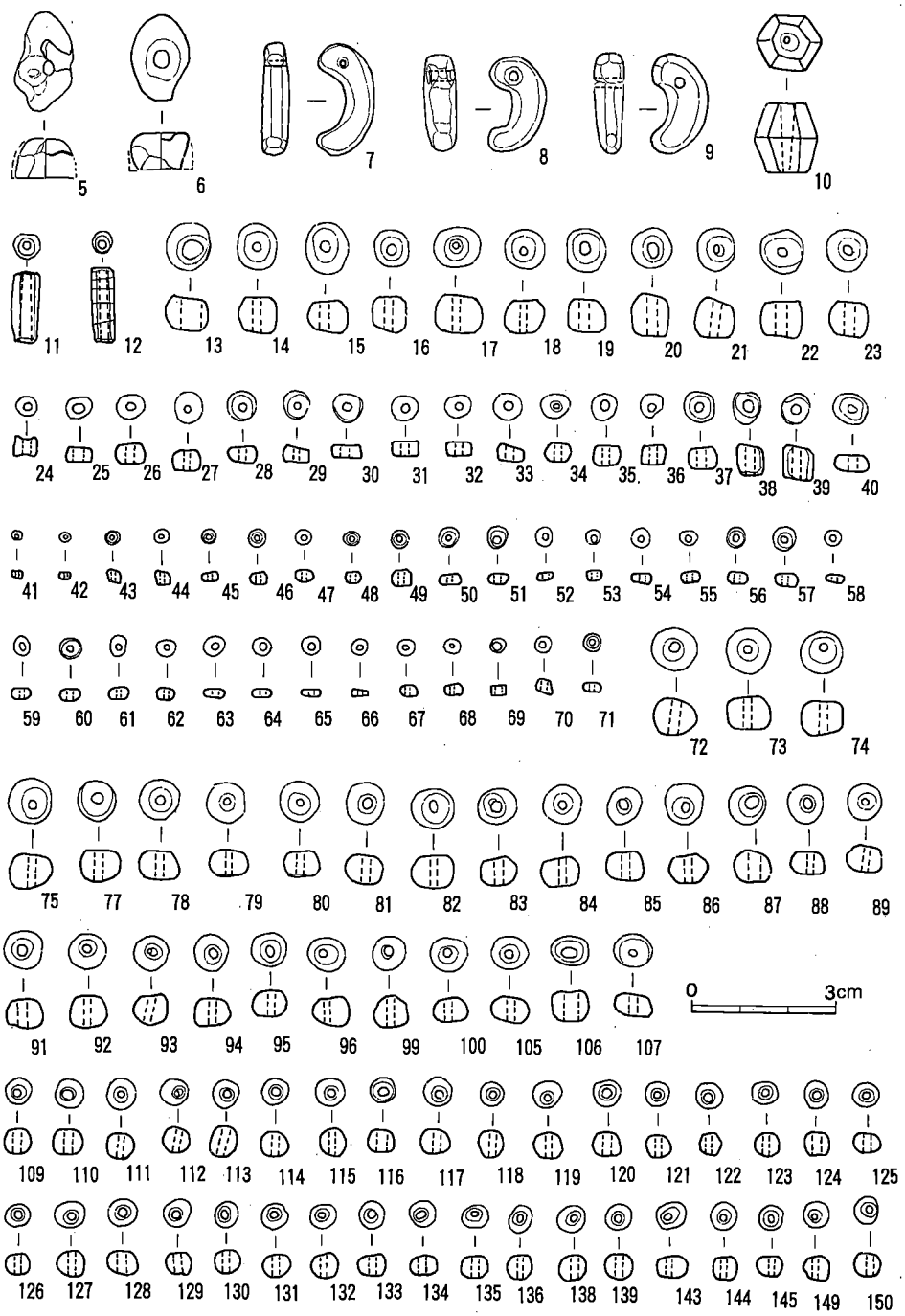
玄室内の左奥・右奥の右手前に群をなして，耳環4点，銀製空玉1点，ガラス製丸玉11点・小玉48点，勾玉3点，管玉2点，土製丸玉37点・小玉45点が出土した。玉類を糸に通すと60cmになる。

耳　環（1～4）　1・2は表面の銹化が進み銅地のみが残っている。1は長径2.1cm，短径1.9cm，断面4.3㎜×6.7㎜の楕円形で，重量は8.7g。玄室右手前（X＝235 Y＝210）より出土。2は長径2.15cm，短径2.0cm，断面5㎜×6.4㎜，重量8.35g，玄室右中央（X＝210 Y＝230）より出土。3・4は銅地銀張りで，3は完形であるが，4は銀が一部捲れている。3は長径3.2cm，短径2.85cm，断面径7.5㎜，重量21.3g。玄室左奥（X＝190 Y＝95）より出土。4は長径3.3cm，短径3.1cm，断面8.5㎜×9.0㎜，重量26.05g，玄室中央（X＝170 Y＝155）より出土。

空　玉（5・6）　現状では歪な形であるが，本来は半球形で2点が合わさり球形になる。銀製である。復元径1.6cm，孔径3.5㎜，重量2.95g。玄室中央（X＝190 Y＝95）より出土。

勾　玉（7～9）　いずれもガラス製で，玄室右奥より出土した。7は薄い透明なブルーで気泡を多く含む。長さ2.2cm，幅4.8～6.4㎜，厚さ4.2～5㎜，孔径1.2，重量1.35g。出土位置はX＝90 Y＝205。8は薄い透明な黄色で気泡を多く含む。一部表面が割れて剝離している。長さ1.91cm，幅5～7㎜，厚さ6.5㎜，孔径1.8㎜，重量1.7g。出土位置はX＝72 Y＝217。9は

磨ガラス状で失透の緑色で翡翠製の可能性もある。長さ1.98cm，幅5.7～7.9mm，厚さ4.2～6



第 28 図　1号墳石室出土装身具実測図6 (2/3)

表4　山田1号墳　玄室第2床面出土玉類計測表 1　　（単位：㎜）

No.	種　類	径	厚　さ	孔　径	色　調	形　態
13	ガラス丸玉	9.8×8.8	6.4～6.8	4.0×3.1・3.9×3.4	コバルトブルー	B
14	〃	9.5×8.5	6.8～7.2	2.0×1.75・2.0×1.8	〃	〃
15	〃	10.5×9.2	6.2～6.6	2.0×1.8・2.0	〃	〃
16	〃	8.1×7.9	6.2～7.1	1.7×1.5・1.8×1.6	〃	〃
17	〃	9.4×8.9	6.8～7.5	1.8×1.6・1.8×1.7	〃	〃
18	〃	8.2×8.0	6.5	1.7×1.5・1.7×1.4	〃	〃
19	〃	8.9×8.7	6.7～7.9	2.0×1.4・1.9×1.5	濃コバルトブルー	〃
20	〃	8.8×8.2	7.9～8.9	2.9×1.9・2.9×2.5	コバルトブルー	〃
21	〃	8.5×8.1	6.5～7.9	1.9×1.5・1.6×1.5	濃コバルトブルー	〃
22	〃	9.2×8.8	7.1～7.5	2.2×1.4	コバルトブルー	〃
23	〃	8.6×8.5	7.2～7.4	1.9×1.7・1.8×1.7	〃	〃
24	ガラス小玉	4.7×4.3	2.6～3.6	1.45・1.2	コバルトブルー	〃
25	〃	5.0×4.4	2.3～2.6	1.3・1.2	ブルーグリーン	〃
26	〃	5.6×5.3	4.1	1.6・2.0	〃	〃
27	〃	6.5×6.4	4.4～4.8	1.1	ライトブルー	C
28	〃	6.2×5.8	3.2～3.4	1.2・1.0	コバルトブルー	B
29	〃	6.0×5.9	2.5～3.5	1.6	〃	〃
30	〃	6.7×6.4	2.5～2.8	2.1・1.4	〃	〃
31	〃	5.7×5.3	3.1	1.6・1.5	コバルトブルー	B
32	〃	5.1×5.0	2.9～3.1	1.3	〃	〃
33	〃	5.4×4.4	2.4～3.0	2.1	〃	〃
34	〃	5.5×4.8	4.0	1.2	グリーンブルー	A
35	〃	5.4×5.3	3.4	1.7	シルバーホワイト	〃
36	〃	4.8×4.4	3.4～3.9	1.8・1.3	グリーンブルー	B
37	〃	6.2×6.0	4.4～4.7	1.8	コバルトブルー	〃
38	〃	6.5×6.2	5.0～5.5	2.0・1.8	〃	C
39	〃	6.5×6.3	6.1～6.3	2.2	〃	B
40	〃	6.8×5.9	3.3～3.5	1.6×1.3・1.6×1.2	〃	〃
41	〃	2.2×2.2	1.5～1.7	0.9	黄	〃
42	〃	2.7×2.7	1.8	0.9	スカイブルー	〃
43	〃	3.2×3.0	2.6～2.9	1.0	薄グリーンブルー	〃
44	〃	3.4×3.2	2.7～3.1	0.9	薄ブルーグリーン	C
45	〃	3.3×3.2	2.2	0.8	〃	B
46	〃	3.8×3.4	2.9	0.8	薄グリーンブルー	〃
47	〃	3.9×3.6	2.1	1.2	薄ブルーグリーン	〃
48	〃	3.4×3.2	2.4	1.0	ブルー	〃
49	〃	4.0×3.7	3.8	1.2	黄	C
50	〃	4.6×4.3	2.4	1.4	〃	B
51	〃	4.5×4.3	2.4	1.2	〃	B
52	〃	4.0×3.8	1.4～2.3	1.5	薄ブルーグリーン	〃
53	〃	3.6×3.4	2.4	1.3	濃コバルトブルー	〃
54	〃	4.2×4.0	2.4	1.2	〃	〃
55	〃	3.8×3.5	2.3	1.1	コバルトブルー	〃
56	〃	4.2×4.0	2.7	0.9	〃	〃
57	〃	4.9×4.5	2.4	1.5	薄ブルーグリーン	〃
58	〃	3.7×3.6	1.9	1.2	コバルトブルー	〃
59	〃	4.1×3.4	2.6	1.0	〃	〃
60	〃	4.3×3.9	2.2	1.2	〃	〃

61	ガラス小玉	4.0×3.7	2.5	0.9	黄緑	C
62	〃	4.0×3.7	2.4	1.2	〃	〃
63	〃	4.2×3.9	2.2	1.4	白	B
64	〃	3.7	1.8	1.5	コバルトブルー	〃
65	〃	3.9×3.7	1.7～1.4	1.4	〃	〃
66	〃	3.6×3.4	1.4	1.2	〃	〃
67	〃	3.8×3.6	2.5	0.9	ブルー	A
68	〃	3.3×3.2	2.4～2.7	0.7	ブルーグリーン	〃
69	〃	3.0×2.7	1.8～2.1	1.2	ブラウン	B
70	〃	3.7×3.5	3.1	1.1	コバルトブルー	A
71	〃	4.1×3.7	1.8～2.0	1.3 ・ 1.2	黄緑	B

表5 山田1号墳 玄室第2床面出土土玉計測表 2 （単位：㎜）

No.	種類	径	厚さ	孔径	形態
72	丸玉	9.2×8.3	5.8～6.9	1.2・1.6	A
73	〃	9.1×8.9	6.2～6.7	1.4	B
74	〃	8.7×8.5	6.3～6.5	1.5・2.1	B
75	〃	9.3×8.7	5.8～6.4	1.5・1.8	C
76	〃	8.8×－	6.7	1.5	B
77	〃	8.8×8.2	6.5～6.7	1.6・2.4	C
78	〃	8.5×8.3	5.4～6.0	1.5	B
79	〃	8.6×8.1	5.5～5.7	1.0・1.4	C
80	〃	8.1×7.9	5.2	1.15	B
81	〃	8.4×8.2	5.2～6.3	1.8・2.0	A
82	〃	8.6×8.2	6.3	1.4・1.7	C
83	〃	8.0×7.6	6.1～5.3	1.5・1.8	A
84	〃	8.2×7.4	5.6～5.8	1.1・1.3	B
85	〃	7.6×7.5	6.1～6.4	1.1	C
86	〃	8.2×7.9	5.5～6.0	1.6・2.0	B
87	〃	7.9×7.7	5.1～6.2	1.8・2.5	C
88	〃	7.6×7.3	5.3～5.5	1.3・1.5	B
89	〃	7.4×7.2	5.2～5.8	1.4	C
90	〃	8.6×8.2	5.6～2.0	1.0	B
91	〃	7.8×7.5	5.3	1.6	A
92	〃	8.0×7.5	5.5～6.4	1.5	〃
93	〃	7.3×7.0	6.2	1.4	〃
94	〃	7.5×6.9	5.7	1.5	C
95	〃	7.4×6.8	4.8～5.2	1.5・2.1	B
96	〃	7.0	4.9～5.2	1.6	〃
97	〃	7.6×6.5	4.9	1.1	〃
98	〃	7.6×6.6	5.0～5.5	1.5	〃
99		7.2×6.6	4.6～5.8	1.4	A
100	〃	7.2×6.3	4.6～4.9	1.3・1.7	〃
101	〃	7.7×7.2	6.2	1.6	〃
102	〃	6.7×6.5	5.3～5.9	1.4	〃
103	〃	7.4×6.9	5.9～6.9	2.0	〃
104	〃	8.2×8.0	—	1.2・1.4	〃
105	〃	7.6×7.4	5.2	1.3・1.4	〃
106	〃	7.8×6.7	5.8～5.4	2.0・1.4	C
107	〃	7.5×7.0	4.4～4.3	1.3・1.1	〃
108	〃	8.2×7.9	6.6～7.1	1.5・1.7	〃
109	小玉	5.3×5.0	4.7	1.5	A

110	小　　玉	5.8×5.3	4.6	1.4・1.7	A
111	〃	6.0×5.8	5.1	1.2	〃
112	〃	5.6×5.2	4.0～4.8	1.5・1.7	〃
113	〃	5.5×5.4	4.4～5.0	1.7	〃
114	〃	5.9×5.7	4.3	1.3	〃
115	〃	5.6×5.5	4.8	1.4	〃
116	〃	5.6×5.3	3.8～4.2	1.5・1.8	B
117	〃	5.9×5.6	4.2～4.5	1.5	C
118	〃	5.1×5.4	4.8～5.2	1.0・1.4	A
119	〃	5.5×5.8	4.6～4.8	1.2	〃
120	〃	5.5×5.3	4.6	1.5・1.7	〃
121	〃	5.0	4.3	1.0・1.2	〃
122	〃	5.4×5.2	4.2	1.7	〃
123	〃	5.4	4.2～4.6	1.4	〃
124	〃	5.6×5.3	4.6	1.5・2.0	〃
125	〃	5.3×5.5	3.4～4.2	1.6	B
126	〃	5.2×5.0	3.5～4.4	1.5	C
127	〃	5.8×5.4	4.3～5.0	1.1・1.8	〃
128	〃	5.8	4.7	1.4・1.8	〃
129	〃	5.0×5.3	4.2～4.4	1.1・1.3	A
130	〃	5.8×5.4	4.5	1.8	〃
131	〃	5.4	4.3	1.2・1.5	〃
132	〃	5.4×5.1	4.4～4.8	1.0・1.5	〃
133	〃	5.7×5.6	4.7～5.0	1.5・1.7	B
134	〃	5.3	4.0	1.3・1.6	A
135	〃	5.5×5.2	4.4	1.0・1.2	C
136	〃	5.5×5.2	4.5	1.0	〃
137	〃	5.5×—	4.1	1.3	〃
138	〃	5.5	4.7	0.9	〃
139	〃	5.2	4.6	1.0・1.5	A
140	〃	5.7×5.4	4.2～4.7	1.1・1.5	〃
141	〃	5.7×5.4	4.6～5.0	1.0・1.5	〃
142	〃	5.7×5.5	4.6～4.8	1.0・1.2	〃
143	〃	6.0～5.8	4.1～4.3	1.1	C
144	〃	5.1×5.2	4.1～4.3	1.4・1.6	B
145	〃	5.2×4.8	3.7	1.1・1.3	〃
146	〃	5.5×5.4	4.4	0.9・1.1	C
147	〃	6.0×5.7	4.5～4.7	1.2	〃
148	〃	5.7×5.3	4.5	1.3	〃
149	〃	5.5×5.0	4.2～4	1.2・1.4	〃
150	〃	5.5×5.0	3.8	1.2・1.4	B
151	〃	6.0×5.5	2.8～3.7	1.3・0.9	〃
152	〃	5.6×5.1	4.7～3.5	1.7・1.4	A
153	〃	5.1×4.6	3.5～3.9	1.2・1.4	〃

㎜，孔径1.8㎜，重量1.75ｇ。出土位置はX＝70 Y＝210。

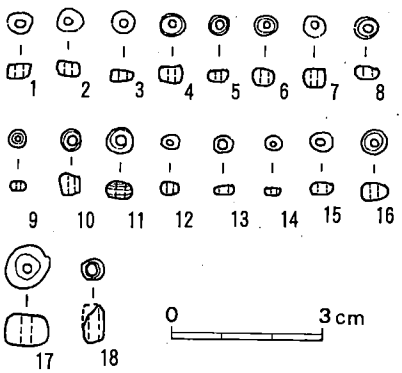
切子玉（10） 水晶製で，長さ1.9㎝，幅0.85～1.3㎝，穿孔は一方からで孔径1.2㎜と4.0㎜，重量は2.9ｇ。敷石の下から出土。

管　玉（11・12） いずれもガラス製で，勾玉と同様に玄室右奥より出土した。11は薄い透明なブルーグリーンで気泡を多く含み，丸味を帯びた六角形でである。長さ1.34～1.47㎝，径5.2㎜，孔径1.6㎜・1.8㎜，重量0.6ｇ。出土位置 X＝85 Y＝215。12は丸味を帯びた六角形で，失

透のイエローグリーンのガラスに二条の透明なブルーグリーンのガラスが配置されている。長さ1.45～1.52cm，径4.5mm，孔径1.2mm・1.8mm，重量0.55ｇ。出土位置 X＝105 Y＝207。

丸　玉（13～23・72～108）　13～23はガラス製で，平面形は楕円形のものが多く，断面形も楔形に近いものもある。孔径は上面と下面とは異なり，形も歪なものが多い。色調はコバルトブルーが主で濃いものもあり，孔と平行に白線（気泡線）が入るものもある。形態は両断面（孔口部）が扁平なものＢ形のみであった。出土地点は22が玄室右奥中央寄りで他は玄室左奥の一群に含まれる。72～108は土製で，ガラス製と同様で歪な形のものが多い。形態分類ではＡ・Ｂ・Ｃが同様にある。色調は黒色を呈する。

小　玉（24～71・109～153）　24～71はガラス製で，平面形は丸玉と同様で楕円形のものが多く，なかには丸味を帯びた五角や六角のものがある。断面形は丸・四角・楔・管状のものなど多彩である。色調はコバルトブルーが主で，透明なライトブルー・スカイブルー・ブルーグリーン・ブルー・グリーンブルー，失透のシルバーホワイト・ホワイト・ブラウン・黄・黄緑などがある。109～153は土製で，丸玉と同様であるが表面が剝離したものが多い。計測値は表に示す。



第 29 図　1号墳石室出土装身具
実測図７（2/3）

表６　山田１号墳　前室第２床面出土玉類計測表　　（単位：mm）

No.	種　類	径	厚　さ	孔　径	色　調	形　態
1	ガラス小玉	4.4×4.3	2.9～3.1	1.7×1.6・1.7×1.5	スカイブルー	B
2	〃	4.8×4.5	2.9～3.2	1.7×1.5	〃	A
3	〃	4.8×4.7	1.8～2.6	1.6	〃	B
4	〃	4.8×4.4	2.4～3.4	1.6×1.5	〃	A
5	〃	5.6×5.3	4.1	1.6×1.4・1.7×1.5	〃	B
6	〃	4.6×4.3	2.9～3.2	1.2　・1.4×1.3	〃	A
7	〃	4.5×4.3	3.2～3.6	1.21	〃	〃
8	〃	4.9×4.6	2.1～2.8	1.5　1.5	〃	〃
9	〃	3.5×3.3	2.4	0.9　1.4	〃	〃
10	〃	4.3×4.2	3.6～4.3	1.4　1.5	〃	〃
11	〃	5.2	3.1～3.4	1.4　1.1	オリーブグリーン	〃
12	〃	3.8×2.9	2.2～2.3	0.9×0.7	ブルー	B
13	〃	4.0×3.8	1.6～1.7	1.7×1.4	〃	〃
14	〃	3.5×3.4	1.7～1.8	0.8	〃	〃
15	〃	4.7×4.1	2.0～2.1	1.5×1.3・1.4×1.2	ブルーグリーン	〃
16	〃	4.9×4.8	2.8～3.2	1.4×1.3	グリーンブルー	A
17	土製　丸玉	8.2×7.9	5.3～5.6	1.3	黒	〃
18	土製　管状玉	4.3×4.0	残存 7.2	1.9×1.4	〃	〃

前室第２床面出土装身具（図版15-３，第29図，表６）

前室内敷石上と敷石下からガラス製小玉16点，土製丸玉１点・管状玉１点が出土した。

小　玉（１～16）　１～16はガラス製で，径3.5～5.2㎜で楕円形のものが多い。厚さ1.8～4.3㎜で管状のものもあり，形態的にはＡとＢ形がある。色調は透明なスカイブルーが主で透明なブルー・ブルーグリーン・オリーブグリーン・グリーンブルーがある。

丸　玉（17）　土製で，形態分類では孔口面の片面は丸味を持もち片面は扁平なＣ形を呈す。

管状玉（18）　土製で，径4.3㎜×4.0㎜，孔径1.9㎜×1.4㎜で径に比して孔径が大きく，一部欠損しているが長さも7.2㎜と長く，他の玉とは異なる。計測値は表６に示す。　（日高）

墓道・前面出土土器（第30・31図）

須恵器杯蓋（19～35）　いずれも身受けのかえりを有さない杯蓋である。19～22は，口縁部がやや外反し，平坦な外天井にナデ調整みられる。復原口径10.5～12.0㎝，器高3.0～3.5㎝の大きさ。21の外天井には放射状のヘラ記号が付されている。19はやや焼成があまく，その他は硬く焼成されている。

23～27は，復原口径約12.0㎝，器高3.5～4.0㎝の大きさ。口縁部は外反せず彎気味で，天豪部も丸味をもつ。28～30も同様の器形であろう。いずれも硬く焼成されている。

31～35は，復原口径12.6㎝～15.5㎝，器高3.8～4.6㎝の大きさ。口縁部は内彎気味で，外天井は回転ヘラケズリされている。いずれも硬く焼成されている。

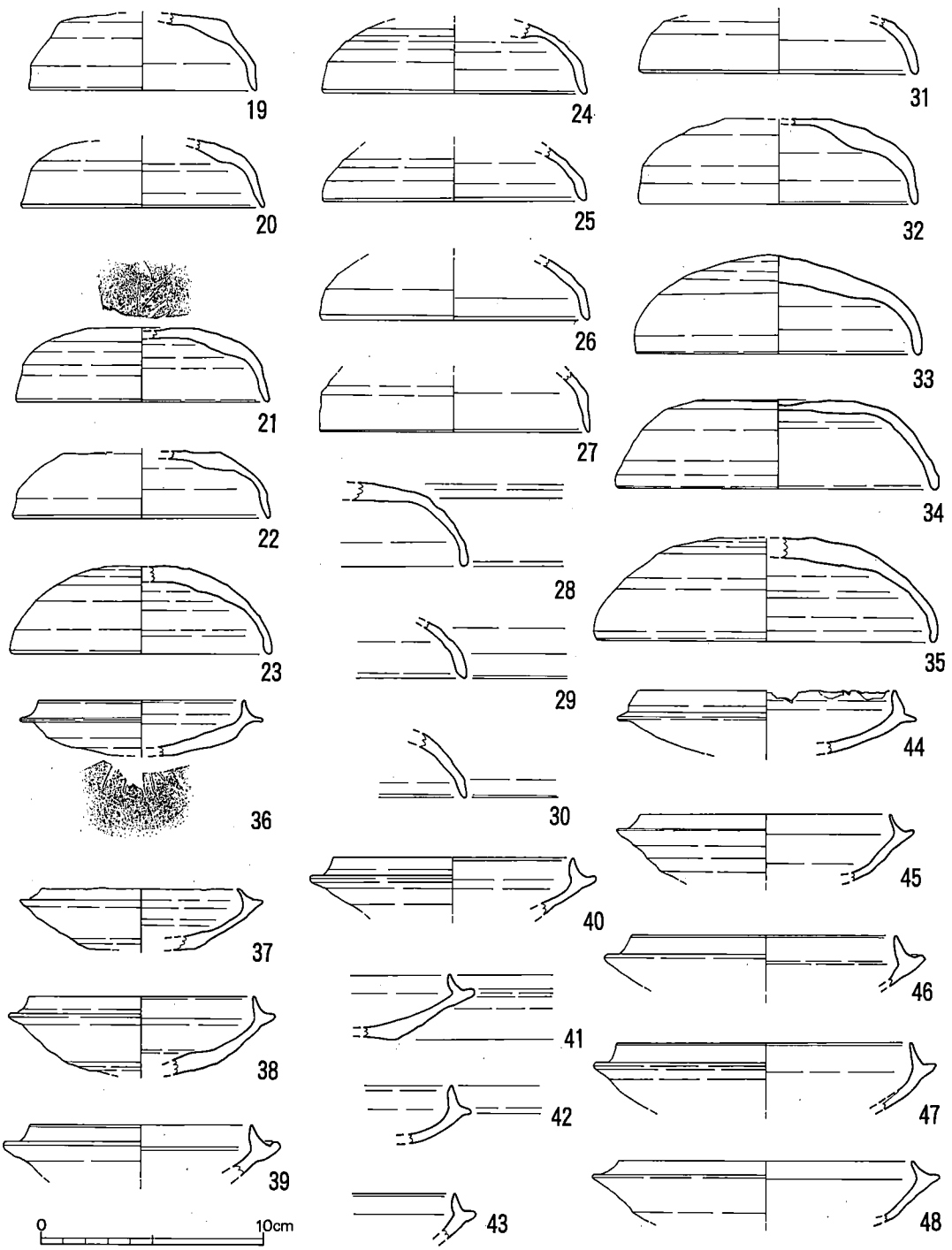
須恵器杯身（36～48）　いずれも蓋受けのかえりを有す杯身で，硬く焼成されている。36～39は，復原口径12.0～12.5㎝，器高2.5～3.5㎝の大きさ。36の外底部には放射状のヘラ記号が付されている。40・45は復原口径13.0前後，46～48は復原口径は14.5㎝～15.6㎝の大きさである。38の外底部には回転ヘラケズリの痕がみられる。

須恵器甕（49～53）　49は口頸部破片で，頸部は大きくびれ，体部外面は平行タタキ，内面に同心円当て具痕がある。外反した口縁は端部が内彎し，外面に三角凸帯が付く。復原口径17.2㎝の大きさで，胎土に砂粒を含み，赤みをおびた暗茶褐色に焼成されている。

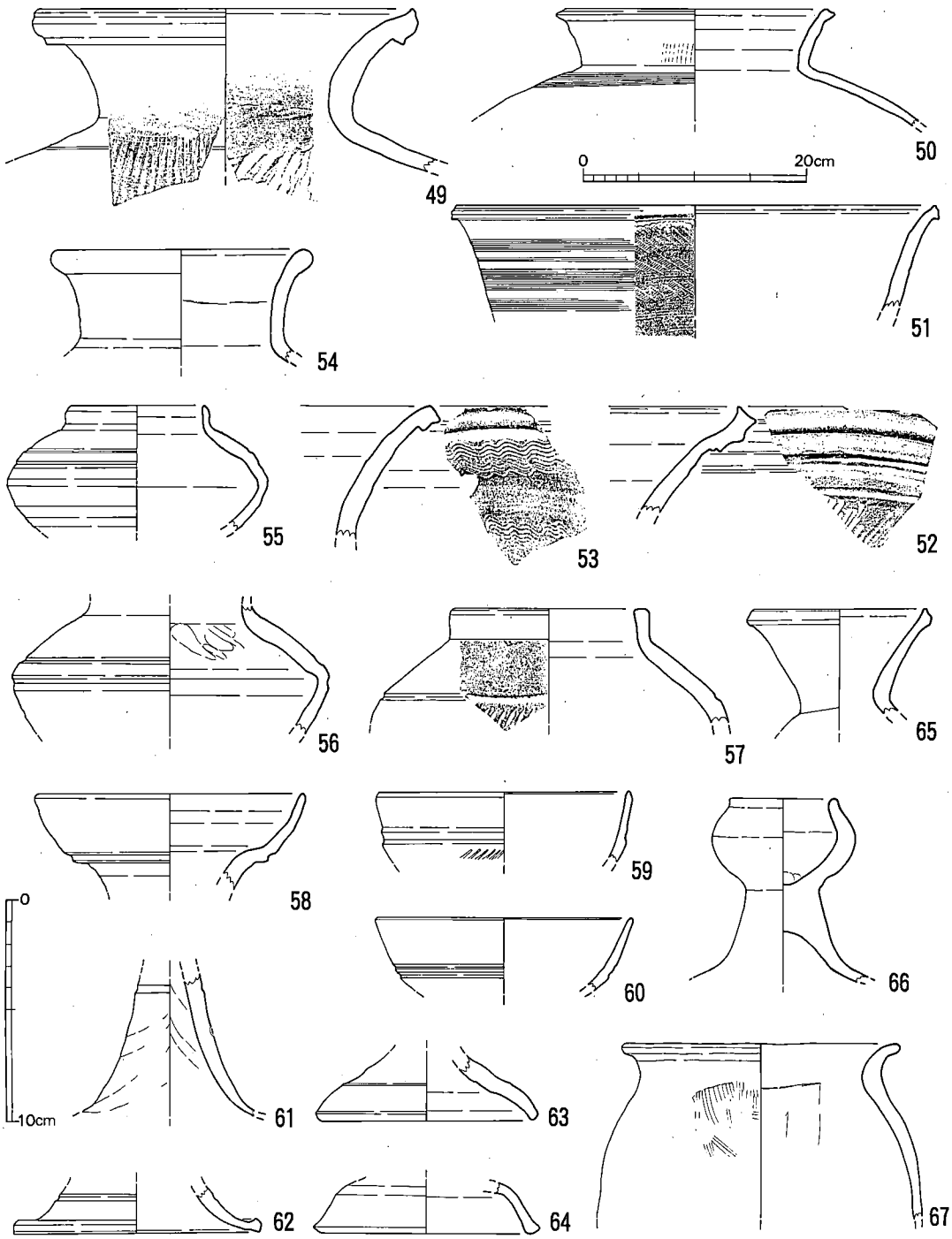
50は，復原口径25.1㎝の大きさの口頸部破片。頸部は大きくくびれ，体部外面は平行タタキのあとカキ目調整，内面に同心円当て具痕がある。口縁部は短く外反し，端部は外側につまみ出されたような形になっている。硬い焼成で，黒灰色を呈している。

51は，復原口径43.0㎝の大形甕の口縁部破片。直線的に開いてわずかに外反するが，端部は内外共につまみ出したようにまとまる。外面には波状文とカキ目がみられる。硬い焼成で，黒灰色を呈している。

52・53は，直線的に開く大きめの甕口縁部破片。52はわずかに端部が内彎し，上方につまみ上げ，外面に三角凸帯が２段低めに付き，平行タタキの痕が残る。53は端部がコの字形に肥厚



第 30 図　1 号墳墓道・前面出土土器実測図 1 (1/3)



第 31 図　1 号墳墓道・前面出土土器実測図 2 (1/3)

したような凸帯が付き，波状文が巡る。いずれも堅緻に焼成されている。

須恵器壺（54～57） 54は，直口縁でやや外反する口縁部破片。端部は丸みをもち，復原口径11.8cmの大きさ。

55～57は，短な直口縁をもつ壺。55は，復原口径6.5cm，残存器高5.5cm，胴最大径11.7cmの大きさで，肩部に２条の沈線が巡り，胴下半にヘラケズリ調整の痕跡がみられる。

56は，口縁・胴下半を欠くが，胴最大径14.3cmの大きさ。胴部に２条の沈線が巡る。内面に指ナデ痕がみられる。焼成は堅緻で黒灰色を呈している。

57は，復原口径9.0cmで，胴最大径は16.2cmをさほど上回らない。肩に沈線と斜方向に連続する小口圧痕がみられる。焼成は堅緻で暗灰色を呈している。

須恵器甕（58） 口縁部破片で，復原口径12.2cmの大きさ。口縁部は内彎して開き，頸部との境目に三角凸帯が巡る。硬い焼成で茶灰色を呈している。

須恵器高杯（59～64） 59・60は杯部，61は柱状部の破片。59は復原口径11.6cmの大きさで，浅い２条の沈線の下に斜行文がみられる。硬い焼成で茶灰色を呈している。60は復原口径11.6cmの大きさで，２条の沈線が巡る。焼成はややあまい。61は浅い沈線が１条巡り，長三角形の透かしが切り込まれているが，内外面に絞り痕が残る。

62～64は裾部破片で，62は脚端にかけて外反して端部で踏張るが，63・64は端部にかけて内彎気味に開く。いずれも焼成良好。

須恵器平瓶？（65） 口頸部破片で、体部との境目の状況から平瓶と思われる。口縁部は直線的に開き，端部でつまみ上げたように面取りされる。

土師器台付壺（66） 台裾を欠くが，残存器高8.2cmをさほど上回らず，復原口径4.9cm，胴最大径6.5の大きさ。壺部は約4.0cmの高さで口縁部も短い。柱状部から裾にかけては外反して開く。丁寧にナデ調整されるが，器高は風化・剝げが進んでいる。胎土に砂粒・角閃石・褐色粒を含み，明褐色に焼成されている。

土師器甕（67） 復原口径12.6cm，残存器高7.7cmの大きさ。口縁部は外反するがあまり肥厚しない。胴部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされている。胎土に金雲母・褐色粒・石英を含み，茶褐色に焼成されている。

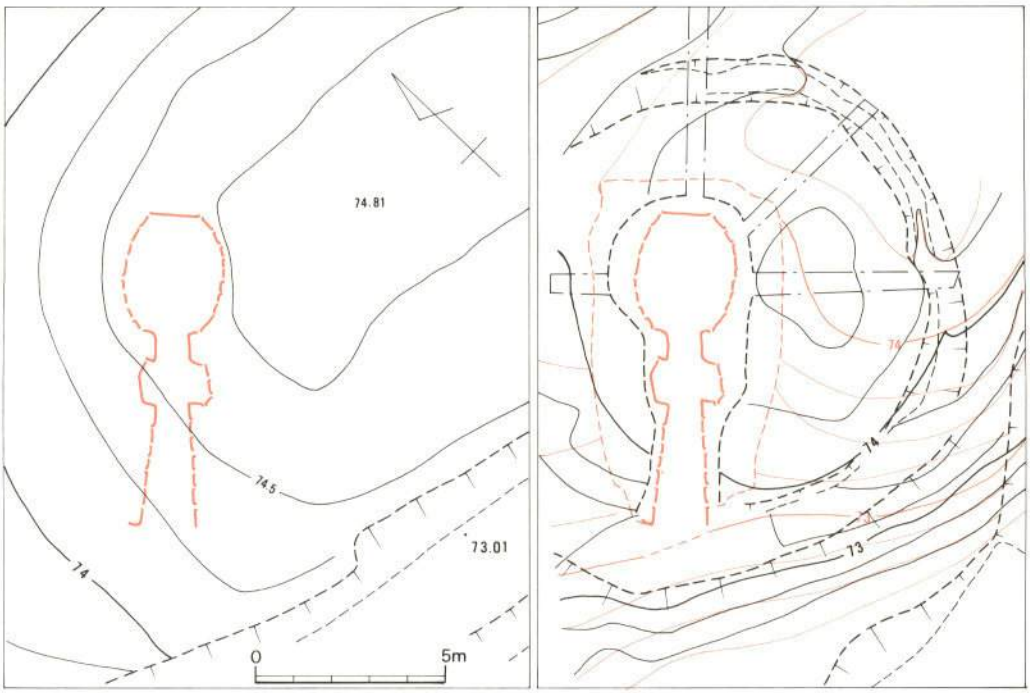
石室内出土土器を含めて，１号墳から出土した土器からは６世紀後半でも末に近い年代が与えられる。

2．2号墳

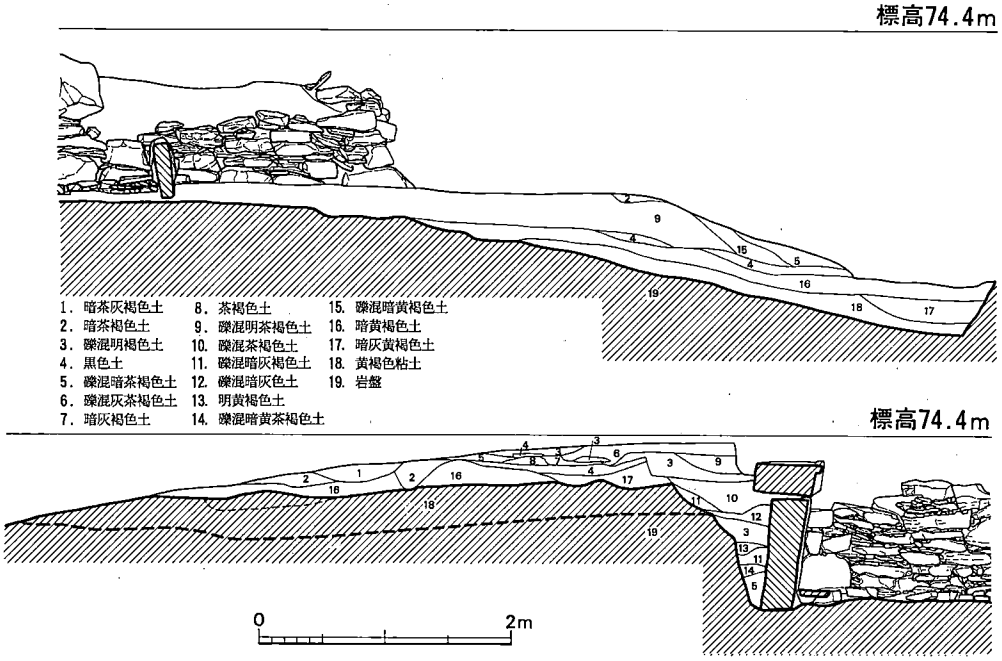
墳　丘（図版16-1，第32・33図）

A地区尾根の頂部で1号墳の西側に占地し，1号墳よりやや低い標高74mに位置する古墳である。調査前の観察では，墳丘はみとめられず，隣接する墓地との境にもなっている段落ちの崖の部分に石材が集中していて，用地外のさらに西側にある墳丘を残す古墳と1号墳との間に1基程度古墳が存在してもおかしくない距離をおいていることから，古墳の可能性を考える程度に判断せざるを得ない状況であった。ユンボによる全面表土剝ぎの結果，石材の集中する部分よりも北東側で石室の主体部が検出され，西側から南側にかけて孤状の列石をもつ円墳であることと，石材が集中する部分は開墾の際に石室を構成していた石材などを崖側に積んだ石垣状のものであることが明らかとなった。

石室確認後に，石室内部の掘り下げと，墳丘の断ち割りを実施した。石室内部は天井石および壁体上部の石が転落し，墳丘盛土の崩落した締りのない土が堆積していた。



第 32 図　2号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）



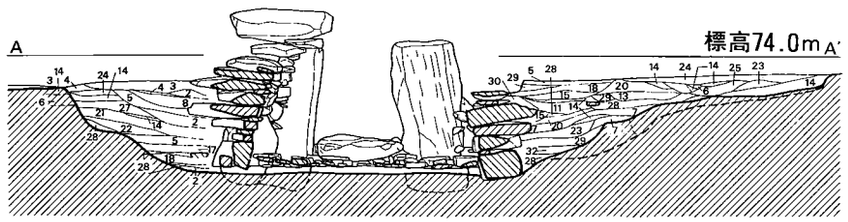
第 33 図　2号墳墳丘土層実測図（1/60）

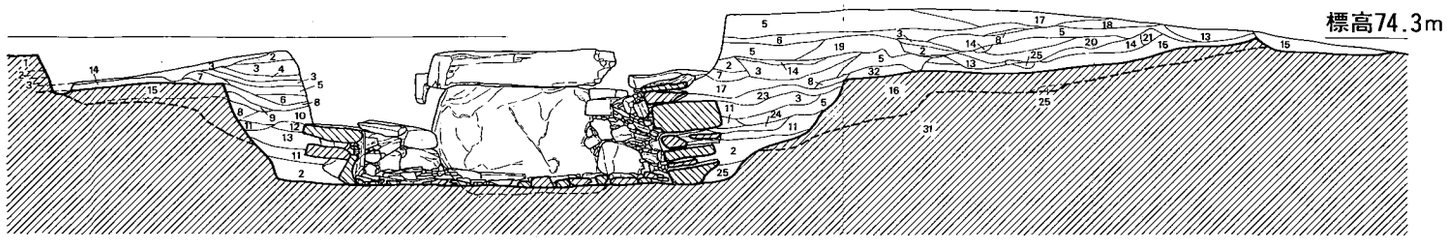
墳丘は，標高74m前後に広がる旧表土の上に，岩盤砕石を含む黄褐色土・赤褐色土・茶褐色土などの盛土が版築状をなして，0.2～0.3m厚さと僅かに残されていた。また，南側には人頭大ないしはそれよりやや大きな扁平石を積んだ列石が検出された。

この古墳は，東側から続く尾根線に直交させて石室を構築している。地山整形では，東側に標高74.4m位を上端として，幅１m程の馬蹄形状の溝を削り，この内側に盛土をして墳丘としている，直径11.0～12.0mの円墳であろう。上部を削平され当初の高さは詳らかでないが，概ね2.0m程度であろうか。

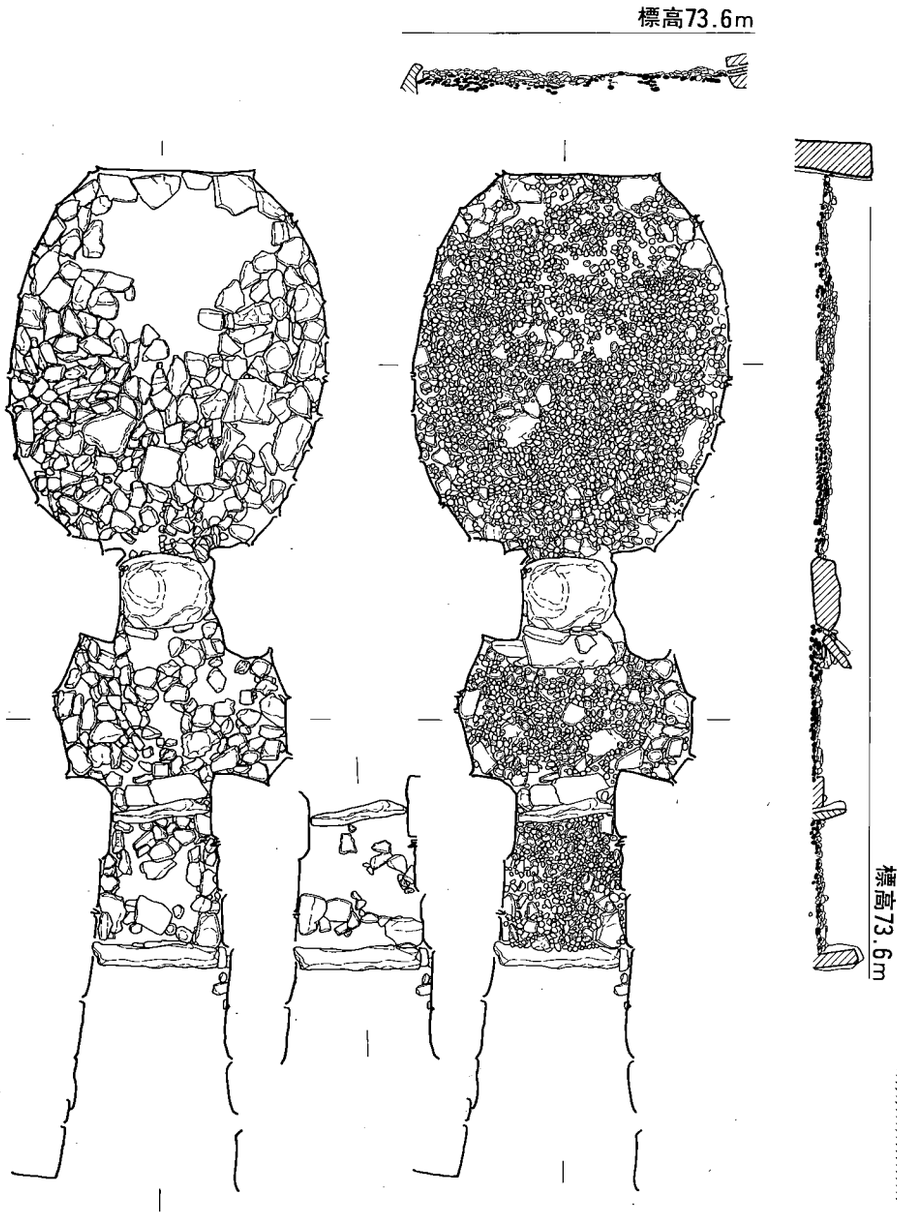
墳丘前面の列石は，部分的に崩壊するものの標高73～74mの高さにあり，左側では約1.8mの長さで２段に20～30cm高さの外側列石，さらに50cm内側に約2.7m長さで２段に20～30cm高さの列石がみられる。右側では，約5.6m長さで１～５段20～80cm高さの外側列石，さらに50cm内側に約1.8m長さで約20cm高さの列石がみられる。内側列石の基底部は，地山整形段階の削平と盛土整形の境目付近で，直接積まれている。外側列石の基底部は，盛土整形された上に積まれる。列石背後は版築状ながら傾斜のある堆積土である。

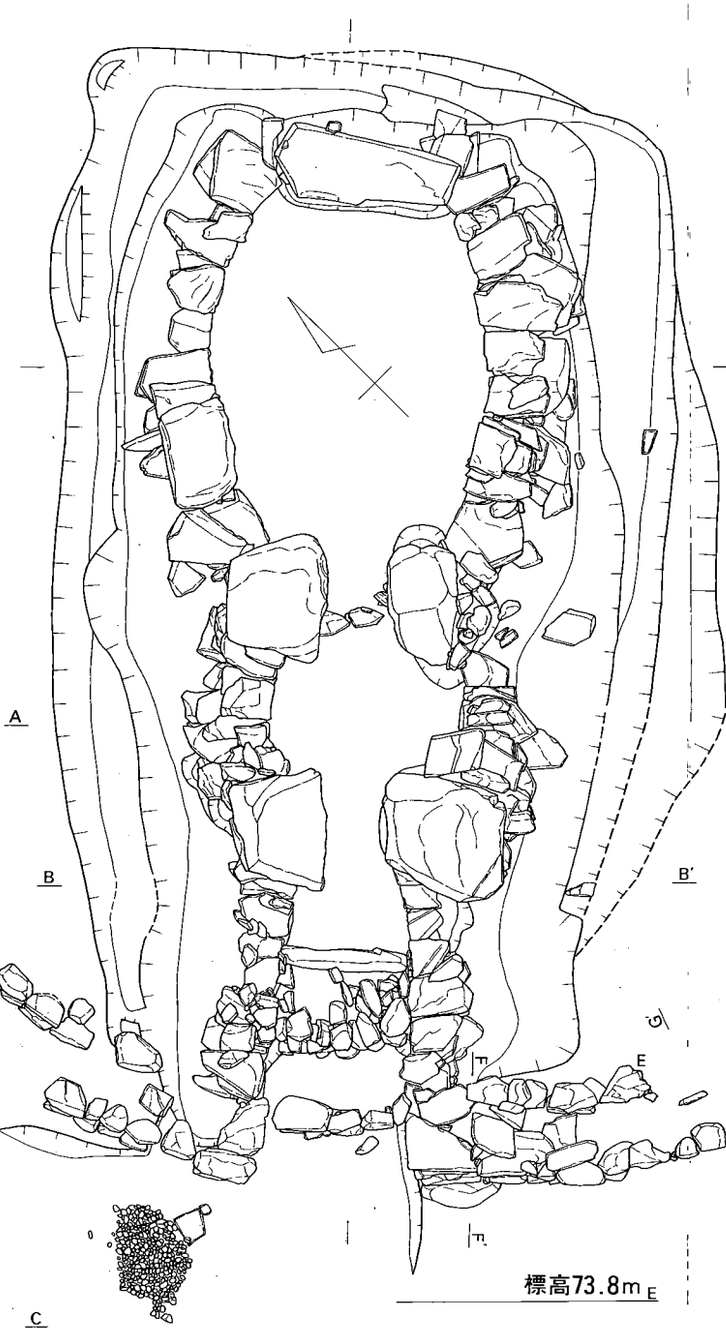
左側列石の約50cm前側には，長径85cm，短径60cmの楕円形とも方形ともとれる形に玉砂利の集石が検出された。中央部で約10cmの高さをもち，左外側列石の基底石の乗る堆積土と同じ堆積土の上に乗る。



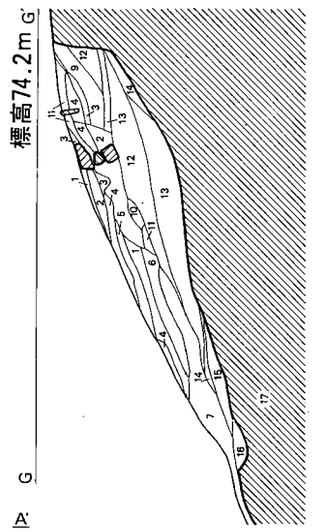


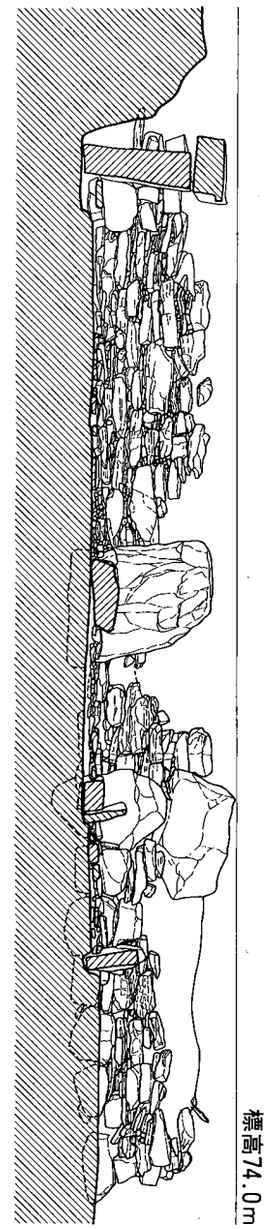
1. 耕作土
2. 礫混茶褐色土
3. 礫混明茶褐色土
4. 礫混黒色土
5. 礫混暗茶褐色土
6. 暗茶褐色土
7. 礫混淡明茶褐色土
8. 礫混暗灰色土
9. 礫混淡暗灰色土
10. 礫混灰褐色土
11. 暗灰褐色土
12. 明茶褐色土
13. 礫混暗灰褐色土
14. 黒色土
15. 暗黄褐色土
16. 明黄褐色土
17. 礫混暗黄褐色土
18. 礫混淡赤褐色土
19. 礫混灰茶褐色土
20. 礫混暗灰茶褐色土
21. 礫混赤褐色土
22. 暗灰黄褐色土
23. 礫混暗灰色土
24. 礫混明褐色土
25. 明褐色土
26. 淡明褐色土
27. 礫混明褐色土
28. 暗灰色土
29. 礫混灰赤褐色土
30. 淡褐色土
31. 岩盤

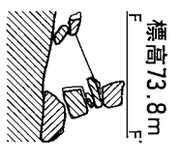




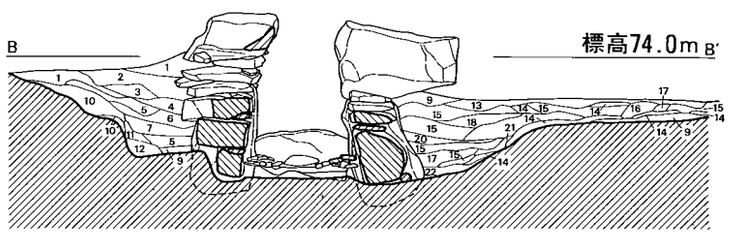
1. 暗黄褐色土
2. 暗灰色土
3. 黒色土
4. 暗灰褐色土
5. 暗茶褐色土
6. 暗黄灰褐色土
7. 濃い暗茶褐色土
8. 礫混暗黄褐色土
9. 灰褐色土
10. 礫混暗灰色土
11. 礫混淡黄褐色土
12. 暗茶灰褐色土
13. 礫混暗赤褐色土
14. 黒色大（旧表土）
15. 灰黄褐色土
16. 赤褐色土
17. 岩盤

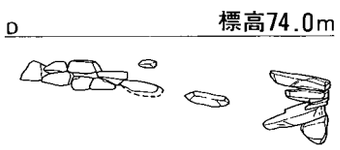


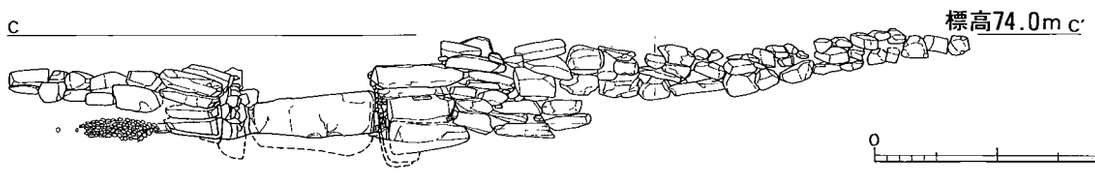




1. 礫混暗茶褐色土
2. 礫混淡茶褐色土
3. 淡明茶褐色土
4. 淡茶褐色土
5. 礫混黄茶褐色土
6. 礫混黒色土・黄茶褐色土
7. 礫混淡黄褐色土
8. 礫混暗黄茶褐色土
9. 暗黄褐色粘性土
10. 礫混黄褐色土
11. 褐色土
12. 礫混赤褐色土
13. 暗黄茶褐色土
14. 黒色土
15. 黒色土混赤茶褐色土
16. 礫混暗茶褐色土
17. 黒色土混淡茶褐色土
18. 礫混赤茶褐色土
19. 礫混明赤茶褐色土
20. 黒色土混暗茶褐色土
21. 暗灰色土
22. 暗赤茶褐色土







第 34 図　2 号墳石室実測図（1/60）

主体部（図版16-2・17・18，第34図）

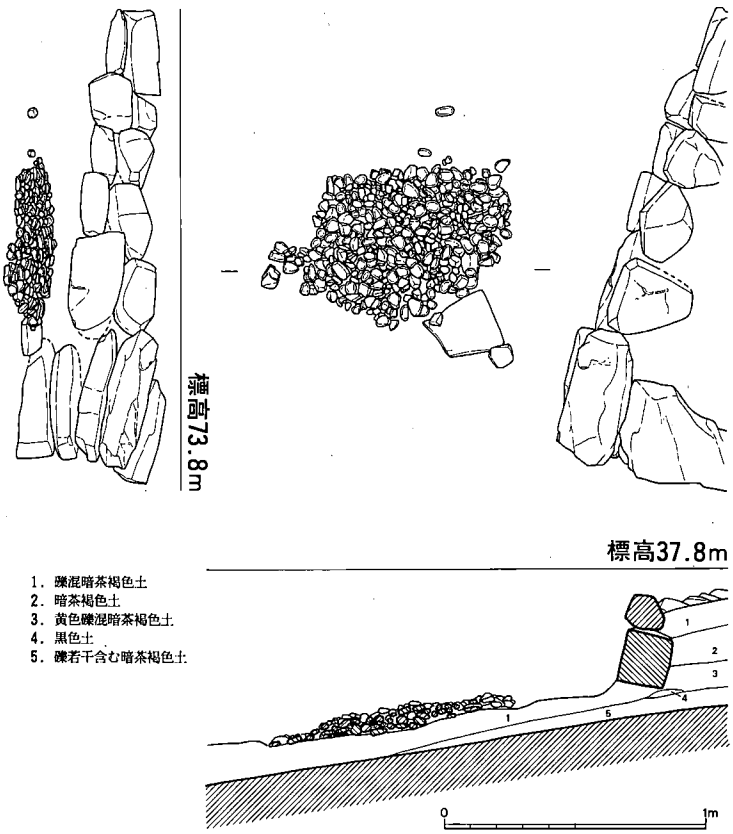
この古墳の主体部は，主軸方位をN45°20′Eにとり，南西方向に開口する，複室構造の横穴式石室である。

石室の掘り方は，74.2m位を奥側の上端として掘り込まれる，長さ9m，幅4～5mの不整長方形プランを呈している。奥壁部分では深さ1.15mだが，前面側に浅くなり，墓道部は盛土整形されている。

石室は玄室・前室ともに天井石と壁体の上部が崩壊しているが，石室全長は，左側壁で8.20m，右側壁で8.30mを測る。

玄室の長さは，左側壁で3.05m，右側壁で3.05m，中軸線で3.00mである。三味線胴の胴張りプランで，最大幅2.60mは中央部にある。奥壁中央に幅130cm，高さ75cm（石材の高さ87cm，最大幅135cm），厚さ30cmの石を据えて鏡石とし，両脇は扁平石を基底部から平積みしている。鏡石の上には，大きく広めの石が平積みされる。両側壁ともに，基底部から扁平石の平積みで，少しづつ持ち送ったドーム状を呈しているが，天井石は残らない。玄室では奥壁が床面から1.05mの高さまで，側壁は高さ0.95m程度しか残らない。床面には下部で大きめの扁平石を，上部で玉砂利状の石を全面に敷いた，上下2面の敷石がみられる。

玄門部分の袖石は，高さ120cm程，幅40～70×100cm程の石が，主軸に平行する方向に据えられるが，上に架かる石は左側に広さ80×100cm，厚さ25cmの扁平石が1つ乗るものの右側は残らない。玄門幅は0.80～0.90mで，高さ1.2m以上の空間があったことにな



第35図　2号墳左前面集石遺構実測図（1/30）

る。床面には長さ80cm，幅55cm，厚さ20cm強の扁平石が仕切石として据えられている。

前室は，左側で1.20m，右側で1.00m，主軸で1.10mの長さを測り，胴張り気味の平面形を呈していて，最大幅は中央部にあり1.85mを測る。側壁は，左右ともに基底部から扁平石の平積みで，少しづつ持ち送ってドーム状を呈し、0.55～1.00mの高さに残っている。床面には下部で大きめの扁平石を，上部で玉砂利状の石を全面に敷いた，上下2面の敷石がみられる。

前室左袖石は，高さ75cm（石材は90cm），幅65cm，厚み50cmの石を，右袖石は高さ60cm（石材は90cm），幅55cm，厚み55cmの石を据えている。この石の上にそれぞれ広めの扁平石を平積みして高さ1.30m程に残るが，このすぐ上に天井の石が架けられていたのであろう。袖石間0.80mぎりぎりに，長さ80cm，幅30cm，厚さ10cmの扁平石を立てた仕切石がある。

羨道部は，前室袖石から緩やかに開く平面形を呈するが，左側で3.25m，右側で3.40mの長さをもち，前面での幅は1.45mを測る。このうち，前室仕切石から左側で1.00m，右側で1.10mの位置では，幅1.05mを測るが，ここに長さ105cm，幅50cm弱，厚さ15cm弱の扁平石と小振りな石を立てて仕切石が設けられている。これによって小さな室が区画されて，床面も前室・玄室と同様な敷石がなされている。左右の側壁は，前室・玄室と異なり，基底部にやや大振りの石が据えられて，その上に扁平石の平積みがみられ，小さな室に区画された部分では0.45mの高さに残っている。

閉塞は，羨道中途の仕切石の前に，奥行き0.6m，高さ0.40m程に積まれるが，前面側が揃うようにする以外積み方に規則性はみられない。ただ，さらに前面側に0.50m程の空間を空けて高さ0.15mに残る積石があり，これも閉塞の一部であろう。

石室を構成する石材は，全て緑色片岩や緑泥片岩であるが，奥壁の鏡石や玄門・前門袖石などには硬く，大きな石材を使用している（図版19-1）。
また図版17-4や第36図は，石室構築材を全て除去した，主体部掘り方である。前述した硬い質の石材を使用する部分は深く掘り下げられている。

遺物出土状況（図版20）

第1床面（上部床面）

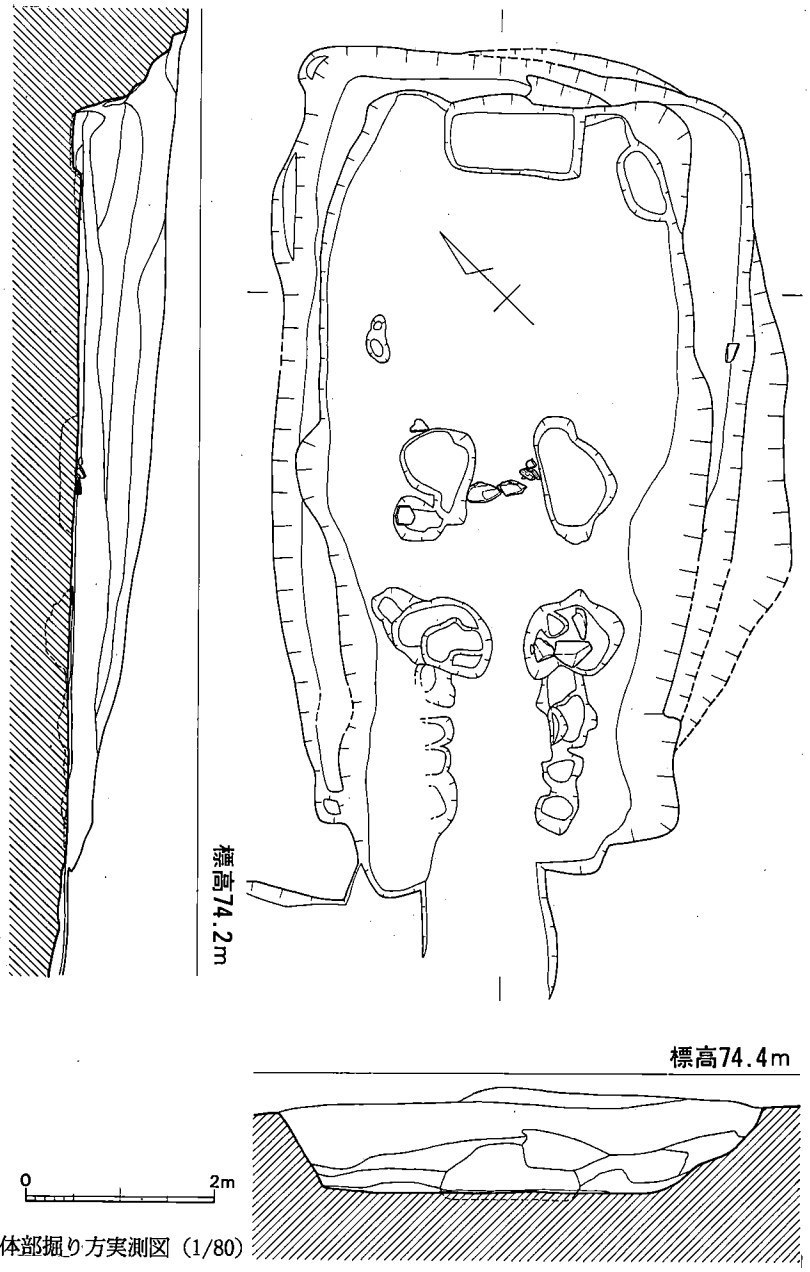
玄室・前室・羨道区画室の，玉砂利状の石で敷かれる上部の床面を第1床面としている。

玄室内では，中央部よりむしろ壁寄りで，鉄鏃・鉄刀子・ガラス小玉など出土したが，とくにまとまった状況でもなく，敷石の間にはまり込んだものが多い。

前室から羨道区画室にかけて，辻金具・U字形鉄製品・耳環・ガラス小玉などがまとまって出土し，前室と羨道区画室の遺物には接合するものもある。

第2床面（下部床面）

玄室・前室・羨道区画室にみられる，第1床面の下にわずかに間層を挟んで，やや大振りの



第 36 図　2 号墳主体部掘り方実測図（1/80）

扁平石で敷き詰められた床面を第 2 床面としている。

玄室内では，右側壁の近くと奥壁寄りで玉類がややまとまって出土し，耳環が中央部の前室寄りの左右で各 1 点出土した。ガラスおよび土製の玉類は中央よりもむしろ右側壁や奥壁寄りで出土し，敷石間に転落したものもある。鉄鏃や鞘金具片などもほぼ同様の出土状況である。

なお排土を水洗選別してガラス・土製の玉類が100点以上検出できた。

また，第2床面の石を除去した床面の排土からも28点のガラス小玉が検出できた。

前室内では，水洗選別した排土では第2床面でガラス小玉2，第3床面でガラス小玉2点が多数検出できた。また，前室と羨道区画室の間の仕切石の下から絞具・辻金具片が出土した。

第2床面および石を除去した床面では，玄室・前室・羨道区画室ともに土器類の出土はみられなかった。

墓道および前面

石室内の床面に対応した面は確認しえなかった。墓道では須恵器甕・高杯・𤭯・提瓶など，左前面では須恵器甕・杯・高杯・𤭯・提瓶などの土器類が散乱し，用地境の先にも広がって続くようである。鉄鏃・鍔・辻金具片や，凝灰岩製砥石なども含まれている。（小池）

出土遺物

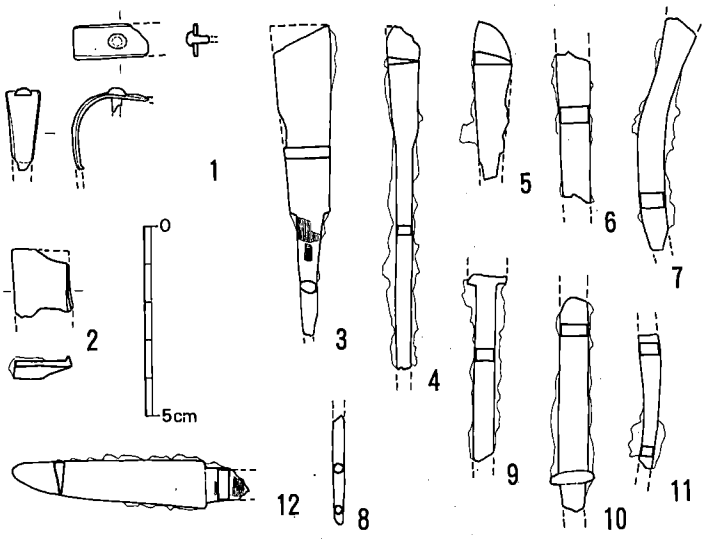
玄室第1床面出土鉄器（図版21，第37図）

武具としては，鞘金具2点，鏃9点，工具では刀子1点が玄室全域から出土した。

鞘金具（1・2）　1は銅製で責金具であろう。現存幅8～6㎜で径3.5㎜の鋲を有す。玄室中央壁際（X＝195 Y＝260）より出土。2は鉄製の縁金具で，厚さ1㎜，幅1.5㎜で一端を外方に直角に折り返している。内面には木質が僅かに残っている。玄室中央（X＝215 Y＝26）出土。

鏃（3～11）　3は平根式方頭形で，最大幅1.6cm，現存形8.2cm，茎部に木質が残る。玄室右手前（X＝305 Y＝220）より出土。4・5は尖根式片刃形で，4は最大幅0.9cm，現存長9cm，玄室右手前（X＝320 Y＝85）より出土。9は直角の関をもち，10は棘状の箆被を有す。

刀子（11）　身部長5.2cm，茎部の多くは欠損するが，木質が残る。玄室右中央奥（X＝70 Y＝175）より出土。



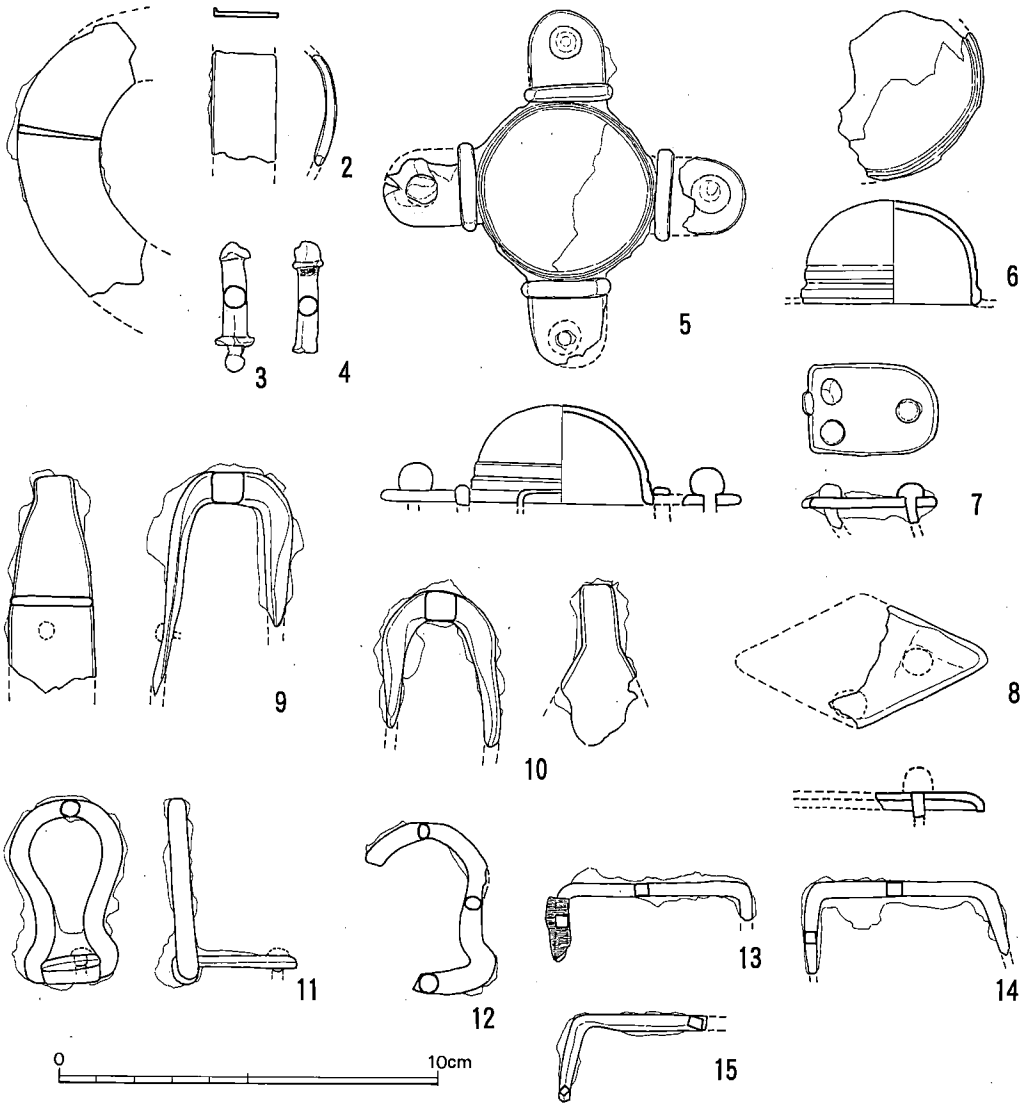
第37図　2号墳石室出土鉄器実測図1（1/2）

前室第１床面出土鉄器（図版22，第38図）

武具としては鍔１点，鞘金具１点，弓付属金具２点，馬具では辻金具２点，留金具２点，鐙金具２点，懸け金具２点，その他に鎹３点が出土した。

鍔（１） 鍔の一部破片で，幅2.2cm，断面は楔形を呈す。前室中央（X＝470 Y＝140）から出土。

鞘金具（２） 鞘の縁金具で幅1.75cm，内面に木質が残る。



第 38 図 ２号墳石室出土鉄器実測図２（1/2）

弓付属金具（3・4） 両端は丸い頭部を有する金具で，4は片方欠損する。両端の頭部径は7㎜前後，中心部径6㎜前後である。3は全長3.3㎝を測る。玄室との仕切石際から出土した。

辻金具（5・6） 鉄地金銅張りで，径4.7㎝の半球形鉢に半円形の脚が4ケ所に付く。鉢の下端は5は段が付き，6は沈線が2条巡る。脚は径9㎜の金銅製鋲と幅4.5㎜の責金具が付く。出土位置は，鉢は前室中央（X＝515 Y＝105），脚は前室手前・羨道などで，かなり動いて出土した。

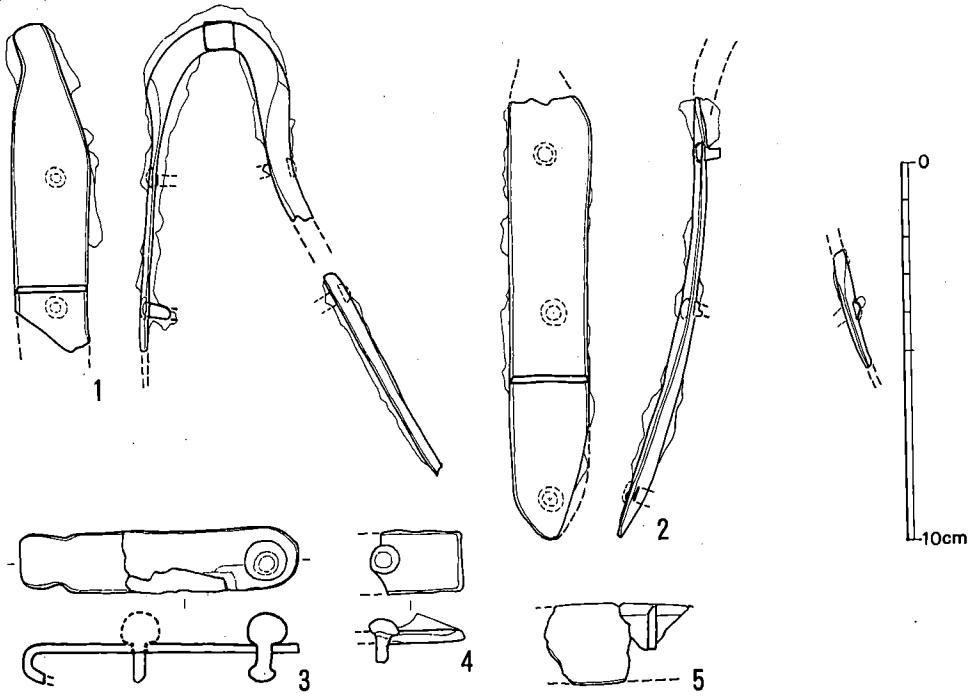
留金具（7・8） いずれも鉄地金銅張り。7は一端が丸味をもつ形で，鋲は3本とも先端が打ち曲げられている。前室左中央（X＝500 Y＝110）より出土。8は菱形で，径7㎜の鋲痕が残る。前室左中央（X＝510 Y＝85）より出土。

鐙金具（9・10） 木心鉄板張鐙上部金具破片。9は前室右手前（X＝530 Y＝170）より出土した。

懸け金具（11・12） 11は鋲が付いた鉄地金銅張りの長形板を巻き付けて回転できるようにしている。羨道との仕切石際より出土した。

鎹（13～15） 4㎜角程度の鉄線をU字に折り曲げ先端を方形に尖らせている。いずれも前室中央部付近（X＝480 Y＝120）より出土した。

羨道出土鉄器（図版22，第39図）



第39図 2号墳石室出土鉄器実測図3（1/2）

馬具の鐙金具２点，懸け金具１点，留金具２点が出土した。

鐙金具（１・２） 木心鉄板張鐙の上部金具で，木製の鐙は遺存していない。１は頂部よりおよそ４㎝下とその下3.5㎜に鋲が打たれている。最大幅2.5㎝，厚さ1.5㎜を測る。羨道左中央（X＝650 Y＝105）より出土。２は頂部を欠損するが，片側は先端部まで残存する。最大幅2.1㎝，厚さ1.8㎝，鋲間隔は4.3㎝・５㎝である。羨道右中央（X＝615 Y＝165）より出土。

懸け金具（３） 鉄地に金銅張りで先端部は円形で，なかに２つの鋲が付く。末端部は折り曲げて金具に巻き付くのであろう。全長7.5㎝，幅1.7㎝を測る。羨道左中央（X＝600 Y＝115）より出土。

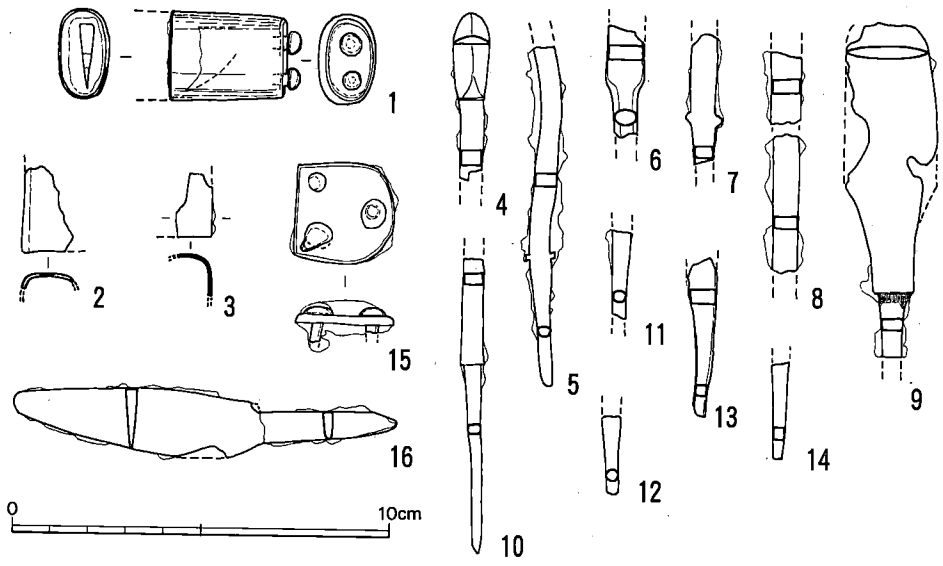
留金具（４・５） ４は鉄地で金銅張り。羨道中央（X＝630 Y＝140）より出土した。５は鉄地しか残っていない。

玄室第２床面出土鉄器（図版23，第40図）

武具としては鞘装具１点，鞘金具２点，鏃11点，馬具では留金具１点，工具の刀子１点が出土した。

鞘装具（１） 鞘尻装具で，平な鞘尻に二本の釘が打たれてあり，この形がカニの目玉のように見えることから通称，カニ目釘付鞘尻と呼ばれている。内部に身幅1.7㎝の刀身が残る。玄室中央壁際（X＝145 Y＝265）より出土。

鞘金具（２・３） 鞘の責金具であろう。

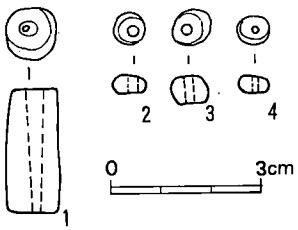


第 40 図 ２号墳石室出土鉄器実測図４（1/2）

鏃（4～14）　4は尖根式剣形で，片丸造り。9は平根式圭頭形で，両丸造り。5～8・10～14は篦被部・茎部破片。7・5は棘状の篦被部を有する。

留金具（15）　一辺が丸味をもつ方形で，鉄地金銅張りで鋲が3ケ所に付く。

刀　子（16）　両関で反り気味の刃部をもつ。身部長6.6cm，現存長10.2cmを測る。玄室左中央（X＝230 Y＝35）より出土。



第 41 図　2号墳石室出土装身具実測図1（2/3）

玄室第1床面出土装身具（図版23，第41図）

玄室右奥から管玉1点，右中央からガラス製小玉が出土した。

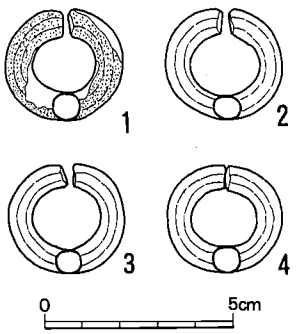
管　玉（1）　暗い緑色を呈する碧玉製で，径9.5㎜×9.8㎜の楕円形，長さ2.44cm，重量4.55ｇを測る。穿孔は一方からで，孔径は2.8㎜×2.4㎜と1.05㎜である。玄室右奥（X＝130 Y＝180）より出土。

丸　玉（2～4）　いずれもガラス製で，2はコバルトブルーを呈する。径6.4㎜×6.6㎜，厚さ3.2～3.8㎜，孔径1.5㎜，重量0.25ｇ。形態分類ではＢ形になる。玄室右中央（X＝250 Y＝205）より出土。3はライトブルーを呈し，径7.5㎜×7.8㎜，厚さ4.4～5.1㎜，孔径1.3㎜・1.4㎜，重量0.4ｇ。4は磨ガラス状でコバルトブルーを呈する。径5.8㎜×6.1㎜，厚さ2.9～3.2㎜，孔径0.9㎜×1.1㎜・1.1㎜×1.3㎜，重量0.15ｇ。玄室右中央（X＝245 Y＝220）で3と出土した。形態分類では3はＣ形，4はＢ形になる。

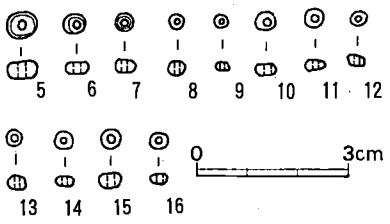
前室第1床面出土装身具（図版21・23，第42・43図，表7）

前室右奥付近から耳環4点，ガラス小玉が12点出土した。

耳　環（1～4）　1・4は銅地銀張り，3・4は錆化が進み銅地のみが残る。1は長径3.1



第 42 図　2号墳石室出土装身具実測図2（1/2）



第 43 図　2号墳石室出土装身具実測図3（2/3）

表7　山田2号墳　前室第1床面出土玉類計測表　（単位：㎜）

No.	種　類	径	厚　さ	孔　径	色　調	形　態
5	ガラス小玉	5.7 ×5.3	3.3～3.4	1.1×10.0・1.3×1.2	コバルトブルー	B
6	〃	4.4 ×4.1	2.2～2.5	1.2	〃	〃
7	〃	4.4 ×4.1	2.2～2.5	1.1 ・ 1.2	〃	A
8	〃	3.4 ×3.1	2.9	0.7	〃	〃
9	〃	3.1 ×2.9	1.8～1.6	0.8	にぶ青緑	〃
10	〃	4.1 ×4.0	2.3	1.2	〃	〃
11	〃	4.0 ×3.9	1.8～2.4	1.3 ・ 1.2	〃	〃
12	〃	3.35×3.1	2.0～2.1	0.7	ブルーグリーン	C
13	〃	3.7	2.5～2.8	1.1	黄	A
14	〃	3.8 ×3.7	2.0	1.1	〃	〃
15	〃	4.1 ×4.0	3.0～3.2	1.5 ・ 1.6	黄緑	C
16	〃	3.5 ×3.4	2.1～2.2	0.9	黄	A

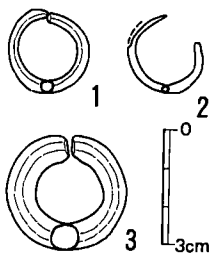
cm，短径2.9cm，断面径7㎜，重量19.95ｇ。前室右奥（X＝455 Y＝170）より出土した。2は長径3.15cm，短径2.85cm，断面径6.8㎜×7.1㎜，重量17.35ｇ，前室中央右（X＝500 Y＝190）より出土。3は長径3.1cm，短径2.8cm，断面径6.4㎜×7㎜，重量17.85ｇ。前室中央右（X＝485 Y＝205）より出土した。4は長径3cm，短径2.7cm，断面径6.7㎜，重量17.7ｇ。前室右壁際（X＝225 Y＝445）より出土した。

小　玉（5～16）　いずれもガラス製で，5を除き径4cm，重量0.05g程度である。色調は透明なコバルトブルー・にぶ青緑・ブルーグリーン，失透の黄緑・黄色がある。6・8には内部に孔と平行な白線（気泡線）が入る。形態分類では両断面が丸味をもつA形が多い。

玄室第2床面出土装身具（図版23・24-1，第44・45図，表8・9）

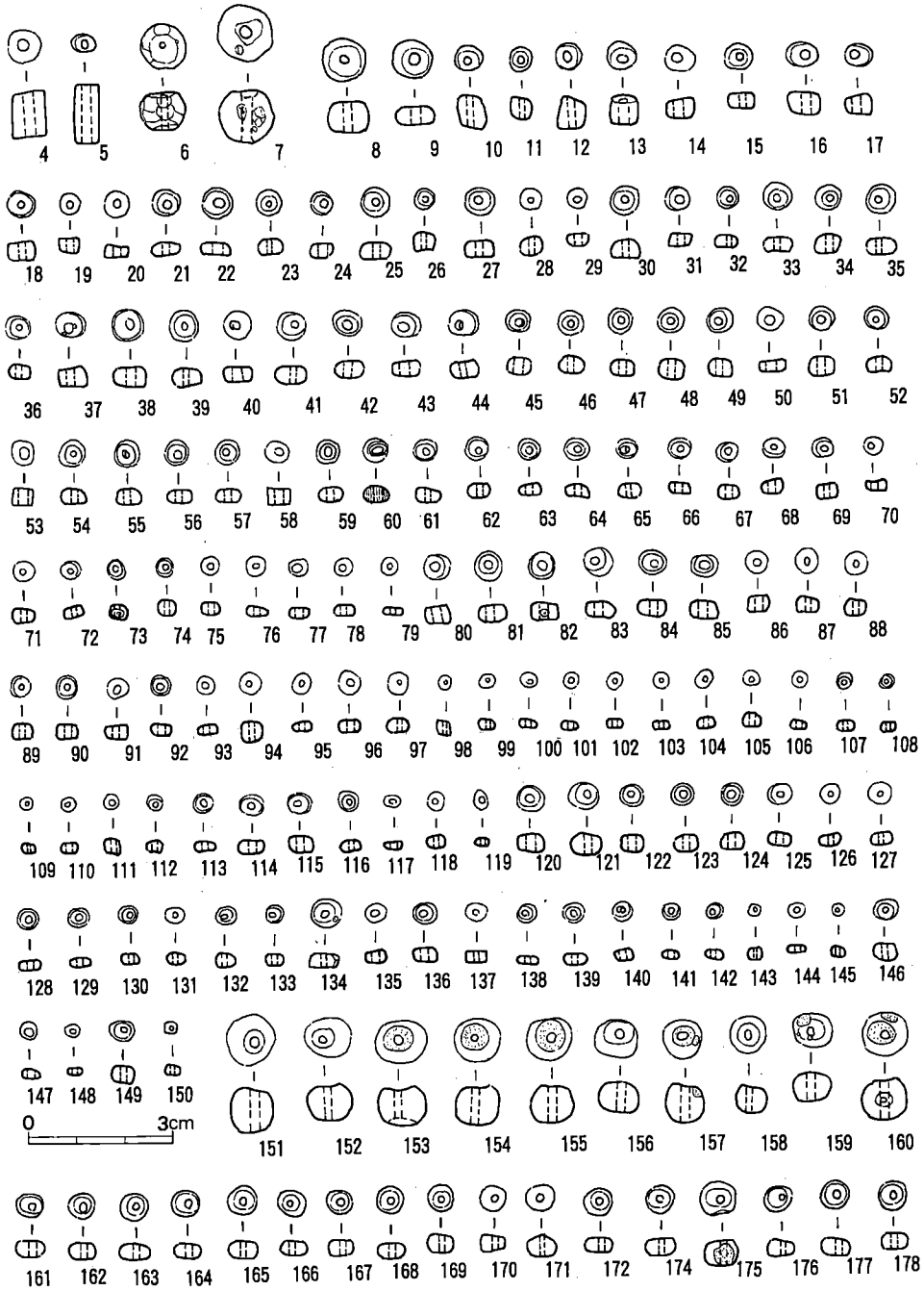
耳環3点，滑石製管玉1点，ガラス製管玉1点，瑪瑙製丸玉2点，ガラス製丸玉2点・管状玉4点・小玉156点，土製丸玉10点・小玉18点，玉類は他に多数の破片が出土した。玉類を糸に通すとおよそ56cmになる。また玉類は玄室奥中央と右中央から集中して出土した。

耳　環（1～3）　1は断面径3㎜の銅線で，径2.1cm，重量1.7ｇ。表面に金銅あるいは銀張りを施していたのであろう。玄室手前右（X＝180 Y＝183）より出土。2は錆化が進み一部は芯のみが残る。断面径1.5㎜の銅線で，長径2cm，短径1.4cmを測る。玄室奥中央（X＝70 Y＝165）より出土。3は銅地銀張りの銀環。表面の銀は下地の錆化が進み剝離してほとんど残っていない。長径3.15cm，短径3cm，断面6.6㎜×7.3㎜，重量18ｇ。



第44図　2号墳石室出土装身具実測図4(1/2)

管　玉（4・5）　4はガラス製で，磨ガラス状のコバルトブルーを呈す。側面には孔に平行に数条の白線（気泡線）が入る。径6.9㎜×7.2㎜，長さ9㎜，孔径2.2㎜，重量0.75ｇを計る。5は白や灰味白を呈する滑石製で，径4.1㎜×5.2㎜の楕円形で，長さ1.17cm，重量0.45ｇ，



第 45 図　2号墳石室出土装身具実測図5 (2/3)

表8　山田2号墳　玄室第2床面出土玉類計測表 1　　（単位：㎜）

No.	種　類	径	厚　さ	孔　径	色　調	形態
6	メノウ丸玉	9.4 × 9.2	6.1～7.2	1.5 ・ 1.6	黄味橙	B
7	〃	11.4 ×11.2	10.5	2.2×2.1・1.8×1.2	黄味橙＋にぶ赤	A
8	ガラス丸玉	8.9 × 8.85	5.8～6.0	1.4	コバルトブルー	B
9	〃	8.1 × 7.5	3.3～4.0	1.8		C
10	ガラス管状玉	4.8 × 5.4	6.7	1.4×1.3	にぶ青緑	A
11	〃	4.6 × 4.7	4.2～4.5	1.5 ・ 1.35	スカイブルー	〃
12	〃	5.7 × 5.3	5.4～6.3	1.5×1.4・1.9×1.5	コバルトブルー	B
13	〃	5.4 × 5.0	4.7～5.6	1.9×1.6・1.9×1.5	〃	〃
14	ガラス小玉	5.9 × 5.4	2.8～3.8	1.7×1.5・1.8×1.5	〃	〃
15	〃	6.1 × 5.75	2.6～3.4	1.1 ・ 1.2	〃	〃
16	〃	6.2 × 5.3	4.0～4.2	2.0×1.8	〃	〃
17	〃	5.25× 4.8	3.4～4.0	1.8×1.6・1.9×1.5	〃	〃
18	〃	5.6 × 5.2	3.7～4.0	1.2	〃	〃
19	〃	4.5 × 4.3	3.3～3.4	1.1 ・ 1.0	〃	〃
20	〃	5.3 × 5.4	2.3～2.7	1.3	〃	〃
21	〃	5.75× 5.6	2.3～2.8	1.4 ・ 1.5	〃	C
22	〃	6.3 × 5.8	2.6～2.7	1.5×1.3・1.8×1.4	〃	B
23	〃	5.4 × 5.2	3.1～3.3	1.0	〃	C
24	〃	5.0 × 4.8	3.0～3.4	1.1 ・ 1.15	〃	A
25	〃	6.4 × 6.3	3.3～3.5	1.0	緑味青	C
26	〃	4.6	3.5～3.7	1.4	灰味青緑	〃
27	〃	6.1 × 6.0	3.1～3.3	1.4	にぶ青緑	B
28	〃	4.8	3.3	0.75 ・ 0.9	青味緑	C
29	〃	4.5 × 4.4	2.4～2.5	1.3 ・ 1.4	にぶ青緑	A
30	〃	6.2 × 6.0	3.2～3.8	1.3 ・ 1.4	明青緑	B
31	〃	4.8	2.6～2.9	1.5×1.4・1.6×1.4	〃	〃
32	〃	4.8 × 4.6	2.6～2.7	1.0 ・ 0.8	〃	C
33	〃	5.75× 5.7	2.8～3.4	1.0	黄緑	〃
34	〃	5.2 × 4.8	3.8～4.0	1.2 ・ 1.3	暗黄緑	〃
35	〃	6.1 × 6.0	2.8～3.3	1.2	暗茶	〃
36	〃	5.1 × 4.9	2.7～2.8	1.0 ・ 0.9	黄	〃
37	〃	5.1 × 5.8	3.2～4.2	1.9×1.4・2.1×1.5	濃コバルトブルー	B
38	〃	6.6 × 6.1	3.2～3.6	1.9×1.6・1.8×1.5	コバルトブルー	〃
39	〃	6.1	3.7～4.1	1.0 ・ 1.1	〃	C
40	〃	5.7 × 5.5	2.8～2.9	1.9×1.8・1.8×2.0	〃	B
41	〃	6.0 × 5.5	3.4～3.9	1.5×1.3・ 1.45	青紫	〃
42	〃	5.0 × 5.8	3.0～3.5	1.8×1.7・1.8×1.6	コバルトブルー	〃
43	〃	5.65× 5.35	2.8～3.1	1.6×1.4・1.7×1.3	濃青	B
44	〃	5.45× 5.1	3.0～3.7	1.4×1.2・1.5×1.4	青紫	C
45	〃	5.0 × 4.0	2.9～3.2	1.2×1.0・1.3×0.8	コバルトブルー	B
46	〃	5.2 × 5.1	3.0～3.1	1.1×0.9・1.1×1.0	青紫	C
47	〃	5.0 × 5.2	3.0～3.1	1.4×1.3・ 1.3	コバルトブルー	B
48	〃	5.3 × 5.0	4.1～4.5	1.3×1.0	青紫	〃
49	〃	5.35× 5.0	3.5～3.7	1.6×1.4・1.6×1.5	コバルトブルー	〃
50	〃	5.3 × 4.7	2.0～2.4	2.0×1.8・2.1×1.9	濃コバルトブルー	〃
51	〃	5.0 × 4.8	3.1～3.4	1.2 ・ 1.3	コバルトブルー	〃
52	〃	2.25× 5.15	2.8～3.2	0.75 ・ 0.8	青紫	C
53	〃	4.75× 4.4	3.3～3.6	1.9	〃	B

54	ガラス小玉	5.3 × 5.2	3.1～3.4	1.0 ・ 1.1	青　紫	A
55	〃	5.4 × 5.35	2.7～3.0	1.2 ・ 1.3	〃	〃
56	〃	5.1 × 5.0	2.4～2.5	1.5×1.3・ 1.4	コバルトブルー	B
57	〃	4.9 × 4.8	2.5～2.8	1.0	青　紫	C
58	〃	4.8 × 4.25	2.7～3.1	1.6×0.9・1.5×0.9	〃	B
59	〃	5.1 × 4.7	3.0～3.1	1.3 ・ 1.2	〃	〃
60	〃	5.15× 4.6	3.2～2.6	1.7×1.1	コバルトブルー	〃
61	〃	5.1 × 4.5	1.4～1.2	1.2 ・ 1.3	青　紫	〃
62	〃	4.6 × 4.4	2.5～2.8	0.9 ・ 0.8	〃	C
63	〃	4.45× 4.2	2.0～2.4	1.1×1.0・1.2×1.0	コバルトブルー	B
64	〃	5.0 × 4.7	2.4～2.7	0.9	青　紫	C
65	〃	4.6 × 4.3	2.1～2.8	1.1 ・ 1.2	〃	A
66	〃	4.4 × 4.25	2.3～2.7	0.65 ・1.0×0.9	コバルトブルー	B
67	〃	4.3 × 4.2	2.4～2.6	1.2×1.1	〃	〃
68	〃	4.3 × 4.2	2.7～2.9	1.0×0.8・1.0×0.9	〃	〃
69	〃	4.25× 4.0	3.0～3.2	0.9 ・ 1.0	〃	〃
70	〃	4.5 × 4.2	1.5～2.4	1.1 ・1.2×1.0	青　紫	〃
71	〃	4.3 × 4.1	2.5～2.7	1.0×0.9・1.1×1.0	コバルトブルー	〃
72	〃	4.1 × 3.9	2.1～2.4	0.9×0.8・0.9×0.7	〃	〃
73	〃	4.0 × 3.65	2.5～2.7	1.3×1.0・1.2×0.9	〃	〃
74	〃	3.9 × 3.8	3.1～3.2	0.9	緑　青	〃
75	〃	4.0 × 3.8	2.5～2.7	0.9 ・ 1.2	〃	〃
76	〃	4.2 × 3.8	1.6～2.0	1.3×1.2・1.4×1.2	〃	〃
77	〃	3.9 × 3.8	1.8～2.0	1.6×1.3・1.6×1.2	緑味青	〃
78	〃	4.1 × 3.7	2.1～2.3	0.9	〃	〃
79	〃	3.5 × 3.4	1.3～1.6	1.1	〃	〃
80	〃	5.0 × 4.9	3.6～3.8	1.7×1.6・1.5×1.4	コバルトブルー	〃
81	〃	5.9 × 5.8	3.2～3.6	1.4 ・ 1.3	薄スカイブルー	〃
82	〃	5.4 × 5.3	3.2～3.4	2.1×1.4・1.7×1.6	〃	〃
83	〃	5.65× 5.4	2.3～3.3	1.2×0.9・1.3×1.1	青　紫	C
84	〃	5.7 × 5.4	3.0～3.1	1.4 ・ 1.35	スカイブルー	〃
85	〃	5.6 × 4.9	3.4～3.6	1.5×1.2・1.5×1.1	〃	B
86	〃	4.6 × 4.4	2.9～3.2	1.5	薄青緑	〃
87	〃	5.0 × 4.6	2.6～2.9	1.1 ・ 1.0	薄　緑	〃
88	〃	4.8 × 4.4	2.9～3.1	1.0 ・ 0.9	〃	〃
89	〃	4.35× 4.1	2.7～3.2	1.0 ・ 1.1	〃	〃
90	〃	4.4 × 4.1	2.7～3.2	1.1 ・ 1.0	〃	〃
91	〃	4.3 × 4.1	2.2～2.7	1.8×1.4	〃	〃
92	〃	4.1	2.3～2.5	1.2	薄青緑	〃
93	〃	3.7 × 3.6	1.5～1.7	1.1 ・ 1.2	緑	A
94	〃	4.3 × 4.2	3.5～3.8	1.1	薄緑青	B
95	〃	4.0 × 3.6	1.7～2.1	1.3×0.9・1.1×0.9	黄	A
96	〃	4.9 × 4.4	2.3～2.7	1.4×1.3	〃	B
97	〃	4.4	2.5～2.9	0.8	〃	〃
98	〃	2.8 × 2.7	3.0～3.1	0.6	緑	C
99	〃	3.3 × 3.1	1.8～2.0	1.0	薄　緑	〃
100	〃	3.5 × 3.2	1.3～1.7	1.1×0.9・1.2×1.1	緑	A
101	〃	3.2	1.5～1.6	1.0	〃	〃
102	〃	3.5 × 3.4	2.3～2.5	0.9 ・ 0.8	黄	〃
103	〃	3.5 × 3.4	1.8～2.0	0.9	〃	〃
104	〃	3.8 × 3.4	2.1～2.0	1.1 ・ 1.0	〃	〃

105	ガラス小玉	3.55× 3.4	2.7～2.8	1.0×0.8・ 0.9	コバルトブルー	B
106	〃	3.2 × 3.1	1.5～1.8	1.0 ・ 0.9	青紫	C
107	〃	3.35× 3.1	2.5～2.4	0.8	コバルトブルー	A
108	〃	3.2 × 2.9	2.0～2.2	1.1×0.8・0.9×0.8	青紫	〃
109	〃	2.9 × 2.8	2.0～2.1	0.7	〃	B
110	〃	3.2 × 3.0	1.7～2.2	0.8	青味黒	A
111	〃	3.5 × 3.4	2.8～2.9	1.0	緑青	〃
112	〃	3.4 × 3.3	2.3～2.4	1.0 ・ 0.9	スカイブルー	〃
113	〃	4.0 × 3.7	2.0～2.2	1.2×1.1	〃	〃
114	〃	5.1 × 4.4	2.2～2.8	1.2×1.1・1.3×1.1	〃	B
115	〃	4.7 × 4.3	3.1～3.4	1.4×1.3	薄緑	〃
116	〃	4.4 × 4.2	2.2～2.6	1.2×0.9	スカイブルー	A
117	〃	3.6 × 3.1	1.4～1.5	0.9×0.8	にぶ青緑	〃
118	〃	3.7 × 3.4	2.2～2.5	1.2×1.1・1.2×1.0	黄	〃
119	〃	3.6 × 3.3	1.8～1.9	1.0×0.9・ 1.0	薄緑	〃
120	〃	5.4 × 5.3	3.1～3.9	1.4×1.0・1.6×1.2	コバルトブルー	B
121	〃	6.4 × 5.9	3.7～4.0	1.3 ・ 1.2	〃	〃
122	〃	4.6 × 4.4	3.0～3.2	1.1	〃	〃
123	〃	4.9 × 4.5	3.2～3.3	1.2×1.1・ 1.2	〃	〃
124	〃	5.0 × 4.9	3.6～3.7	1.4×1.3・1.5×1.3	〃	〃
125	〃	4.7 × 4.4	2.2～2.6	1.3×1.2・1.4×1.3	〃	〃
126	〃	4.3 × 4.2	2.0～2.4	1.2×1.1・ 1.1	〃	〃
127	〃	4.6	2.9	1.0	〃	A
128	〃	4.6 × 4.5	2.0～2.4	1.35	〃	B
129	〃	4.4 × 4.1	2.1～2.2	1.0 ・ 0.9	〃	〃
130	〃	3.9 × 3.5	2.6～2.7	0.8	〃	〃
131	〃	3.8 × 3.5	2.3～2.4	0.8	〃	〃
132	〃	3.9 × 3.7	2.7～2.9	1.1×0.8・1.0×0.5	明青緑	〃
133	〃	3.8 × 3.5	2.3～2.4	1.4×1.0・1.1×1.5	〃	A
134	〃	6.3 × 5.9	3.2～2.8	0.9×0.8・1.1×0.9	緑味青	C
135	〃	4.1 × 3.6	2.4～2.6	1.1×1.0・1.1×0.9	緑	A
136	〃	4.8 × 4.55	2.7～3.1	1.4	薄緑青	B
137	〃	4.0	2.2～2.4	0.9	〃	〃
138	〃	4.1 × 3.9	1.8～2.0	0.9×0.8	〃	A
139	〃	4.3 × 4.0	2.1～2.2	1.2×0.9×1.1×1.0	青緑	〃
140	〃	3.9 × 3.6	2.4～2.6	1.4	薄緑青	〃
141	〃	3.9 × 3.6	1.8～1.9	1.1×1.2	青緑	〃
142	〃	3.4 × 3.3	2.1～2.3	1.1	薄緑青	〃
143	〃	3.3 × 3.0	2.5～2.6	0.7	青緑	〃
144	〃	3.6 × 3.35	1.6～1.9	1.1×1.0・1.2×1.0	青味緑	〃
145	〃	2.8	2.0～2.2	0.7×0.6	〃	〃
146	〃	4.7 × 4.2	3.2～3.5	1.1	暗黄緑	〃
147	〃	4.1	1.8～2.1	1.5	黄緑	〃
148	〃	3.2 × 2.9	1.4～1.7	0.9	〃	〃
149	〃	5.1 × 4.6	3.2～3.4	1.3×1.2	ダークブルー	B
150	〃	3.0 × 2.9	2.0～2.2	0.9 ・ 0.8	〃	〃

孔径は2㎜×2.4㎜と1.8㎜で穿孔は両方から行っている。

丸　玉（6～9・148～156）　6・7は瑪瑙製で表面は凹凸が目立つ。 8・9はコバルトブルーを呈するガラス製。8は側面や内面に孔と平行に7条の白線（気泡）が入る。148～156は土製である。160は側面に貫通してないが孔がある。形態分類では全てB形になる。

表9　山田2号墳　玄室第2床面出土土玉計測表 2　　（単位：mm）

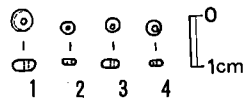
No.	種　類	径	厚　さ	孔　径	形　態
151	丸　玉	9.5 ×9.2	7.1～8.6	1.5 ・1.6×1.3	B
152	〃	9.1 ×8.9	6.4～7.5	1.4×1.3・ 1.4	〃
153	〃	10.2 ×8.9	6.0～7.3	1.4 ・1.4×1.2	〃
154	〃	9.4 ×8.8	7.0～7.5	1.3×1.1・1.4×1.1	〃
155	〃	9.2 ×8.8	6.6～7.4	1.4×1.1・1.5×1.4	〃
156	〃	8.6 ×7.5	6.0～6.5	1.1 ・ 1.3	〃
157	〃	9.6 ×7.5	7.15	1.6×1.5・1.3×1.1	〃
158	〃	7.4 ×7.2	4.9～5.6	1.6×1.3・1.9×1.3	〃
159	〃	7.9 ×6.7	5.0～5.6	1.4×1.3	〃
160	〃	9.2 ×8.1	6.3～7.7	1.2 ・1.4×1.7	〃
161	小　玉	5.6 ×5.2	3.4～3.5	0.8 ・ 0.9	〃
162	〃	5.7 ×5.6	3.6～3.7	1.0	〃
163	〃	5.9 ×5.5	2.8～3.6	0.9	〃
164	〃	5.6 ×5.7	3.1～3.3	1.1×0.8・1.1×1.0	〃
165	〃	6.1 ×5.7	3.45	1.0×0.9・1.0×0.8	〃
166	〃	5.5 ×5.4	3.4	1.0×0.9	〃
167	〃	5.2 ×4.85	3.0～3.2	1.0×0.9・ 0.9	〃
168	〃	5.5 ×5.35	2.5～2.7	1.2×1.1・1.0×0.9	〃
169	〃	5.15×5.1	3.6～3.7	1.1×0.9・1.0×0.8	B
170	〃	5.3 ×4.9	2.7～3.3	1.1 ・ 1.2	〃
171	〃	5.9 ×5.5	4.1	1.1 ・ 1.0	A
172	〃	5.75×5.65	2.9～3.2	1.1×1.0	B
173	〃	5.2 ×—	2.3	1.3	〃
174	〃	5.7 ×5.4	3.3～3.5	1.0	C
175	〃	7.4 ×6.3	4.6～5.5	1.7×1.5・1.8×1.5	A
176	〃	5.3 ×5.0	2.5～3.3	1.0 ・1.2×1.0	B
177	〃	5.8 ×5.5	3.0～3.3	1.0 ・1.2×1.0	〃
178	〃	5.4 ×5.2	3.4	1.3×1.2・ 1.3	〃

管状玉（10～13）　小玉のなかで径に対して厚みがあるものを取り上げた。いずれもガラス製で，10は透明にぶ青緑，11は透明緑味青，11・12はコバルトブルーを呈する。

小　玉（14～147・158～175）　14～147はガラス製でおよそ径3～6㎜，厚さ2～4㎜程度まである。色調も多彩でコバルトブルーが主で緑味青，黄色が目立つ。特異なものでは，側面に孔があるもの（73・82），孔口部に年輪状の線が入り，側面に孔と平行な皺状の線が入るもの（60）がある。全般に気泡が入ったものや，孔と平行な気泡線が入るものが多い。158～175は土製で，径5.5㎜，厚さ3.5㎜前後である。

前室第2床面出土装身具（図版　，第46図）

小　玉（1～4）　いずれもガラス製で，1・4は透明な緑色，2・3はコバルトブルーを呈す。1は径4.7㎜×4.5㎜，厚さ2.2㎜，孔径1.1㎜。2は径2.7㎜×2.9㎜，厚さ1.3～1.5㎜。3は径3.2㎜×3.4㎜，厚さ1.5～1.9㎜，孔径0.9㎜，孔径0.9㎜。4は径3.2㎜，厚



第46図　2号墳石室出土装身具実測図6（2/3）

さ1.5mm，孔径1.1mm。3・4は孔と平行に気泡線が入る。形態分類では1・3はB形2・4はA形になる。1・2は敷石上，3・4は敷石の下から出土した。（日高）

墓道出土土器

墓道からは須恵器杯蓋2，高杯3，甕3，平瓶1，提瓶2，土師器小形壺1などが出土した。

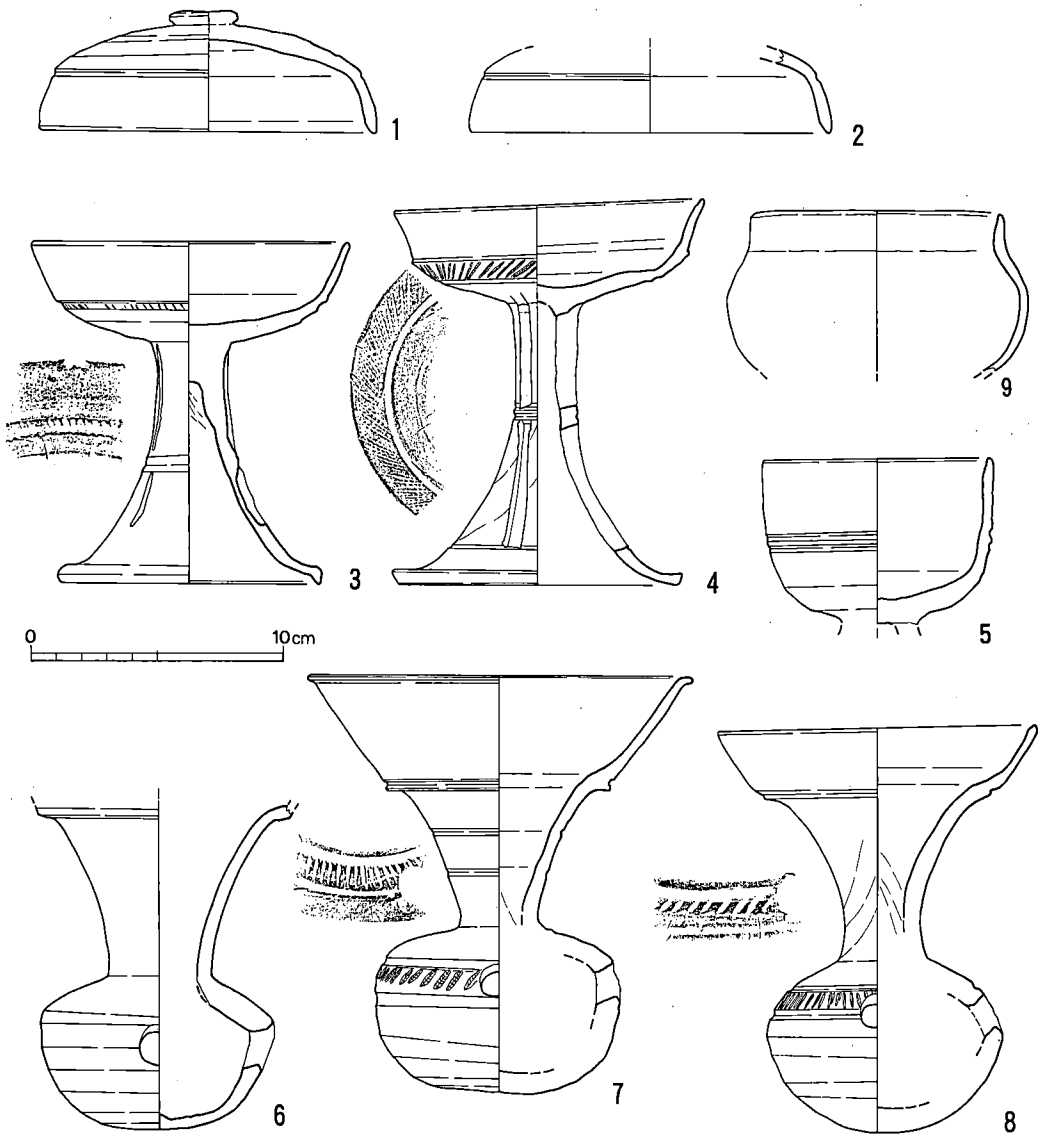
須恵器杯蓋（1・2） 身受けのかえりをもたないもので，1では天井に扁平なつまみが付く。1は，復原口径13.4cm，器高4.8cm，つまみの径2.7cm，高さ0.5cmの大きさ。肩に1条の沈線が巡り，外天井は回転ヘラケズリされている。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で青灰色を呈している。2は，復原口径14.4cm，残存器高3.3cmで，肩に1条の沈線が巡る。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で暗灰色ないし黒灰色を呈している。

須恵器高杯（3～5） 長い柱状部をもつ高杯である。3・4は，普通の深さの杯が付くもの。回転ヨコナデ調整されて2条の沈線が巡る，柱状部には，3箇所・2段のヘラで切り込んだ透かしが入る。3は，器高13.4cm，復原口径12.6cm，裾径10.5cmの大きさ。杯部の高さは3.9cmで，口縁部は直線的に立ち上がる。杯部中ほどに1条の沈線が巡り，板小口端の軽い刺突が連続する。裾部端は，やや踏ん張る形をなす。透かしは貫通しない。良好な焼成で，淡黒灰色を呈する。4は，器高14.9cm，復原口径12.4cm，復原裾径11.6cmの大きさ。杯部の高さは3.8cmで，わずかに屈曲して立ち上がる口縁はやや外反する形をとる。杯部中ほどに2条の沈線を巡らせ，沈線間に板小口を連続刺突した文様がある。裾部端は大きく外反する。良好な焼成で，淡青灰色を呈する。5は，柱状部以下を欠くが，杯部が深く，むしろ椀状を呈している。残存器高6.5cm，口径9.2cmの大きさ。中ほどに2条の沈線が巡る。良好な焼成で，黒灰色を呈する。

須恵器甕（6～8） 6は口縁部を欠くが，残存器高12.8cm，体部高6.0cm，胴最大径9.3cmの大きさ。体部はやや上側に最大径のある扁球形を呈し，丸底の底部は回転ヘラケズリ調整されている。円孔は体部下半にやや上向きに穿たれる。7は，復原口径15.2cm，器高16.5cm，体部高6.6cm，胴最大径9.5cmの大きさ。体部は扁球形を呈して2条の沈線間に板小口の連続刺突文様と円孔の穿穴がある。細い頸部からラッパ状に開く口縁部は中途で稜をなして屈曲し，やや内彎気味ながら端的で外に反る。屈曲部と，頸部側に2条，沈線が巡る。底部はやや平らな丸底で，回転ヘラケズリされている。8は，復原口径12.7cm，器高16.1cm，体部高6.8cm，胴最大径9.4cmの大きさ。体部は扁球形を呈して2条の沈線間に板小口の連続刺突文様があり，下の沈線にかかるように円孔がやや上向きに穿たれる。頸部には絞り痕が残りラッパ状に開くが，口縁部は段状の沈線を介して内彎気味に開く。底部は丸く，回転ヘラケズリ調整されている。

土師器壺（9） 小形の短頸壺で，底部を欠く。残存器高6.2cmの大きさだが口径は不確実である。精良な胎土で，淡赤褐色に焼成されているが，器面が風化して調整手法は不明。

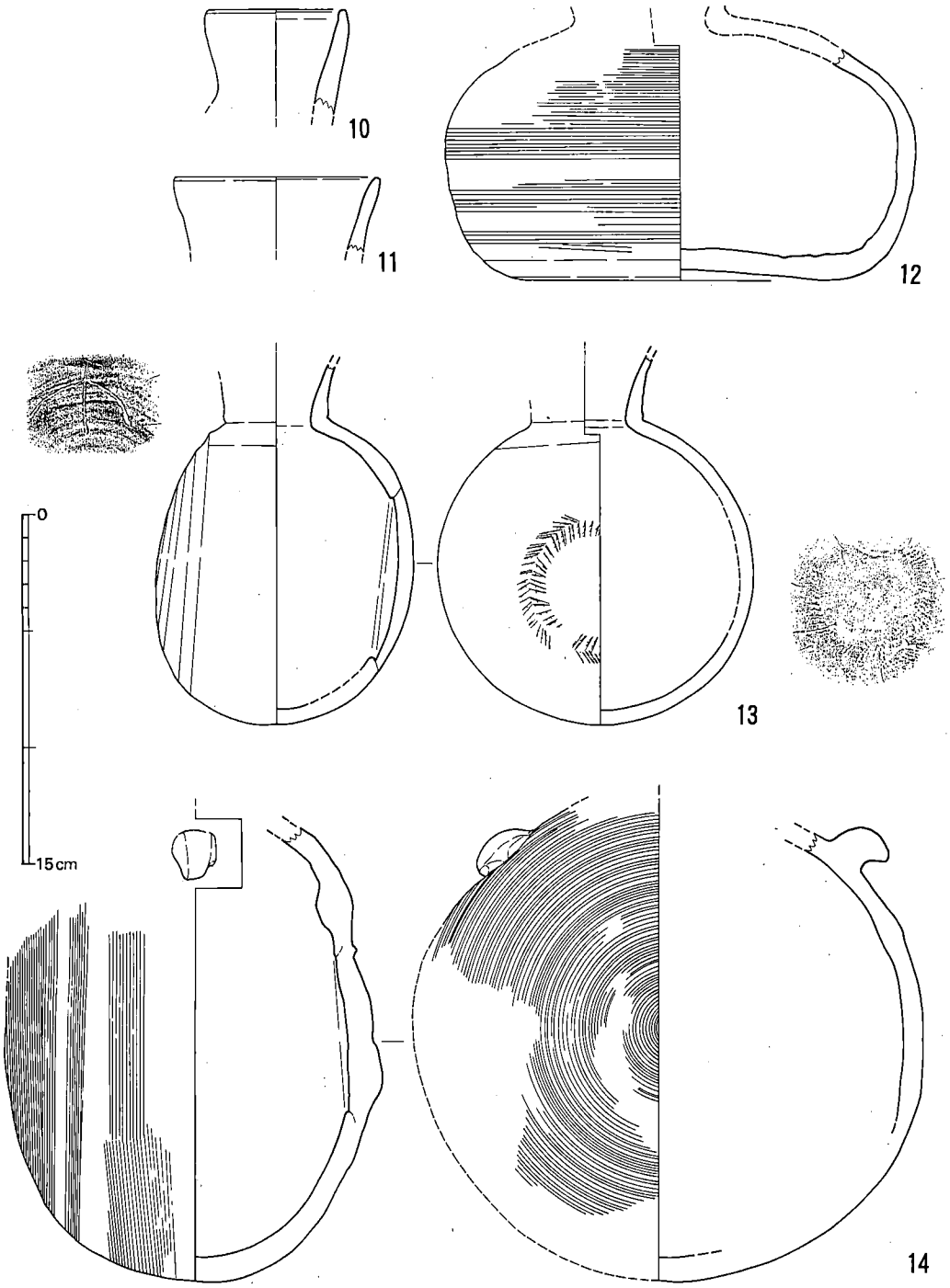
須恵器平瓶（12） 口頸部を欠くが，胴最大径20.2cm，残存器高10.0cmの大きさの扁平な体部



第 47 図　2号墳墓道出土土器実測図1 (1/3)

の平瓶である。平らでやや凹み気味の外底面から肩部までカキ目調整されている。砂粒を胎土に含み，堅緻な焼成で，淡青灰色を呈している。

須恵器提瓶（13・14）　13は，口縁部を欠くが，残存器高16.0cm，復原胴最大径13.6cm，厚み11.1cmの大きさ。口縁部は直立気味でわずかに開き加減である。胴部は回転ヨコナデ調整されるが，体部製作時の底部側の面は回転ヘラケズリされて，つるはしに似たヘラ記号が付されて



第 48 図　2 号墳墓道出土土器実測図 2 (1/3)

いる。もう一方の面は，蓋をした部分に，板小口の連続圧痕を交互に施文している。胎土に若干砂粒を含み，ややあまい焼成で黄灰色を呈している。

14は，口頸部を欠き，残存器高19.6cm，復原胴最大径22.0cm，厚み16.3cmの大きさ。肩部に一対の鈎手が付される。主にカキ目調整されるが，一部回転ヘラケズリされる。蓋をした側に焼成時の焼け膨れがみられる。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で黒灰色を呈している。

10・11は口縁部破片で，平瓶か提瓶かの区別をしえないが，内彎するものと，直線的に開くものである。

左前面出土土器（図版25～27，第49～54図）

石室前面の左側からは，須恵器壺・甕・杯蓋・杯身・高杯・小形壺・提瓶・𤭯，土師器高杯などが出土した。

須恵器壺（15～17） 15は，胴部以下を欠くが，くびれた頸部から口縁部が外反する。口頸部の高さ5.0cmで，復原口径11.7cm，頸部径6.6cmの大きさ。胎土に砂粒を多めに含み，良好な焼成でよう黒色を呈している。

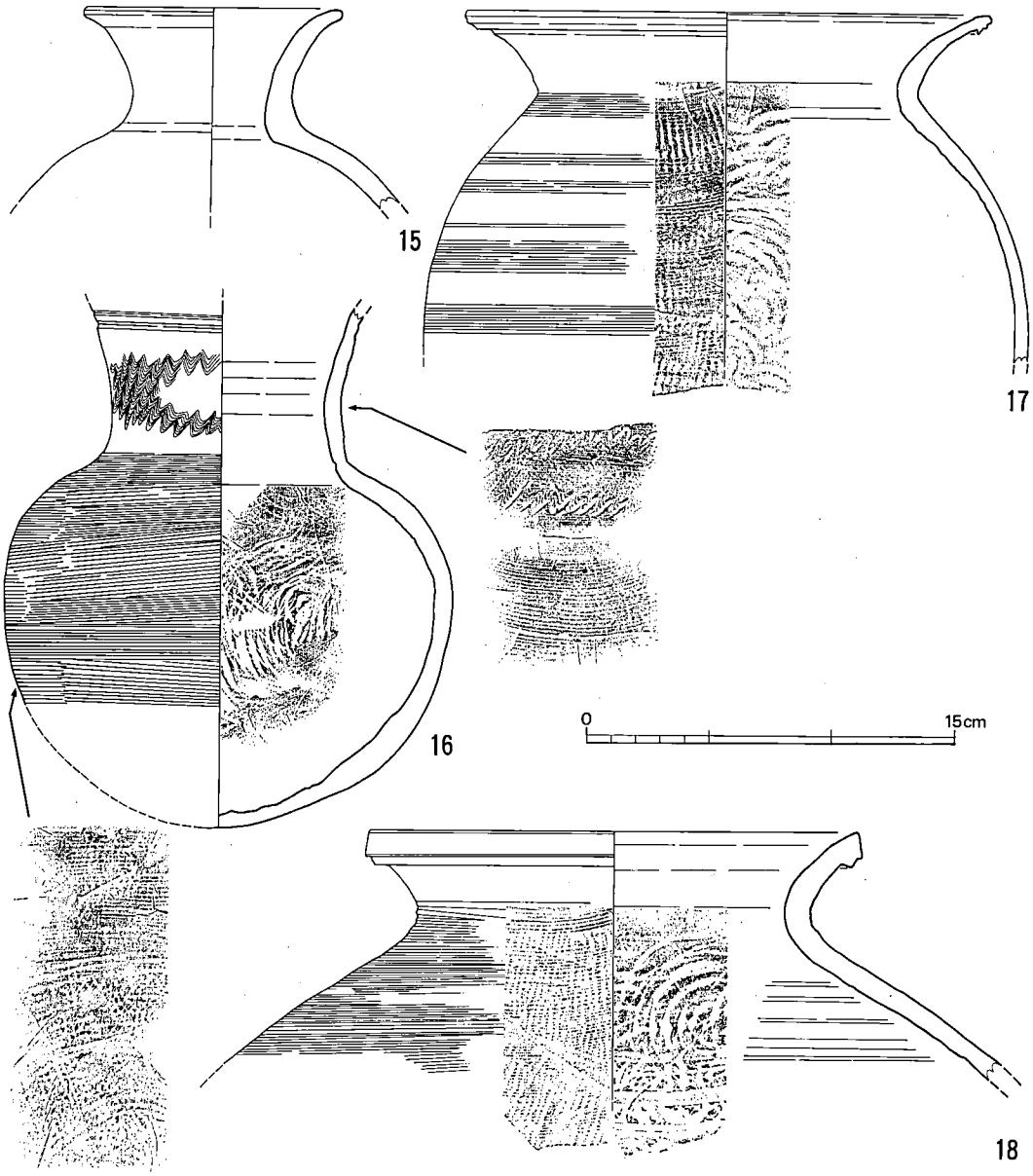
16は，やや上側に最大径のある球形の体部に長めの口頸部が付くもので，口縁部を欠いた残存器高20.8cmのうち体部が15.0を占める。頸部径9.4cm，胴部最大径18.4cmの大きさ。体部はカキ目調整されている丸底の底部には平行叩きの痕跡が残る。頸部には，２条の沈線が巡り，板小口による波状文が描かれる。体部内面には同心円当て具痕がみられる。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で淡灰色を呈している。

17は，胴部下半を欠くが，くびれた頸部から口縁部が強く外反する。口頸部の高さ3.4cmで，復原口径21.6cm，頸部径15.6cm，胴最大径24.8cmの大きさ。口縁端部は下方に折返すように肥厚する。体部外面は平行叩きの後カキ目調整され，内面に同心円当て具痕がみられる。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で暗灰色を呈している。

須恵器甕（18） 胴部以下を欠くが，くびれた頸部から口縁部が強めに外反する。口頸部の高さ3.5cmで，復原口径20.1cm，頸部径15.9cmの大きさで，胴部は大きく膨れる。口縁端部は下方に三角凸帯を付ける。体部外面は平行叩きの後カキ目調整され，内面に同心円当て具痕がみられる。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で赤紫灰色を呈している。

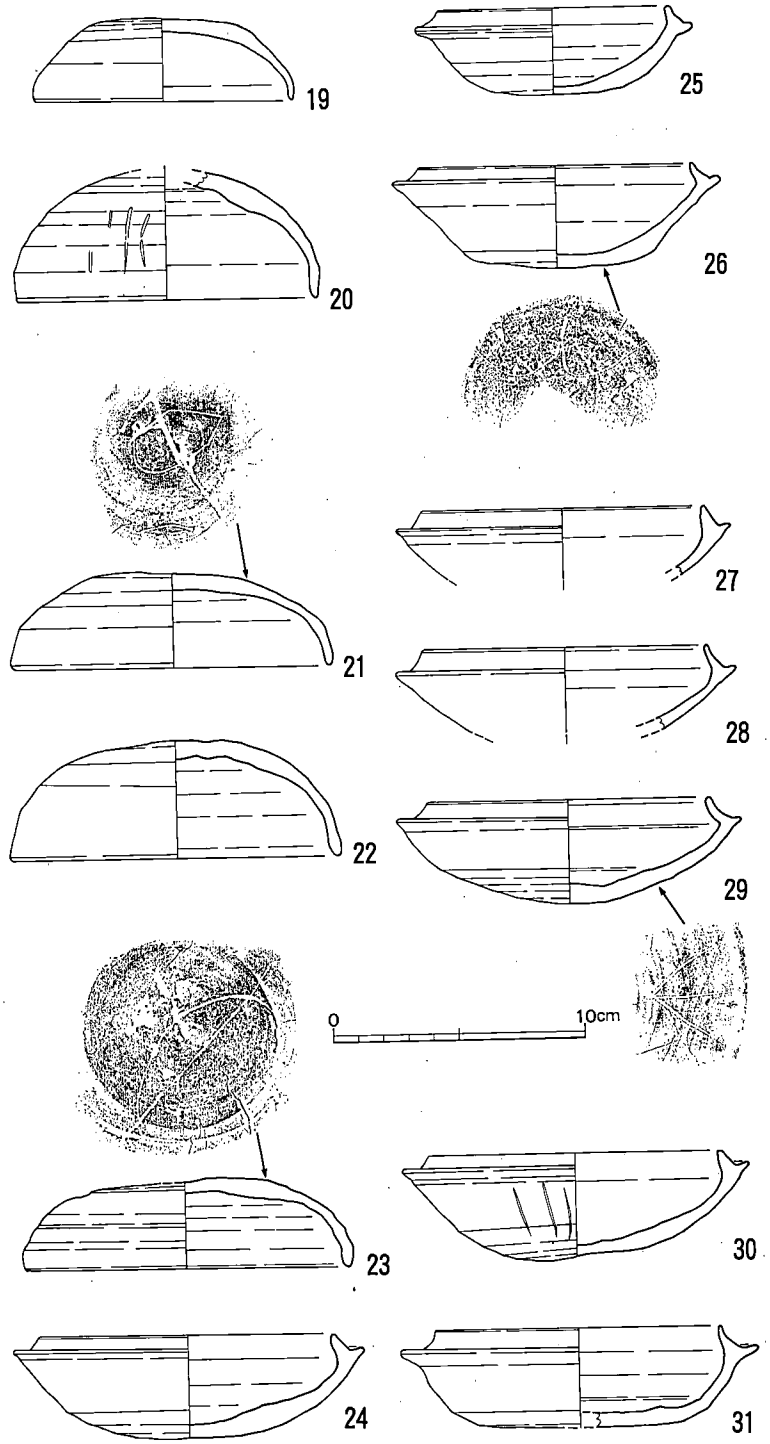
須恵器杯蓋（19～23） いずれも身受けのかえりを有さない杯蓋である。19・20は，口径10.3cm・11.8cm，器高3.3cm・5.0cmの大きさ。口縁部は内彎気味で，回転ヘラケズリされる天井部に丸みをもち，ヘラ記号ともつかないヘラ痕がある。２点とも硬く焼成されている。

21～23は，口径12.6cm～13.0cm，器高3.5cm～4.6cmの大きさ。口縁部は内彎気味で，回転ヘラケズリされる天井部は丸みをもつ。21は一方の尖った楕円形の，23は直線と孤線を組合わせたヘラ記号が外天井に付されている。21・22はやや焼成があまい。

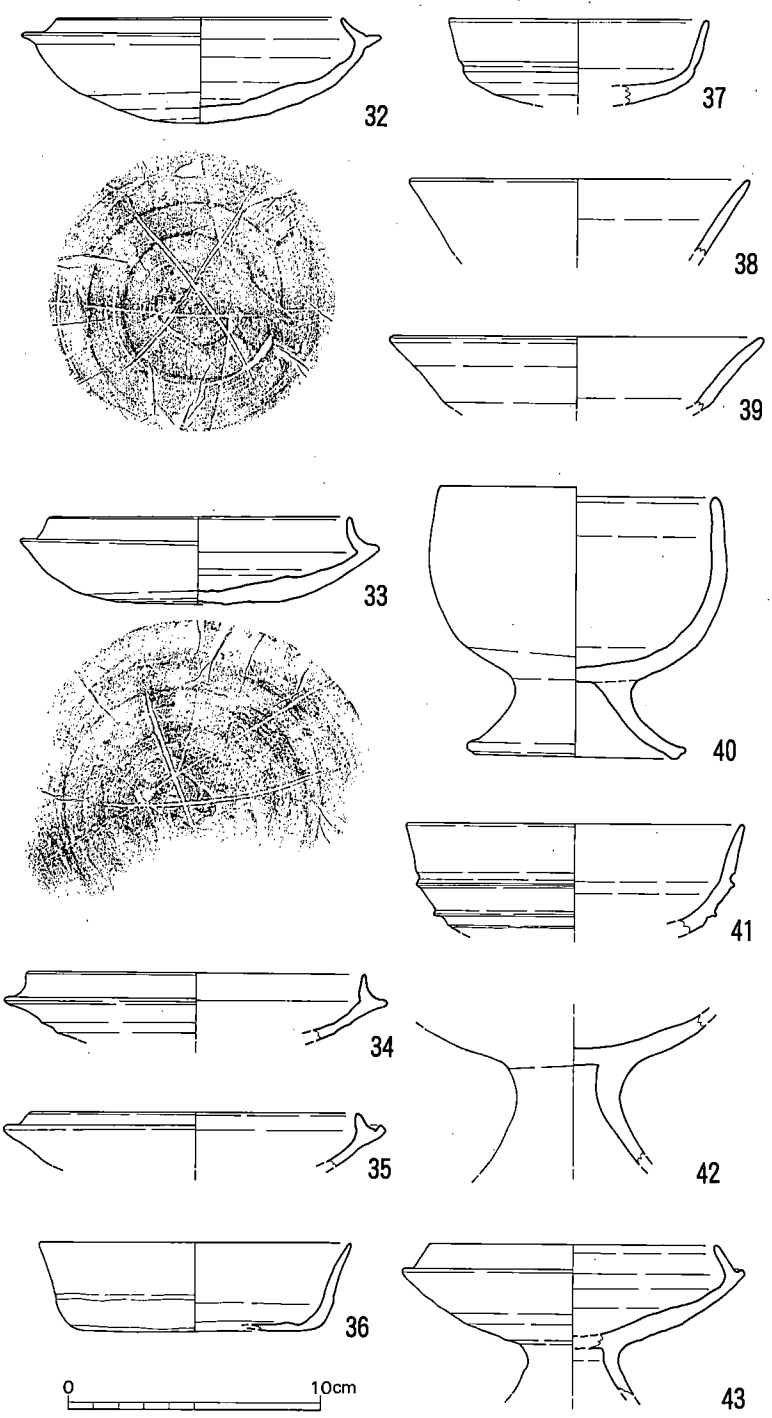


第 49 図　2号墳左前面出土土器実測図1（1/3）

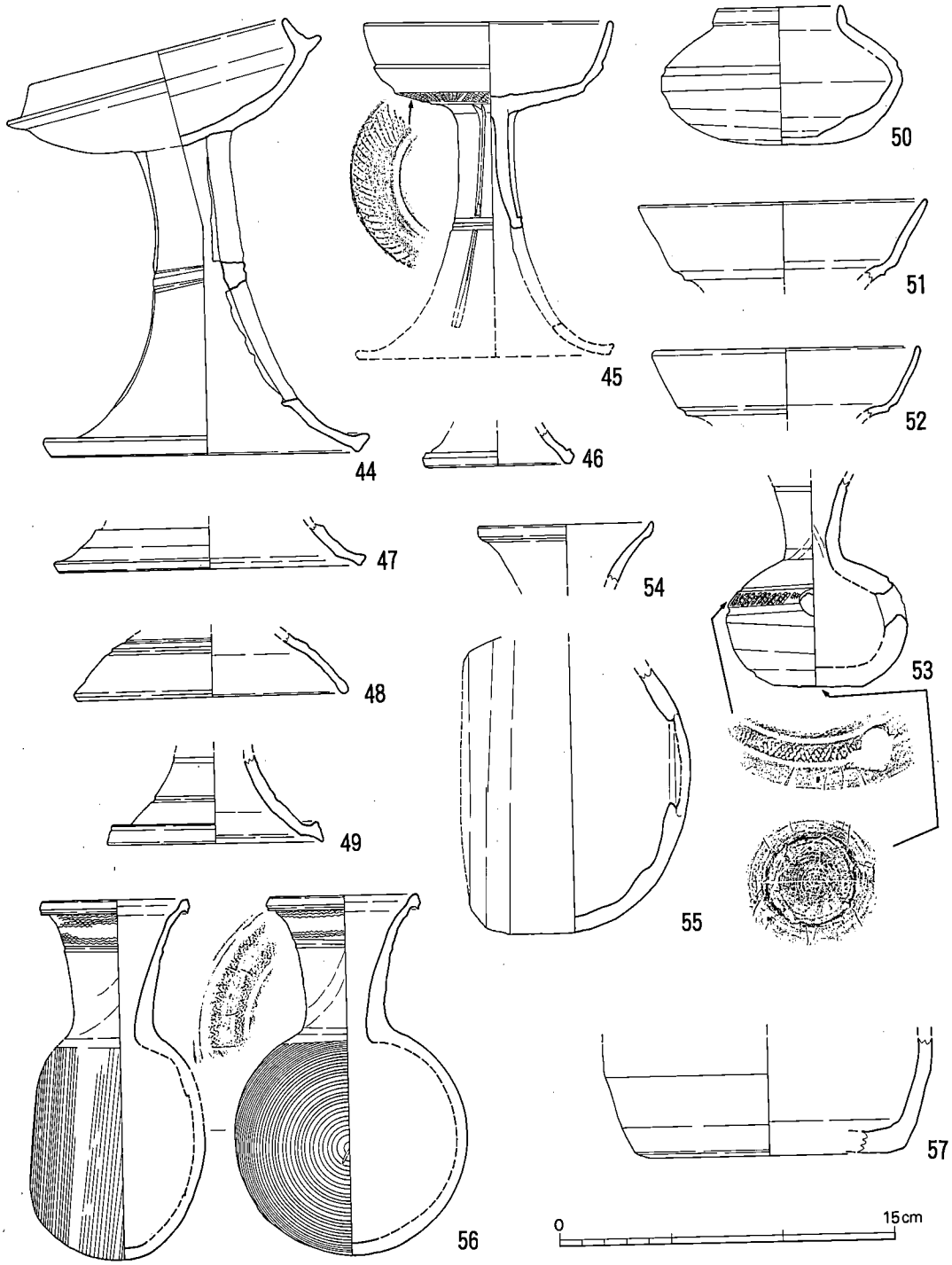
須恵器杯身（24～35）　いずれも蓋受けのかえりを有す杯身である。外底面は回転ヘラケズリされているが，25・30・31・33のように底部の平坦なものや，29・32のような丸いものもある。25は口径10.9cm，器高3.4cm，24・26～30は口径12.8～13.8cm，器高4.0～4.1cmの大きさで，26には孤線が2つ繋がるヘラ記号，29には鳥足状の，30には3本川のヘラ記号が付される。31～33



第 50 図　2 号墳左前面出土土器実測図 2 (1/3)



第 51 図　2 号墳左前面出土土器実測図 3 (1/3)



第 52 図　2 号墳左前面出土土器実測図 4 (1/3)

は口径14.0cm，器高3.5～4.2cmの大きさで，32・33には×字のヘラ記号が付されている。34・35は口径15.0cm前後の大きさである。

須恵器杯（36～39） 36は平坦な底部から直に口縁部が立ち上がる杯で，浅い沈線が1条巡り，口縁端部はわずかに外反する。口径12.4cm，器高3.5cm，底径10.0cmの大きさで，焼成があまく暗茶褐色を呈している。

37は，底部が厚めで高杯かも知れない。やや丸みのある底部から直に口縁部が立ち上がり，浅い沈線が1条巡る。復原口径10.4cm，器高3.4cmで，灰色に焼成されている。

38・39は，外反する口縁部破片で，沈線などはみられない。

須恵器高杯（40～49） 40は，杯部が深く，むしろ椀状を呈している。器高10.2cmのうち杯部が7.4cmを占め，復原口径11.2の大きさ。体部下半は丸みをもち，口縁部は直に立ち上がる。脚台部は外反して，端部は跳ねる。良好な焼成で淡緑灰色を呈している。

41はやや丸みのある杯部で口縁部は僅かに外反する。2ないし3条のつまみ出した凸帯が巡る。復原口径13.3cmの大きさ。堅緻な焼成で，茶灰色を呈している。

43・44は，杯部に蓋受けのかえりのある高杯で，43は脚台部を欠く。44は長めの柱状部をもち，杯部は傾くが，口径11.9cm，器高の現況19.5cm（復原値18.4cm），裾径14.6cmの大きさ。裾端部は跳ねる。柱状部中ほどに2条の沈線が巡り，沈線を挟んで上下にヘラ切りの透かしが2箇所に開けられている。砂粒を含み，暗緑灰色に硬く焼成されている。

45は，蓋受けのかえりのない高杯。裾部を欠き，残存器高12.5cm，杯部は4.0cmの高さで，口径11.2の大きさ。口縁部はやや内彎気味に立ち上がり，杯外底部を含めて，段状の沈線が3条巡り，外底部側に沈線間に板小口の連続刺突文がある。柱状部中ほどに2条の沈線が巡り，沈線を挟んで上下にヘラ切りの透かしが3箇所に開けられている。細砂粒を含み，赤紫灰色に硬く焼成されている。

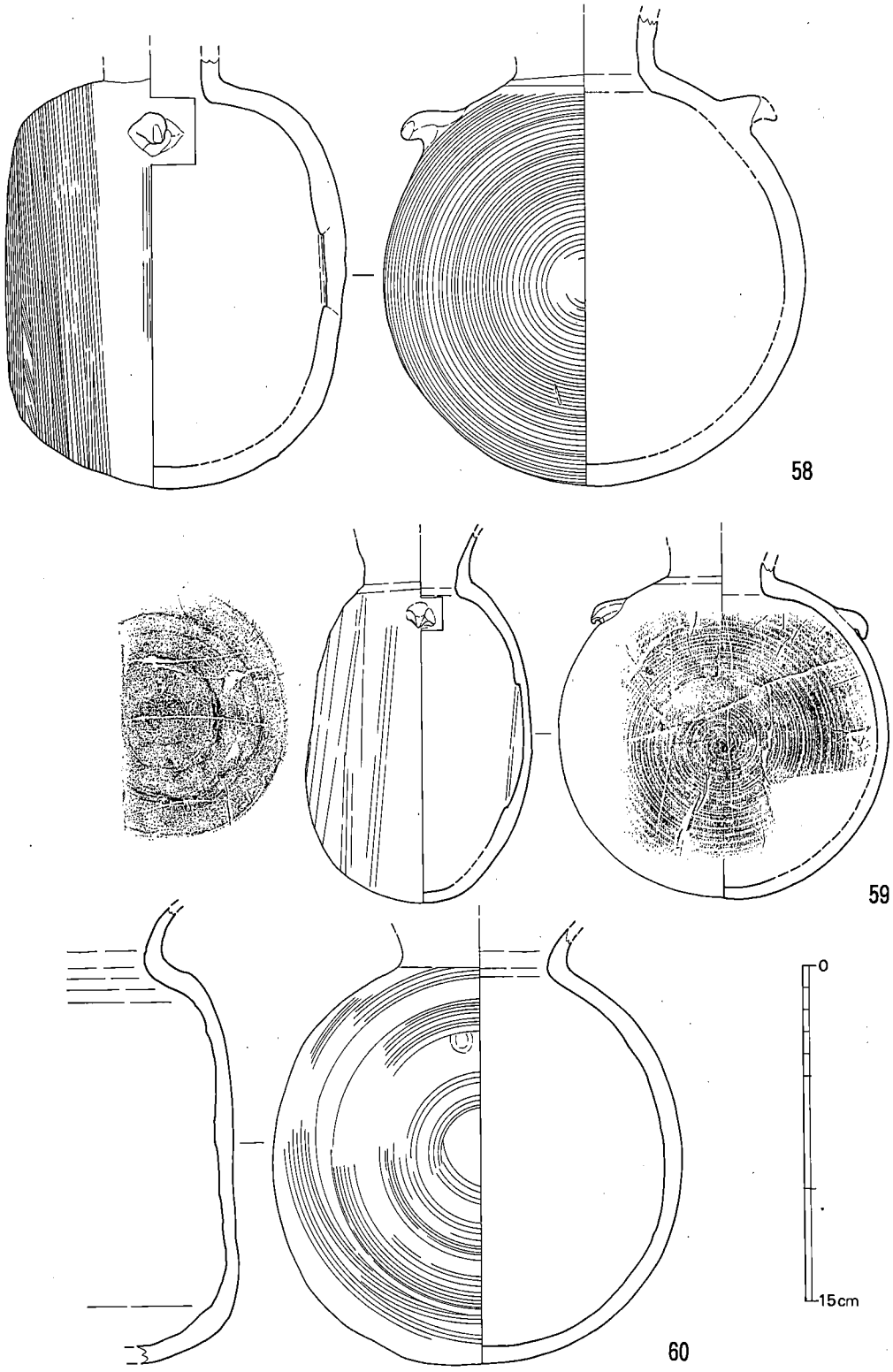
46～49は，脚裾部破片で，端部が，跳ねるものや踏張るものもある。

須恵器小形壺（50） 算盤玉状の体部に，短い口縁部が直立して付く短頸壺である。復原口径5.7cm，器高6.1cm，胴最大径10.8cmの大きさ。肩部に浅い沈線が1条巡り，底部は回転ヘラケズリされている。砂粒を胎土に含み，暗灰色に焼成されている。

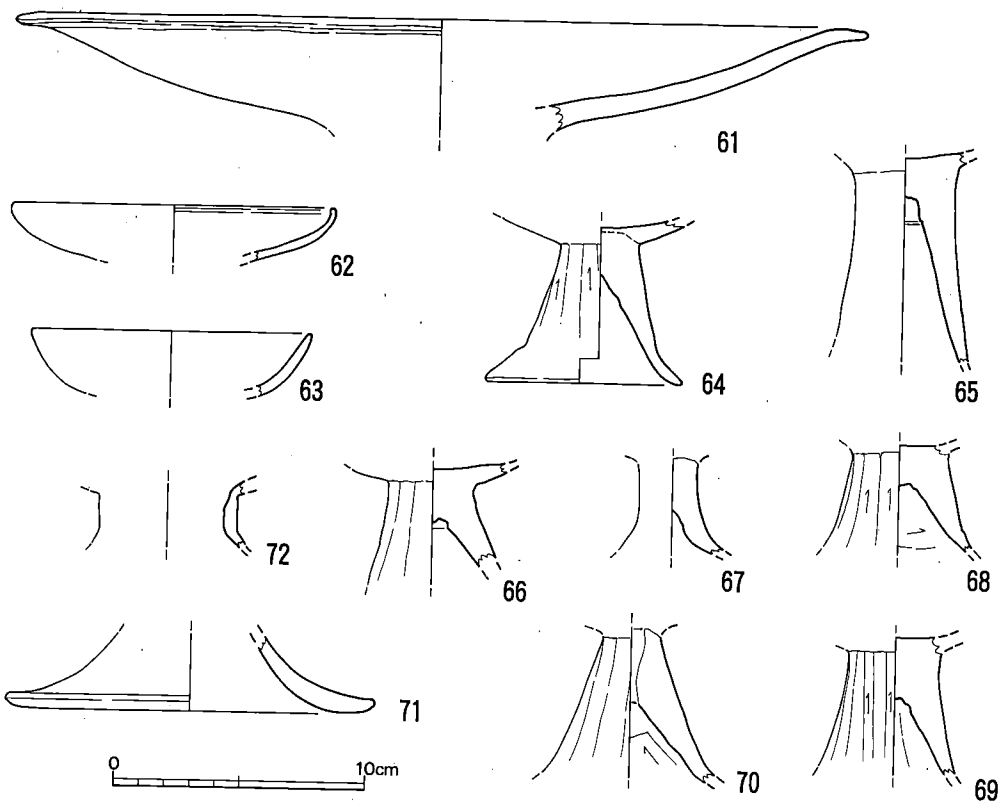
須恵器𤭯（51～53） 51・52は口縁部破片で，頸部との境に浅い沈線が巡る。口縁は51が外反し，52は内彎する。

53は，口縁部を欠くが残存器高9.1cmで，体部高5.7cm，胴最大径8.1cmの大きさ。体部は扁球形で，2条の沈線間に板小口の連続圧痕が付けられ，やや上向きになるよう外面から穿孔される。体部下半は回転ヘラケズリされ，平坦な底部にオ字状のヘラ記号が付けられる。頸部にも細い沈線が巡る。胎土に砂粒を含み，良好な焼成で灰色ないし黒灰色を呈している。

須恵器提瓶（54～56・58～60） 54は口縁部破片で，端部が内彎して肥厚する。うまく接合し



第 53 図　2 号墳左前面出土土器実測図 5 (1/3)



第 54 図　2号墳左前面出土土器実測図6 (1/3)

ないが同一固体の可能性のある55は，胴最大径13.5cm前後，厚みの10.0cm強の大きさ。蓋をした側の面はカキ目調整，平坦な側の面は回転ヘラケズリされている。

56は，器高16.1cm，口径6.9cm，胴最大径10.4cm，厚み7.7cmの大きさ。口縁部は長めで緩やかに外反して，端部外側が三角凸帯状に肥厚するが，下側につまみ出したような形状になっている。口縁下に巡る沈線との間に波状文が描かれる。体部は全体にカキ目調整される。胎土に砂粒を含み，暗灰色に焼成されている。

58～60は口縁部を欠く。58は残存器高21.2cm，胴最大径19.0cm，厚み15.3cmの大きさ。体部は全体にカキ目調整されているが，肩部に一対の鈎手が付される。胎土に砂粒を含み，黒灰色に焼成されている。59も肩部に一対の鈎手が付される。残存器高16.3cm，胴最大径14.8cm，厚み10.0cmの大きさ。蓋をした側の面はカキ目調整され，反対側の面は回転ヘラケズリされるが，両面ともに三本川のヘラ記号がある。胎土に砂粒を含み，暗灰色に焼成されている。60は鈎手をもたないが，残存器高19.6cm，胴最大径18.5cmの大きさ。平坦面はカキ目調整，側面はナデ調整されている。大きめの砂粒を胎土に含み，暗灰色に焼成されている。

須恵器平瓶？（57） 底部破片で，復原底径12.2cmの大きさで，胴部・底部ともに回転ヘラケズリされる。砂粒を胎土に含み，暗灰色に焼成されている。

土師器高杯（61～71） 61は大きく緩やかに外反する杯部破片で，復原口径34.0cm，残存器高4.3cmの大きさ。胎土に砂粒・褐色粒を含み，淡褐色に焼成されているが，ナデ調整された内外面に赤色顔料が塗布されている。

62・63は内彎する口縁部をもつ杯部破片で，脚台の付かない可能性もある。器面は風化するがおそらく研磨されているであろう。

64～71は柱状部および裾部の破片。64は脚台部の高さ5.5cm，裾径7.8cmの大きさで，やや太めの柱状部は裾側に少し屈曲して開く。65は長めの柱状部，67は中実の柱状部で，71は大きく開く裾部である。柱状部はいずれもヘラケズリされている。

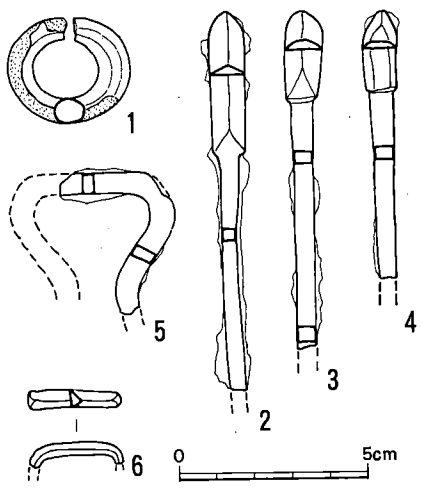
土師器壺？（72） 頸の部分の破片で，頸部径5.5cmの大きさ。胎土に金雲母・砂粒を含み，淡茶褐色に焼成されているが，外面に赤色顔料が塗布されている。

2号墳では石室内からの出土土器はないが，墓道および左前面より出した土器などは6世紀後半でも末に近い頃のものである。（小池）

墓道出土鉄器（図版22，第55図）

武具としては鏃3点，馬具では懸け金具1点，責金具1点が出土した。

鏃（2～4） いずれも尖根式で，2・3は片鏑造り，4は片丸造りである。2は身部長3.9cm，身部幅0.9cm。3は身部長2.6cm，身部幅1cm。4は身部長2.2cm，身部幅0.95cm。



第55図 2号墳墓道出土鉄器・装身具実測図（1/2）

懸け金具（5） 懸け金具の破片で，断面3mm×5mmの方形である。

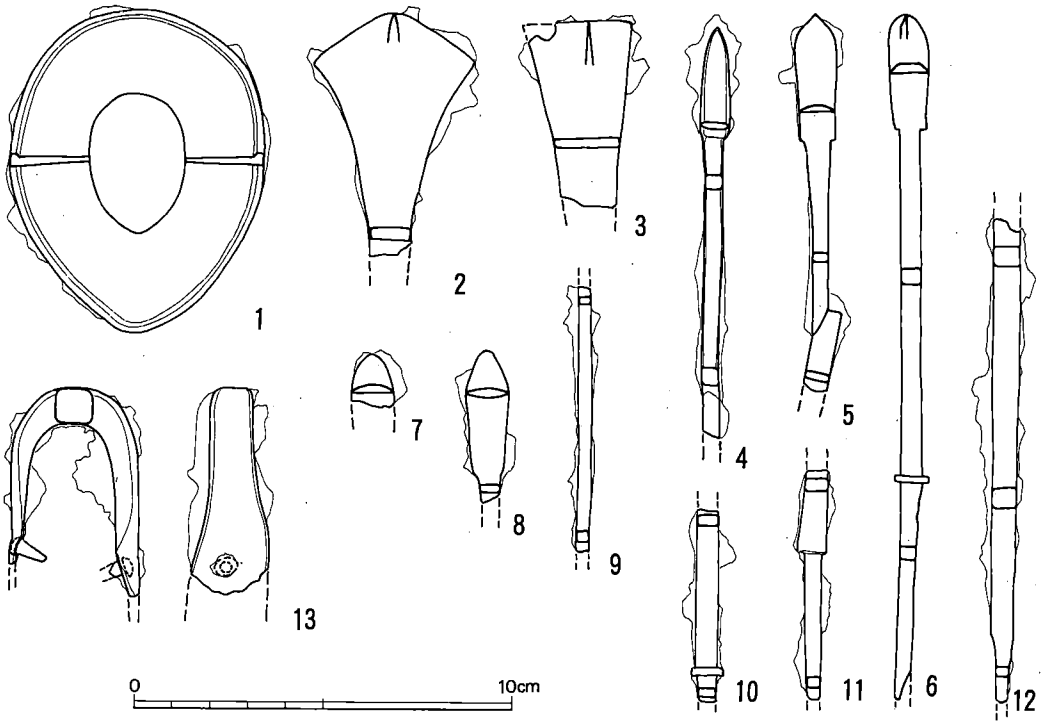
責金具（6） 辻金具の脚部責金具であろう。断面が三角形である。

左前面出土鉄器（図版22，第56図）

武具として鍔1点，鏃11点，馬具の鐙金具1点が出土した。

鍔（1） 大刀につく鍔で，長径8.4cm，短径6.9cmの卵形を呈する。断面は外縁部が厚く2.5mm，内縁部1mmと薄くなる。孔長径3.7cm，孔短径2.6cmである。

鏃（2～12） 1は平根式圭頭形で，最大幅4.3



第 56 図　2号墳左前面出土鉄器実測図（1/2）

cm。3は平根式方頭形で，最大幅3cm。4～8は尖根式剣形で，4・8は両丸造り，5・7は片丸造り，6は片切刃造りである。6は身部長3.1cm，身部幅1.1cm，現存長18.2cm。身部から9.2cmのところに幅9mmの棘状の箆被部を有する。10も同様な箆被部を有する。

鐙金具（13）　木心鉄板張鐙の上部金具破片。

墓道出土装身具（図版22，第55図）

耳　環（1）　銀環で，銅地の錆によって表面の銀張りの大半が剥離している。長径3.2cm，短径2.8cm，断面6.7mm×7.6mm，重量17.7g。（日高）

左前面出土石器

砥　石（図版36，第77図6）　長さ6.8cm，幅1.6～3.6cm，厚さ1.8～3.8cmを測る。四角柱状に四面の砥面をもち，よく使用されている。細くなる側は，本来の砥石の中ほどに相当するのであろう。乳白色を呈す凝灰質砂岩製。

3．3号墳

墳　丘（図版28-1，第57・58図）

A地区尾根の南側斜面の標高67m位にある古墳で，1号墳の南西方，2号墳の南方に位置する。調査前の観察では，長さ7m，幅4m，深さ2m程の大きな陥没穴があり，その周囲が斜面に突出するように緩傾斜になっていて，古墳とすれば直径15m，高さ3m前後のものかと思われたが，陥没穴には，伐採材・炭灰・塵芥などが充満していて，内側の壁に石材が全くみられなかったので，防空壕のようなものかも知れないという危惧もいだかせた。

まず，地形測量の実施と併行しながら，陥没した攪乱穴内の塵芥などを除去したが，相変わらず石材は全くみいだせなかった。このため地表からそのまま土層堆積観察のトレンチを設定せずに，ユンボによる全面表土剝ぎを進めた結果，1号墳前面の斜面に続くものの古墳周溝らしい落込みを確認し，墳丘盛土も残ることが明らかとなったので，攪乱穴内の壁をさらに削りながら，墳丘の断ち割りを実施した。

北東側の周溝は，標高71m位から，幅2m，深さ1m前後に掘り込まれている。

墳丘盛土側では版築状に細かい堆積がみられ，旧表土の上に約1mの厚さをもっている。主体部掘方の内側では規則的に埋められ，さらに60cm程上まででで2工程目らしい盛土があり，その上に土饅頭に盛りあげたような状況がうかがえる。ただ不自然な落込みや土層のズレを生じている。

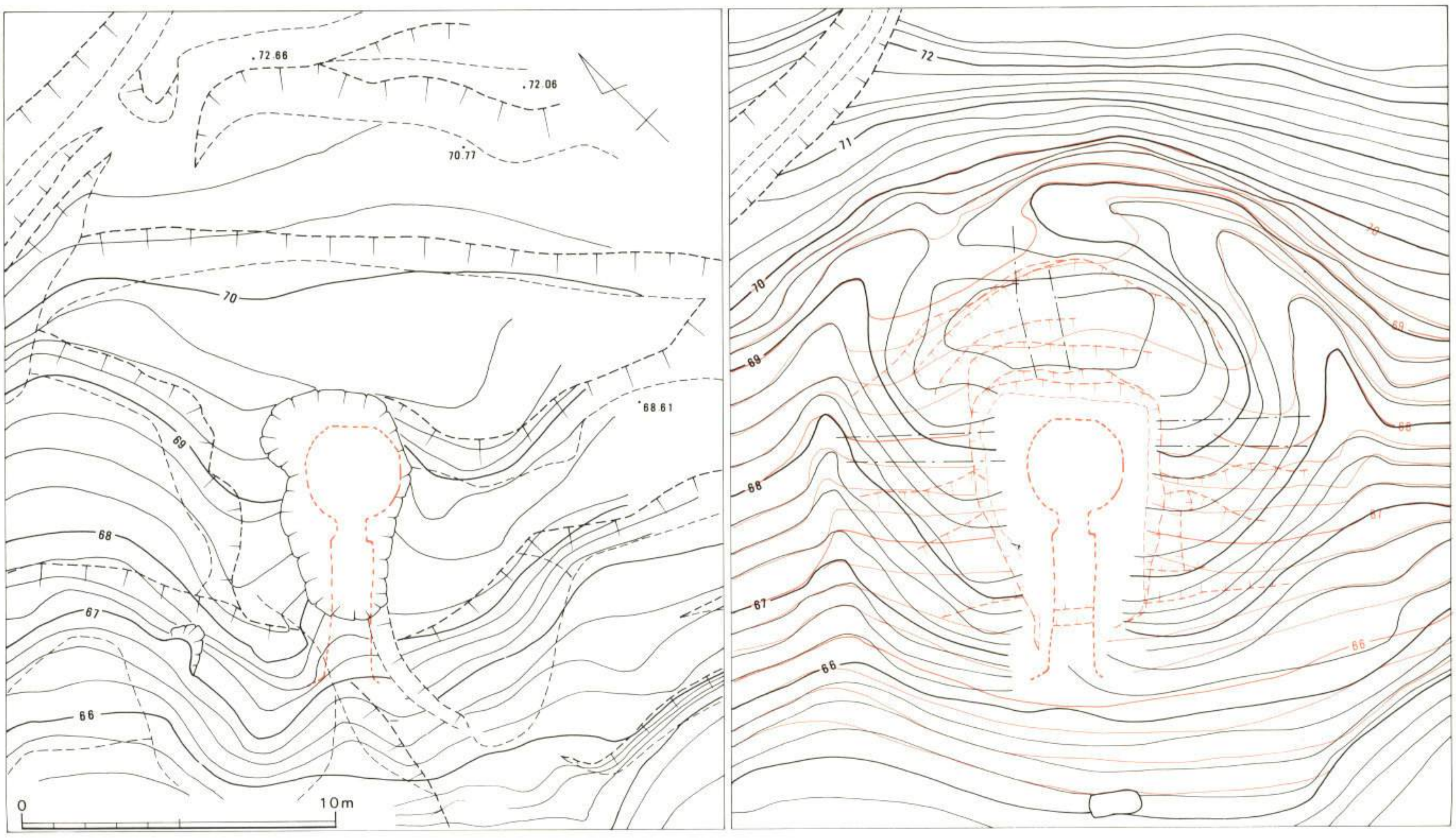
主体部と思われる攪乱穴は，相変わらず石材を検出できないでいたが，奥壁の手前と，右側壁の基底部の石が残る以外，石室を構成していた石がことごとく抜き取られていて，抜き痕によって石室の形が判断し得るという状況であった。ここでも露呈させた床面は50cm程の高低差があり極めて不自然な状況であった。結局，この高低差と墳丘の土層のズレは，主体部掘方を完掘することによって，地滑りに起因することを知り得たが，それまでは石材がないこともあって掘り過ぎではないかという危惧を常に残させた。

とまれ，3号墳は直径15～16m，高さ3.0m程の円墳で，2・3箇所の亀裂のために中央部付近が落込んでしまった古墳である。

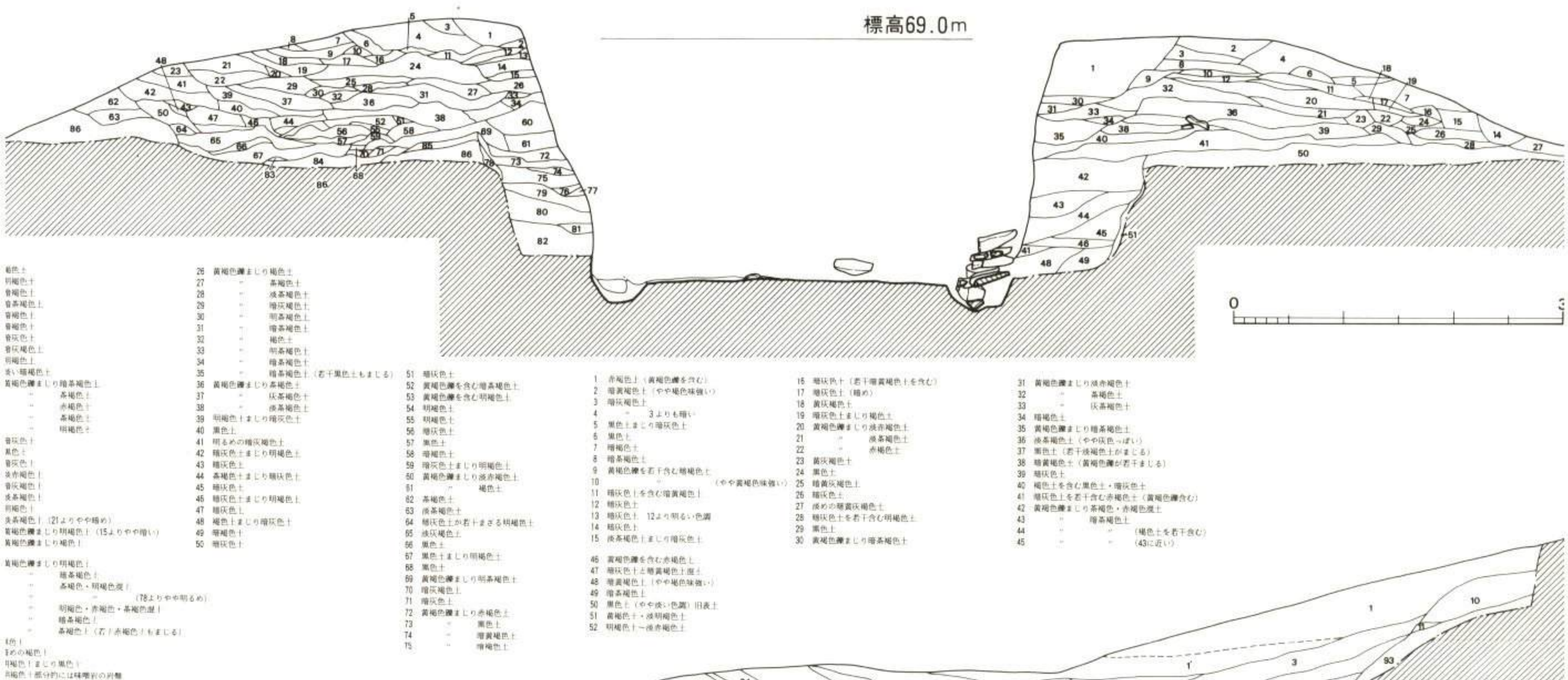
主体部（図版28-2，第59図）

この古墳の主体部は，主軸方位をN48°Eにとり，南西方向に開口する，複室構造の横穴式石室である。

石室の掘り方は，標高68.2m位を奥側の上端として振り込まれる。長さ9m，幅4～5mの



第 57 図　3号墳墳丘・地山整形面測量図（1/200）



褐色土
明褐色土
暗褐色土
暗茶褐色土
暗褐色土
暗褐色土
暗灰色土
暗灰褐色土
明褐色土
淡い暗褐色土
黄褐色礫まじり暗茶褐色土
〃　茶褐色土
〃　赤褐色土
〃　茶褐色土
〃　明褐色土
暗灰色土
黒色土
暗灰色土
淡赤褐色土
暗灰褐色土
淡茶褐色土
明褐色土
淡茶褐色土（21よりやや暗め）
黄褐色礫まじり明褐色土（15よりやや暗い）
黄褐色礫まじり褐色土

26 黄褐色礫まじり褐色土
27 〃　茶褐色土
28 〃　淡茶褐色土
29 〃　暗灰褐色土
30 〃　明茶褐色土
31 〃　暗茶褐色土
32 〃　褐色土
33 〃　明茶褐色土
34 〃　暗茶褐色土
35 〃　暗茶褐色土（若干黒色土もまじる）
36 黄褐色礫まじり茶褐色土
37 〃　灰茶褐色土
38 〃　淡茶褐色土
39 明褐色土まじり暗灰色土
40 黒色土
41 明るめの暗灰褐色土
42 暗灰色土まじり明褐色土
43 暗灰色土
44 茶褐色土まじり暗灰色土
45 暗灰色土
46 暗灰色土まじり明褐色土
47 暗灰色土
48 褐色土まじり暗灰色土
49 暗褐色土
50 暗灰色土

51 暗灰色土
52 黄褐色礫を含む暗茶褐色土
53 黄褐色礫を含む明褐色土
54 明褐色土
55 明褐色土
56 暗灰色土
57 黒色土
58 暗褐色土
59 暗灰色土まじり明褐色土
60 黄褐色礫まじり淡赤褐色土
61 〃　褐色土
62 茶褐色土
63 淡茶褐色土
64 暗灰色土が若干まざる明褐色土
65 淡灰褐色土
66 黒色土
67 黒色土まじり明褐色土
68 黒色土
69 黄褐色礫まじり明茶褐色土
70 暗灰褐色土
71 暗灰色土
72 黄褐色礫まじり赤褐色土
73 〃　黒色土
74 〃　暗黄褐色土
75 〃　暗褐色土

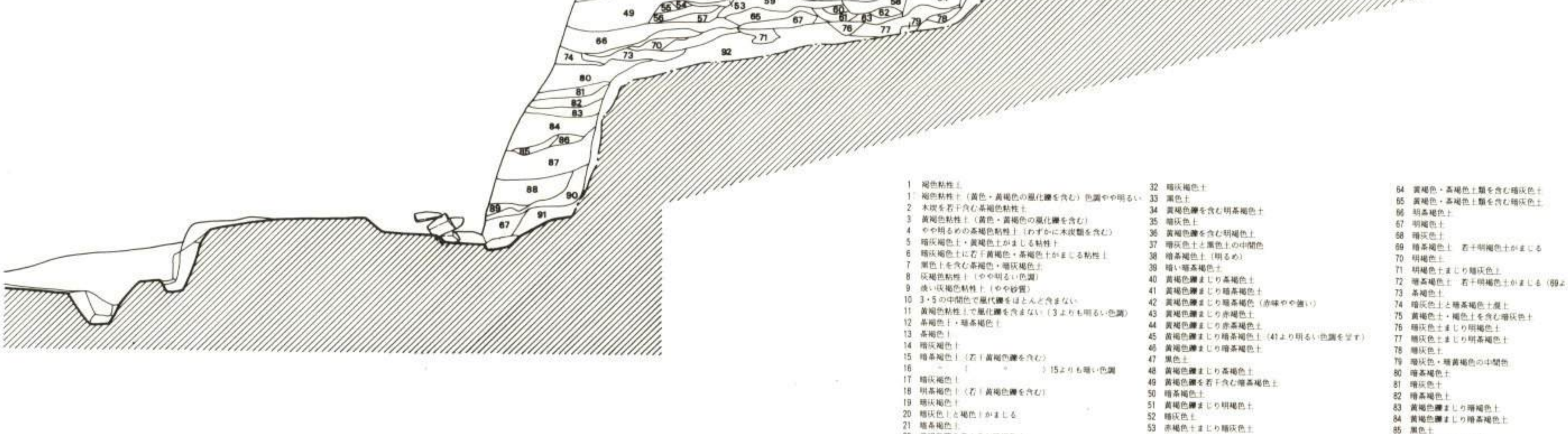
黄褐色礫まじり明褐色土
〃　暗茶褐色土
〃　茶褐色・明褐色混土
〃　〃　（78よりやや明るめ）
〃　明褐色・赤褐色・茶褐色混土
〃　暗茶褐色土
〃　茶褐色土（若干赤褐色土もまじる）
色土
めの褐色土
明褐色土まじり黒色土
褐色土部分的には緑泥岩の岩盤

1 赤褐色土（黄褐色礫を含む）
2 暗黄褐色土（やや褐色味強い）
3 暗灰褐色土
4 〃　3よりも暗い
5 黒色土まじり暗灰色土
6 黒色土
7 暗褐色土
8 暗茶褐色土
9 黄褐色礫を若干含む暗褐色土
10 〃　（やや黄褐色味強い）
11 暗灰色土を含む暗黄褐色土
12 暗灰色土
13 暗灰色土　12より明るい色調
14 暗灰色土
15 淡茶褐色土まじり暗灰色土

46 黄褐色礫を含む赤褐色土
47 暗灰色土と暗黄褐色土混土
48 暗黄褐色土（やや褐色味強い）
49 暗茶褐色土
50 黒色土（やや淡い色調）旧表土
51 黄褐色土・淡明褐色土
52 明褐色土～淡赤褐色土

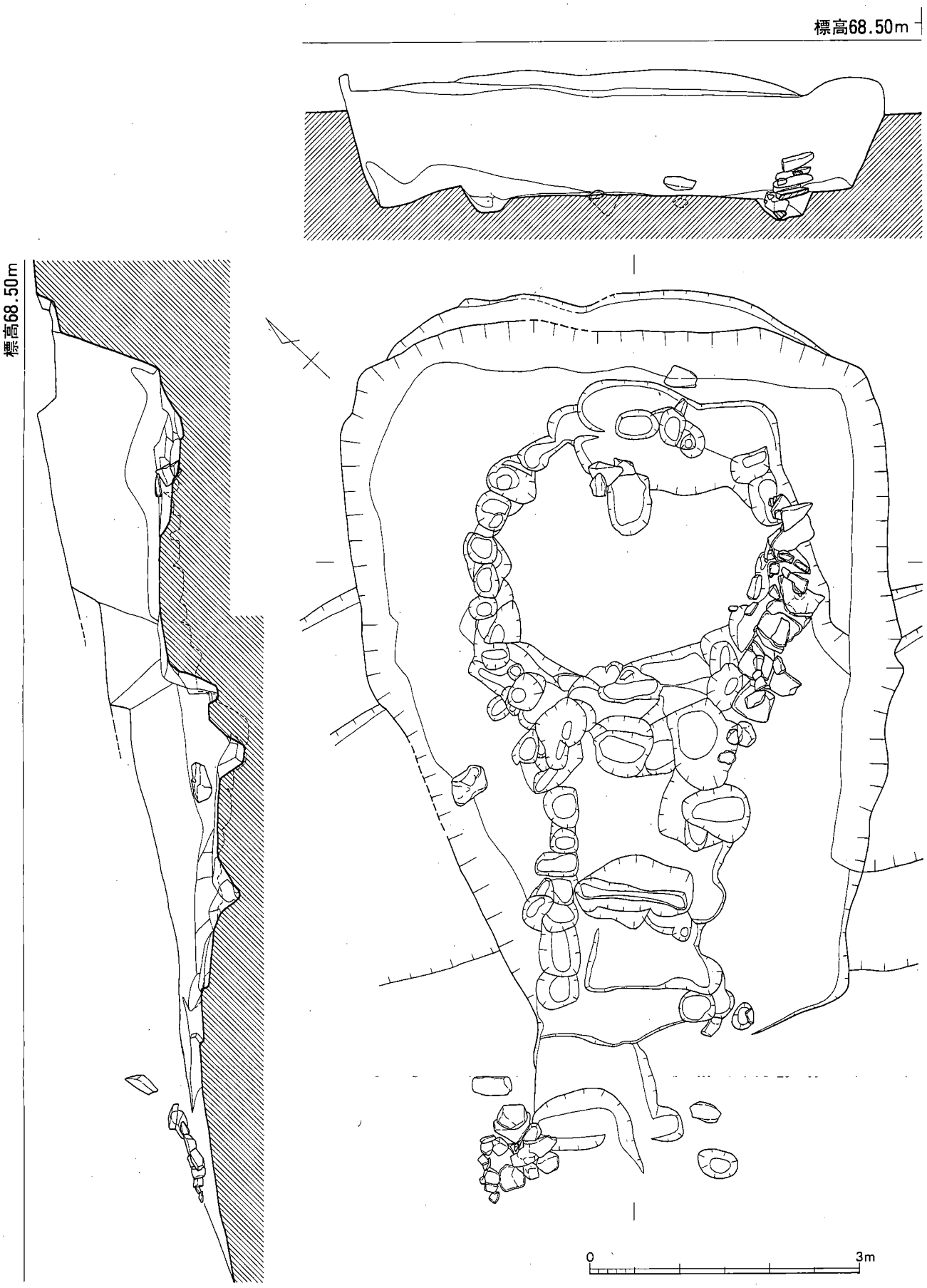
16 暗灰色土（若干暗黄褐色土を含む）
17 暗灰色土（暗め）
18 黄灰褐色土
19 暗灰色土まじり褐色土
20 黄褐色礫まじり淡赤褐色土
21 〃　淡茶褐色土
22 〃　赤褐色土
23 黄灰褐色土
24 黒色土
25 暗黄灰褐色土
26 暗灰色土
27 淡めの暗黄灰褐色土
28 暗灰色土を若干含む明褐色土
29 黒色土
30 黄褐色礫まじり暗茶褐色土

31 黄褐色礫まじり淡赤褐色土
32 〃　茶褐色土
33 〃　灰茶褐色土
34 暗褐色土
35 黄褐色礫まじり暗茶褐色土
36 淡茶褐色土（やや灰色っぽい）
37 黒色土（若干淡褐色土がまじる）
38 暗黄褐色土（黄褐色礫が若干まじる）
39 暗灰色土
40 褐色土を含む黒色土・暗灰色土
41 暗灰色土を若干含む赤褐色土（黄褐色礫含む）
42 黄褐色礫まじり茶褐色・赤褐色混土
43 〃　暗茶褐色土
44 〃　〃　（褐色土を若干含む）
45 〃　〃　（43に近い）



1 褐色粘性土
1' 褐色粘性土（黄色・黄褐色の風化礫を含む）色調やや明るい
2 木炭を若干含む茶褐色粘性土
3 黄褐色粘性土（黄色・黄褐色の風化礫を含む）
4 やや明るめの茶褐色粘性土（わずかに木炭類を含む）
5 暗灰褐色土・黄褐色土がまじる粘性土
6 暗灰褐色土に若干黄褐色・茶褐色土がまじる粘性土
7 黒色土を含む茶褐色・暗灰褐色土
8 灰褐色粘性土（やや明るい色調）
9 淡い灰褐色粘性土（やや砂質）
10 3・5の中間色で風化礫をほとんど含まない
11 黄褐色粘性土で風化礫を含まない（3よりも明るい色調）
12 茶褐色土・暗茶褐色土
13 茶褐色土
14 暗灰褐色土
15 暗茶褐色土（若干黄褐色礫を含む）
16 〃　（〃　〃）15よりも暗い色調
17 暗灰褐色土
18 明茶褐色土（若干黄褐色礫を含む）
19 暗灰褐色土
20 暗灰色土と褐色土がまじる
21 暗茶褐色土
22 黄褐色礫を多く含む暗褐色土
23 黄褐色礫を含む淡茶褐色土
24 茶褐色土
25 黄褐色礫を含む暗茶褐色土
26 〃　（25よりやや暗い色調）
27 黄褐色礫を含む暗褐色土（22より赤味強い）
28 〃　（27より暗い）
29 黄褐色礫を含む赤褐色土
30 黄褐色礫を若干含む黒色土・暗茶褐色土混土
31 〃　暗灰色土・暗茶褐色土混土
32 暗灰褐色土
33 黒色土
34 黄褐色礫を含む明茶褐色土
35 暗灰色土
36 黄褐色礫を含む明褐色土
37 暗灰色土と黒色土の中間色
38 暗茶褐色土（明るめ）
39 暗い暗茶褐色土
40 黄褐色礫まじり茶褐色土
41 黄褐色礫まじり暗茶褐色土
42 黄褐色礫まじり暗茶褐色（赤味やや強い）
43 黄褐色礫まじり赤褐色土
44 黄褐色礫まじり赤茶褐色土
45 黄褐色礫まじり暗茶褐色土（41より明るい色調を呈す）
46 黄褐色礫まじり暗茶褐色土
47 黒色土
48 黄褐色礫まじり茶褐色土
49 黄褐色礫を若干含む暗茶褐色土
50 暗茶褐色土
51 黄褐色礫まじり明褐色土
52 暗灰色土
53 赤褐色土まじり暗灰色土
54 淡い茶褐色土
55 淡褐色礫まじり暗灰色土
56 暗黄褐色土
57 赤褐色土まじり暗茶褐色土
58 暗めの暗茶褐色土
59 明るめの暗茶褐色土
60 黒色土
61 暗灰色土
62 〃
63 黒色土
64 黄褐色・茶褐色土類を含む暗灰色土
65 黄褐色・茶褐色土類を含む暗灰色土
66 明茶褐色土
67 明褐色土
68 暗灰色土
69 暗茶褐色土　若干明褐色土がまじる
70 明褐色土
71 明褐色土まじり暗灰色土
72 暗茶褐色土　若干明褐色土がまじる（69よ
73 茶褐色土
74 暗灰色土と暗茶褐色土混土
75 黄褐色土・褐色土を含む暗灰色土
76 暗灰色土まじり明褐色土
77 暗灰色土まじり明茶褐色土
78 暗灰色土
79 暗灰色・暗黄褐色の中間色
80 暗茶褐色土
81 暗灰色土
82 暗茶褐色土
83 黄褐色礫まじり暗褐色土
84 黄褐色礫まじり暗茶褐色土
85 黒色土
86 暗褐色土まじり黒色土
87 黄褐色細礫まじり暗茶褐色土（84より赤味強
88 84に近い黄褐色細礫まじり暗茶褐色土
89 暗茶褐色土（やや暗め）
90 黄褐色粗礫まじり暗茶褐色土（赤味強い）
91 明褐色土・風化礫
92 明黄褐色土
93 明褐色砂質粘性土
94 乳白色砂質粘性土
95 黄色砂質粘性土

第 58 図　3号墳墳丘土層実測図（1/60）



第 59 図　3 号墳主体部実測図（1/60）

不整長方形プランを呈している。奥壁部分では深さ1.35mだが，前面側に浅くなり，墓道部は盛土整形されている。ただ，中ほどの４m前後の部分が陥没している。

石材の抜き痕と左前面の石などから復原した石室全長は，左側壁で8.15m，右側壁で8.20mを測る。

玄室の長さは，左側壁で2.80m，右側壁で2.90m，中軸線で2.80mである。三味線胴の胴張りプランで，最大幅3.00mは中央部にある。奥壁中央に鏡石を据えて，両脇は，両側壁ともに，基底部から扁平石を平積みされていたようである。床面の敷石は全く残らない。

玄門部分の袖石は，幅50×100cm程の石が，深さ50cmほどで主軸に平行する方向に据えられて，玄門幅は0.90～1.00m程で，仕切石が据えられていたようである。

前室は，左側壁が直線的で胴の張らない痕跡を残し，右側壁は胴の張る可能性を残すもののやや不明瞭である。仕切石の抜き痕による長さは約1.40mを測る。前室にも敷石は全く痕跡を残していない。

羨道部は，前室袖石から緩やかに開く平面形を呈するが，３m弱の長さをもち，前面での幅は約1.55mを測る。

閉塞の痕跡も全く残されていない。

石室を構成する石材は，僅かに残された石でみる限り，全て緑色片岩や緑泥片岩であるが，奥壁の鏡石や玄門・前門袖石などには，大きな石材を使用していたようで，残された抜き痕の深さが他の部分より深い。

遺物出土状況（図版29-１）

墓道および前面

石室部分では，遺物が全く出土していない。

墓道の左側前端部分にみられた石材の少しまとまって残る部分を中心に，須恵器杯蓋・杯身，高杯・甕・提瓶・平瓶などの土器類が出土した。

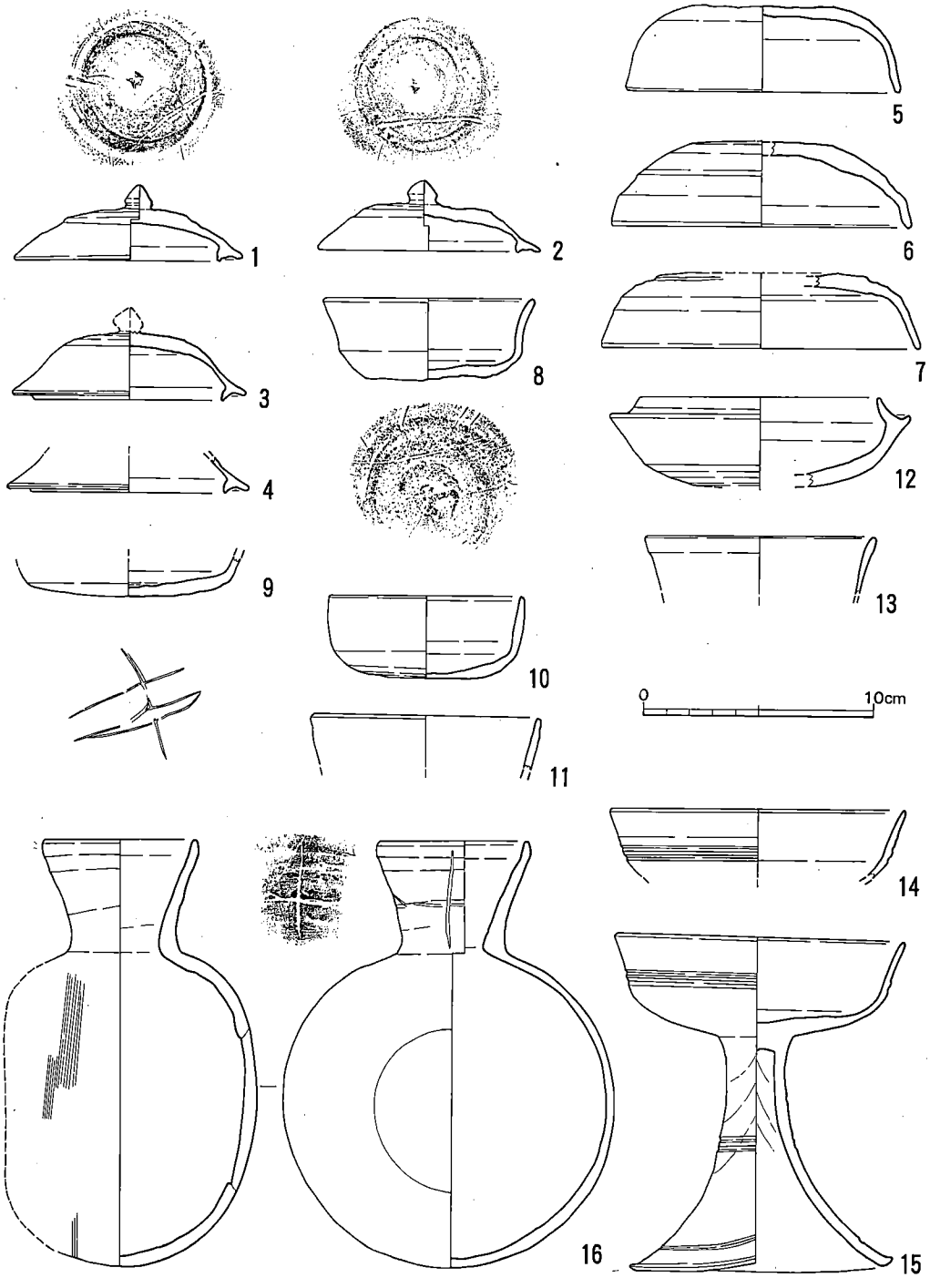
墳丘および周溝

墳丘を主体部中軸および直交軸で区切った西側をⅠ区，北側をⅡ区という順に便宜上分けているが，左前面側のⅠ区側では須恵器壺，甕，杯蓋・杯身，甕などが，Ⅲ区側では須恵器壺，甕，杯蓋・杯身，甕，土師器高杯などが出土し，墳丘Ⅱ区の上面から鉄鏃が出土した。

出土遺物

墓道および前面出土土器（図版29-２，第60・61図）

須恵器杯蓋（１～７）　１～４は，身受けのかえりをもち，天井部に小さな宝珠形つまみのつく杯蓋である。１は外径10.0cm，器高3.3cm，２は復原外径9.7cm，器高3.1cmの大きさで，回転



第 60 図　3 号墳墓道・左前面出土土器実測図 1 (1/3)

ヘラケズリされる外天井は平坦である。外天井には短直線のヘラ記号が付されている。3はつまみを欠き，外径10.2cm，残存器高3.0cmの大きさで，外天井は回転ヘラケズリをされている。3のかえり端が口縁部より下に出るが，他のものは口縁部に隠れる。いずれも硬い焼成で，暗灰色ないし灰色の色調を呈している。

5～7は身受けのかえりのない杯蓋。5・7はそれぞれ復原口径12.1cm・13.8cm，器高3.8cm・3.3cmの大きさで，平坦な外天井は磨滅している。6は復原口径13.1cm，器高3.7cmの大きさで，外天井は回転ヘラケズリされている。5があまい焼成で褐色の色調を呈し，6・7は硬く焼成されている。

須恵器杯身（8～13）　8～10は蓋受けのない杯身。8は復原口径9.3cm，器高3.5cmの大きさで，口縁部が外反する。外底面はヘラ切離しの後ナデられ，短直線のヘラ記号が付されている。硬い焼成で黒灰色を呈している。9は口縁を欠くが，外底面に串のようなヘラ記号が付されている。10は口径8.6cm，器高3.6cmの大きさ，口縁部が直に立ち上がる杯身で，外底面は回転ヘラケズリされている。いずれも硬い焼成である。

12は蓋受けのかえりをもつ杯身で，復原外径13.2cm，器高3.9cmの大きさ。外底面は回転ヘラケズリされている。焼成は硬く茶灰色を呈する。

須恵器高杯（14・15）　15は復原口径12.6cm，器高14.3cm，脚裾径11.4cmの大きさ。器高のうち杯部が4.3cmを占める。口縁部は緩く外反し，外面に2条の沈線が巡る。中空で細く高い柱状部は裾に大きく開き，端部で跳ねるが，中ほどに2条，裾に1条の沈線が巡る。14の復原口径12.9cmを測る口縁部破片も同様な高杯であろう。

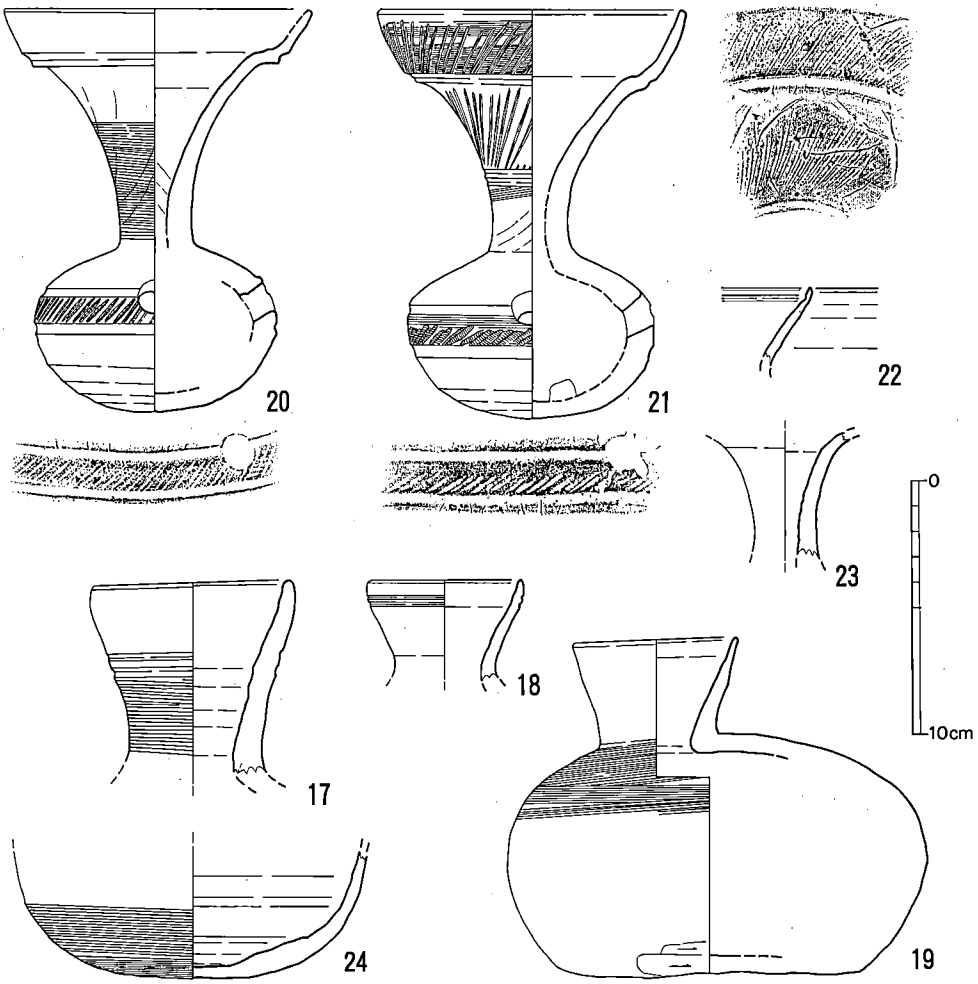
須恵器提瓶（16）　口径6.7cm，器高18.5cm，胴最大径14.4cmの大きさで，体部高は13.6cmを占める。口縁部は直線的に開くが，端部で内彎する。ヨコナデ調整されているが，口縁部に短直線のヘラ記号が付されている。製作時に体部を蓋した痕跡が明瞭に残る。良好な焼成で淡茶灰色を呈する。

須恵器平瓶（18・19）　19は復原口径6.6cm，器高13.4cm，胴最大径16.7cmの大きさで，体部高は9.6cmを占める。口縁部は直線的に開く。体部上半はカキ目調整，下半はヘラケズリされている。良好な焼成で黒灰色ないし暗茶褐色を呈する。18も平瓶の口縁部であろう。口縁部は直線的に開くが，端部で内彎し，沈線が2条巡る。暗灰色に焼成されている。

17は提瓶・平瓶の類より細頸壺であろうか。口縁端部は内彎し，中途の2条巡る沈線より体部側はカキ目調整されている。良好な焼成で黒灰色を呈している。

なお，24はカキ目調整される丸底の破片で，全体の形は不明。横瓶の可能性もあるが，それにしては小さい。

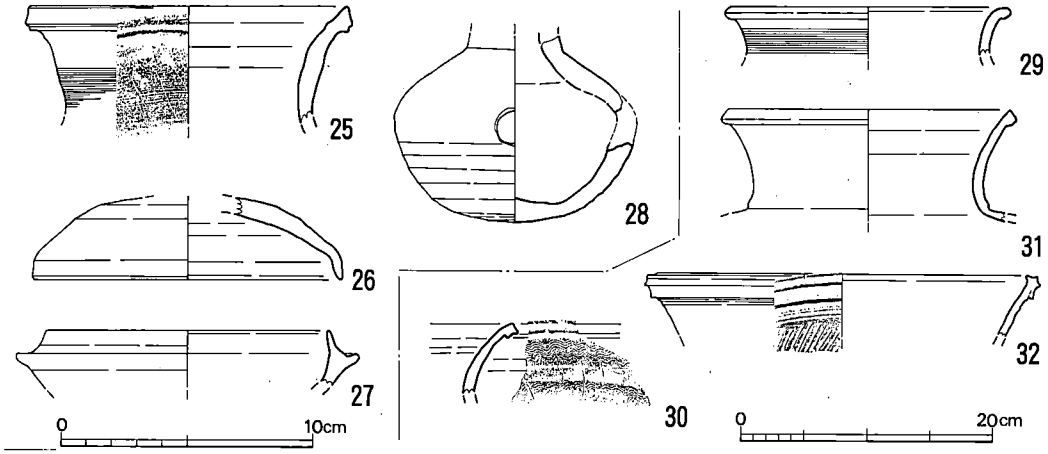
須恵器甕（20～23）　20は口径12.2cm，器高15.9cm，胴最大径9.6cmの大きさで，体部高は6.5cmを占める。体部は扁球形で，回転ヘラケズリされる底部は丸い。最大径の所に巡る2条の沈



第 61 図　3 号墳墓道・左前面出土土器実測図 2 (1/3)

線間に板小口の連続圧痕があり，外側に斜め上りの円孔が穿たれる。口頸部は広く外反して，口縁部は屈曲するが，段状の沈線を介する。絞り痕のある頸部はカキ目調整されている。硬い焼成で暗茶灰色を呈している。

21は口径12.3cm，器高16.1cm，胴最大径9.8cmの大きさで，体部高は6.5cmを占める。体部は扁球形で，回転ヘラケズリされる底部は丸いが，なで肩になる。最大径の所に巡る 2 条の沈線間に板小口の連続圧痕があり，外側に斜め上りの円孔が穿たれる。口頸部は広く外反して，口縁部は内彎するが，低い段伏の沈線を介して屈曲する。絞り痕のある頸部に浅い 2 条の沈線が巡り，これより口縁側に放射状の暗文が付されている。良好な焼成で灰色を呈している。



第 62 図　3号墳墳裾・周溝出土土器実測図1（1/3・1/6）

墳裾・周溝出土土器（図版29−2，第62・63図）

須恵器壺（25）　Ⅰ区裾から出土した。復原口径13.0cmの大きさで，外反する口縁部は端部が三角形に肥厚して，浅い沈線が巡る。頸部はカキ目調整されて，放射状のヘラ痕が付く。灰黒色に硬く焼成される。

須恵器杯蓋（26）　Ⅰ区裾から出土した。身受けのかえりをもたない杯蓋で，復原口径12.4cm，器高3.3cmの大きさ。淡灰黒色に硬く焼成される。

須恵器杯身（27）　Ⅰ区裾から出土した。蓋受けのかえりをもつ杯身で，復原外径13.6cmの大きさ。灰色に硬く焼成される。

須恵器𤭯（28）　Ⅰ区裾から出土した。口頸部を欠き，残存器高7.4cm，胴最大径9.5cmの大きさで，回転ヘラケズリされる底部は丸い。なで肩で，最大径の位置に外側に斜め上がりの円孔が穿たれる。暗青灰色に硬く焼成されている。

須恵器甕（29〜32）　Ⅱ区の裾ないし周溝から出土した口縁部破片で，胴部の破片も出土しているが，うまく接合しない。29は復原口径23.2cmの大きさ。外反する口縁部がカキ目調整され，端部で丸く肥厚する。30は復原口径24.0cmの大きさ。直線的に開いた口縁部が端部で三角形に丸く肥厚する。31は復原口径31.6cmの大きさ。直線的に開いた口縁部が端部で肥厚するが，つまみ出されて菱形を呈する。外面の端部下に浅い沈線状の凹みがあり，平行タタキ痕がみられる。32は外反する口縁部外面に波状文が巡り，端部はコ字形に肥厚する。いずれも硬い焼成で

黒灰色ないし灰色の色調を呈する。

周溝Ⅲ区出土土器（第63図）

須恵器壺（33） 復原口径23.8cmの大きさ。外反する口縁部は端部側が内彎気味になり，肥厚して低い三角凸帯をつくる。硬い焼成で黒灰色を呈する。

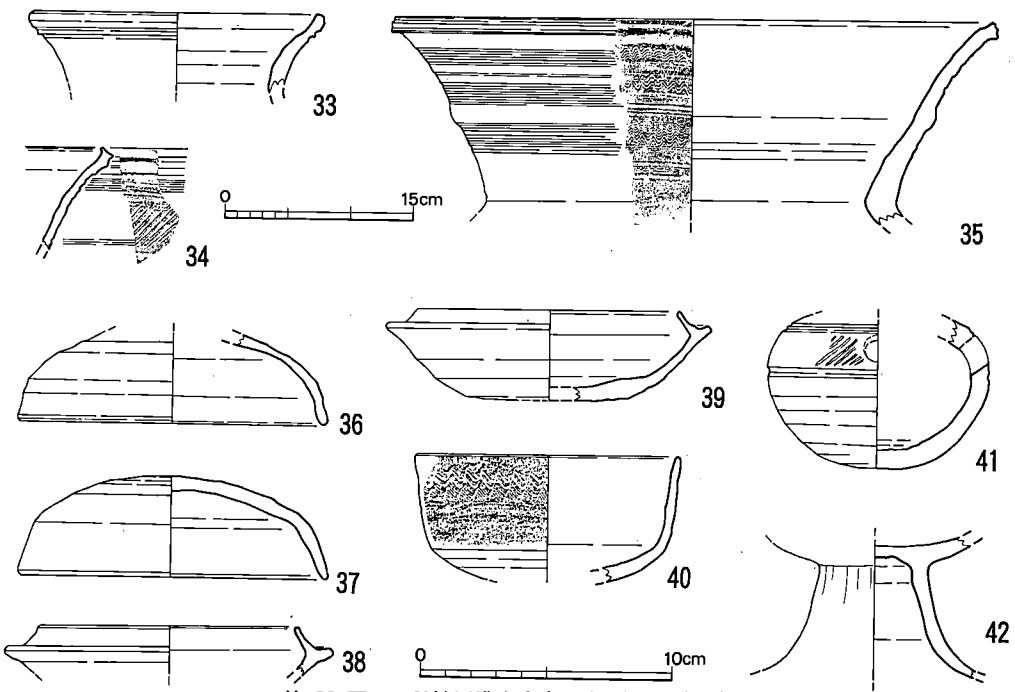
須恵器甕（34・35） 34は接合しないが，周溝Ⅱ区出土の32と同一個体であろう。35は復原口径48.2cmの大きさ。口縁部は長めで直線的に開くが，外面に浅い沈線と波状文を交互に巡らせる。中途の膨らみは焼け膨れである。口縁端部は軽くつつまれ，口唇部外面に浅い2条の沈線を巡らす。硬い焼成で黒灰色を呈する。

須恵器杯蓋（36・37） 身受けのかえりをもたない杯蓋で，外天井は回転ヘラケズリされている。36・37ともに復原口径12.4cmで，37の器高は4.0cm。硬い焼成で，暗青灰色を呈する。

須恵器杯身（38・39） 蓋受けのかえりをもつ杯身で，39では外底部が回転ヘラケズリされている。復原外径は38が13.0cm，39が12.8cmで，39の器高は3.5cm。硬く焼成されている。

須恵器杯（40） 体部の深い椀状の杯で，口縁部は直に立ち上がる。復原口径10.6cm，残存器高は5.0cm。外面に波状文がある。硬い焼成で，淡青灰色を呈する。

須恵器甑（41） 口頸部を欠き，残存器高6.0cm，胴最大径8.9cmの大きさで，回転ヘラケズリ



第 63 図　3号墳周溝出土土器実測図2（1/3）

される底部は丸い。ややなで肩で，最大径の位置の上側に巡る２条の沈線間に板小口の圧痕が並び，外側に斜め上がりの円孔が穿たれる。黒灰色に硬く焼成されている。

土師器高杯（42） 中空低めの柱状部をもつ高杯。杯部・裾部とも失い，全体に磨滅するが，外面にヘラケズリの痕跡を残している。砂粒・褐色粒を胎土に含み，淡褐色に焼成されている。

この古墳では，主体部内からの出土遺物はないが，墓道・左前面より出した土器は６世紀末から７世紀前半頃までの時期のものを含んでいる。なお，周溝Ⅲ区の土器は１号墳前面から転落した土器であろう。

この古墳の時期としては，６世紀後半～末頃に築造された可能性が高いが，占地からみて１・２号墳より後出するものと考えられる。そして７世紀前半頃まで，追葬あるいは供献が続けられていたのであろう。

なお，後述する７号土壙が前面の墳裾より少し下の斜面で検出されたが，これとの時期的な関係は把握できなかった。

４．石棺墓

山田遺跡群で今回検出され，調査した石棺墓は１号石棺墓１基のみである。

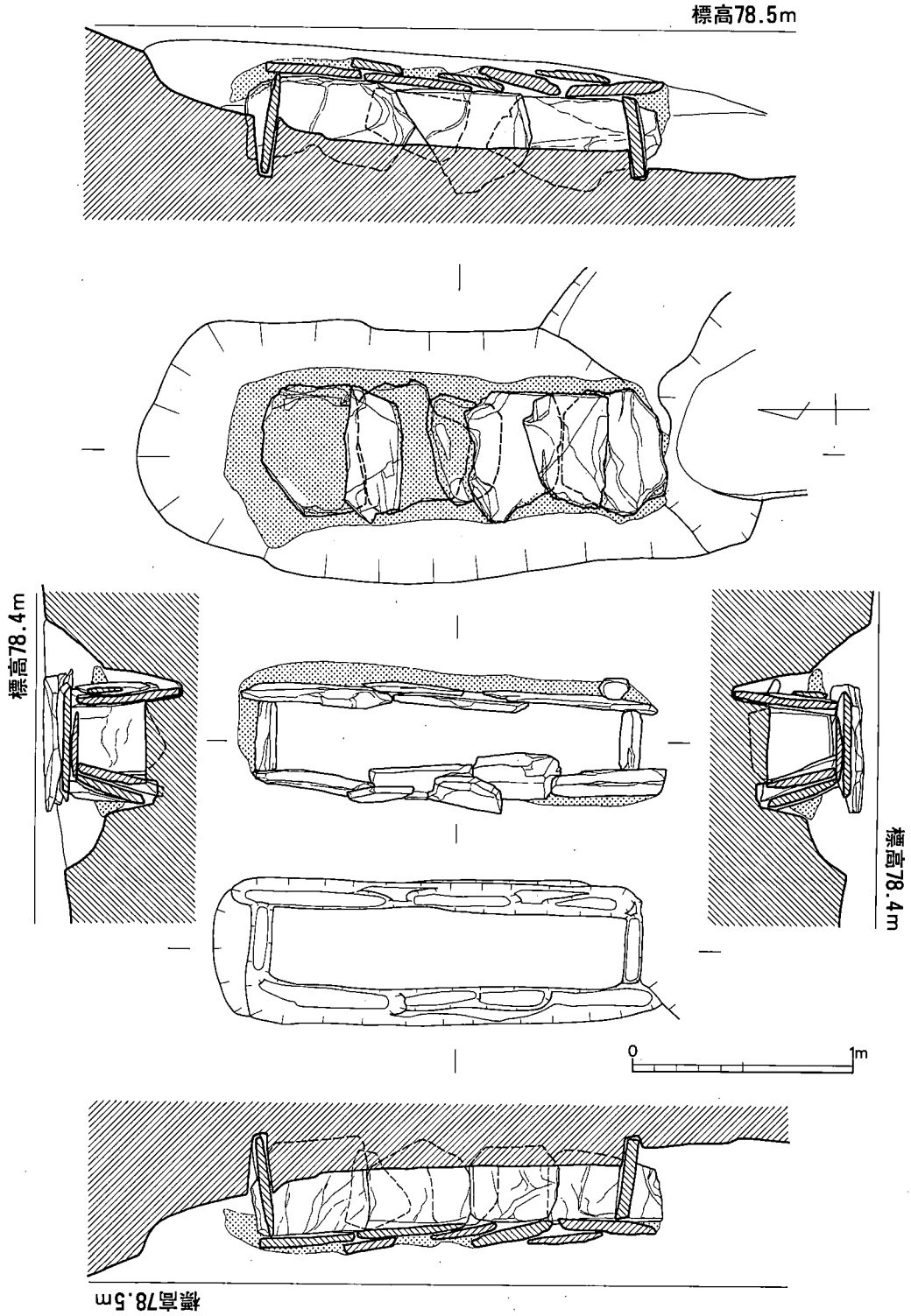
１号石棺墓（図版30・31，第64図）

１号墳の７ｍ南側の標高78.4ｍ位に検出された。主軸方位をＮ４°Ｗにとり，北側を頭位にする石棺墓で，緑色片岩の扁平石を組み合せて構築されている。

主体部掘り方は，長さ2.8ｍ，幅1.1ｍ，深さ0.4ｍ程の不整長方形の平面プランを呈し，黄褐色粘土を掘り込んでいるが，下部は岩盤に達している。この土壙内には，岩盤の砕片を含む黄褐色の粘性土が埋まっていたが，なんらの遺物を含んでいなかった。

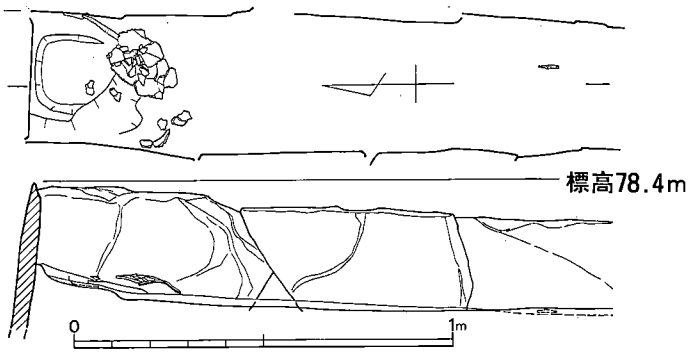
石棺は後世の攪乱を全く受けずに残されていた。蓋石は７枚の扁平石で構成されて，北側から広めの石を並べ，石の継目には幅の狭い石を上に重けているが，中ほどでは横側に隙間を生じる為か隣の石の下に片側を差し込んで，隙間を最少限に押えている。さらに全体に隙間を覆うように厚い目張り粘土が施されている。

石棺は，墓壙底に５～30㎝掘り込んで扁平石を立て並べ，側壁石が小口を挟む形に据えられている。東側壁は北側２枚を並べ，南側１枚はその外側に重ねるが，北側の継目は外に小振りの石を被せている。西側壁は北側３枚を並べ，南側１枚はその外側に重ねるが，北側２箇所の



第 64 図　1 号石棺墓実測図 (1/30)

継目は外に小振りの石を被せて隙間を埋めている。両側壁・小口の隙間も含めてこちらも目張り粘土が施される。ただ現状では土圧の影響を受けてか，全体に中央部がやや下がり気味になって，側壁石も内側に少し傾いている。



第 65 図　1号石棺墓遺物・人骨出土状況実測図（1/20）

石棺内法は，長さ1.61m，幅0.32～0.36m，深さ0.30mを測る。最大幅は中ほどから北側にあり，南側で最少幅を測る。岩盤の上に粘土を乗せて施設される床面は南側より北側が約10cm高く，北端には粘土枕があり，長さ・幅ともに20cm程の部分が凹む。枕部分の内側寄りに頭骨が残るが，他の部分の骨は残らず，人骨以外では，枕の東側に鉾を棺内中央側に向けた鉄剣1点と，足位になる棺内南部に鉄鏃1点が出土した。なお，棺内には赤色顔料塗布の痕跡が全くみとめられなかった。

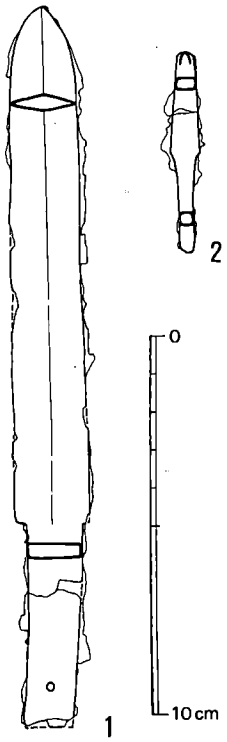
出土遺物（図版31－3，第66図）

出土人骨についてはⅣ－2にゆずる。棺内出土の人工遺物は鉄器のみである。

鉄　剣（1）　全長19.0cmの剣で，両刃の身部分は13.6cmを占める。最大幅1.9cm，厚さ0.4cmで鎬は鉾から関部まで明瞭に残る。茎部は幅1.3～1.5cm，厚さ0.4cmで基部端近くに目釘孔が1つ確認できる。短剣であろうか。

鉄　鏃（2）　全長5.3cmで身部は2.8cmを占める。最大幅0.8cm，厚さ0.3cmで，先端の尖りは鈍い。茎部は0.35cm角の棒状を呈している。

1号石棺では，鉄器のみの出土で，時期の確定は難しいが，石棺の形態から，5世紀代までにおさまる可能性が高いといえよう。



第 66 図　1号石棺墓出土鉄器実測図（1/2）

5．土　壙

山田遺跡群で今回検出され，調査した土壙は７基で，人骨などの遺存体はないが，形態から土壙墓の可能性がある。

１号土壙（第67図）

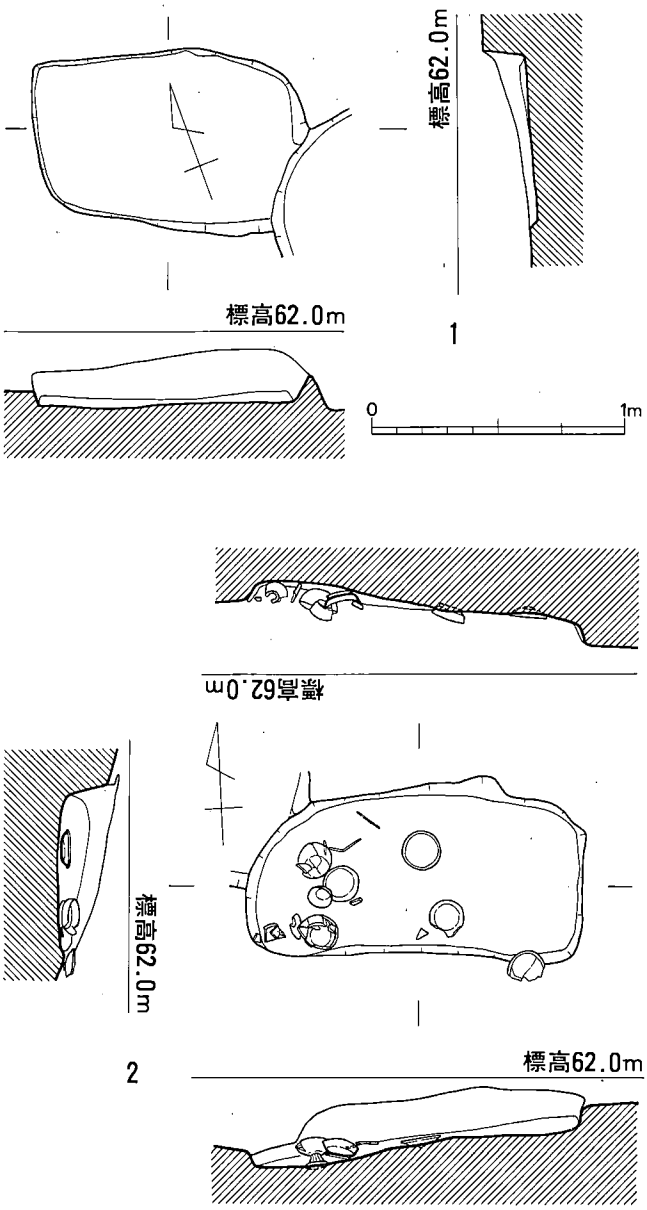
３号墳の約12m南方で検出した。南側斜面の僅かに緩傾斜になる，標高62m位に占地する。南東側で２号土壙と重復し，２号土壙を切っている。

主軸方向をN73°Wにとる，不整長方形プランの土壙で，長さ1.05m，幅0.70mの広さをもつが，削平を受けて深さ0.05～0.15mしか残らない。床面は平坦だが，なんらの遺物も出土しなかった。

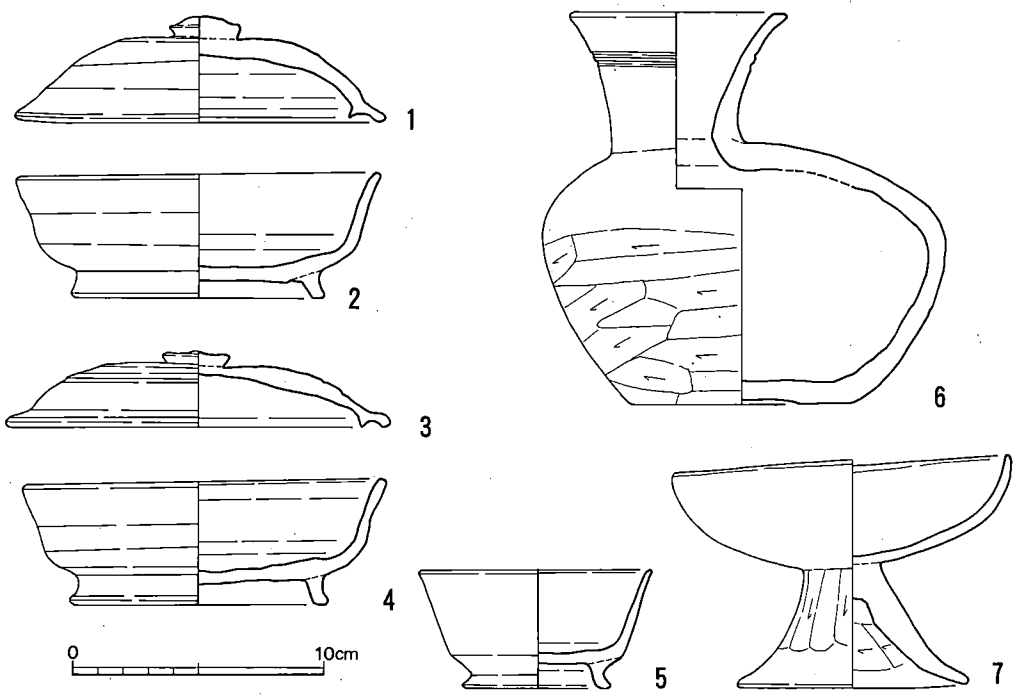
２号土壙（図版32，第67図）

１号土壙の南東側に重複して検出されたが，西側の一部を１号土壙に切られている。

主軸方向をN87°Eにとる，不整長方形プランの土壙墓で，長さ1.33m，幅0.65mの広さをもち，南側は削平されて残りが悪いが，北側で約0.20mの深さを残す。床面は西側に低く，比高は約10cmある。土壙墓内に須恵器杯蓋・身，平瓶，土師器高杯，鉄鏃などが出土した。



第 67 図　１・２号土壙実測図（1/30）



第 68 図　2号土壙出土土器実測図（1/3）

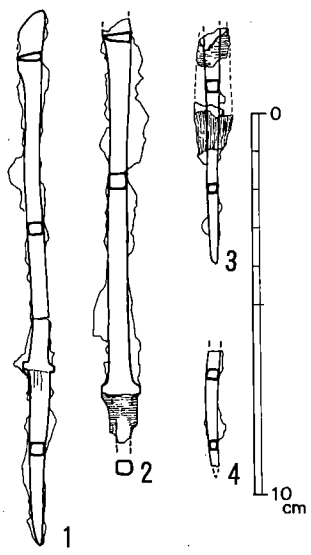
出土遺物（図版32-2，第68図）

須恵器杯蓋（1・3）　1は南東部出土の約半分を失う杯蓋で，身受けのかえりがあり，天井部に扁平な宝珠形つまみをもつ。復原口径14.8cm，器高4.2cmの大きさで，かえりの端部は内側に隠れる。外天井は回転ヘラケズリされている。良好な焼成で，灰色を呈している。3はほぼ中央から出土した完形の杯蓋で，身受けのかえりがあり，天井部に扁平な宝珠形つまみをもつ。口径15.3cm，器高3.0cmの大きさで，かえりの端部は内側に隠れる。外天井は回転ヘラケズリされている。良好な焼成で，淡緑灰色を呈している。

須恵器杯身（2・4）　2は南側出土の杯身で，高台をもつ。口径14.6cm，器高4.9cm，高台径10.1cmの大きさで，口縁部は外反し，高台は低くハ字に開く。硬い焼成で灰色を呈している。4は中央部西側出土の杯身で，高台をもつ。口径14.5cm，器高4.9cm，高台径10.3cmの大きさで，口縁部は外反し，高台は低くハ字に開く。硬い焼成で灰色を呈している。

須恵器杯（5）　4の杯身の西端に重なって出土した。口径9.3cm，器高4.7cm，高台径4.9cmの大きさで，口縁部は直線的に開き端部で僅かに外反する。高台は外方に跳ねる。硬い焼成で淡灰色を呈している。

須恵器平瓶（6）　南西隅で出土した。体部の1/3を失うが，口径8.6cm，器高15.5cm，復原



第 69 図　2号土壙出土鉄器実測図（1/2）

胴最大径16.0cmの大きさ。口頸部は緩く外反して開くが，口縁下に2条の沈線が巡る。体部は高さ10.3cmで，胴部下半はヘラケズリされ，底径9cm弱の底部は底面が僅かに凹む。ややあまい焼成で淡い灰白色を呈している。

土師器高杯（7）　西端部で出土した。完形で，口径13.5cm，器高9.0cm，脚裾径9.3cmの大きさ。杯部は高さ4.0cmを占めて，口縁部は内彎して立ち上がる。脚部は大きく開き，内外面ともにヘラケズリされる。胎土に赤褐色粒を多く，角閃石・砂粒も含み，茶褐色に焼成されている。

鉄　鏃（第69図1～3）　1・2は北端部で出土した。長い箆被部をもつ細根の片刃鏃である。1は全長14.0cmを測る。2は先端・基部端を欠き，現存長11.2cmを測る。棘から基部側に木質が残る。3・4は，出土時にもう少し長い破片だったが，脆弱で破損した。3は現存長6.1cmで木質が残り，4は現存長3.0cmの基部破片である。

砥　石（第77図1）　須恵器杯身4の南側で出土した。乳白色を呈する軟質の凝灰質砂岩の砥石で，長さ4.0cm，幅1.9cm，厚み1.3cmの7面をもつ7角柱状で，各面ともによく使用されている。

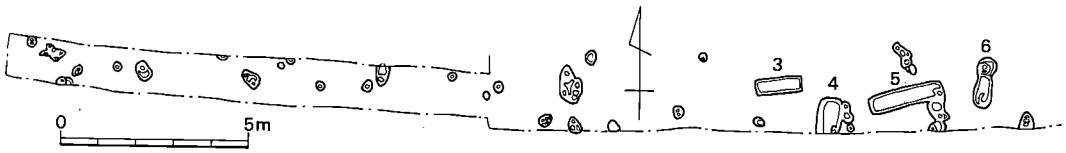
3号土壙（図版33-1・2，第71図）

3～6号土壙は調査区南西隅部の，標高49.5m位に占地している。

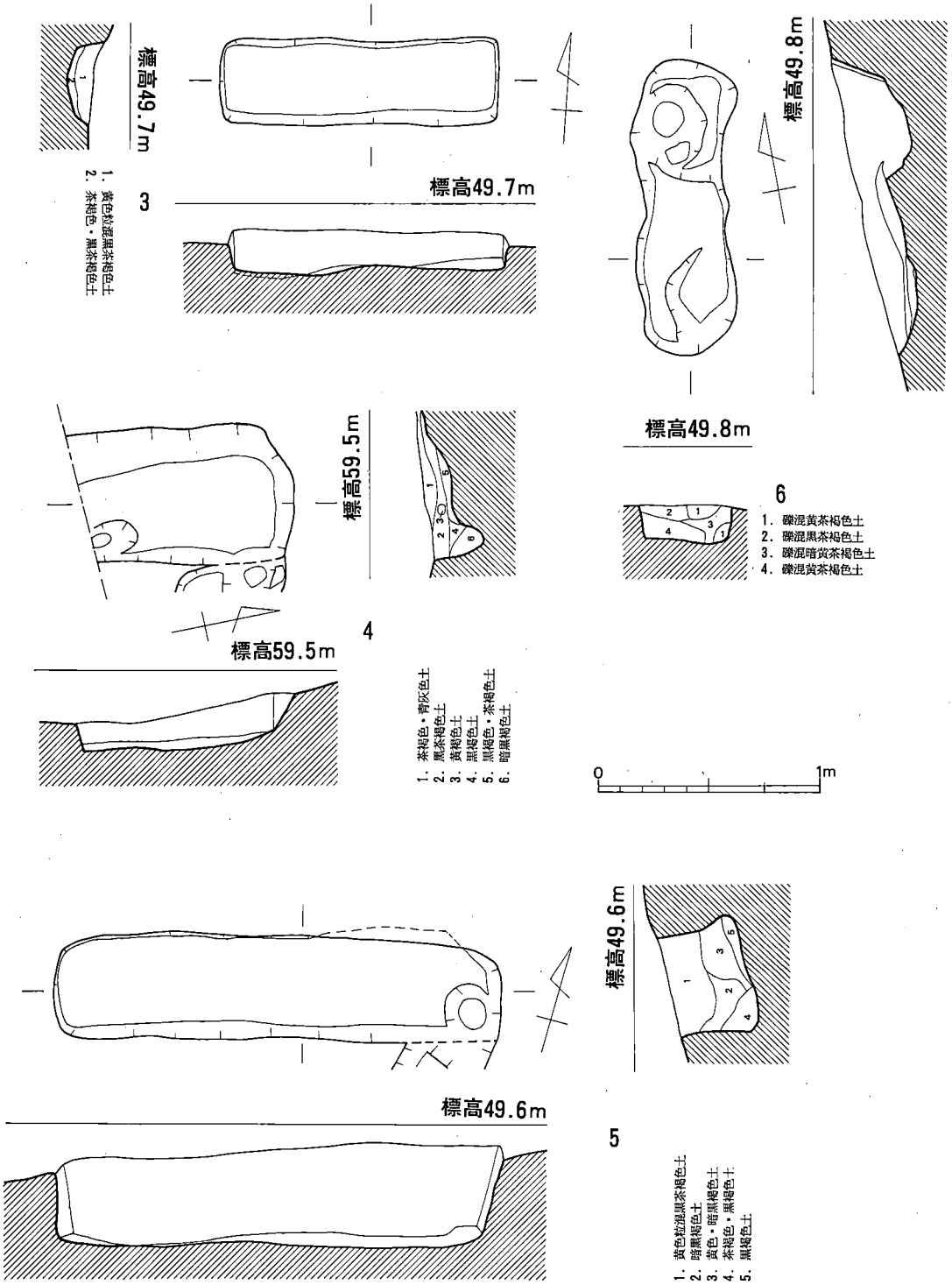
3号土壙は，主軸方向をN84° 30′ Eにとる，下整長方形プランの土壙で，長さ1.27m，幅0.39mの広さをもち，南側は削平されて残りが悪いが，北側で約0.20mの深さを残す。床面は西側に低く，比高は約8cmある。土壙内には暗茶褐色土が詰まっていたものの，なんらの遺物も検出されなかった。

4号土壙（図版33-3，第71図）

3号土壙の南西側に隣接して検出された土壙で，南側は調査区域外に潜る。主軸方向をN



第 70 図　3～6号土壙配置図（1/200）



第 71 図　3～6 号土壙実測図 (1/30)

10°Eにとる，不整長方形プランの土壙で，長さ1.00+αm，幅0.61の広さをもち，約0.15mの深さを残す。北側の壁は緩傾斜で，床面は西側にやや低くなり，南西隅に小さなピットがある。土壙内には暗茶褐色土などが堆積していた。遺物は全く検出されなかった。

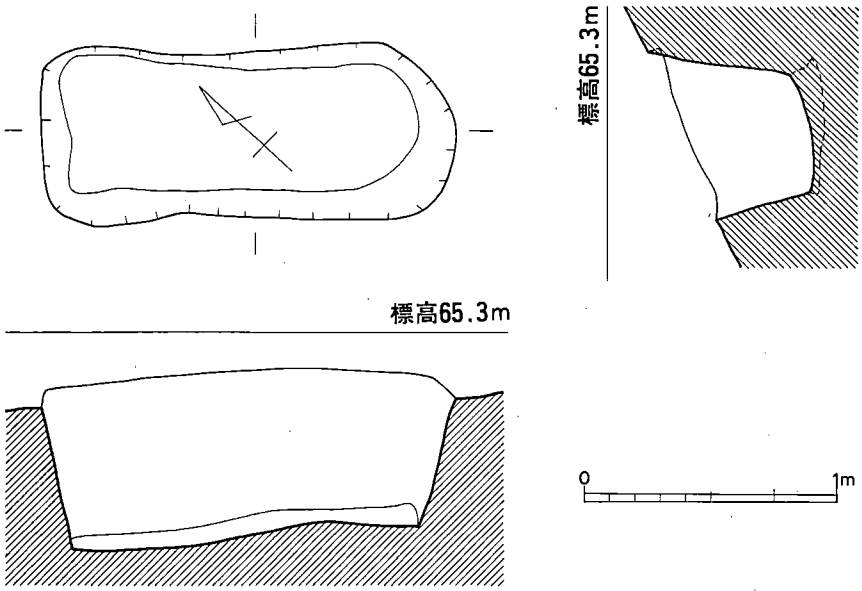
5号土壙（図版34-1，第71図）

4号土壙の東側に隣接して検出された土壙で，主軸方向をN75°Eにとる，不整長方形プランの土壙で，長さ2.02m，幅0.50mの広さをもち，約0.40mの深さを残す。南東隅は木根穴があって攪乱を受けている。北側の壁がオーバーハングし，床面は北側がやや高い。土壙内には暗黒褐色粘性土などが堆積していた。石製紡錘車が1点出土した。

石製紡錘車（図版　，第　図2）　直径4.4cm，厚さ1.1cm，重さ40.5gを測る。縞雲母片岩製で，周縁は丁寧に研磨され，径6㎜の穴が穿孔されている。

6号土壙（図版34-2，第71図）

5号土壙の東側に隣接して検出された土壙で，主軸方向をN10°Eにとる，不整長楕円形プランの土壙で，長さ1.33m，幅0.36～0.42mの広さをもち，約0.15mの深さを残す。北側はやや深い穴になって約0.35mの深さがあり，床面は中ほどやや高い。土壙内には暗茶褐色粘性土などが堆積していた。遺物は全く出土していない。



第72図　7号土壙実測図（1/30）

7号土壙（図版34-3，第72図）

3号墳前面の斜面にあり，墳裾の約3m南西側，標高65mに位置する。長さ1.63m，幅0.65～0.70mを測る，不整長方形の平面形を呈し，主軸方向は斜面の傾斜に直交するN43°Wである。南西側は浅めだが，北側で0.60mの深さに残る。土壙内から馬歯が出土したが，遺存状況は悪く，現在所在不明である。

6．その他の遺構と遺物

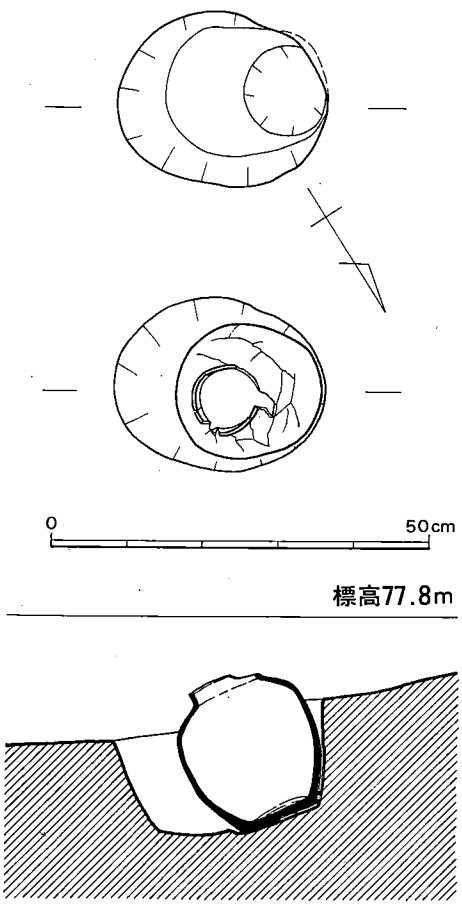
1号火葬墓（図版35-1，第73図）

尾根の南東斜面で，標高77.7m位の所に検出された。1号墳の東方約22mに相当する。

蜜柑栽培の為に段々畑に造成された狭い平坦面にあり，調査前には全く存在が予想されなかった。ユンボによる全面表土剝ぎによって骨蔵器が発見された。この時に不注意に上部を少し削平してしまった。このため即座に排土を精査して，破片を集めて復原し，記録作成したが，蓋破片はこの時既に半分しか残っておらず，本体側口縁部に古い割れ目があって，畑造成時に削平されて失っていた可能性が高い。

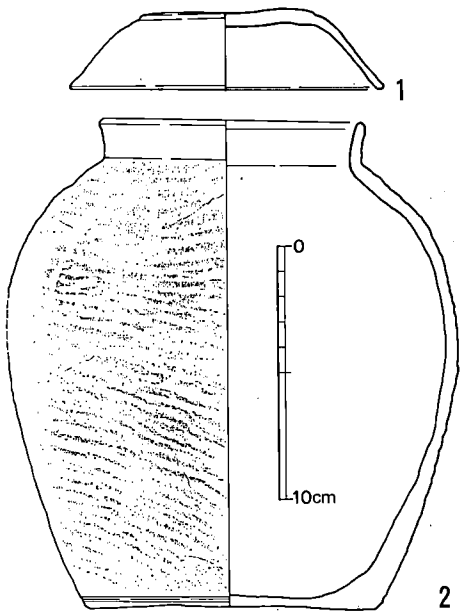
土壙は，風化して脆くなった岩盤を掘り込んだ，長径28cm，短径23cmの大きさの穴で，壁面・底面に岩盤の節理による角が現れて凹凸がある。残存する穴の深さは13～14cmである。

骨蔵器本体は，主軸方位N57°Wをとり，南東側に約23°傾く埋置角度に据えられている。中には若干の木炭と多数の焼骨片が入れられ黒色土が下半に詰まり，褐色土が中程から上半に詰まっていた。

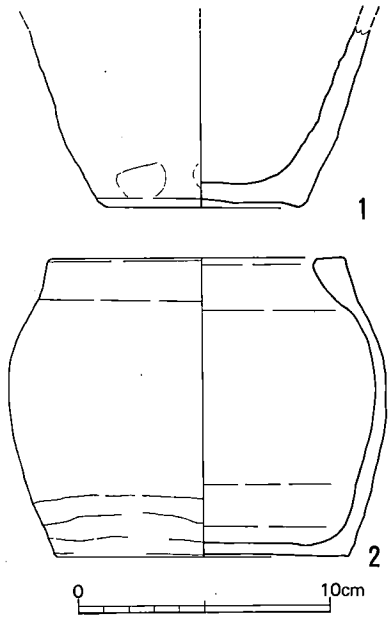


第73図　1号火葬墓実測図（1/10）

1号骨蔵器（図版35-2，第74図）



第 74 図　1 号骨蔵器実測図 (1/3)



第 75 図　2・3 号骨蔵器実測図 (1/3)

土師器杯（1） 復原口径12.4cm，器高3.2cmの大きさの杯で，外底面はヘラ切りされる。胎土に砂粒・褐色粒・金雲母を含み，淡茶褐色に焼成されている。

須恵質壺（2） 口径10.6cm，器高19.3cm，胴最大径17.8cmの大きさの壺で，僅かに外反する口縁部は短く，端部で丸みをもつ。胴部はずんぐりとし，やや中凹みの平底は底径11.5cmを測る。胴部全体に平行タタキ痕が残り，底部外に 1 条の沈線が巡る。口縁部および内面全体にナデ調整されている。胎土に砂粒を含み，軟質の焼成で，白灰色ないし暗灰色を呈している。

1 号骨蔵器蓋に使用された土師器杯の法量から，9 世紀中頃前後の年代が与えられよう。

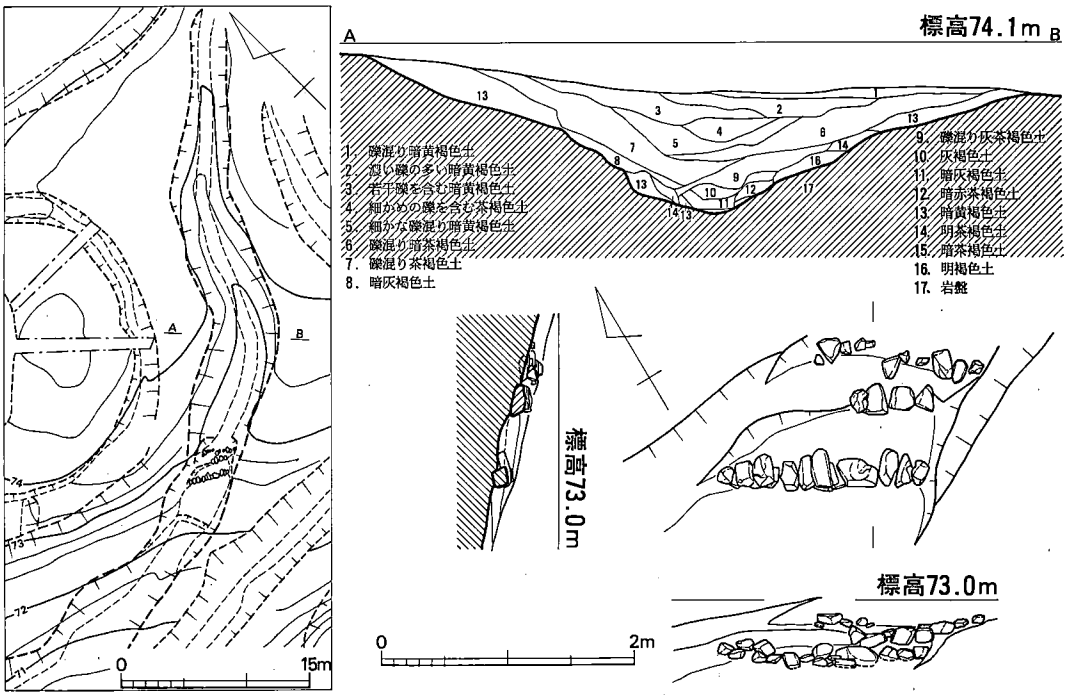
2 号骨蔵器？（図版35-2，第75図）

遺構は分らないが，1 号墳の主体部崩落土中に発見された壺底部で，上部は残らないが，骨蔵器の可能性がある。

須恵質壺？（1） 底径8.0cmを測るやや中凹みの底部から胴部が膨らむ。内外面ともにナデ調整されている。胎土に細砂を含み暗黄褐色に焼成されている。

3 号骨蔵器？（図版35-2，第75図）

遺構は分らないが，3 号墳の北西方調査区端で，表土下から出土した。なお付近から，天目茶碗片も出土した。



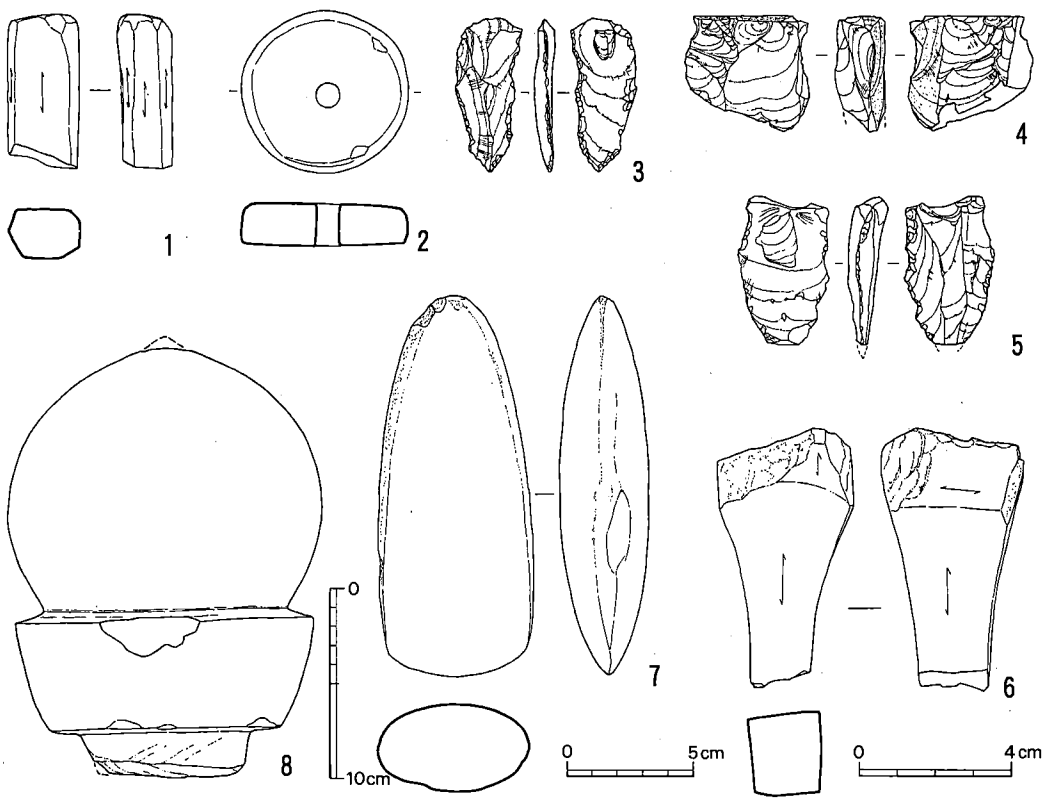
第 76 図　通路遺構実測図（1/300・1/60）

土師質壺（2）　口径11.8cm，器高11.8cm，胴最大径15.0cmの大きさの壺で，内傾する口縁部は短く，内側に肥厚する。底径11.6cmを測る底部は平底で，胴は膨らむ。全体に回転ヨコナデ調整され，明茶褐色に硬く焼成されている。用地外にある近世墓と関連する遺物であろう。

通路遺構（図版36−1・2，第76図）

2号墳と3号墳の間には，切り通しを伴う里道があり，1号墳と2号墳の間を抜けて，1号墳背後の尾根線へ登っている。その先はC地区・D地区の方に続くようだが，調査に入った段階には，C地区側に掘削が進んでいたのも残る部分にも防火帯などがあって，尾根上の様子はわからない。この道は，山田集落から麻底良山に登る道としても使用されていたという。

ところが，全面の表土を剝いで遺構検出を実施したところ，この道と2号墳周溝の間に落ち込みが確認された。これを精査した結果，床に細かな砂が互層状に堆積し，一部階段状に整えられた所がある。上幅で2～5m，最大深さ1m余りの観模で，岩盤を最大0.8m程掘り込んでいる。岩盤まで開墾の削平を受けて，斜面上側は不明瞭になるが，里道に続く可能性がある。また斜面下側は，崖で切られてしまうが，こちらも里道に繋っていたであろう。即ち新たに検出された通路遺構は，現里道の旧道と考えられる。おそらく，階段を伴う急な道より，現道の大きくカーブするコースへ，緩やかな道へとの志向から移行されたのであろう。ただ，その契

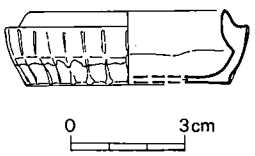


第 77 図　石器・石製品実測図（1～6は1/2，7は1/3，8は1/4）

機として、2号墳部分の開墾も想定されよう。

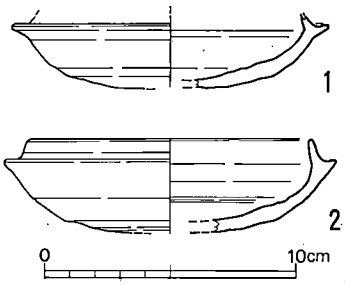
通路遺構周辺出土遺物（図版36-3，第77図）

五輪塔（第77図8）　1号墳の北北西方向の通路が不明瞭になる辺りの表土中から出土した。空風輪で，風輪基部は平坦に削られている。空輪頂部の突起を欠くが，残存する全高は22.5cmで，このうち2.5cm分が火輪に嵌め込まれる「ほぞ」の高さである。空輪は地形に近く，最大径は16.5cmを測る。風輪は高さ6.0～6.5cm，上端の径15.6cm，下端の径12.0cmで，空輪との境目は径13.0cmにくびれる。凝灰質安山岩と思われる石材を用いていて，ほぞの部分に削り痕が残るものの，外面はよく研磨されている。

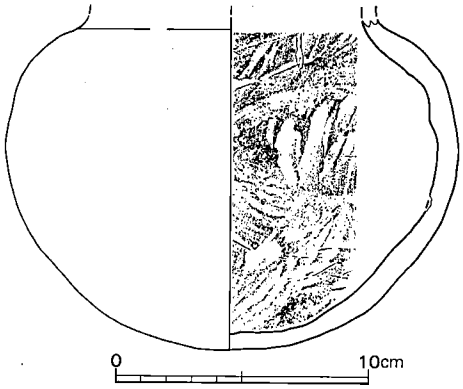


第 78 図　合子実測図（1/2）

青白磁合子（第78図）　3号墳の周溝Ⅱ区とⅢ区の間の上部から出土した。約1/3程の破片だが，復原口径5.2cm，外径6.4cm，器高2.0cmを測る。花弁状の切込みを施した合子身で，内面と外面



第 79 図　表採土器実測図（1/3）



第 80 図　南裾部出土土器実測図（1/3）

上半にうすい空色を呈する釉がかかっている。

土師器などの出土をみないが，五輪塔・合子は，中世のものと考えられ，墓にかかわる遺物であろう。

その他の土器

須恵器杯身（第79図１・２）　１号墳の南西方で採集した破片で，蓋受けのかえりをもつ杯身である。１は復原外径11.6cm，器高3.6cm程で，外底面はナデられる。２は復原外径13.2cm，器高3.7cmで，外底面は回転ヘラケズリされる。

須恵器壺（第80図）　調査区南裾部の平坦地（903−２番地）で，遺構存在有無の試掘調査時に，耕作土下の床土から出土した。口頸部を欠くが，胴最大径17.9cm，残存器高13.0cmの大きさで，やや扁望形を呈する。丸底の底部から胴部にかけてはナデ調整されるが，内面には同心円当て具痕が残る。黒灰色に焼成されている。

なおこの地点は削平を受けていて，なんらの遺構も検出できなかった。

その他の石器（第77図）

削　器（３・５）　３は１号墳墳丘下の堆積土から出土した。黒色の黒曜石縦長剝片の側縁にわずかな調整と使用痕がみられる。長さ4.1cm，幅1.6cm，厚さ５㎜を測る。５は３号墳南側の斜面下位で採集した。黒色の黒曜石縦長剝片の側縁に使用痕がみられる。先端部を欠くが，残存長3.8cm，幅2.2cm，厚さ８㎜を測る。

石　核（４）　１号墳墳丘下の堆積土から出土した。黒色の黒曜石製で下部を欠く。縦長剝片などを剝ぎ取った残核であろう。残存長3.0cm，幅3.3cm，厚さ1.3cmを測る。

磨製石斧（７）　１号墳石室内の堆積土から出土した。輝石安山岩製で，長さ15.0cm，幅5.5cm，厚さ3.5cmを測る。

7．おわりに

A地区で調査した古墳3基は，いずれも胴張りの平面プランをもつ両袖複室構造の横穴式石室を主体部にしている。3基の石室を比較すると，玄室の規模は近似するものの，前室の規模で，1号墳より2号墳，2号墳より3号墳が小さい傾向がみられる。出土土器では1・2号墳ともに6世紀後半ないし末頃で大差がなく，3号墳には6世紀末から7世紀初頭頃の土器が出土し，占地などの状況からして，1→2→3号墳の順に構築されたものと考える。

胴張りの石室は，筑後地方に特有的で一部筑前の甘木・朝倉地方にも分布する。磚にも似た扁平な片岩を入手し易い地域であることに，その要因の一つがあると考えられる。甘木・朝倉地方で発掘調査された胴張り複室石室は狐塚古墳，千代田古墳，柿原遺跡群のD地区・EF地区・G地区・H地区・I地区などの古墳群，大岩東部2号墳などがある。(註1a～1c)。

これらの古墳では，筑後地方に6世紀中頃の例があるものの，甘木・朝倉地方では中頃の例を知らない。中頃以降に流入したのであろうか。6世紀後半ないし末頃とされる柿原遺跡群の古墳のうち，玄室の長さと幅の比で長さの優るH3号墳などと，ほぼ同じ長さになるG1号墳やI2号墳では，前者が先行する可能性が高い。6世紀末以降，玄室は矮小化しつつ長さと幅が同規模になり，前室は7世紀に入る頃に大型化して狐塚古墳のように玄室と前室が同規模あるいは前室が優るかのようになるものの，7世紀前半以降はまた前室が小型化して羨道と区別しがたい例も現れ，柿原D・EF地区の斜面に群集する古墳では7世紀後半ないし8世紀にかけて築造されている。

山田1・2号墳はこのようななかで，玄室が矮小化しない段階に，ぎりぎりかかる6世紀後半でも末に近い頃，3号墳はこれに続く6世紀末から7世紀にかかる頃に該当するであろう。

石棺墓は，鉄剣1と鉄鏃1のみ副葬され，土器をもたないが，石棺の形状や鉄剣から5世紀代までに考えておきたい。

山田遺跡群では，昭和8年に内行花文鏡片・内行花文鏡をそれぞれ出土させた2基を含む4基の石棺墓が知られ，山田ウラ山遺跡とされている(註1a)。第3図の左下隅がその位置とされる煙草乾燥場跡であり，道路拡張部分を一部試掘したがなんらの遺構も検出できなかった。

土壙は7基あり，うち2号土壙は出土土器から7世紀末頃の年代が与えられる。

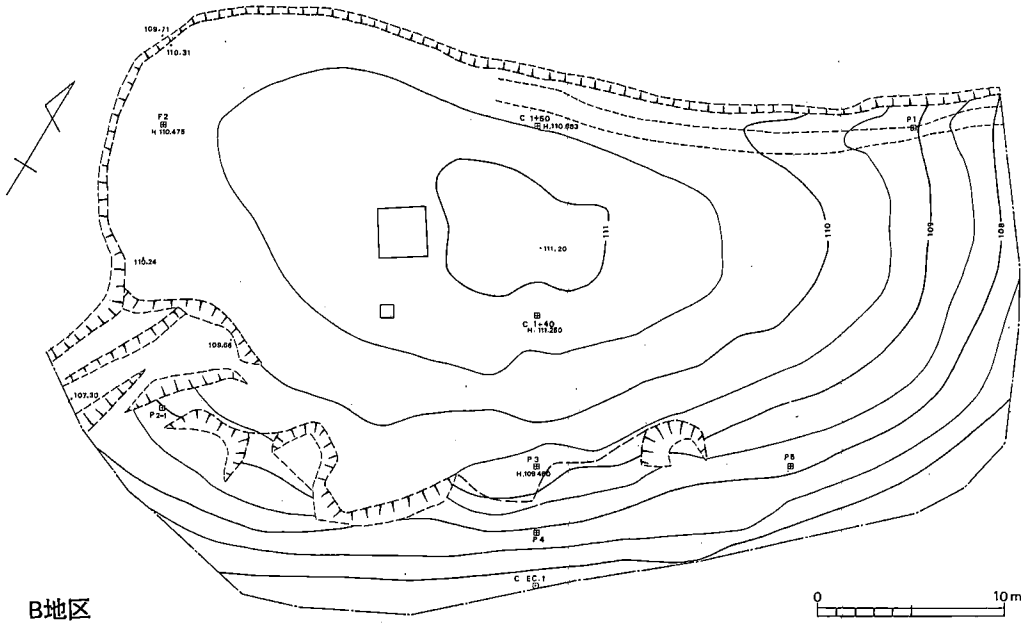
また，9世紀中頃の1号骨蔵器や，時期を特定しがたいが通路遺構なども調査した。

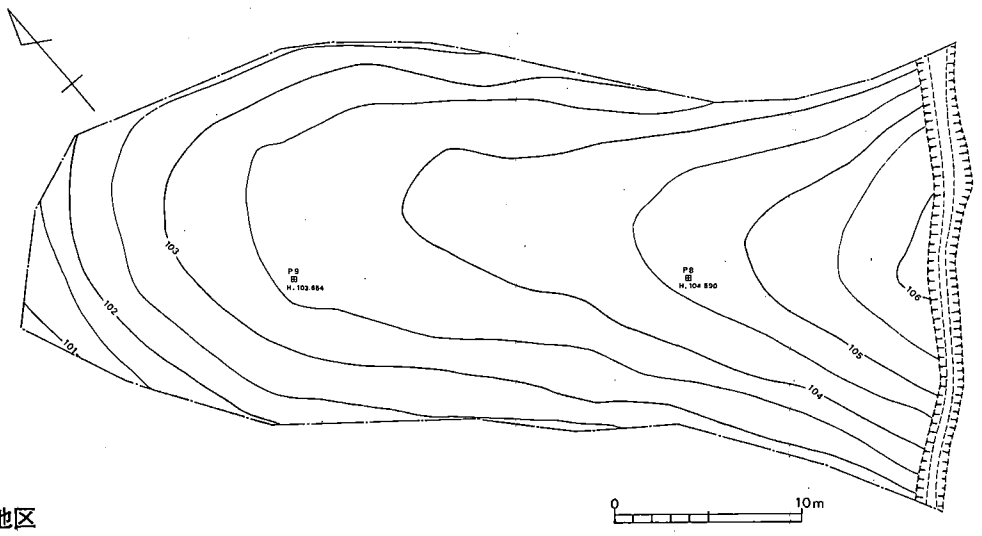
なお，B・C地区については地形測量を実施したが，その後の試掘調査を経て，全面発掘調査には至らなかった。測量図のみ次頁に掲載しておきたい。　(小池)

註1a　福岡県教育委員会　1957　福岡県文化財調査報告第17輯

1b　福岡県立朝倉高等学校史学部　1969　埋もれていた朝倉文化

1c　福岡県教育委員会　1984・1986・1987・1990　柿原遺跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告4・6・12・19





第 81 図　B・C 地区地形測量図 (1/400)

Ⅳ　D地区の調査

1．はじめに

山田サービスエリアが設置される場所は，九州山脈の主脈から派生した山並みが筑紫平野をのぞむごとく形成する朝倉低山地の一つである麻底良山（標高294.9m）から，右手に奈良ケ谷の小谷を見ながら西南の方向へ延びてきた丘陵の先端付近である。その先端部は尾根筋が一段低くなったあとにまた小高くなって独立丘陵的観を呈している。

ここの尾根筋上に土塁状の高まりや堀切の如き溝が存することは以前から知られており，山田古墳群の調査の折にもその存在が注意されてはいた。しかし，明確に土塁や堀切であるとかの確認はできずじまいであった。

ここに報告する分は，サービスエリアとして造成した用地の境界付近に残存する土塁について，工事の進捗に伴っての周辺の地滑りの危険性が生じ，それとともに土塁も崩落するかもしれないという危惧が抱かれたことにより，急拠追加の調査を行ったものである。

調査は，昭和60年（1985）2月23日に一度現地を立会したあと，同3月5日に実施した。担当したのは文化課・木下修と伊崎俊秋である。

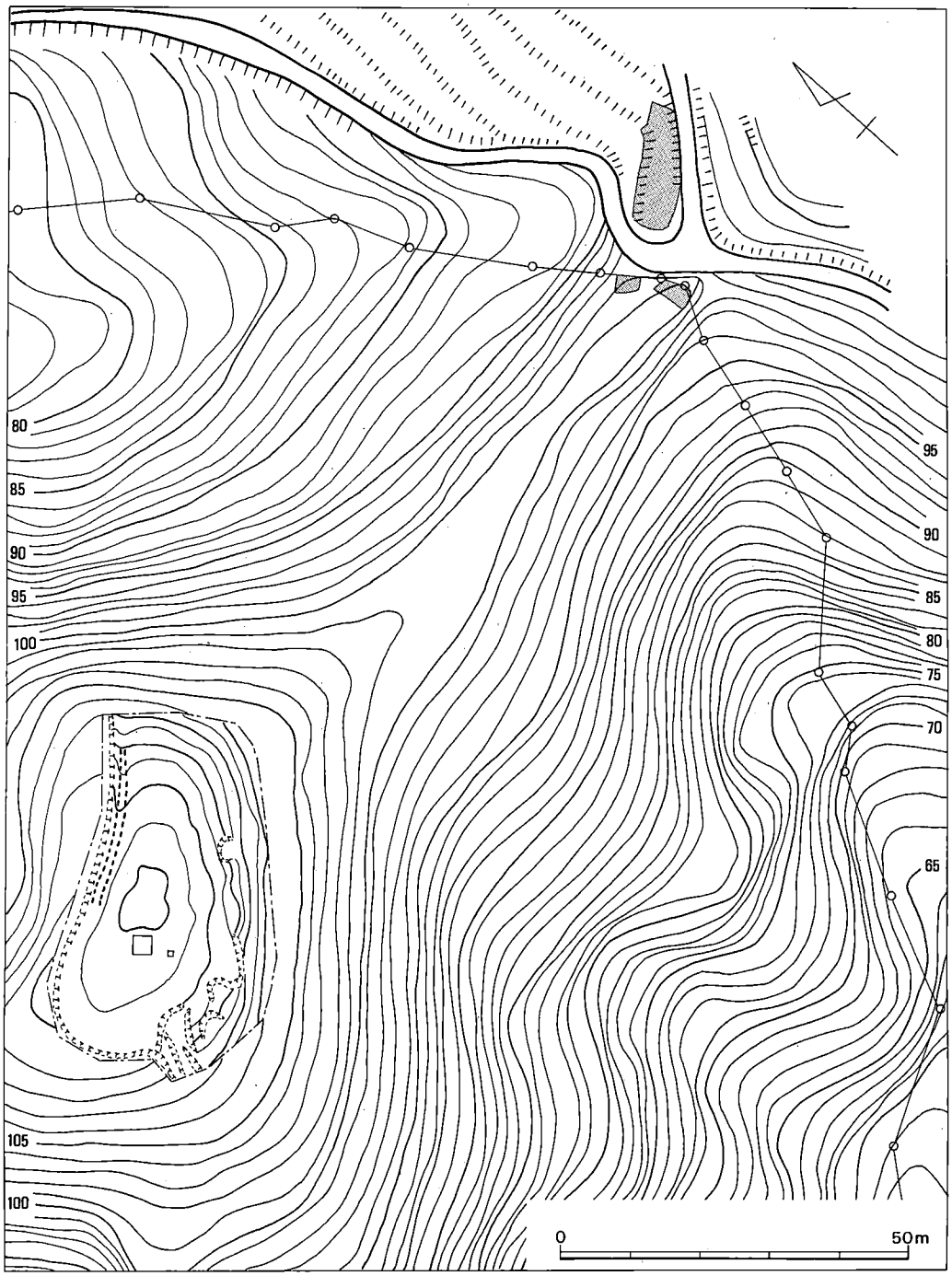
なお，この地区をD地区として報告する。

2．調査地の立地と状況（第82・83図）

このあたりの丘陵の鞍部や斜面は造成されて柿畑となっているが，それに関連しての農道が麓から蛇行しつつ造られている。今度の調査地点も，その農道が尾根上で分岐してゆく付近にあって，標高100m前後を測る。

現地で見たところでは，もと尾根上に東西方向に存した土塁がこの農道で分断され，その残骸が第83図に示すⒶⒷⒸとして残っているとも考えられた。そうであるとすれば，もとの土塁は裾部の幅10mにも及ぶ大きなものであった可能性もある。

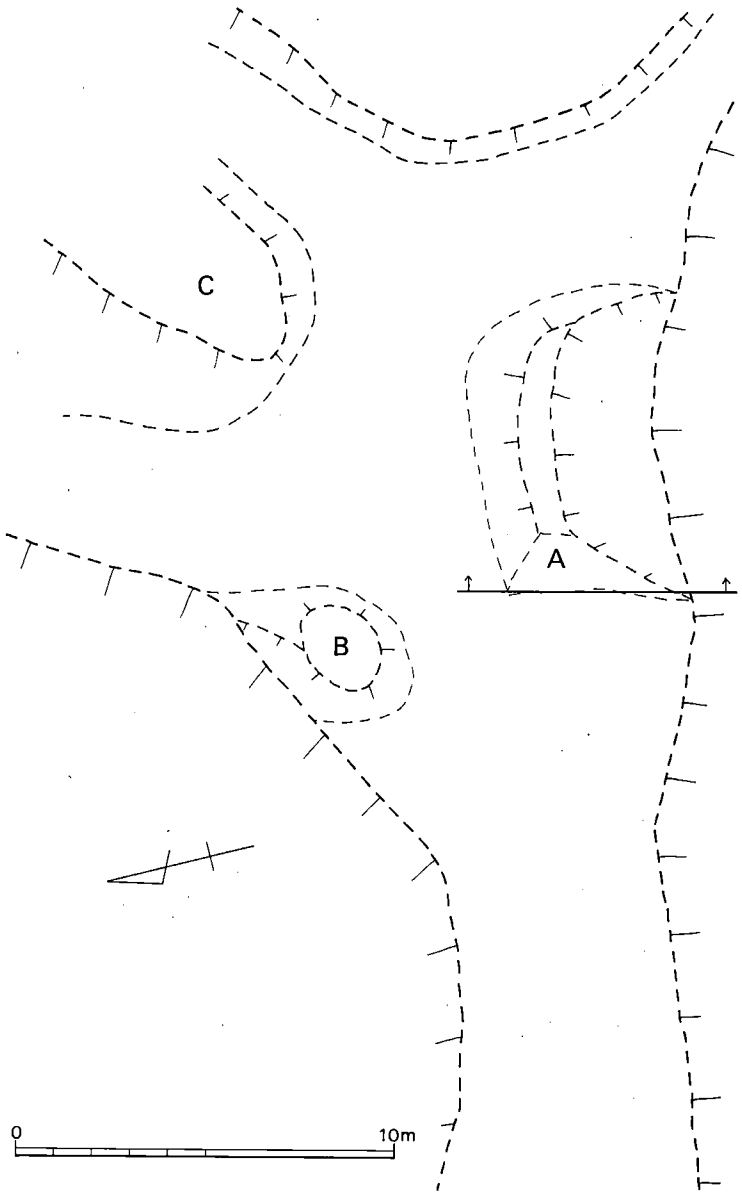
しかしもうひとつの見方もできる。それは，Ⓐの土塁は後述のように断面観察によって北側が削られていることは明白であるが，これが大きな削平でなかったとした場合，ⒶとⒷの間，ⒷとⒸの間などが土塁の途切れた部分として当初からの縄張り工程にあったとするものである。いまはいずれとも判じ難いが，地形的な状況を斟酌すれば後者が妥当であるかもしれない。



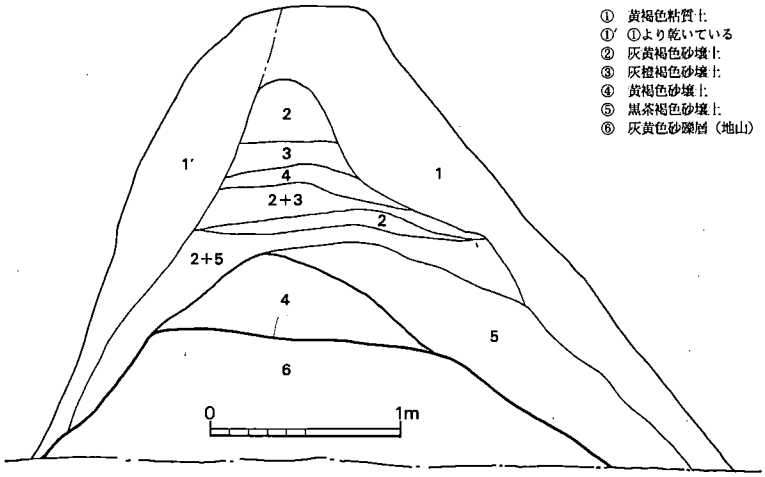
第 82 図　D地区周辺地形図（1/1000）

3．調査の内容

調査は，土塁周辺の地形測量と，用地内に入る土塁の断面観察とを行った。土塁周辺のあり方は前述のとおりである。



第 83 図　D 地区地形測量図（1/200）



第 84 図　D地区土塁断面実測図（1/40）

土塁Ⓐ（図版38，第83図）については，現況ではほぼ東西方向に約８ｍが残存していた。東側が低く，西に高く遺存している。その西端部分において断面観察を行った。

土層（第84図）は，まず灰黄色砂礫土の地山を台形状に削り出し，その上に土盛りを行ったものと見てとれる。地山削り出しは上辺1.5m，底辺３ｍ以上で，その上には黄褐色土，灰橙褐色土，灰黄褐色土を水平に近く積み重ねる。いわゆる版築状の積み方に近いが，同色系の土を用いていることもあって明瞭に版築とは言い難い。最上層に黄褐色の粘質土が表土層として被っている。北側が南側より急斜面となっているのは後世の削平によるものであって当初からではない。現状で基底部裾幅3.7m，高さ2.4ｍを測る。

遺物の出土は全くなかった。

4．おわりに

この調査は用地内に遺存した土塁の一部について測量と実測等の記録を行ったものであり，ごく狭い範囲の断片的なものであった。出土遺物もない中で，この土塁について云々するのは本意ではないが，思いつくままに少し触れてまとめとする。

まず，この土塁の性格についてであるが，これが人為的に構築されたものであることは明白であり，最も短絡的ながら想起しうるのは山城に付属する土塁の一部とすることである。この土塁の存する尾根を東北方向へたどってゆけば，標高294.9mの麻底良山に行きつく。ここは中世末期に秋月種実が築城したという麻底良城の存したところである。

麻底良城は，秋月藩士・大倉種周が著わした『古戦古城之図』(註1)によれば，山頂に40～50m四方の主郭があり，これより北東に100m程，西方に120m程の間には幾つかの郭が配されている。尾根筋を利用して郭を連続して配置する典型的な中世山城の縄張りを示したものである。

この麻底良城から南へ下って筑後川（千歳川）を眼下にのぞむ標高135.6mの所には，やはり中世秋月氏が出城にしたという本陣山城がある。麻底良城から本陣山城までと，今回調査の地点までとはほぼ同じくらいの距離になり，この山田の丘陵上にも山城がかつて存したとしても不都合はない。

また，山城の縄張りとして，郭が配置された所から尾根筋を延々と土塁が築かれている例をいくつか見ることができる。(註2)それが1㎞以上に及ぶ例は寡聞にして知らないが，存したとしても不思議ではない。

本跡の周辺の低丘陵は過年の柿畑等への造成によってかなり改変されている。今次の土塁もそのような中で辛うじて残存していたものであり，これが果たして麻底良城から続くものなのか，あるいはこの近辺に別の山城が存してのその一部なのかはわからない。ただ，山城に関連しての構築物であることは確かであるとみておきたい。B地区の東南端に堀切のような溝が存することと，A地区において中世期の遺物が出土していることは，C地区を中心としたあたりにかつて山城に関連する遺構が存したのかもしれない。

なお，山城に関連する土塁であったとしてもその築造の時期は，出土遺物が全くないこともあって不明とせざるを得ない。ただ，麻底良城に関連があるならば，戦国時代末期の16世紀中頃以降とする推測は可能である。（伊崎）

註1　「内閣文庫　大倉喜太郎献納本」甘木市教育委員会　1984　筑前秋月城跡Ⅳ　甘木市文化財調査報告第17集

註2　たとえば，京都郡苅田町松山城，築上郡椎田町広幡城のような例がある。

V　山田遺跡出土人骨について

1．福岡県朝倉郡，山田遺跡出土火葬骨

九州大学医学部解剖学第2講座　中橋　孝博

はじめに

九州中部を横断する高速自動車道の建設に伴ってこれまで多くの遺跡が発掘調査され，従来は比較的末調査地区の多かった同地域についても，人類学，考古学両面にわたって資料が蓄積されつつある。この一連の調査の過程で，1985年秋，福岡県南部，筑後平野の東端に位置する朝倉郡で，新たに火葬墓が検出された。僅かに一器の壺中から見いだされたものであり，また火葬骨であるため歪み，縮小，細片化が著しく，形態学的な比較検討は出来なかったが，当時の埋葬風習を追跡する上での基礎資料の一つになると考えられるので，以下に精査した結果を報告する。

遺跡・資料

遺跡：山田遺跡は，福岡県南部の筑後平野東端部，朝倉郡朝倉町（大字山田字浦山）の丘陵上に見いだされた遺跡で，九州横断自動車道の建設工事に伴い，1985年秋に発掘調査された。同遺跡では，古墳時代後期の墳丘（3基以上）の他，やはり古墳時代のものと思われる石棺（1基）や，7—8世紀所属の土壙墓（1基）など，古墳時代から中世に到る遺構，遺物が検出されている。人骨もここに報告する火葬骨の他，古墳時代の石棺中からも人骨片が出土している（別項参照）。

出土状況：火葬骨は丘陵東斜面で検出された器高約30㎝の壺（蔵骨器）中に見いだされたもので，後世の攪乱のためか，墓石や標石の類は検出されず，墓壙も明確ではなかった。

所属時代：主に土器等に対する考古学的考察からほぼ9世紀所属の人骨と考えられている。

観察結果

火葬骨について，同定部位を表示した。ほぼ全身各部の破片が見いだされるが，変形や小片化のため確認できない破片も多く，不明確な場合は確認不能として（？）を付した。

頭蓋や骨盤，あるいは四肢骨端など，火葬骨でも性判定に有効な部位が殆ど見あたらず，性

表1　山田遺跡出土火葬骨

時代	性別	年齢	遺存量	同定部位															
				頭	下顎	歯	脊椎	第2頸椎	肋骨	上肢骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手骨	骨盤	大腿骨	脛骨	腓骨	足骨
9世紀	不明	成人		○	○	×	○	×	○	?	○	○	?	○	?	○	○	○	?

（○：有り、×：なし、？：確認不能）

別は不明とするしかない。ただ，一部の四肢関節部の観察から，骨端線が無いことだけは確認でき，また，他部の骨厚などの観察所見も併せて，少なくとも成人年齢には達した人の遺骨とみなされる。

以下，観察所見を概括する。

- 全体量がかなり少なく，1体分としても，全量の約4割程度が遺存しているに過ぎない。
- 歪み，ひび割れ，小片化が著しく，原形を保っている部分は殆ど存在しない。
- 埋土の影響もあって，全体的に茶褐色を呈し，一部，青灰色の部分も存在する。
- 変形の度合，色調に大きな部分差は見られず，火熱に因って比較的均一な変化を受けている。
- 歯は歯根部も含めて一片も見いだせない。
- 以上の所見から，骨化した遺骨を焼いたのではなく，軟部をつけたままの遺体をかなりの高温度で（700—800度以上），各部に火が行き渡るように焼却した状況が窺える。
- 頭蓋片の量が全量に比較して，やや不自然に少ない。
- 第2頸椎の歯突起部は拾骨していない。
- 全体的には，四肢骨片が大半を占めるが，四肢骨の中では特に骨端部（関節部）が少ない。
- 四肢に較べて，脊椎や肋骨などの体幹部の骨が比較的少ない。
- 確認できる限りにおいては，遺存部に重複はなく，1体分の遺骨と考えられるが，他遺体の小片が混入している可能性は完全には否定できない。
- 成人骨のみで，子供の骨は見いだせないが，この点についても，小片が混入している可能性までは否定できない。

考察

周知のように仏教に関する埋葬習俗の一つとしての火葬は，文武4年（西暦700年），僧道昭が火葬されたのを起源とする（土井，佐藤，1979）。当初は一般的な風習ではなくて，例えば太

安萬呂（池田，1981）に代表されるような，高官，貴族，皇族，僧侶といった，上層階級に限られた埋葬形態だったとされている。今回の出土例では一応蔵骨器に埋納されていたが，当遺跡では後世の攪乱があるため，この上にどういう埋葬施設が整えられていたのか不明であり，残念ながら骨の観察所見にもそうした被葬者の出自を示唆するような特に目立った傾向，特色は見いだせなかった。ただ，近隣の多くの事例（中橋，1988，1992a，b）と同様，今回もまた，火葬された遺骨が成人のものであったことは，この埋葬習俗の当時の実態を窺う上で多少は参考になるかもしれない。また，真宗門徒等で現在も続けられているような第2頸椎を特に意識した拾骨は（国分，1985；中橋・永井，1985）していないらしいことも，近隣の火葬墓との共通した傾向として指摘しておきたい。分骨して他所にそれらを埋葬していることも考えられなくはないので，この問題は単純には結論づけられないが，埋葬習俗の歴史的変遷を追う上で一つの興味ある課題になると思われるので，今後とも注視していきたい。

謝辞：当人骨を研究する機会を与えて頂いた福岡県教育委員会の諸先生，諸氏に深謝いたします。

文　献

池田次郎（1981）：『出土火葬骨について」 太安萬呂墓，奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊，奈良県立橿原考古学研究所編。

国分直一（1985）：「吉母浜の中世墓制―特にその葬俗をめぐって」 吉母浜遺跡，下関市教育委員会。

土井卓治・佐藤米司（1979）：「総論」 葬送墓制研究集成1，名著出版。

中橋孝博（1988）：「1区中世墓出土の火葬人骨」 小郡市文化財調査報告書　第59集，小郡市教育委員会。

中橋孝博（1992，a）：「福岡県朝倉郡大迫遺跡出土の火葬骨」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書，福岡県教育委員会（印刷中）。

中橋孝博（1992，b）：「福岡県甘木市大佛山遺跡出土の中世火葬骨」 甘木市埋蔵文化財調査報告書，甘木市教育委員会（印刷中）。

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」 吉母浜遺跡，下関市教育委員会。

2．山田1号石棺墓出土人骨について

九州大学医学部解剖学第二講座　土肥　直美

はじめに

福岡県の南部，朝倉郡朝倉町所在の山田古墳群は，九州横断道山田サービスエリア建設にともなって発掘調査が行なわれた。この地域は筑後川の中流域にあたり，福岡平野や佐賀平野のような渡来系の形質をもつ人々が多くみられる地域と，大分県山間部地方のように在来の形質を色濃く保有する地域との中間に位置している。したがって，形質人類学的にも非常に関心のもたれる地域である。しかし，この地方からの人骨の出土例は少なく，今回の出土は古墳人骨の貴重な追加例である。人骨は残念ながら保存不良であり，形質の詳細を知ることはできなかった。形質については更なる追加例を待ちたい。以下に出土人骨の所見を報告する。

出土人骨および所見

人骨は1号石棺墓より出土した1体分のみである。

1）保存状態

保存部位は図1に示すように頭蓋骨の一部だけである。骨質ももろく，かなりの部分の外板と内板が剥離していた。注意深く復元したところ，頭蓋骨は頭蓋冠の左半部が比較的よく残存することが分かった。

2）性別と年齢の推定

性別は，残存する前頭骨の形状や推定される全体的な頭蓋冠のサイズから，男性と考えてほぼ間違いないと思われる。

年齢は，頭蓋骨の厚さやサイズから成人に達しており，しかも縫合は矢状および冠状ともに開離していることから，比較的若かったと推定される。すなわち被葬者は20代から30代の成年であったと考えられる。

まとめ

朝倉町山田古墳1号石棺墓より，古墳時代人骨1体分が出土した。保存状態は悪く，主として左側の頭蓋冠片が同定可能であった。頭蓋骨片の形状から被葬者は成年の男性と推定された。

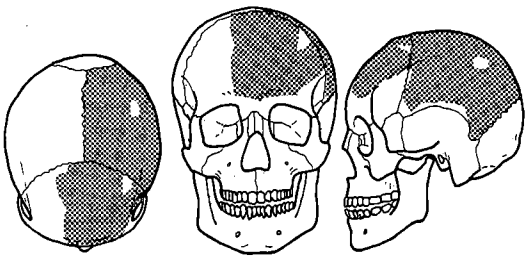


Fig 1．1号石棺墓人骨の保存部位

図　　版

山田遺跡群周辺航空写真（国土地理院　提供）

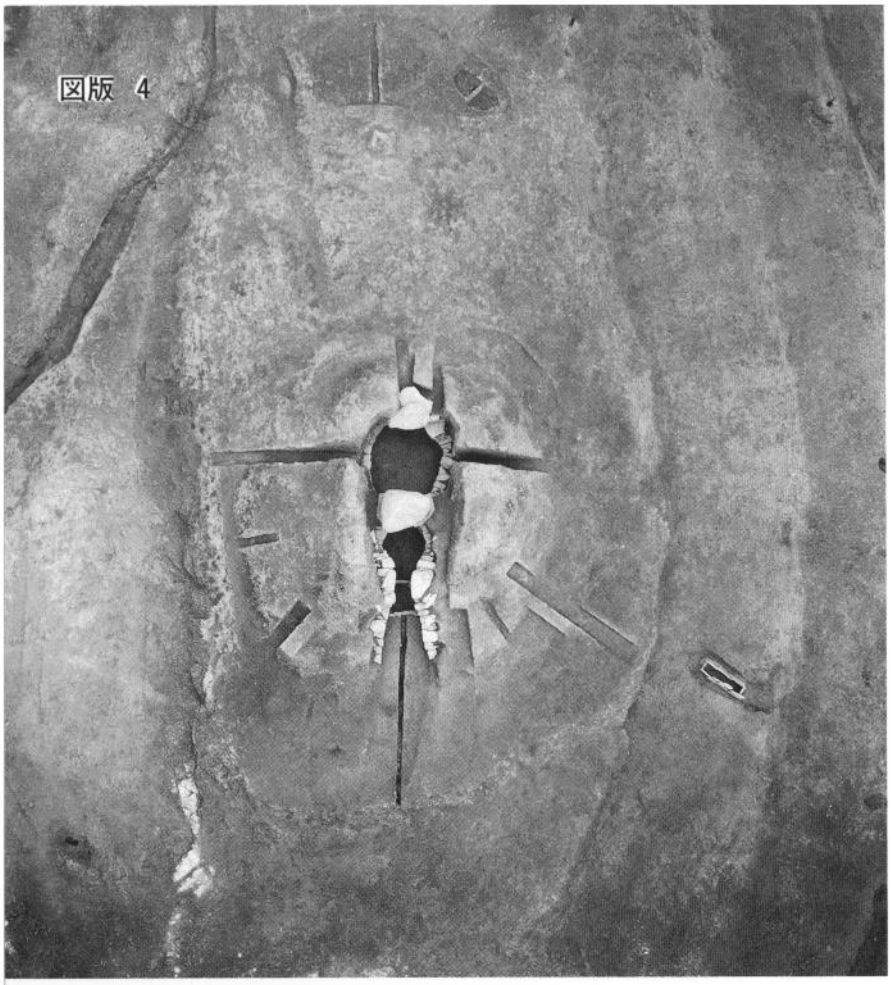
1

2

1　山田遺跡群遠景（西から麻底良山側に望む）　　2　山田遺跡群全景

1　A地区全景

2　A地区1～3号墳



1　1号墳全景

2　1号墳石室全景

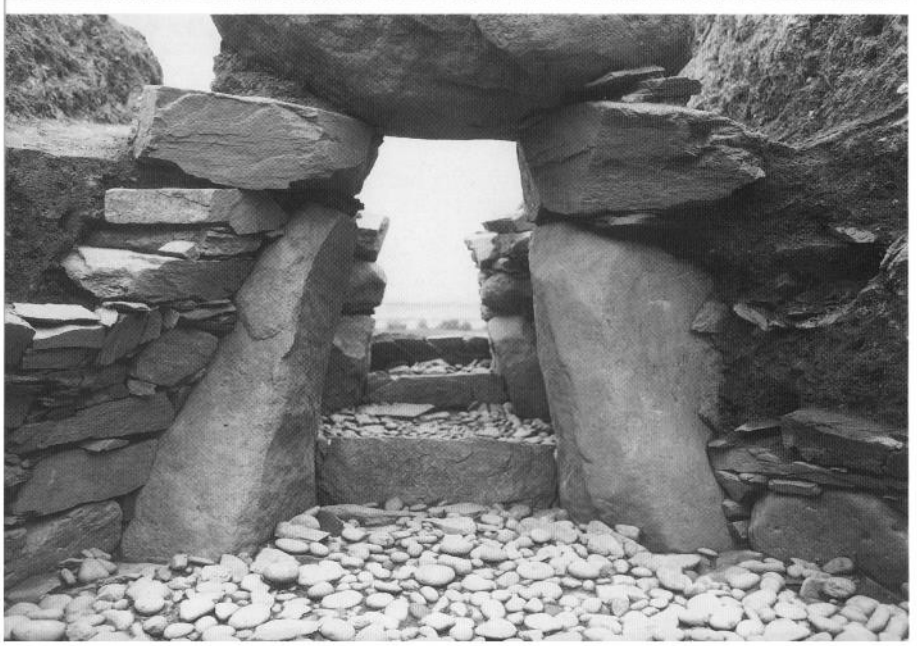
1　1号墳石室前面

2　1号墳前室左側壁

3　1号墳前室右側壁

1　1号墳石室前門（前室から）

2　石室玄門（前室から）



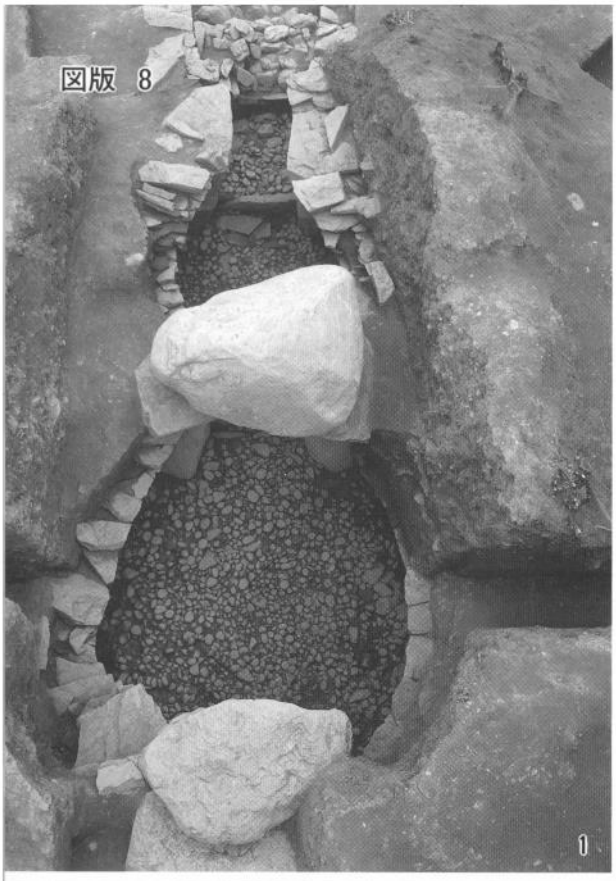
3　石室玄門（玄室から）

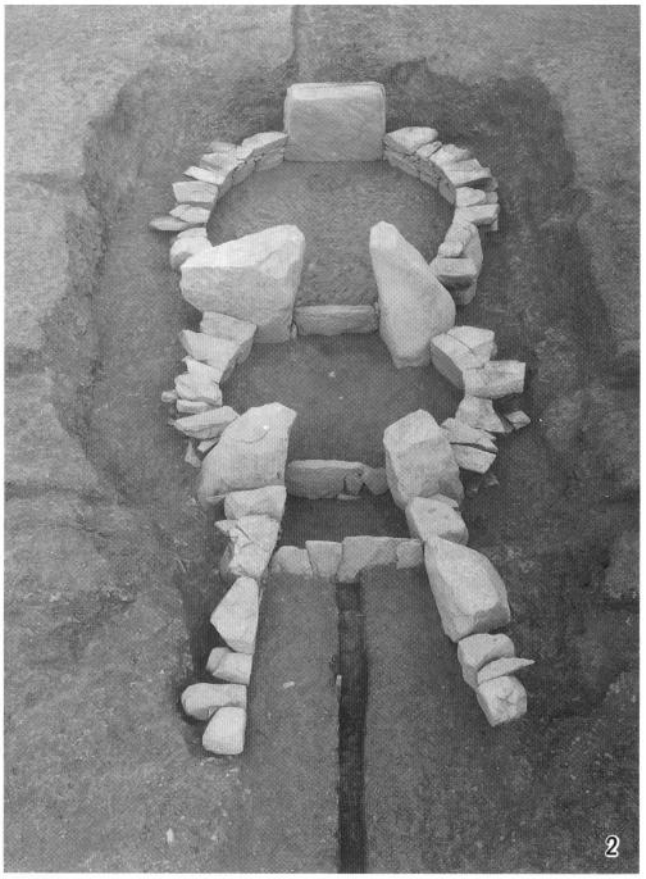
1

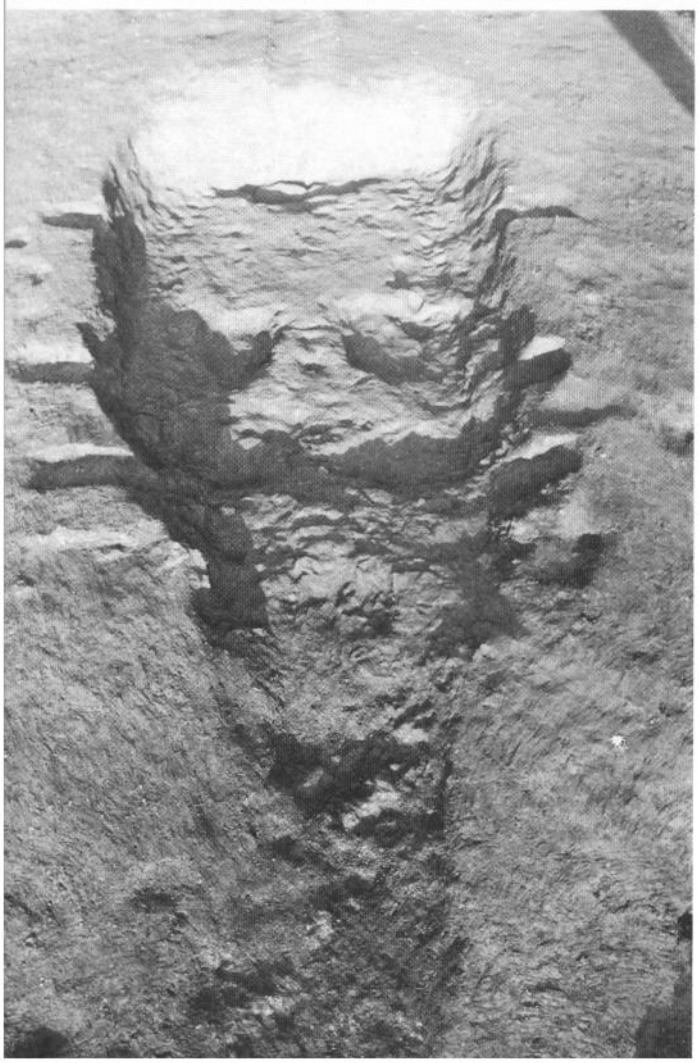
2

3

1　1号墳石室奥壁　　2　玄室左側壁　　3　玄室右側壁





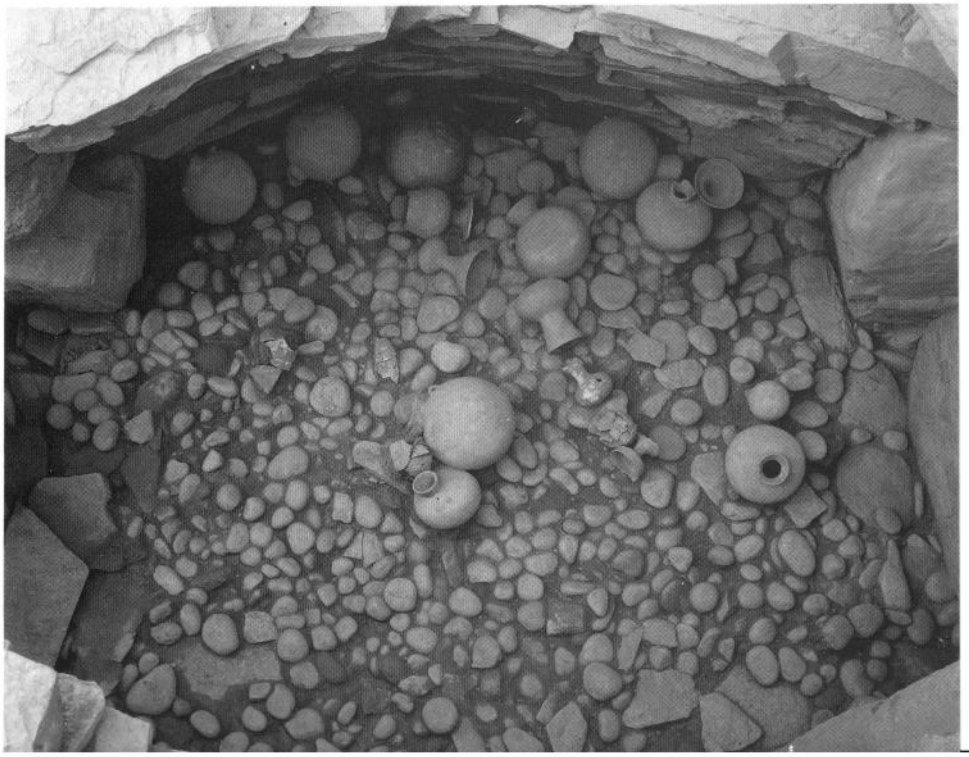


1　１号墳石室と閉塞状況

2　石室基底部

3　完掘後の石室掘り方

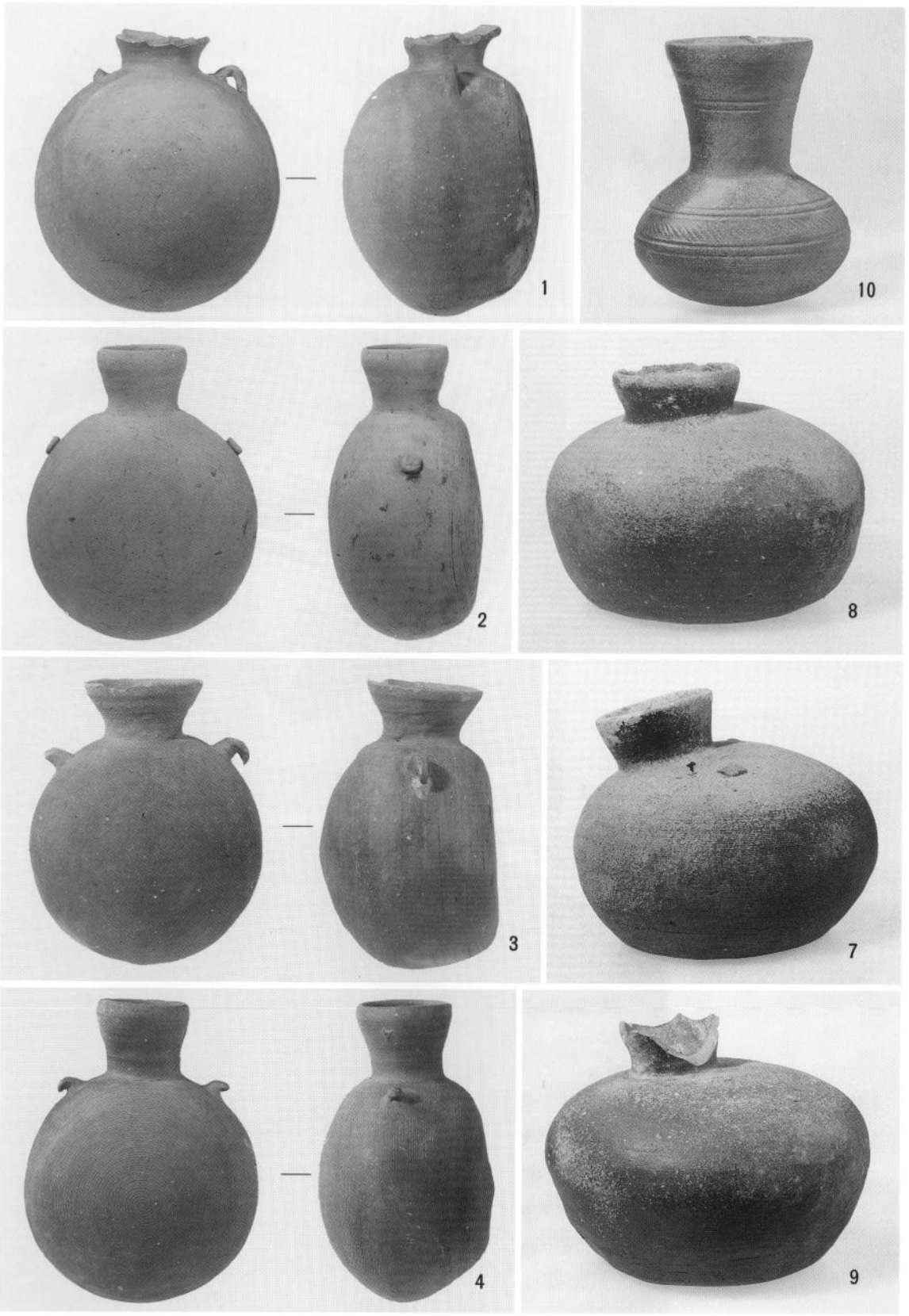
1



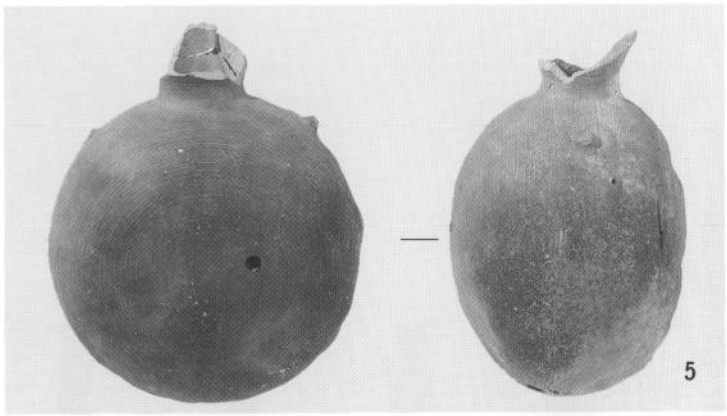
2

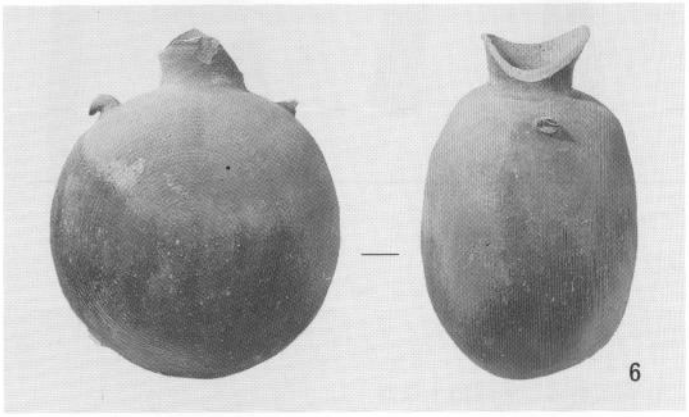
1　1号墳発掘風景

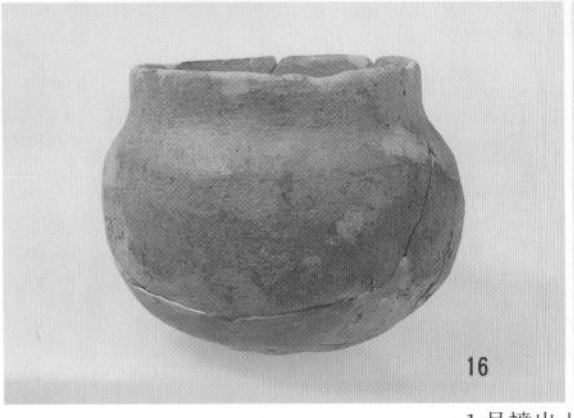
2　石室内遺物出土状況



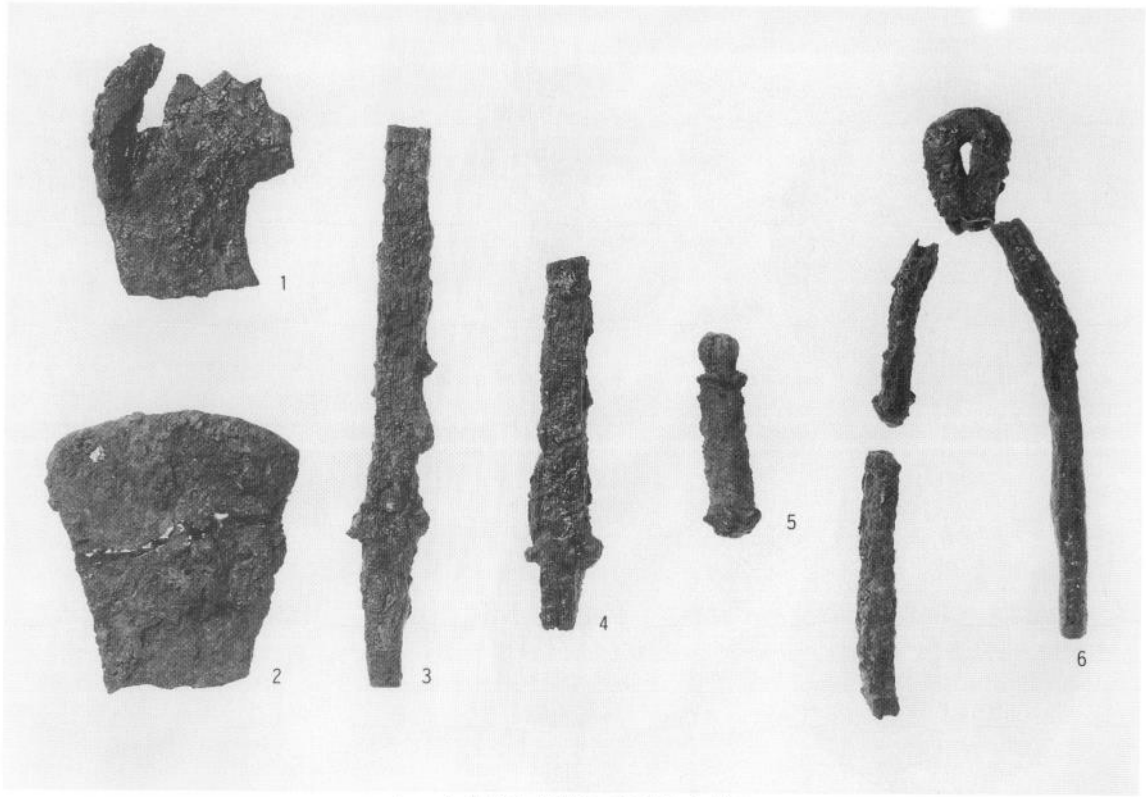
1 号墳出土土器　1



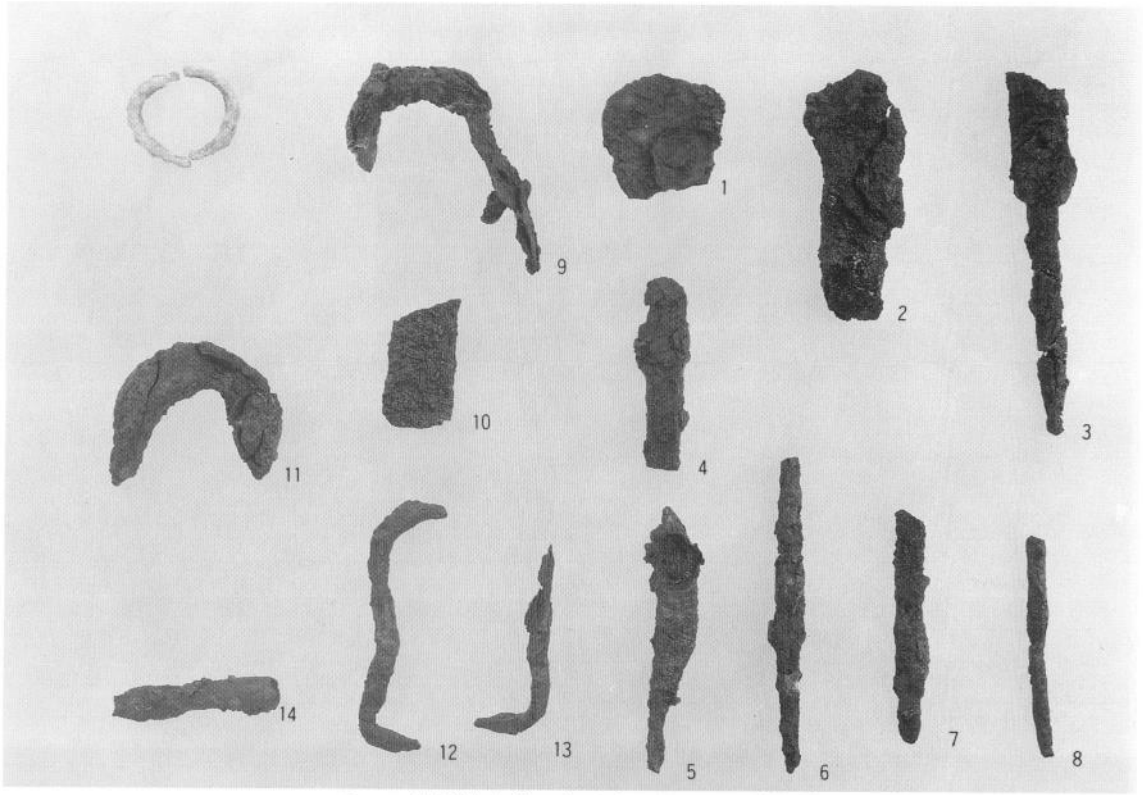




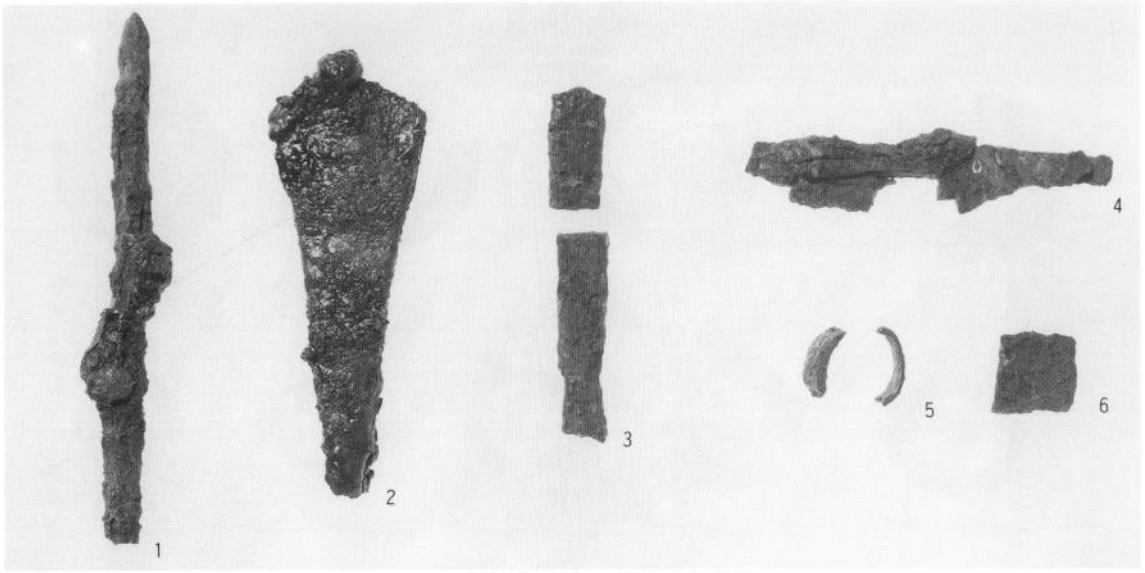
1号墳出土土器　2



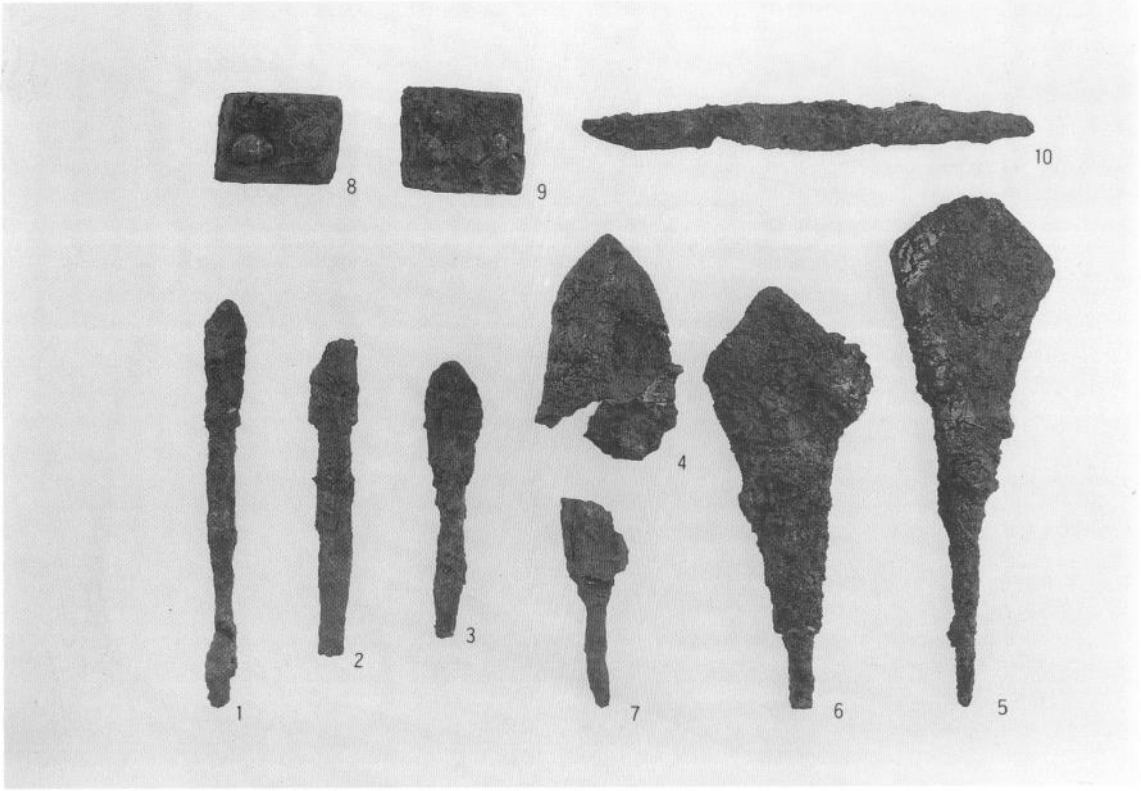
1　1号墳玄室第1床面出土鉄器



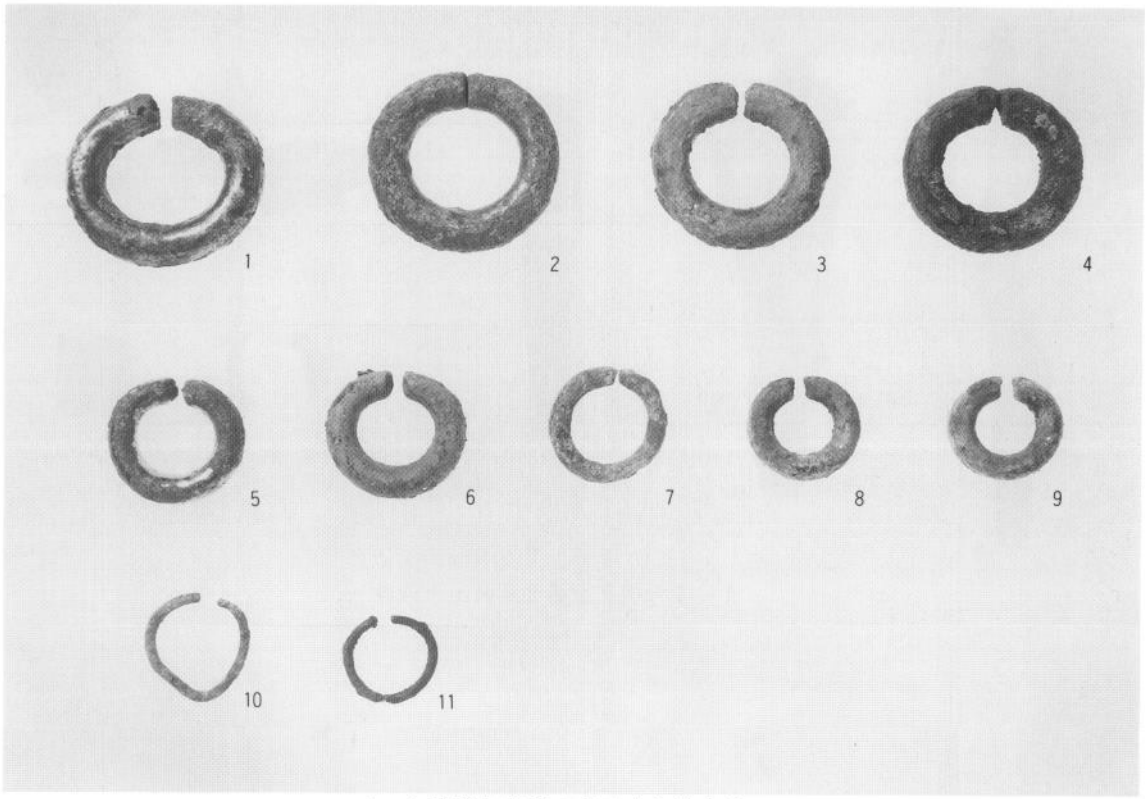
2　1号墳前室第1床面出土鉄器・装身具



1　1号墳玄室第2床面出土鉄器

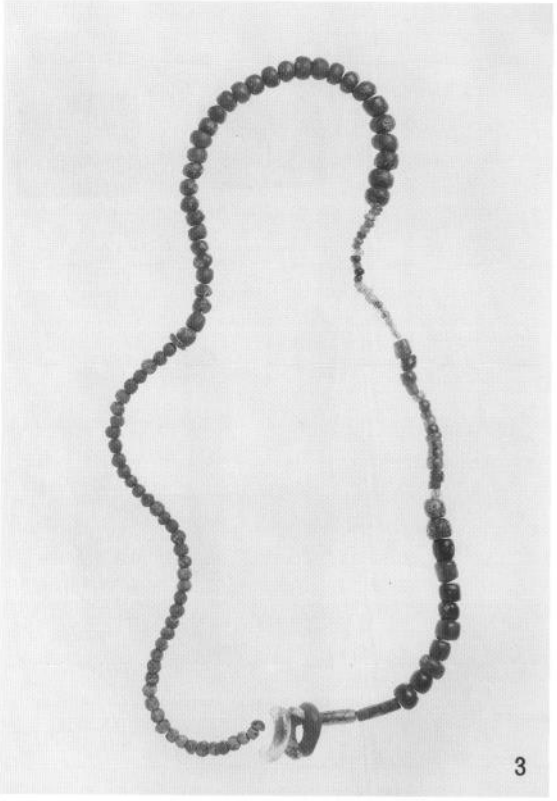


2　1号墳前室第2床面出土鉄器

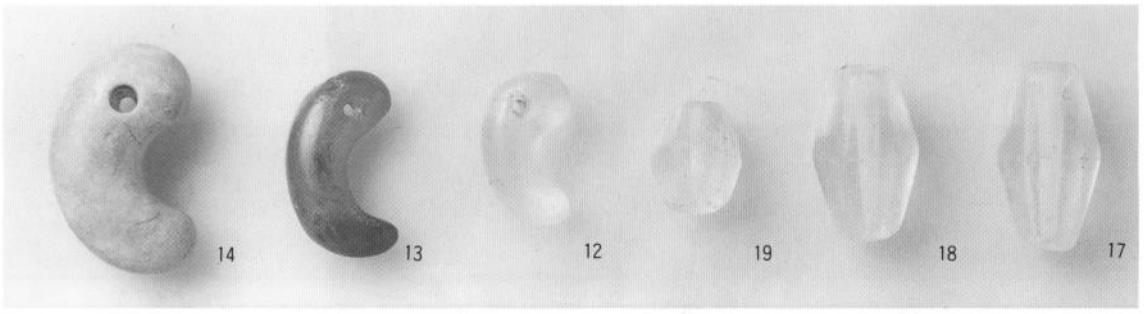


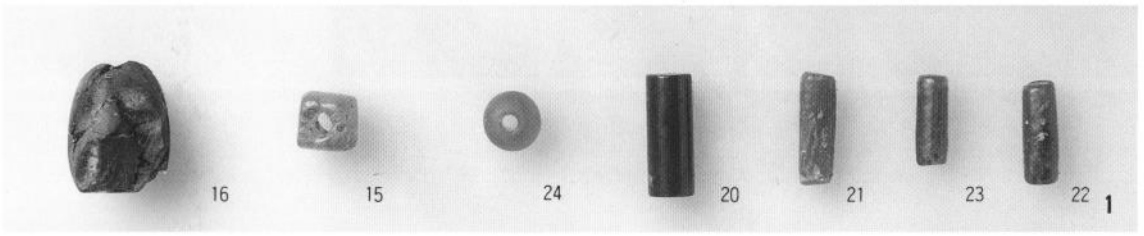
1　1号墳玄室第1床面出土装身具　1

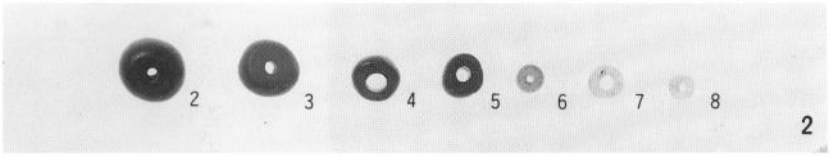
2　1号墳玄室第1床面出土装身具　2

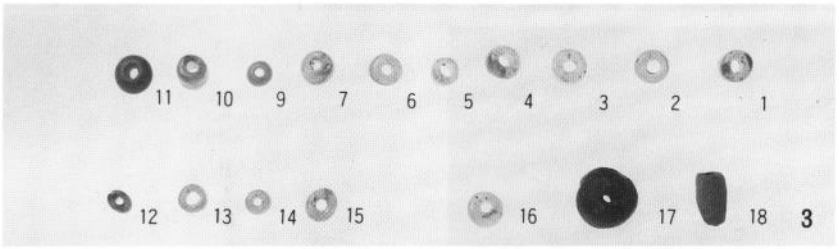


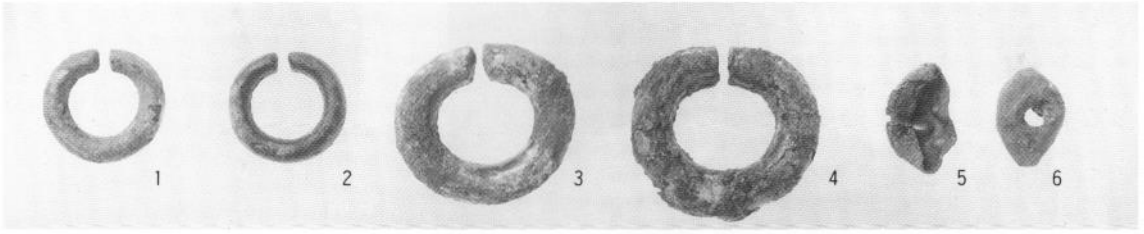
3　1号墳玄室第2床面出土装身具　1

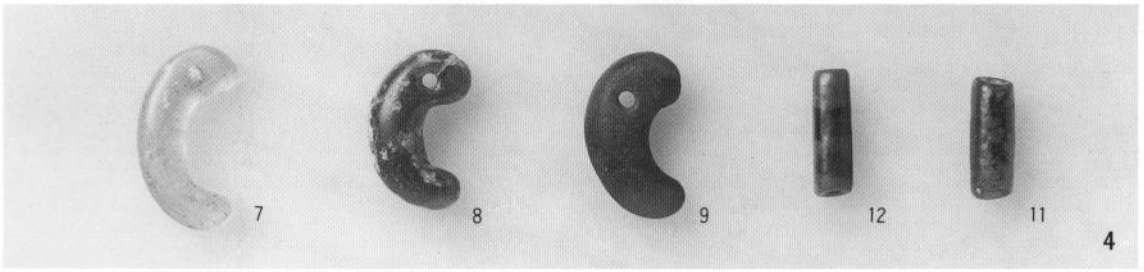












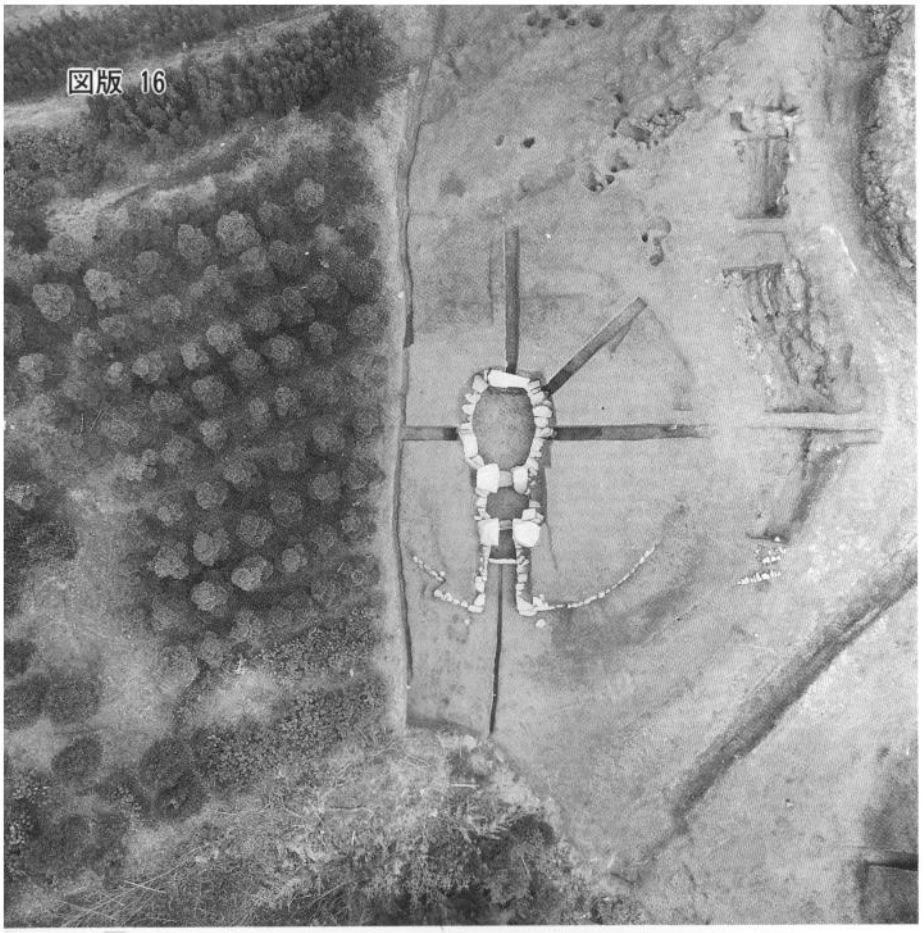
1　1号墳玄室第1床面出土装身具　3

2　1号墳前室第1床面出土装身具

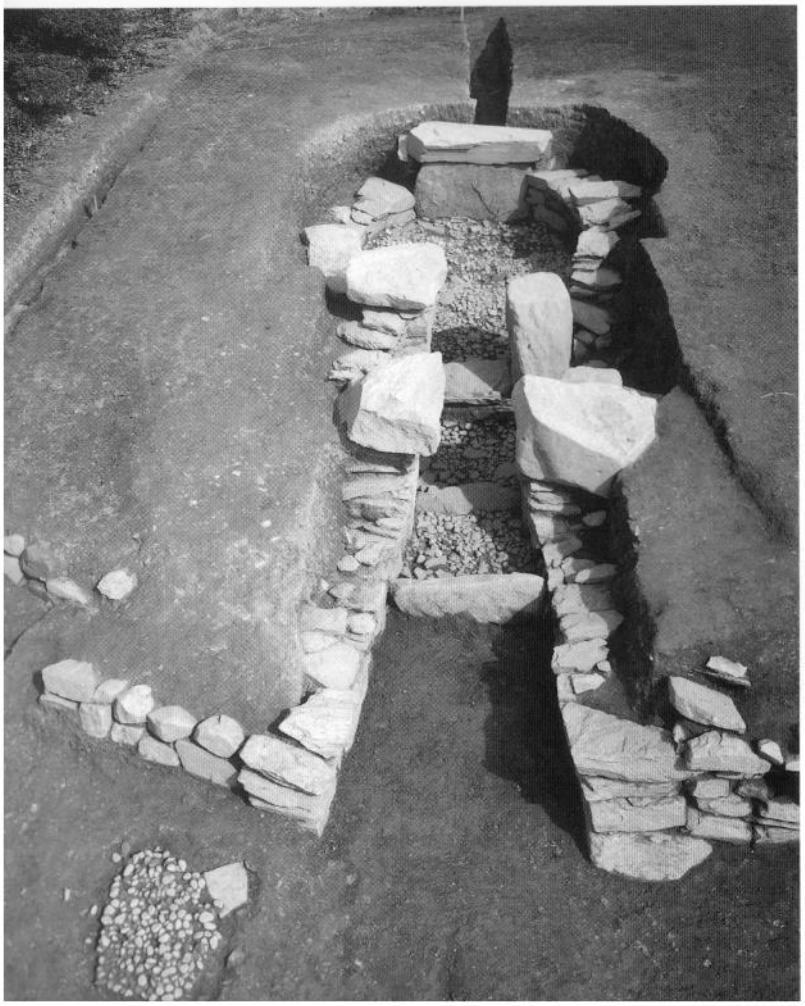
3　1号墳前室第2床面出土装身具

4　1号墳玄室第2床面出土装身具　2

図版 16



1



2

1　2号墳全景

2　2石室全景

1

2

1　2号墳石室奥壁
2　玄室左側壁
3　玄室右側壁
4　完掘後の石室掘り方

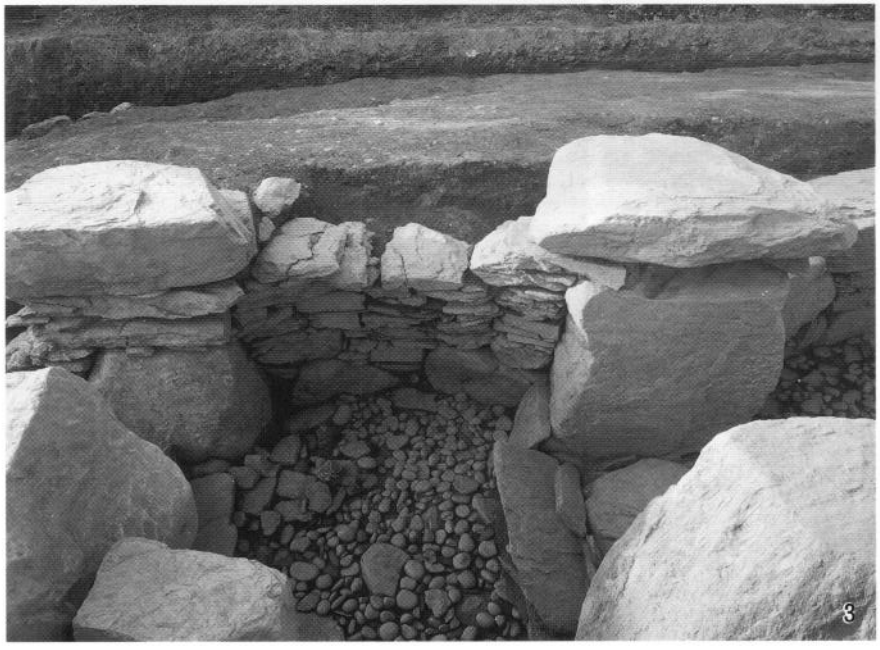
3

4

1　2号墳石室閉塞

2　石室閉塞（前面から）

3　前室左側壁



4　前室右側壁

1　2号墳石室と掘り方

2　墳丘列石

3　石室左前面の列石と集石

4　石室右前面の列石

1

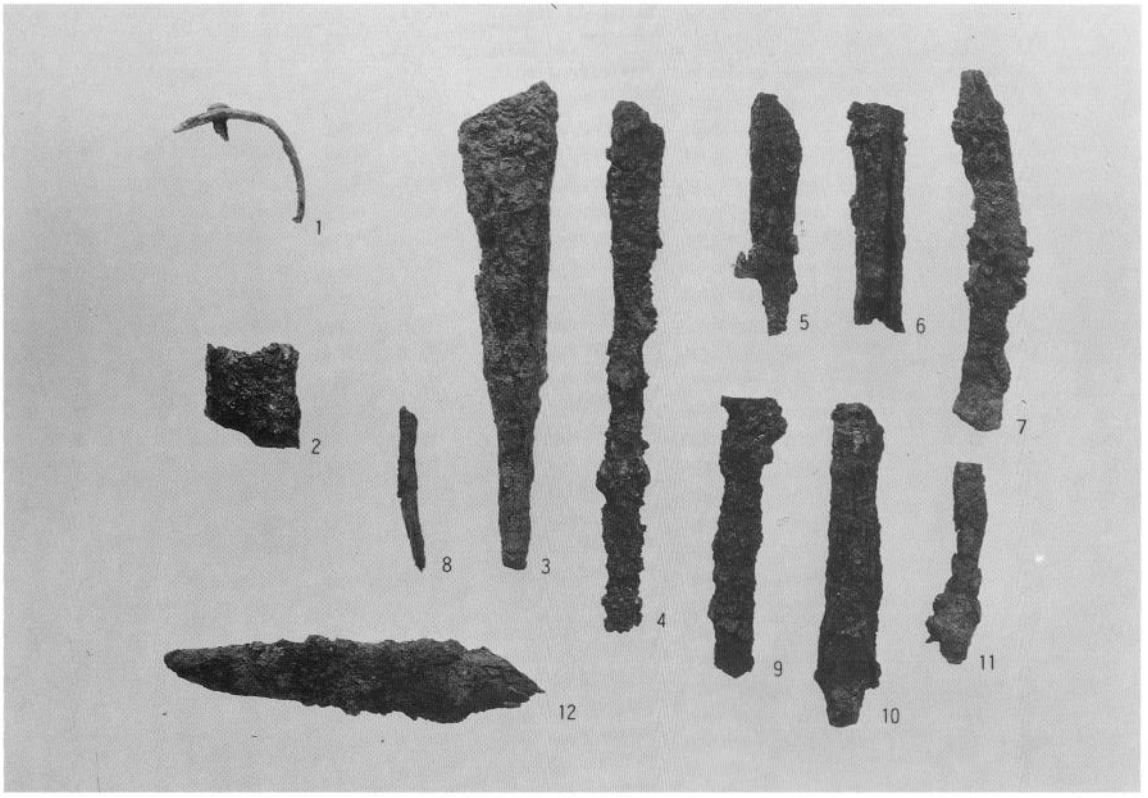
2

3

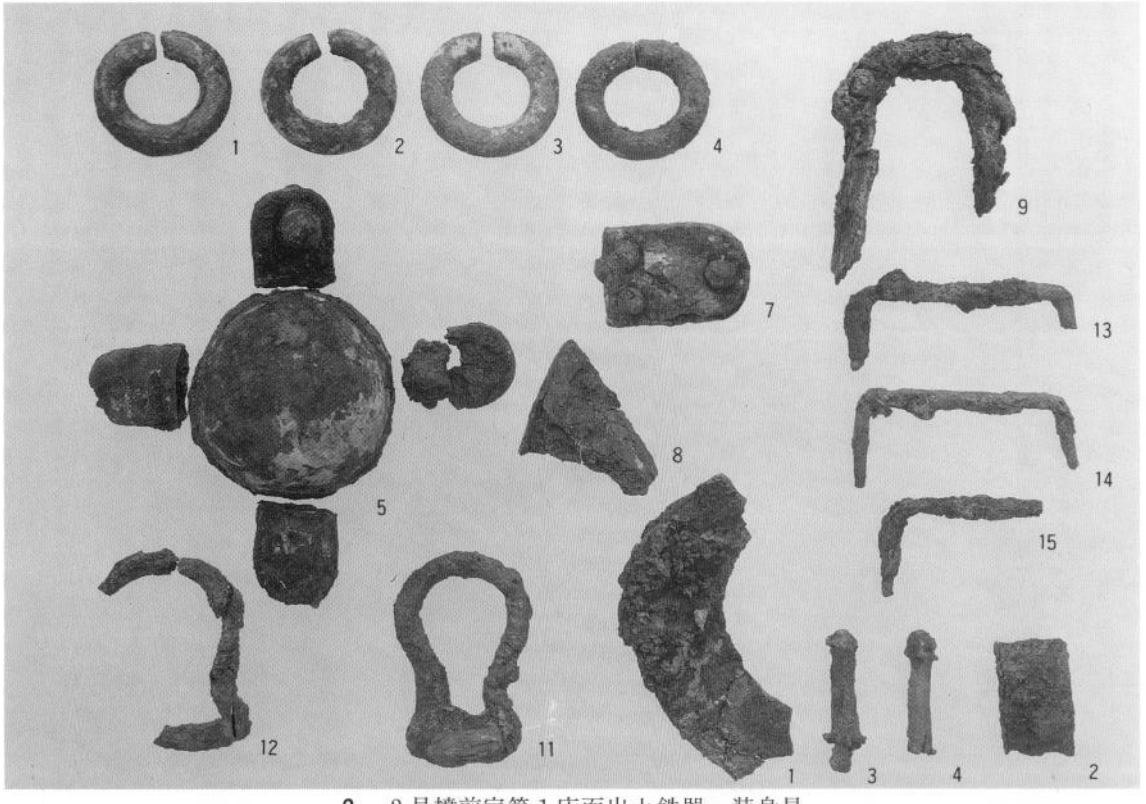
1　2 号墳玄室内遺物出土状況 1

2　玄室内遺物出土状況 2

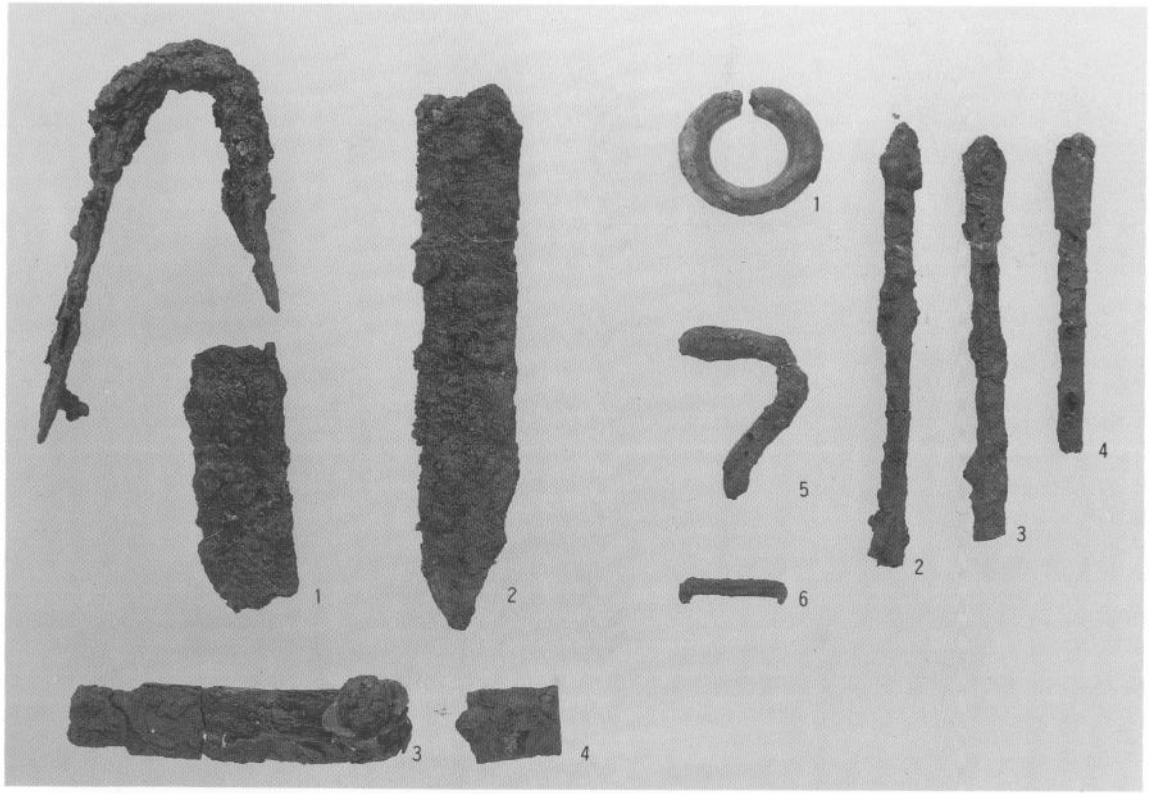
3　石室前面遺物出土状況



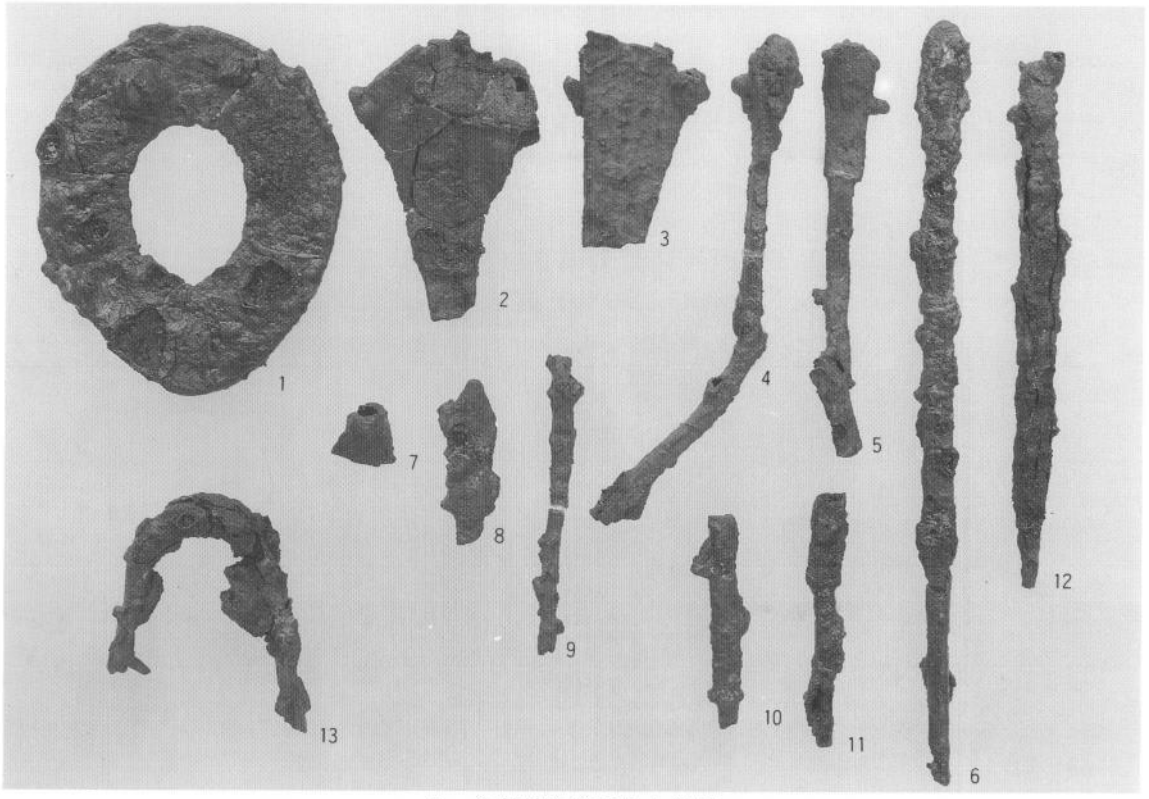
1　2号墳玄室第1床面出土鉄器



2　2号墳前室第1床面出土鉄器・装身具

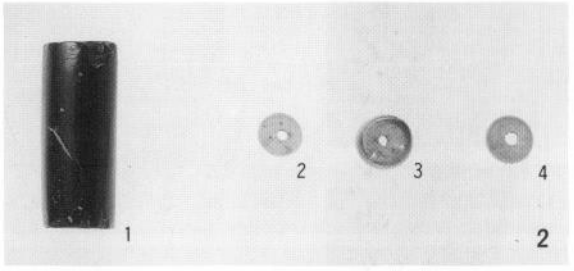


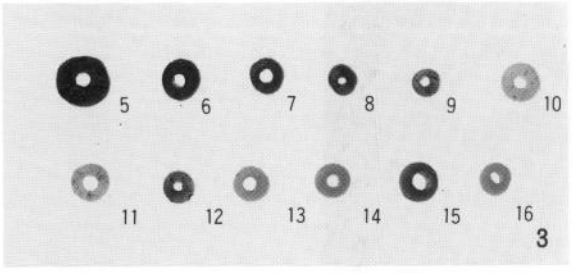
1　2号墳羨道・墓道出土鉄器・装身具

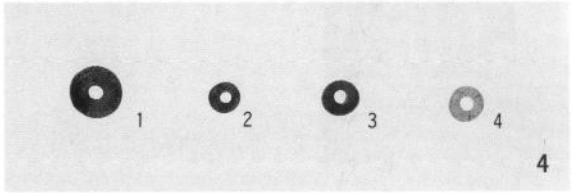


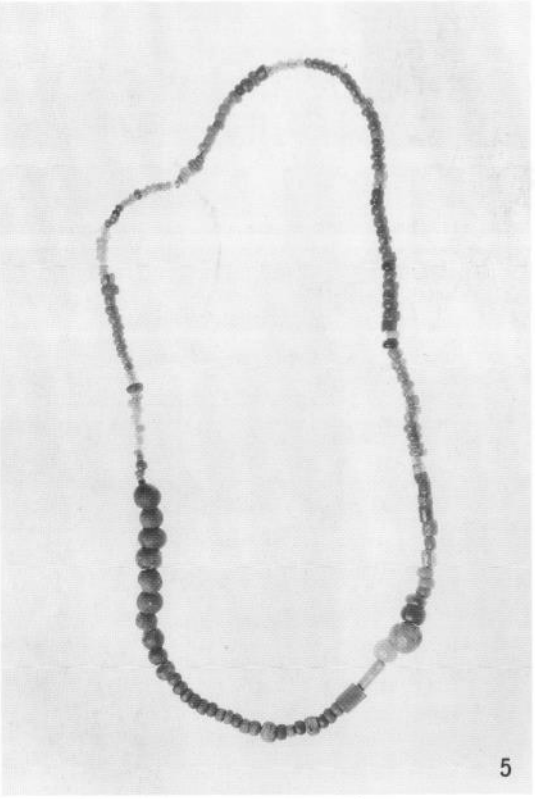
2　2号墳左前面出土鉄器

1　2 号墳前室第 2 床面出土鉄器







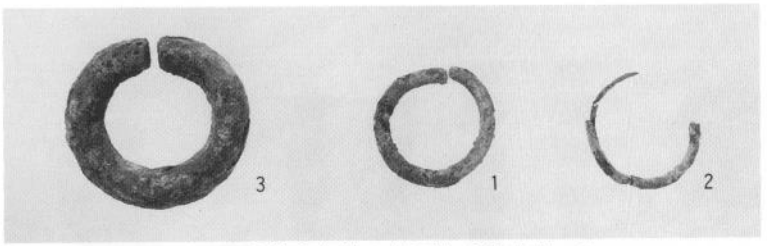


2　2 号墳玄室第 1 床面出土装身具

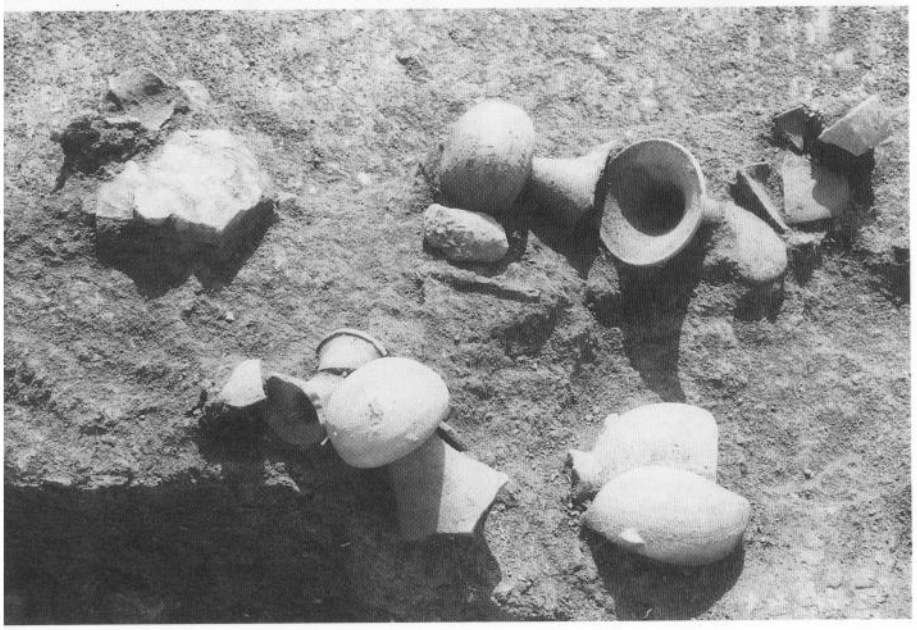
3　2 号墳前室第 1 床面出土装身具

4　2 号墳前室第 2 床面出土装身具

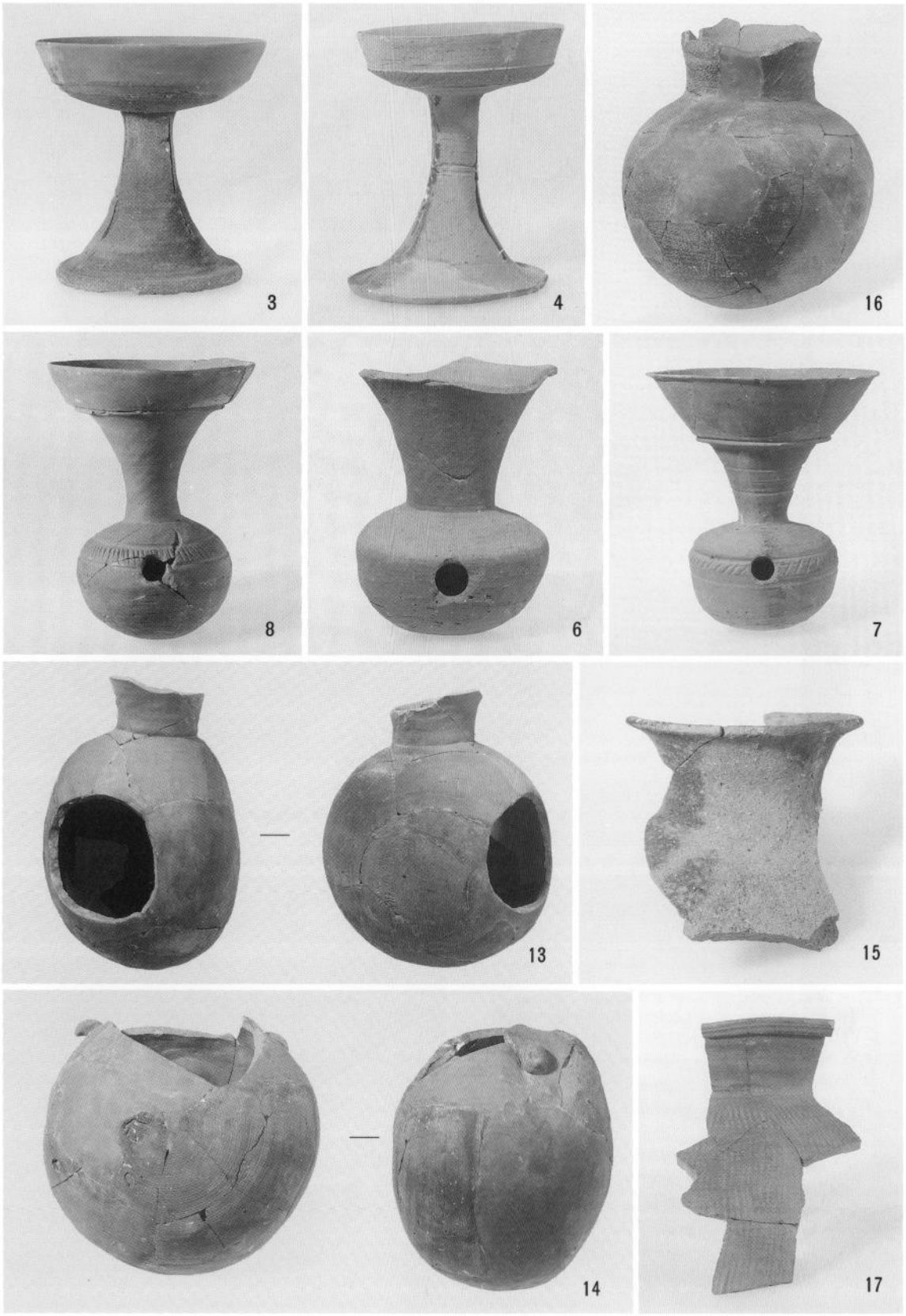
5　2 号墳玄室第 2 床面出土装身具 1



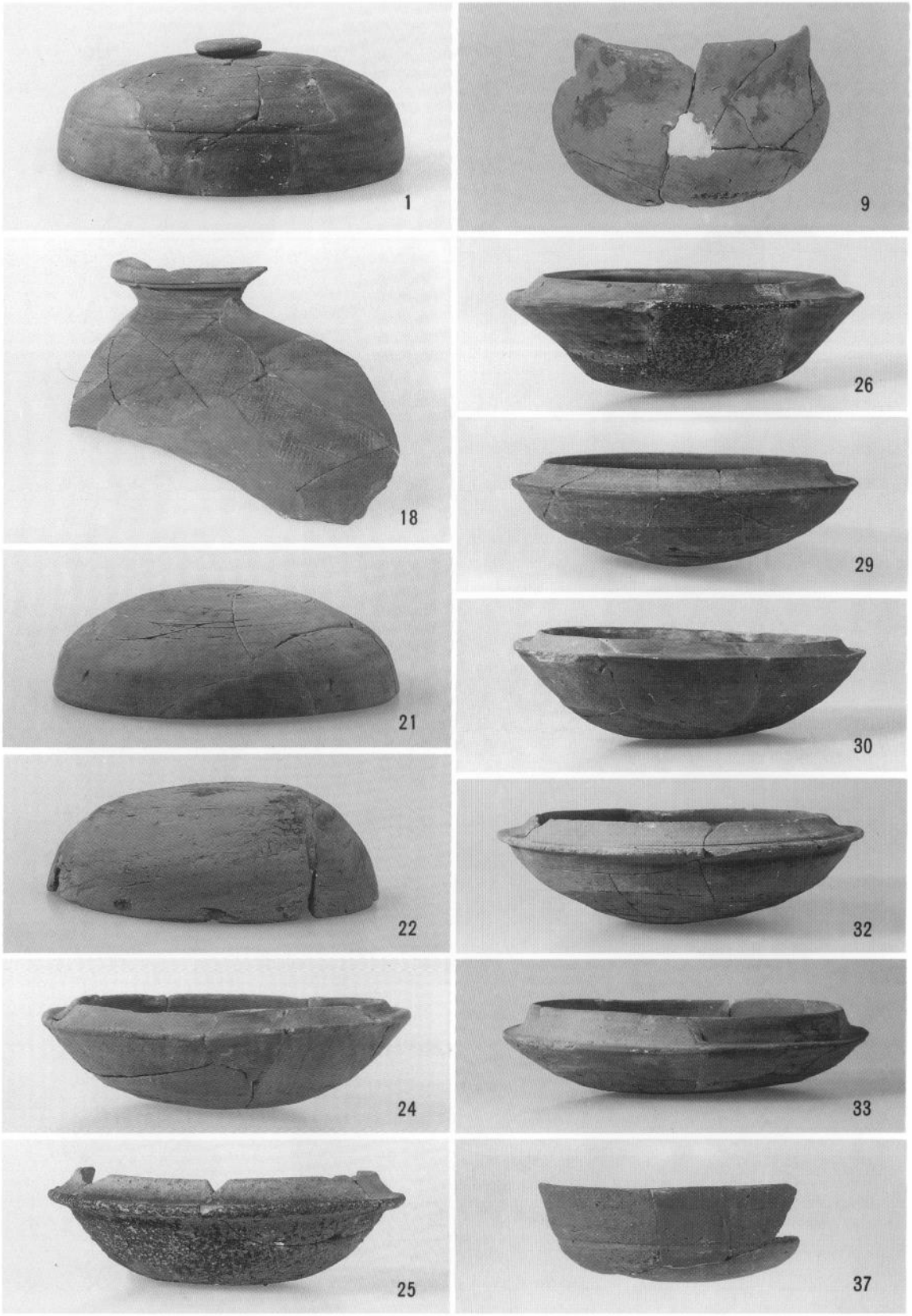
1　2号墳玄室第2床面出土装身具　2



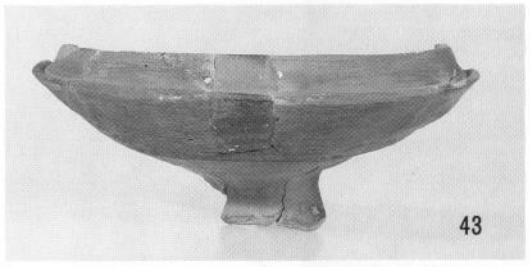
2　前面遺物出土状況

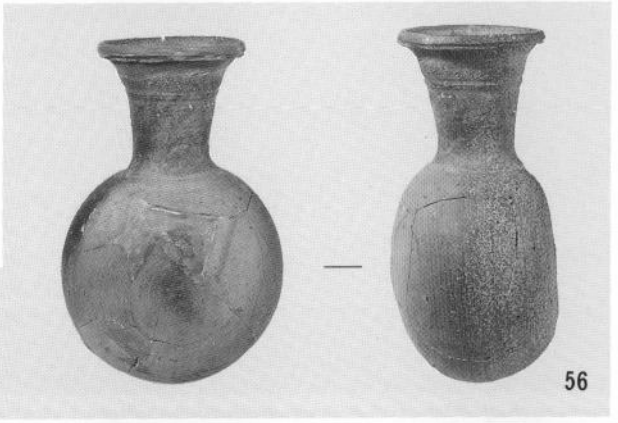


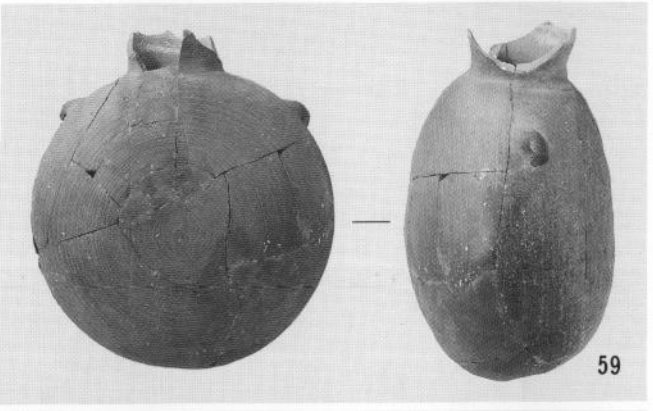
2号墳出土土器 1

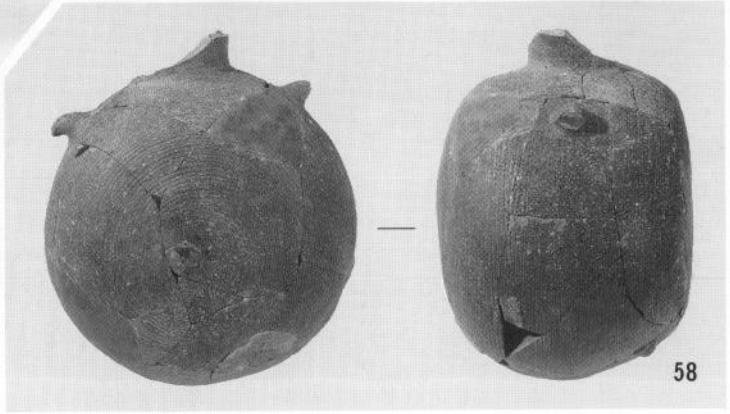


2 号墳出土土器 2









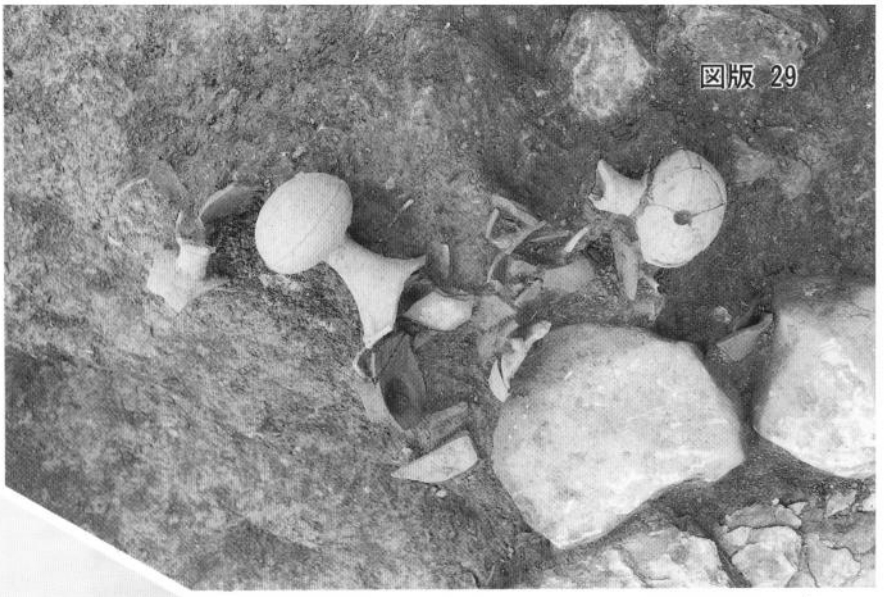
2 号墳出土土器 3

図版 28

1

2

1　3号墳全景空中写真　　2　主体部



1

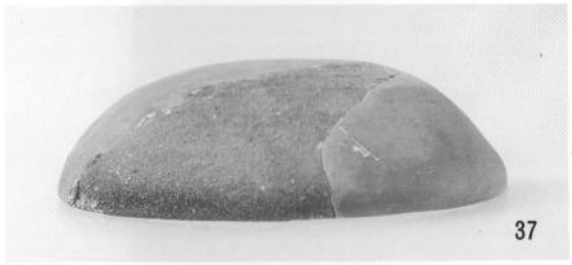
15

19

1

10

2



37

8

21

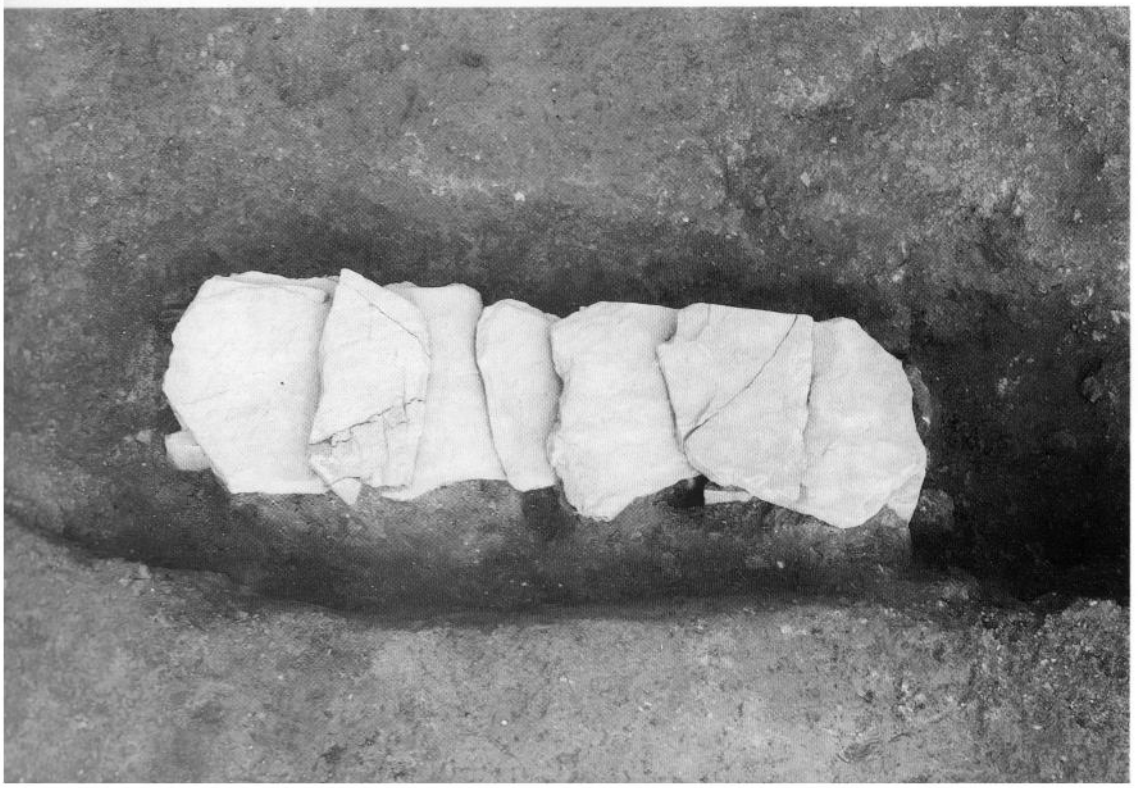
20

16

2

1　3 号墳左前面遺物出土状況　　2　3 号墳出土土器

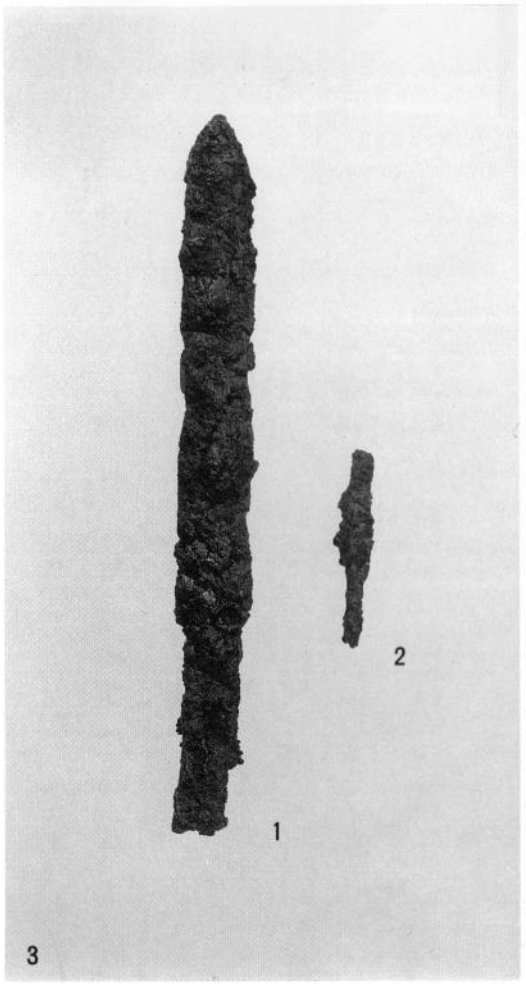
1

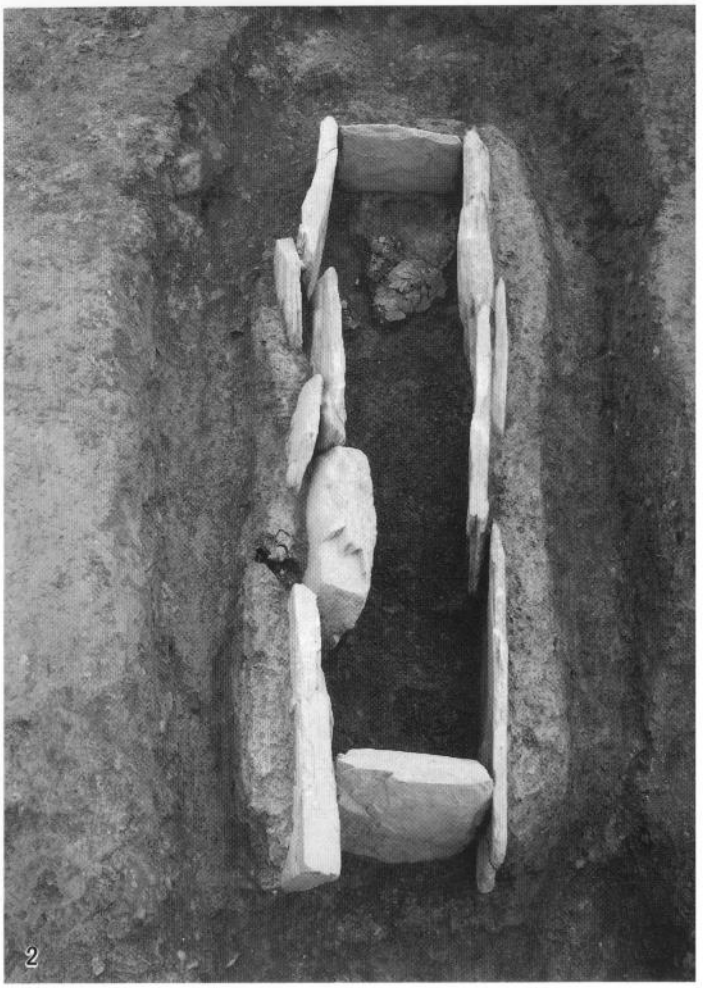


2

1　1号石棺墓（検出状況）

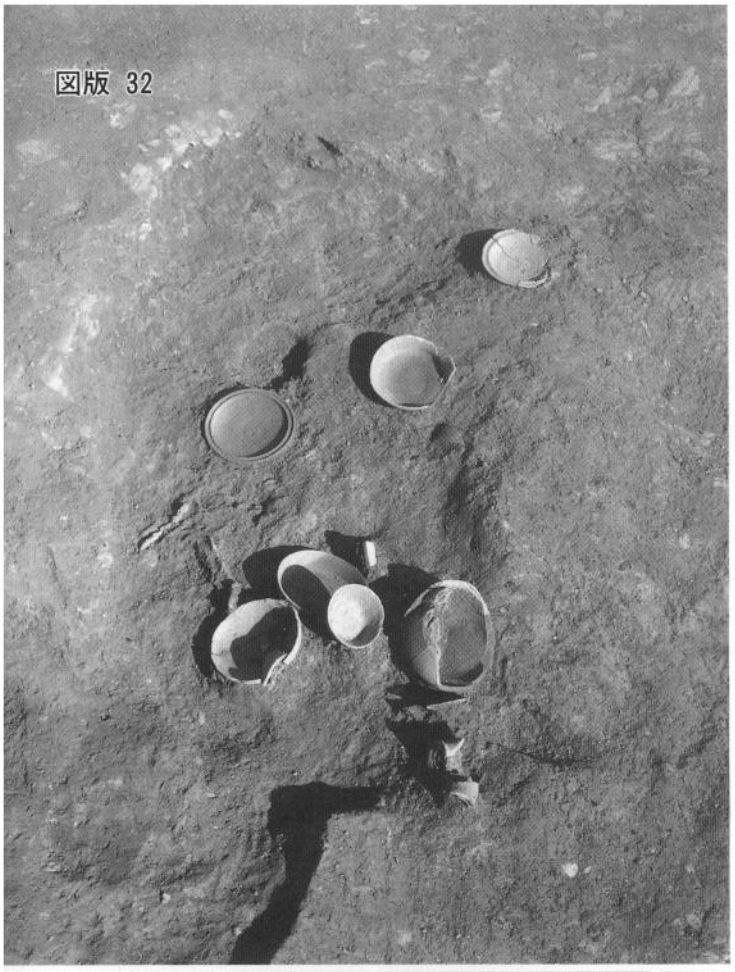
2　1号石棺墓（粘土除去後）



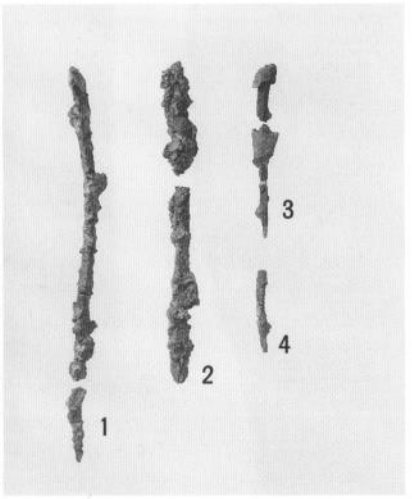


1　1号石棺墓人骨出土状況　　2　蓋石除去後の1号石棺墓　　3　出土鉄器

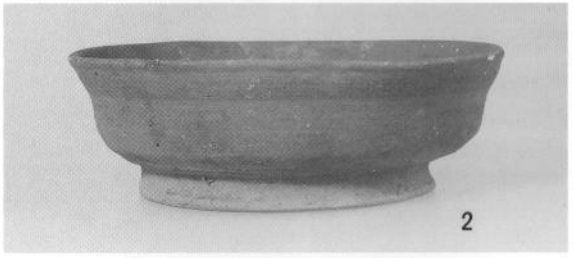
図版 32

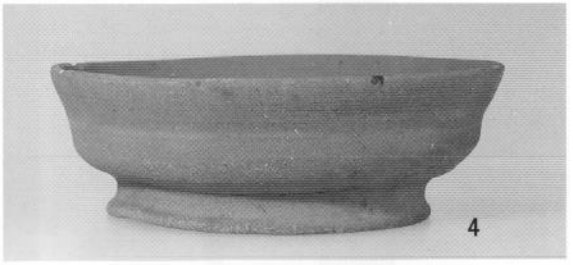


1



3

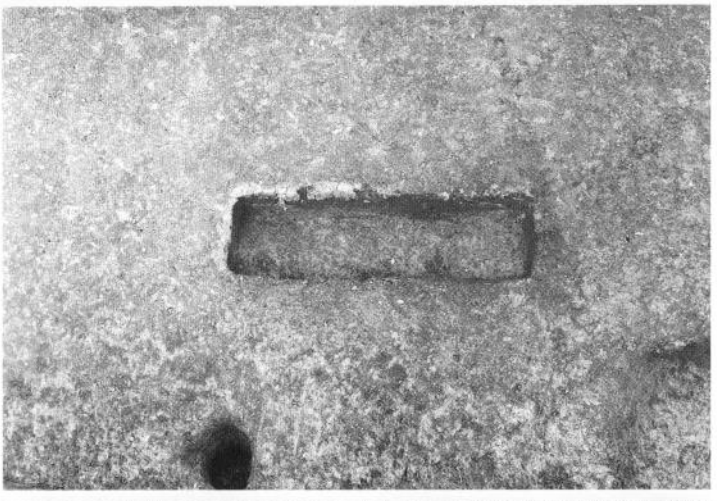




2

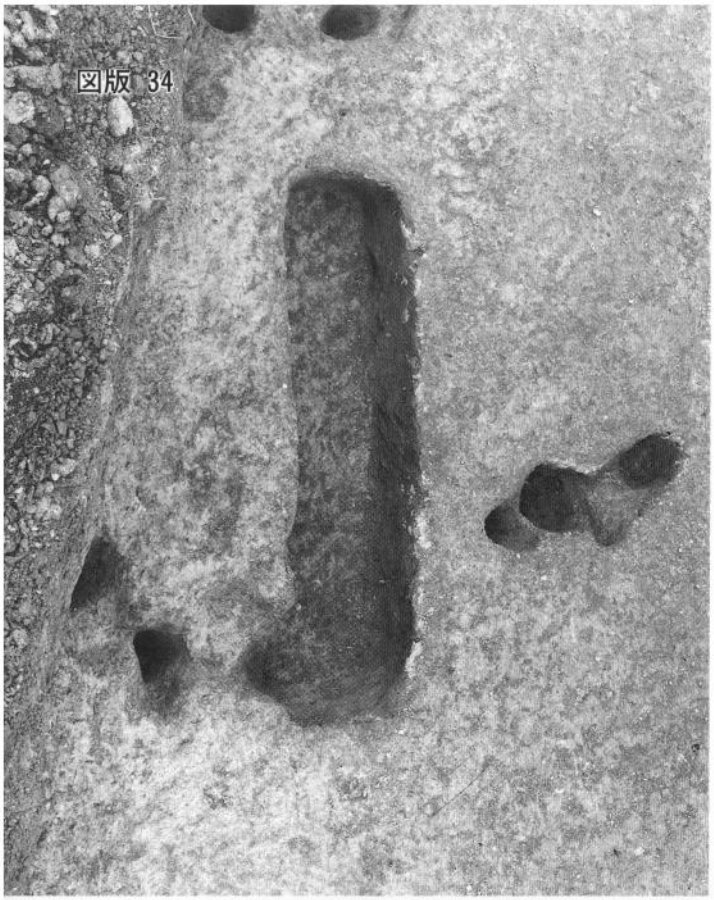
1　2号土壙　　2　出土土器　　3　出土鉄器

1　3～6号土壙



2　3号土壙

3　4号土壙

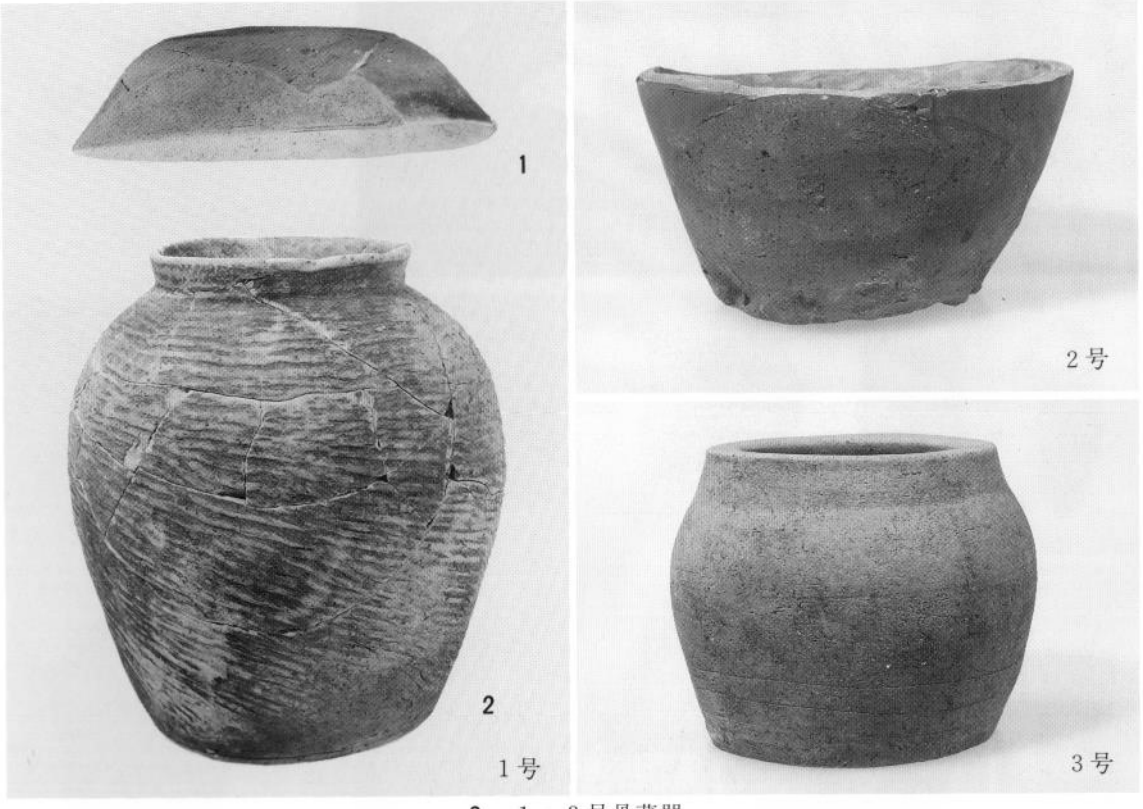


1　5号土壙

2　6号土壙

3　7号土壙

1　1号火葬墓



2　1～3号骨蔵器

図版 36

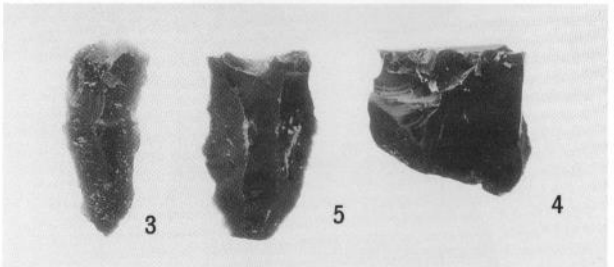
1

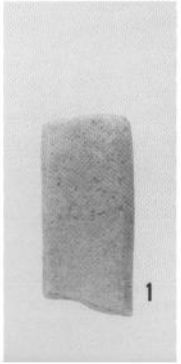
2

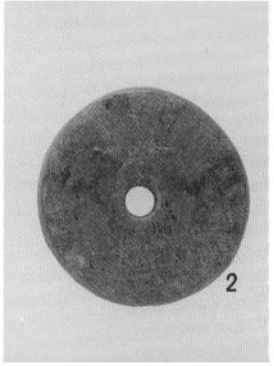
1　通路遺構

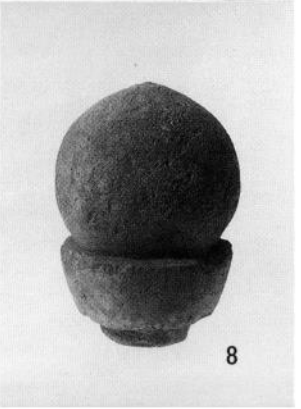
2　通路遺構　階段

3　その他の出土遺物





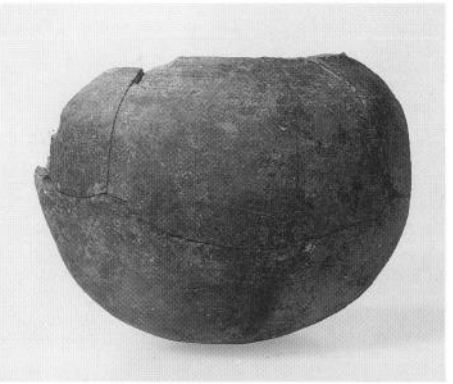




3

1

2



3

1　903番地試掘トレンチ

2　903番地試掘トレンチ

3　試掘トレンチ出土土器

1　山田D地区土塁（北から）　　2　土塁土層断面（西から）

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 3	登録番号 8

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 — 23 —

平成4年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号